
ガンダムSEED - 閃光のライトニング -

抹茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガンダムSEED - 閃光のライティング -

【Zコード】

Z7546S

【作者名】

抹茶

【あらすじ】

工業・電子系を専攻としていた殻木浩介は、一人の男の子を救つて死んでしまった。しかし、それは女神が運命を捻じ曲げて起きてしまったのである。

そして女神は謝罪をする為に主人公を別の世界に転生させて貰える事になった。

そして殻木浩介が行つた先はガンダムSEEDの世界
殻木浩介は、戦いに意味を見出せるのだろうか？

PHASE 00 (前書き)

初めて小説を書きました。
まあ主は文章能力は皆無といつても良い位下手です・・・。
それでも努力して書いたので良ければ呼んでいつてください。

そここの部屋の第一印象は白だった

何処を見渡しても永遠に続く白だけしかなかった「・・・」何処だ?「

思わずそつ狂いでしまったが仕方ない

しかし何故此処に来てしまったのだろうか?

「数分前の出来事を遡って考えて見るべきだな」

（回想）

俺の名前は殻木浩介、一応電子・工業系を学んでいる普通の大学生だ

まあ名前のとおり男だ。

俺は自宅に帰る途中に何時も行つてゐる馴染みの公園へ、向かつていた。

何故かは自分もわからない・・・。しかしそれでも週に一度は公園に足を運んでいた
ある程度公園を散歩し風景を眺めたら自分で適当に満足すると喜びを感じた。

そして何時もどおり家に帰つて食事をして眠ると言つ。

同じ工程を繰り返すはずだつた・・・。

しかし、その日は違つた。何時も通りこの信号を渡つて真っ直ぐ行つたら自分の家

に到着だつたが、突然男の子が飛び出して來た。最初は驚いたが直ぐに俺も男の子を救う為にとびだし、そして男の子を突き飛ばした。そして俺は、その子の変わりに車に轢かれて20年の人生を終えた。

（回想終了）

そうか俺は車に轢かれちゃつたんだな・・・。

「結局親父とお袋には何の恩返しも出来なかつたな」

まあ充分生きたんだし満足か

「でだ・・・お前さんは誰だい？」

俺は過去にやつた事は後悔もしないしグダグダと文句も言わない（例えそれが自分の死に關係あつたとしてもだ）といつか今この目の前で起こつてる現実の方が絶対重要だろ。

そう言つて俺はこの白い部屋で田の前に居る女性に話しかける。

しかし女性と言つよりかは、美女と言つた方が良いかも知れない。桜の花のように美しいピンク色をした長い髪と晴れ渡る冬空の様な瞳。

とても人とは思えないほどの美しさ、まるで女神を見てるような感じだ。

「今回の件については大変申し訳有りませんでした。」

そして行き成り深々と頭を下げられた。

「別に良いよ。過去の事をグダグダ言つ氣も無いし、それなりに良い人生だったと自分でも思うしさ。」

「そうですか。私は貴方が住んでいた世界で言つ神と呼ばれる存在で、あなたは「あそこでは死ぬ運命じゃなかった。でも手違いで運命が狂つて死んじやつたでしょ」・・・はい、そうです。」

「本当にすいませんでした」

「だから気にはんなつて言つてんだろ。それなりに納得出来た人生をアンタは否定するつもりか?違つだろ」

「え?でも、本来だつたらこいつの不手際で死んでしまつたのに、元気にすんなで一蹴するのも変ですよ!普通だつたらもつと怒る所なのに。」

そんなもんかな?って言つか俺がおかしいのかな?最近の若者って後悔しながら生きて死んだ時に未練を残すつて少ない気がするんだが。

で、俺に至つては明日死のうが来年死のうが結果は殆ど変わり無い物だろつて、簡単に割り切れるもんなんだよな。

「あなたと話してると調子狂いますね」

女神と話しててそんな事言わせるの滅多に無いんだろうな

「しかし貴方は本来の運命だつたらあと80歳も余生が有つたんですね
すよ?」

（オイオイ・・・。俺は本来の運命だつたら100歳まで生きてる
予定だったのかよ。）

「そりゃ、じゃあ元の自分の世界の生は終つちまつたし、例えば
アニメや漫画などの別の世界に転生させて貰えるかい？」

「ええ、その程度でよければ出来ますよ。あつ、でも少し待つてく
ださい」

殻木がどの世界に行こうか迷つてゐる間に女神が何かを取り出してき
た。

「何此れ?」と思わず田の前の上だけ丸い穴がぽつかり開いてる段
ボール箱を指してしまった。

「いや、私は貴方を転生させる事は出来るんですが、力を多大に使
用するので何処に行けるかまではランダムに決めないと駄目なんで
す」

つまりだ。彼女は転生させる時に多くの力を使うから世界や能力は
ランダムで決めないと云つ事だ。

(…あれ?此れミスつたら即死フラグ立つ世界にも行くって事だよね?)と内心冷や汗を搔いてしまった殼木だった。

「それじゃあ引きますね」と殼木も軽く諦めつつも覚悟を決め箱を選んでみた。

・行く世界　・チート1個目　・チート2個目と書かれた箱が3つ
有つた。

取り敢えず行く世界から殼木は引いてみた。書かれていた世界は『
ガンダムSEED』

「行き成り死亡」フラグ満載の世界ですか…。次のチートでマトモな
物引かないとマズイなこれは『

そういうて一つ目の箱の中身を引いてみた

『パイロット能力、一般的の兵より少し強くて敵の攻撃とかに反応
しやすい』

（・・・これってやり直し効かないよね?）といついつい思つてしま
つた

「やり直しは出来ませんよ?取り敢えず最後の奴引いてください」と女神にまで急かされた。

完全に諦め氣味に最後の箱の中身を引いてみた。其処に書かれていたのは

『メカニックと電子能力のチート化更にはMS改造が一人でも出来る完成度が高い技能』

このカードに殼木は少しだけ喜んでしまった。彼は元々電子・工業系を専攻としていたのでこの技量は何かと嬉しいのだ。

「さて決まりましたけど、今回此れほど運が悪いのは貴方が初めてですね」と軽く苦笑していた。

「ええ、そうですね。今回ばかりは運が悪かったかも知れません。でも能力に製造系チートが有るので嬉しいですよ。あ、無理かもしれませんけど出生場所はオープンでお願いしますね。」

「誕生場所まで願うんですか。まあ良いでしょう、此れ位やらないと流石に貴方が可哀想なんで」

と女神にまで同情されてしまったが、一人で無理だつたら他の人と頑張れば出来たんじゃね?と考えてしまつたが

「本来自分の手違いで殺してしまつた人間は自分の手で解決しないと駄目なんですよ」と言つてきた。

「成るほど、神にも色々と事情が有るんだな」

「それでは、準備が出来ましたので送りますね

「はい、お願ひしますね」

俺の足元が光りだした

「そうやつ、縁がありましたら何処かで会いましょうね」

それを言い終えた後俺の意識は無くなつた

PHASE 00 (後書き)

如何だったでしょうか？自分はパイロットチートは苦手なので別の方面でチートを加えさせてもらいました。まあパイロットとしての能力は簡単に言えばザフトの赤服と同じかちょっと上に設定させてもらいました。

多分チートでは無いと思います。

人物・機体紹介（前書き）

今まで遅くなつて申し訳有りません

今回改めて機体情報やパイロットの情報を公開します

人物・機体紹介

オリジナル主人公

名前：シユウ・K・ライトニング
クサナギ

身長 189・7cm

体重 68・6kg

MS 適正 射撃B+ 格闘B 反応A+ 命中C

髪型：鋼の鍊金術師のエドの髪の色を黒にしアホ毛を無くした状態

顔：エヴァンゲリオンのカヲル君の顔

好きな物：静かな場所に行く事・コーヒー

嫌いなもの：平穏を壊す物 調子に乗る者

搭乗機

初期MS ジン・アサルト改

〇機体各部にブースターを装着 頭部モノアイ露出 高性能の
索敵・サーモグラフ完備

固定装備 左足：一連装ハンドガン ホルダー付き

キマイラ（PHASE10以降搭乗）

機体情報

頭部 元のティインの頭部は微妙という事なのでジンアサルト改の頭部をそのまま使用

背中 元のティインの羽を6枚から4枚に変更 羽の中心部にビームキャノンを搭載

両腕 ジンアサルト改の両腕をティインに移植

両足 局地にも対応するティインの脚に収納式のバクウのキャタピラを使用

その他 宇宙戦闘可・サーモグラフティ・高性能索敵機

ジン改の各部ブースターの考えをティインにも着用

基本武装

左腕：収納型射出式アーマーシュナイダー

右腕：ビームソードシールド（判らない方はシナンジュの盾と一緒に思えば良いです）

両足：二連装ハンドガン（シュウが気に入ってるんで転用）

両肩：ビームキャノン（頭を挟んで肩を突き出している。IWSRのビームキャノンの真似）

両腰：ディインの元々のホルダー（メインは7.6mm重突撃銃と90mm散弾銃が入ってる）

両手：状況によって持つていく武器が変わる。

OP 後ろ腰に大型武器なら一個装着（スナイパーライフル等）
小型系なら10まで可能（小型：グレネード系・マガジン）

追加武装：ガトリングシールド（PHASE23にて登場）

オリジナルヒロイン

名前：シラユキ・カグヤ（PHASE10にて登場）

身長：162.7cm

体重：54.3kg

MS適正 射撃C+ 格闘A- 反応C 命中B

髪型：水色のショートでポニーテール 元々ロングヘアだったらしいがパイロットに成つてからポニーテールにしたらしい

顔：遊戯王GXの明日香の顔

好きなもの：デザート全般

嫌いなもの：独りに成る事・勝つ為に手段を選ばない人達

搭乗機

初期MS：バクウ 二連装レールガン装備

エンジェル（PHASE17にて搭乗）

機体情報

原型はM1アストレイ

背中のパックにディーンの羽を追加

常に8枚の羽で空中を飛び姿勢制御を同時に実行。その姿からシユウはエンジェルと名づけた

両足 バクウのキャタピラをエンジェルにも転用 収納式

基本武装

頭部：イーゲルシュテルン

両腰：ガンブレード（FF8のスコールの武器 弹丸には貫通弾を使用 最大6発まで装填）

右腕：アンチ・ビーム・シールド

追加武装：

両腕 ビームサーベル装着（判らない方はコニコーンガンダムのビームトンファーを想像してくれれば良いと思います）（PHASE25にて登場）

左肩 ビームライフル装着（此方もデュエルASのシヴァがビームライフルに変わったと思えば良いです）（PHASE25にて登場）

PHASE01（前書き）

とりあえず主人公は原作知識は軽くですが持っています。
主人公がザフトか連合どっちに付けるかは未だに謎と成っております。
ですが

話の展開によつてどっちに付くかは決まっていきます。

まあ頑張つて書いたので読んで下さい

ジコリリソン

「ふあ～、もう起きる時間がか～・・・全く宇宙は相変わらず変わらないもんだな。つて・・・何で起きたらもう成人に成つてるんだよ！？どう考へても普通にオカシイだろ。

チクショウめ俺の幼少期のキャツキヤツウフフ生活を期待してたのに。

」

(何を言つてゐんですか貴方は?)

「ヤヴヒよ、俺何か幻聴聞こえるや。早く精神科の病院で治してもらわなきゃ・・・」

(ヒドイ扱いですね。船の構造・この世界の貴方の名前・出生・能力・今の職業等を教えようと思つたのですが、そう言つ扱いならせつかく教えて上げようと思つたのにもう教える気失せました。)

「すんませんしたーーー!冗談、冗談だから教えてくださいよ。女神様」

(一瞬で態度変えましたね・・・まあ良いでしょう。まずこの世界では貴方はシュウ・^{クサナギ}・ライトニングと言つ名前です。

一応出生はオープにしては、いますが残念ながら貴方が五歳の時に両親とも事故で亡くなりました・・・)

「さうか、この世界では、もう親父とお袋は居ないのか。まあ前世も両親は仕事でずっと独りだつたから気にする事じゃないな。」

（その後貴方は孤児院に引き取られて十歳の時位にプラントに上がり、その貴方の持つている電子・工業系の知識にて天才児と呼ばれました。）

そして、研究で得た資金で貴方は、ジャンク回収艦を買い、ジャンク屋をしています。今乗つてる戦艦は元はホームという戦艦を改造してるそうですよ？）

「オイオイ、ホームって言えばガンダムSEEEDアストレイで出でくる戦艦じゃねえか。そういうえば改造したつて俺はどんな事をしたんだ？」

（そうですね・・・。破損したMSや武装を少し形は変わりますが元通りに直す事が出来るとか。後は、ジャンク品の武器改造して自作したりくつ付けたり色々な事出来ますね。）

「え？それって有る意味戦艦チートじゃないか？」

（うーん、まあ大丈夫じゃないでしょうか？あと私からのプレゼントでちょっと面白いものをハンガーに積み込んで置きましたよ。私からはこれ位ですね。何か聞いておきたい事が有りますか？可能な限り答えますが。）

「面白いものは、後で自分で調べるとして。今はC・E・何年だ？そして何月何日だ？あと今俺はどう辺に居るんだ？」

（今はC・E・70年10月31日です。そして貴方は今L1畠域の世界樹のデブリの近くに居ますよ。）

「そうか、それだけ判れば後は自分で何とかするわ。ありがとうございます」

女神様「

(そうですか、一応言つときますけど貴方が原作に介入する事で歴史も変える事も出来ますので、貴方は如何したいか良く考えて下さい。では、貴方の人生に幸あらん事を願つています・・・。)

運命の女神が幸多い事願つているつて実際に幸せが降り注ぐ気がして成らないんだが・・・突つ込んだら駄目だよな。

「さてとまずは、ホームだと同じ艦に会つたら意味が判らなくなるから何か名前付けとか。一応元世界樹でジャンク品を集めてみるか。」

「ブリッジ」

(オートパイロット 行き先を指示してください)

「とりあえず、世界樹の『ブリ』まで行つて貰つて、ミストラルでジャンクを回収だな」

(ピッ・・・了解 目的地 世界樹跡地)

「さて、次は面白い物が有るつて言つてたハンガーに行くか。」

「ハンガー」

これはジンか?いやジンにしては装甲が厚いし羽の数が多いな。それに各部にブースターが付いてる?これは、無理やり接続した感じがあるな、とりあえず端末確認だな。

(端末)

機体情報 ジンアサルト改 o.o 機体各部にブースターを装着
主に高速移動・高速戦闘・回避運動に重点を主にしている 頭部モ

ノアイ露出 高性能の索敵・サーモグラフティ完備

固定装備 左足：一連装ハンドガン ホルダー付き

故障部位両腕・頭部接続部 各部位バーニア接続部

「幾らなんでもサービスしそうだろ女神様・・・それにこの一連装の武器も始めて見る武器だし、使い勝手もそこそこ良さそうだけど。

故障部位が最初から多すぎだろ！・・・まあ無理やりくつ付けた感は有るけど少し補修すれば良い感じに使えそうだな。」

（ピー 目的地の世界樹 デブリに到着しました。 次の目的地を指示してください）

「デブリに付いたか。ここは一度大きな戦争が有った場所だったからなジャンク武器や色んな物が大量に有るはずだが、電子接続部とジャンク武器見つかる事に期待だな・・・。」「

（デブリ内）

「しかし、色々な物が壊れた状態で放棄されてるな。とりあえず其処まで酷い壊れ方してない250m級戦艦でも漁つて見るか。」

だが幾らなんでも壊れ方が変な物もあるな。まるで無抵抗つて言つて連携が取れずに各個撃破された感じがするな

「ん？丁度良い感じの250m級の奴があるな。中身を貰つていくか」

（3時間後）

「結構集まつたからそろそろ戦艦に戻るか・・・ん？これは、ワイヤーか？しかも頑丈だから多少荒く使っても千切れにくそうだな。」

ついでに持つて帰るか

（戦艦 ハンガー）

結構集まつたから修理して一度どれ位武器が有るかリスト化するべきだな

対装甲リーアガン×7 76mm重突撃銃×2 重斬刀×1 キヤツトウス 500mm無反動砲×1 特火重粒子砲×1 装甲盤×7
電子接続部×4 MSS用ワイヤー×1

「結構武器とか補給できたな・・・。ただ重粒子砲と無反動砲は一個しかないから壊れたら即アウトだから使い道を考えるべきだな。
それにリーアガンは電子回路さえ弄れば突撃銃のO.P装備として充分使えるな・・・」

まあそれでも一回に装填出来る弾数は10発だが使う機会が少なきやうだが無いよりかはマシだな

「さてとハンガー内でも戦艦の行き先は指定は出来るんだが・・・
次は何処へ向かおうかな。とりあえずヘリオポリスに行つて色んな物を買つとくか」

（ピッ・・・目的地 ヘリオポリス）

「さて・・・ヒジンに武装を付けて修理でもするかな」

そしてふと作業する手を止めてしまう

「俺は、敵を撃てるのか？俺はこんな兵器を持つてしまつたが・・・
殺せる事が出来るのかな？だけど戦場で躊躇いを持つたら、こっち
がやられるな・・・。

躊躇いを持つべきじゃないな。戦場を出るなら撃たれる覚悟を持つて戦うべきだろ？が！クソッ訳が判んなくなつて来たな・・・。

考えれば考えるほどシユウは、彼は未だに戦う事に對しての意味を考えてしまつ。それは彼は一度も殺し合いをして来なかつたからだ。
・・。

そして C · E · 71 1月1日 シユウはヘリオポリスに到着した。
・・。

しかし彼は未だに戦う理由を見出せないまま戦火の渦に巻き込まれようとしていた・・・。

PHASE 01 (後書き)

如何だったでしょうか？主人公であるシユウ・K・ライトニングは元は日本人なので戦争に対しても少し抵抗を持っております。え？何故幼少期を出さないのか？

まあそれは、作者の表現不足で書けませんでした・・・。申し訳ありません。

ついでにジャンク回収艦の名前を希望します。一応ご意見など有りましたら、ドンドン言つてください

PHASE02（前書き）

今回は、あのガンダムSEEDで有名なキャラを一人ほど登場させました。

まあヘリオポリスと言えば、もう判る人も居ますよねw
今回も努力して書いたので良ければ読んで行って下さい。

PHASE 02

C · E · 71 1月

「ようやくヘリオポリスに到着したか。幾ら考えても戦いの理由は、結局思いつかなかった な・・・。」

そう、彼はヘリオポリスに着くまで戦いの理由を考え続けて居たのだ・・・。

「やっぱり自分のジャンク艦に籠つても、余り良い考えが出て来ないもんだな。気分転換に、ヘリオポリス内部にでも行くか。」

シュウはそう言つてジャンク艦を出でヘリオポリス内に入った。

→ヘリオポリス内部

「やっぱり中立国の中は静かな物だな。このロロニーがガンダム製造してて、それが原因で戦火に巻き込まれるなんて悲しく成るもんだな」

と少し悲しそうに呟いてしまった。そしてシュウは前世と同じように公園へと足を向けて行つてしまつた。

(やっぱり公園に来ちゃつたか・・・。もしかしたら心の中じや不思議と平穏な場所を求めてしまつから、不思議と来ちゃつてるのかな?)

と考えると不意に鳥の飛んでくる音が聞こえてきた。そして俺の方

に止まって「トロイー？」と緑色をした鳥型のロボットが首を傾げて鳴ってきた。

「トロイー

「ん？ 君はトロイーって誰のかい？」

「トロイー！」

「わっかそっか、俺はショウウつて言つただ。でだ・・・田の前に居る青年は誰だい？」

と顔を田の前に向けて聞いた

「僕はキラ・ヤマトって言こます。あなたの左肩に居るトロイの持ち主みたいなものです。」

「・・・ッ！ そりゃ君はキラ君つて言つのか。じゃあ俺も名前教えて貰つたんだし、礼儀としてこつけも言わせて貰うか。

んじゃあ改めて言つたど俺の名前は、ショウ・エ・ライトーンングつて言うんだ、まあ気軽にショウつて呼んでくれ

とショウは驚きを隠す様に気軽に言った

「わかりました。ショウさんさ、ヘリオポリスは初めてな感じですね？」

とキラは聞いてきた

「ん？ なんで判つたんだい？ 何も言つてないのにさ・・・。」

ヒシュウは、少し警戒した口調で聞いた

「いえ、ヘリオポリスに長く住んでいて殆ど的人は知っているんですけど。何となくですけど何故かあなたは、初めて会った感じがするんで。」

「そうか。まあ初めてなのは、本當だよ。それにヘリオポリスは中立安全だと思つたし、それに此處は静かだから来たのかもね。」

「そうですか。確かに中立の場所に居れば戦火に巻き込まれずに平和に暮らせますからね。」

と笑いながら話をした。

「せんと、そろそろ自分の家に戻るよ」

「そうですか。シュウさんは、何処らへんに住んでるんですか？」

「ああ、俺ジヤンク屋やつてるから自分の戦艦を持つてるんだよ。それが今の俺の家になつてる。」

「そうですか。失礼な事聞いちやつて、すいません」

「いや、気にして無いから良いさ。それより戦場のハゲタカっぽい仕事だから、中立の人間にはちょっと気に障ったかな?だとしたら悪かつたね」

「いえ、大丈夫です。気にしてないんで」

「さうか、キラ君キミと話して楽しかったよ。まだどつかで会おうね」

「そこで俺は、キラと分かれて自分の船が有る港に向かっていった。そして戻る途中で

「さて・・・と、原作通りに進むんだつたら、そろそろヘリオポリスが戦火に巻き込まれるね。キラ君キミの戦う意味を見せて貰うよ・・・。」

と誰にも聞こえない声でそつと呟いた・・・。

（戦艦内）

「さて・・・俺も戦火に巻き込まれたら、イヤでも戦わないとマズイんだよな。とりあえずヘリオポリスから少し離れるか」

（ピッ・・・了解 目的地 L3 宙域 半径20km ロロニー無し）

「設定はこれで問題ないな。次はロロニーで戦闘中に弾を回避されたり被弾しなくてロロニー内部に当つたらロロニー崩壊の原因に成るからMS用のスマートクグレネードを相手に投げつけて、こっちの位置を判らなくさせて一方的に戦闘不能にさせるしか無傷で勝つ方法は殆ど無いな・・・。」

到着するまでMS用スマートクグレネードを作り続けていたシユウであつた。可能な限りロロニーに被害を出さない為に、そして敵パイロットを殺さない為に…。

そして6個目が完成した時に条件に有つた宙域に到着のホールが鳴り響いた。

「目的地に着いたか、じゃあジンアサルト改にジャンク屋のマークを着けて出撃するか」

(機体端末)

武装：一連装ハンドガン・重斬刀・76mm重突撃銃。p対装甲

リーアガソ

機体状態： A L L GREEN

(天井のロックを解除します)

と言つ単調な機械音と同時に天井のハッチが開く音がした。

「ジンアサルト改 シュウ・ヌ・ライトーンング出るー。」

そうしてシコウの乗るジンアサルト改は果てしなく続く宇宙へと飛び出した。

「しかし機体名少し長いから形は殆ど変わらないからジンって略して言つか・・・」

「それにしてもコイツはホント運動性高いな。しかも改造したかい有つてか、機体の隅々まで自分の思い通りに動いてくれるから、ホント使いやすいな。

かるく最高速度で動いて見るか・・・ってGが凄いが、乗りこなせれば充分強いな！」

と軽く自分で改造したジンを賞賛してると、急に「ヤニのジン止まれ！」と言う声が聞こえてきた。

止まって索敵センサーを確認してみると、後方1kmにメビウス・ゼロと言つ連合が開発したNT専用戦闘機が近づいて来た。どうやら此れに呼び止められたらしく・・・

「人が楽しんでる時に邪魔しやがって撃ち落してやろうかな。」

と少々物騒だが聞こえない様に呴いてしまった、シユウだった。

「こちら第7艦隊所属ムウ・ラ・フラガだ。ジャンク屋のMS機体がコロニーの警戒ラインに入ってるから至急引き返せ。」

「ああ、すまないな。改造したら良い機体に成つててな、試運転で飛ばし過ぎてしまつたら警戒内に入るとはね以後気をつけるよ。フラガさん」

「確かに良さそうな機体じやないの、そいつは、どうやって作ったんだい?えーと・・・何て呼べばいいんだ?」

「ああコイツは、15体位壊れたジン集めて作つた奴だ、誰にも言わないでくれよ?そっちが名前教えてくれたんだし礼儀として自分も教えなきゃね。」

「俺の名前は、シユウ・K・ライティングだ。それじゃあ失礼するよ」

と言つて来た道を引き返そうとして

「今度から氣を付けてくれりゃ、それで良いぞ」と言われて通信を切られた。

シユウはちょっと苦笑してしながら来た道に沿つて自分の戦艦に帰つて行つた。

「全く、今回は、原作の一人と会つのは少々予想外だつたな。まあこの後イヤでも絡みそุดだから、顔合わせと思えば良いか・・・。」

と呟きながら自分の戦艦に戻つて行つた。

PHASE 02（後書き）

はい、今回ムウ・ラ・フラガさんとキラ・ヤマトの登場とさせて頂きました。

しかし原作キャラの口調とか全然わかんないぜ oren

ちなみにジン15機で作ったのは嘘だろ！と思つた人

そうですね、あの時には流石に貰つたじゃザフトのスペイ扱いになるのでジャンク屋の身分を使って、ああ言いました。

さあ次は、いよいよ待ちに待つた主人公の戦闘が始まります。

未だに戦闘への理由が思いつかない主人公はどうなるのでしょうか？

乞うご期待！

そしてシユウは最後まで生き残れるのか・・・。それは作者も判りませんww

「そろそろヘリオポリスが襲撃される日だな。確かに一日で言うと25日あたりに襲撃されるんだったよな？今は、20日だからまだ時間はあるな。取り敢えずジンに今回開発した新武器と武装を何個か積むか。」

そう、今回シユウはコロニーに被害を出さない為にスマートグレネードと併用して新しい武器を作っていたのだ。そしてシユウはヘリオポリス襲撃が来る前に直ぐに出撃できるよう準備を行つた。

(機体端末)

メイン武器：76mm重突撃銃 op 対装甲リニアガン

腰：スマートグレネード・各射撃武器マガジン

左足：二連装ハンドガン

背中：76mm大口径対MS用スナイパーライフル（残つた一つの76mm突撃銃と余つたジャンク品で作成）

そう今回、コロニーに被害を出さない為に、シユウはスナイパーライフルを製作していた・・・。

「殺さずに確実に戦闘不能にまで追い詰めるべきだな・・・。」

戦う理由が未だに無いシユウは、無意識に敵兵を殺す事に抵抗をし、不思議とそう呟いていた。

そして遂にザフト軍が連合が作成したガンダムを奪取する日がやつてきた・・・。

「遂にこの日が来ちまつたが、イージスとすれ違つてストライクの近くに着くまでザフト軍のMSとして認識をしてしまう奴を、俺のジンに積んでストライクの近くに行つたら認識が中立軍に戻るプログラムを組み込んでおくか。」

そしてプログラムを作成中に時間を確認し「そろそろ作戦が始める頃か」とポツリと呟く。

（30分後）

そしてシュウは、プログラムをこの短時間で完成させた

「結構時間は喰つちましたがコイツの機動性なら直ぐにヘリオポリスに着くな・・・。ハッチ解放！」

言った瞬間

（ハッチ解放 ディゴ） と囁き単調な機械音が聞こえてきた

「ジン シュウ・K・ライトニング出るー！」

そしてシュウのジンが飛び出た。ストライクに乗つてゐるで有りつきを救出する為に・・・。
またヘリオポリスを壊したくないと思つたために。

シュウは自分のジンが持つフルスピードを出してヘリオポリスに向かつた。

機動性ではXシリーズを上回るので30分位でヘリオポリス内部に侵入することが出来た。

そして入つて直ぐにイージスとすれ違い

「ストライクやメシリーズは、P.S装甲を持つからB.E.A.M兵器以外は効かないから気をつけろ」「イージスのパイロットに言われ、即座に

「了解」

と軍の返し方をして、通信を切った。そして「プログラムが正常に働いてるな」と苦笑しながら

再び機体の持つ最高速度でストライクの居る場所まで近づいた、そしてストライクの近くに行つた瞬間にザフト軍表記が中立軍表記へと元に戻つた・・・。

「あなたは・・・良いから、さつさと後方に下がれストライク！えつ？あつ、はい！ありがとうございます。気をつけてくださいね」

そう言ってストライクは後方に飛び去つていった。

「貴様、何故ザフト軍のジンに乗つていながら連合に味方する！」

そう言ってザフト軍のパイロットが激怒していく。

「お前等ヘリオポリスは中立だぞ！連合とザフトの火種をここに持ち込んでくるな！！」

「先に中立を破つたのは連合だ。今の状況も判らぬに、あのような物を作るから・・・。邪魔をするなら先にお前を撃つ！」

と言しながら76mm重突撃銃を構えて撃つてくる。

「クッ」

シュウは、急に撃つてこられたが冷静に対処する為に左にサイドステップをして、銃弾を避けた。確かにザフト兵の言つてゐる事は正しいが……。

「だからと言つてそれが中立コロニー内で戦つ理由に成つてゐるのも思つてゐるのか！」

とシュウは、表面上だけ激怒し（とりあえずスマートグレネードでお互いの位置を判らなくさせてやる。）と思い腰に付けてあつたスマートグレネードを自分と敵の間に複数ばら撒いた。
そしてお互いの姿を煙で見え辛くしてシュウは「サーモグラフティ起動」と呟いた。

そしてシュウの「ACKPITCH」画面から敵のジンのシルエットが浮かんできた。

「戦争を吹つ掛けた奴に先も後も関係ない……。中立の平穏を乱すなら、俺はお前を無力化する。」

と言いながらシュウは、背中に掛けた狙撃銃を構えてジンの右肩を撃ち貫いた。

「黙れ黙れ黙れ！ナチュラルは黙つてコーディネーターに従えればいいんだよ！貴様もだ、邪魔をするなら先に貴様から落としてやる。」

そつ言いながら左腕で重斬刀を抜きこつちに斬りかかつて來た。

「なつ・・！」

シュウはザフト兵の予想外の行動に驚いてしまったが、反射的に持つていたライフルを咄嗟に前に出し重斬刀を防いだが代償として、ライフルが折れてしまい使い物に成らなくなってしまった・・・。

そして使い物に成らないと一瞬で判断したシュウは、持つていたライフルを敵に投げつけショルダータックルを喰らわした・・・。

シュウの咄嗟の判断と乗つっていた機体の装甲の厚さとバーニアの数の多さだからこそ出来た芸当だろう。そしてジンの体勢を崩した後、本能的にホルダーの中に入つていたハンドガンを抜き出してマガシンの中に入つていた弾を全部使ってコックピットを撃ち抜いた・・・。

「えっ？」シュウは咄嗟に自分のやつた行動に驚きを隠せなかつた・・・。「殺す気なんて無かつたのに・・・なんで・・・」

と言いながら操縦桿から手を離しガタガタと震えてしまった。

当然の事だらう・・・。

今まで殺し合ひの無い平穏な生き方をしていたのに、目の前のジンに乗つていた兵士と殺すか、殺されるかの戦いでコックピットを撃ち抜いて殺してしまつたのだから。

「うう・・・」と嗚咽を漏らしながらコックピットで涙を流してしまつたシュウで有つた・・・。

何分ぐらい泣いていただろうか？判らなかつた。結果的に敵兵を殺してしまつて涙を流してしまつた事が後悔は、しなかつた。

「何時かは殺さない事を心情としていても不運な事は起きるんだ。
。それが少し早く起きてしまつただけだ。そう考えるとこの兵士
には、感謝だな・・・。ありがとう」

そつ言いながらショウは、結果的に殺してしまつた兵士に感謝し、
索敵レーダーを確認しストライクが居るであろう方向にバーニアを
起動させ飛び出して行つた。

PHASE04（前書き）

投稿遅れて申し訳御座いません

やつぱり下書きで時間が掛かりました・・・。

今回は、拠点編 + 強敵戦の一本でお送りします。

シコウは赤服よつちよつと強いだけなので如何対処するのか？

「レーダーを見ると、確かにこの辺りの筈なんだが？」

そういつてシユウは、モノアイカメラで周囲を確認し始めた。

「…………！」

「ん？ 今何か声が聞こえたような？」

シユウは声のした8時の方に向機体を向けた。

そこには膝を付きかかんだストライクとヘリオポリスの住民とキラ君。そして、拳銃を構えた女性整備士が居た。

「オイオイ、ずいぶんとまあ 穏やかじゃない空気が出来上がつてんじゃないの」

そう呆れながらもシユウは、ストライクの横に行き同じように片膝を付きジンから降りた。だが皆に凄く怯えられた。
と・・とりあえず泣きそには、成ったが話が先だなと思つたシユウだった。

「オイツ、銃持つてんアンタ、何故ヘリオポリスの住民にそんな物騒なもん向けてんだ？」

と民間人に銃を向けているので多少苛付ながら聞いた。

「貴方は誰ですか！？ 所属軍・所属部隊・目的を答えなさい！！！」

と言ひながら今度はいつかに拳銃を向けてきた。

「所属は中立軍つて正確に言えばジャンク屋だ。書いて有つただろ？まあ目的は、そこに居る青年と戦火に巻き込まれるヘリオポリスの防衛かな？」

「ふざけないで！第一ジンはザフト軍の物よ。それに普通のジャンク屋がジンを手に入れられる訳無いでしょう！しかもナチュラルの貴方が何故コードィネーターのMSに乗れるの？ザフト軍のパイロット？どうなの答えなさい！」

と女性整備士が怒鳴りながら聞いてくる。

「はあ、アホらしいな・・・。まずキラ君を助けに来たのは、本當だ」と女性整備士の質問に呆れながら、ヘルメットを外した。

「えつ、シユウさん！？」「知り合いなのかキラ？」「うん、ヘリオポリスの公園で偶々会つたんだ。」

と青年たちの話が聞こえて来だが取りあえず無視。

「次にジンの話だな。アンタも技術者の端くれなら聞いた事有るだろ当時10歳の子供がプラントの電子・工業系大学に入り主席で出た奴が居るって。」

「ええ、でもあれは、伝説的扱いで今頃20歳で何処かの技術TOPに居るんじや？」

「その人間が俺なの」「えつ！？」多少驚かれたが、本当に、

本当にあの時は大変だつたなあ・・・。と思ひながら多少遠い目に成つてしまつた、シユウだつた。

「話しほるけど、まあ知識と技術をフル活用して作り上げたんだよ。このジンはな」

「ちょっと信じられないけど、何で貴方は、何処にも所属しないの？」

「ん？まあ色々有つたんだけど、大半は面倒だつたからかな」

「面倒だつたからつて、まあ良いわ。それより何でヘリオポリスがしゅうげ「ザフト軍のCPにハッキングしたかい。」

「へえ～ハッキングねえ・・・。ハッキング！？連合の電子班ですら、苦戦する事を何でそう簡単に答えるわけ？」

「アンタ等のハッキング方法がハッキリ言つて悪すぎる、足跡残しそぎまるで見つけて下さ」と、とても堂々と言つてる様なもんだぞ？」

？」

「正に規格外ね」と言われたが、（まあクジ引きだつたが運良く手に入れた公認チートだしな）と思つてしまつた

「だつたら何でその情報を教えてくれなかつたの？」と言われちまつたが

「何でそんな事教えなきや成らんのだ？第一教えたとしても狂言として一蹴されるのが良いオチだ」と返しといた

「さて・・と 話は、終わりだ。そろそろアイツが来る頃だから隠れとけ、適当に追い払うからさ。」

「「「アイツ?」」」とハモって聞かれたので

「敵の指揮官が出て来るんだよ。それも飛びつきり危ねえ奴がな」と答えるながら自分の愛機に乗りかけた時に、「僕も手伝います」とキラが答えるながらストライクに乗りかけていた。

そして少し睨みながら「覚悟はあるのか?」と質問をした

「友達が殺されるのを黙つて見たくないんです」と覚悟を決めた眼差しでこちらを見てくる。

「そうか、ヘリオポリス内の地図を送るから、指定したポイントまで付いて来てくれ」

そう言つてストライクにデータを送りシュウは「また、行く事に成つちまつたな」と辛そうな声を出しながら、P₁₅^{ボイント}に向かった

そう、そこは、先ほどシユウが敵兵と殺しあった場所だった。そこでシユウは有る物を回収しようとしていた。

「ライフルのスコープに重斬刀それに突撃銃、少し壊れてるが予想範囲内だから、此處で何とか修理と改造は出来る物だな。」

「つと、その前にストライク用のシールドがそこに有るから装備しきな、あとはコロニー内で射撃してビームライフルが外れたらコ

ロニーのダメージが蓄積しやすいから代わりにこれを使ってくれ。」

とショウは背中に掛けおいた7.6mm突撃銃（OP 対装甲リーアガン）をストライクに渡した。

「あの、何でこんなにしてくれるんですか？」

とキラは、恐る恐るショウに聞いてみた。

「ん~、何でだろう?」と言しながら武器の修理・改造に取り掛かっていた。

「まあ多分だけど、不当な暴力を認められなかつたからかな?その為だつたら味方に対する支援は、惜しまないけどね」

と言いながらショウは、その天才的な手腕で重斬刀とスコープの修理を終え、スコープを突撃銃に溶接し始めた。

「認められない不当な暴力ですか?」と不思議そうな顔をしたキラだった。

「うん、良いかいキラ君。俺は、殺し合いつと言つ権利が有ると言つ事は、同時に撃ち撃たれる覚悟が有る人の事を指すと思うんだ。それに今回のヘリオポリスの襲撃で戦争に全く関係無い人も多く死んでしまつた事だろうね。だから俺は、銃を持たない普通の人人が死んでしまつた事は、容認出来なかつた。だから此処に居るんだ。まあ俺が味方するのは、ザフトでも連合でも無い力無き人達の為に戦うんだ。」

と言い完成させた7.6mm突撃銃（OP AOCGスコープ）を確認していた。

「そりなんですか、でも僕は、「君は君の戦いの理由を納得出来るまで探し続けねば良い」と・・・はい」

(ビーーー・ビーーー・ビーーー・)

そしてシコウのジンの敵が接近しているのを示す警戒音が鳴らされた
「ちつ！ 話は終わりだ、キラ君。初めての実戦だが気を抜くなよ。
相手はシャレに成らない奴だからな・・・。」

と言ひながら確實にダメージを与える方法を頭で画作し続けていた。

「知っているんですか？」と聞かれ

「戦つた事は、無いが噂では何度も奴の武勇伝を聞いたよ。どれも
ぶつ飛んでる位の撃墜数だ」と返しといた

そして指揮官の乗つたシグーが目の前に現れてきた・・・。

（ちょっとマジでやらないと、こっちが死ぬかもな）と少々焦つてしまつたシコウだった。

（そういうえば、ストライクには、3つの兵装が有つたな。）

高機動で動く ハールストライク

隙はデカイが当たれば打点がデカイ ランチャーストライク

そして接近戦に持ち込めば確實に致命傷を与える ソードストライク

(どれもP17にある。だが奴は、確実にストライクを狙うだろう
な。俺が囮に成って戦えば兵装を付けて・・・。

だが俺は生き残れるのか？いや生き残るんだ！迷うな！恐れるな
！戦うんだ！）

「キラ君アイツは、俺が引き付ける、その間に君はP17に行つて、
どれでも良いストライク専用の兵装を付けて来るんだ！」

「えっ、しかし「早く行け！」「クツー判りました。」

そつと云つてストライクは、P17へ向かつた

そしてシグーはストライクを追う様に向きを変えようとした。

しかし

「オイオイ、どっち向いてんだお前？お前の相手は俺だろ？が！！」

そう言つて76mm突撃銃を構えてシグーに撃つた。
しかし相手は歴戦のパイロット単調な攻撃が当たる筈が無い。

そしてシグーの向きがストライクの行った方向からこつちに変わつ
た。

「さあ楽しい殺し合いをしようじゃないか・・ラウ・ル・クルーゼ
！――」

と震えながらも笑っていた、まるで此れから始まる殺し合いを楽し
むかのように。

そして行き成りシグーの持つていたシールドから28mmバルカンが地上にばり撒かれた。

シユウは急いで上に飛び上がりシグーに対して重斬刀で斬りかかつた。

だがクルーゼ機も咄嗟に反応し重斬刀を抜き出していた。そして鎧迫り合いが起きた。

だが数秒後お互に後方に下がり、76mm突撃銃をほぼ同時に取り出し撃ち合いが起きた。

そしてお互いに10分ほど撃ち続けて・・・

クルーゼ機は、右足を、俺の機体は左腕が被弾し使い物に成らなかつた。

そして咄嗟に推進剤爆破を恐れて左腕を強制パージをした。

そしてその判断が功を制したのか元左腕から爆発が起きた。

「やはりクルーゼは、戦闘の化物だな・・・。」と忌々しげに呟くシユウだった。

そして手持ちの武装を確認する
(マガジン数：突撃銃3本 ハンドガン1本)

「少し賭けに出るか」と呟いた。

「君、名前はなんていう?」とクルーゼが聞いてきた。

「人に名前を聞く前にまず自分からと教えて貰わなかつたのか?」
(まあ、お前の名前聞かなくても知つてるけどな・・・)

「ハッ!確かにそうだな。私の名前は、ラウ・ル・クルーゼだ。再び言おう君の名前は?」と言われ

「チツ・・・シユウ・Ｋ・ライトニングだ」とイラつきながらも答えた。

「单刀直入に言おう私の「仲間になれか?」・・・そつだ

「拒否するわ、あなたの目的は、知らないが お前等が地球にノジヤマーを打ち込んでから入る気失せたわ」

「そうか、君ほどの人材を失うのは辛いが仲間に成らないのなら此処で落ちてもらつー!」

そう叫びながら重斬刀を持つてシユウに突っ込んで来た。

そしてシユウは「此処で俺は落ちない!賭けはアンタの負けだ、ラウ・ル・クルーゼ!..」

シユウは「全ブースターリミッター解除!」そう言いブースターのリミッターを解除した。

そしてシユウはクルーゼ機に体当たりを喰らわしたバーニアをフル稼働をさせた。

「なにっ！？」と叫う声が聞こえた気がしたが気にしない。

そして失った左腕以外のブースターのリミッターが解除したのだから掛かるGと速度は恐ろしい物だろ？。

途中でビルの壁にぶち当たったが今のGと速度では、紙切れ同然だらう・・・。

そしてシュウは、Jの解放モードを一度計測した事がある。そして危険があると考えリミッターを掛けたほどだ。そうその速度は、Xシリーズなど話に成らないほどの速度だった・・・。

そしてシュウのジンとクルーゼ機は、P₉^{ポイント}に有る山に突っ込んだ。そして互いの機体がREDOゲージで有る事を示す警報鳴り響いた・・・。

シユウは、最後の気力を振り絞つて重斬刀を振り下ろした・・・。だが当たった場所は左腕だった・・・

「チクショー」思わずそう呟いてしまった

そしてシユウは、それを最後に気を失ってしまった・・・。

PHASE04（後書き）

如何だったでしょうか？今回はラウ・ル・クルーゼ▽シュウ・K・ライトニング

でしたね。正直言つて自分で書いてて△△感あるなと思ったほどでした。

まあ次話も少し時間掛かりますが頑張つて書きます。

感想やレビューまた何か有りましたら気軽に書いて下され

PHASE 05 (前書き)

とりあえず戦闘終了後の拠点フェイズに入りました。
まあ今回は、少なめですがそれでも頑張って書いたので読んで行って下されば嬉しい限りです。

「ん？此処は・・・ツ！！」

シユウはベッドの上で目覚めた、しかしクルーゼの乗るシグーに殺されない為にリミッター解除をしてしまったので肉体的ダメージも大きいのだ。

そして医務室のドアが急に開かれ、そして3人が入ってきた。

どうみてもパイロットの金髪の人、先程話した女性整備士、そして黒髪の女性は、誰だ？

「目が覚めたか。取り敢えずの所生きてるようだな。」

と知らない女性に怒ってる様に言われた。

「何で怒ってるんですか？」と取り敢えず聞いてみた。

「怒つてなどいないのだが・・・。」と反論されてしまった。

とりあえず本題に入ろうかな。「今回助けて下さり、有難う御座います。自分はシユウ・K・ライトニングト言います。気軽にシユウとでも呼んで下さい。」

「マリュー・ラミアスよ」「ナタル・バジルールだ」「ムウ・ラ・フラガだ、先日ぶりだな」

と三者三様の返し方をしてきた。

「しかし、何故お前さんは、山に突っ込んでいたんだ?」とムウさんに言われ

「ラウ・ル・クルー・ゼと戦っていたから」と言つた瞬間

「「「!?」「」」3人の顔が驚愕に染まった。

「まあ良いや、とりあえず俺のMS見させてくれ。後は、今此処どこなんだ?」

「あ・・あ・、こっちだ付いて来い」と言われナタルといふ人に付いて行つた

「とりあえず、今はユニウスセブンに行つていい。ほら、此処を真っ直ぐ進んだらデッキだ。整備してるのは、コジロー・マードックだ挨拶しとけよ?」と軽く言られた

「はい、ありがとうございます」そう言いながら(アルテミスの傘は落とされたんだな)思つたショウだった。

↓ハンガー内↓

入つて直ぐにキラ君と鉢合わせた。

「シユウさん!? もう動いても大丈夫なんですか?」と少々困惑した表情で聞かれた。

「ああ大丈夫だよ。それよりマードックさん何処に入るか、判るかい?」と大丈夫そうに体を動かしながらマードックの位置を聞いた。

「マークさんですか？マークさんでしたら僕と大尉の機体の整備終って直ぐにシウさんのMSの修理してましたよ？」と教えられたので。

「ありがとう、キラ君。それより後で話をしたいんだけど良いかな？」と言つて「・・・はい。」と返して来たキラ君だった。

「大丈夫、そんなに堅苦しい事聞くんじゃないよ、自分が動けない間に何が有つたか教えて欲しいんだ。」と言いシウは、その場を離れ自分の機体に向かつた。

そして自分の機体の目の前に辿り着いた瞬間に、喧騒が起きていた。「整備長、焼ききたコード全部変えました。」「良し他の所を手伝え！」
「はい。」

「整備長、余りの忙しさで泣きたいです！」「よし、泣け！泣きながら作業続けな！」
「解しました。」

「整備長、寝させて！」「もう懇願じゃなくて、言い切つてるじゃねえか、作業しろ！！」「うう、眠たい」

と言う声が響いてきた。あとの2つ位が整備に関係して無い気がしたが、気のせいだと思つ。

「ゴジロー・マークは居るか！」と整備士に向かつて叫んだ。その瞬間一人の整備士が作業をやめこっちに来た。

「ああ何だ坊主？俺がマークだが如何したんだ？」と少し苛付いている様な感じが出ていた。

「ええ、そこのジンしう「ガンツ！」いつてえええ・・何すんだよー。」

そうシウは、行き成りマークにスパンでぶん殴られたのだ。

「アホか、フルバーストで山にぶち当たりやがって、直す方も大変なんだぞ！？次からは気をつけろ」

そう怒ったのは、ジンがボロボロなのも有るが、機体以上にパイロットも心配だつた・・・。

「すいません、気をつけます」と素直に謝つたシユウだった。

「わかりや良いさ、次から気をつけてくれよ？」と言われシユウは、その場を離れた。

そしてシユウはホームの存在を思い出し
こっちまで持つて来て良いかマリューさんに聞きたくてプリッジまで向かつた。

♪プリッジ♪

「マリューさん自分のジャンク艦をこっちまで持つて来て良いですか？」

と一応聞いてみた。

「ええ、でも時間掛かるんじゃ・・・？」と聞かれて
「ユニウスセブンまで来させます。端末借りますね」そう言ってシ
ュウは、端末を打ち出した。

(ホーム端末)

(目的地を設定してく下さい) カタカタ (目的地) ユニウスセブ
ン 最高速度)

(ピッ -- 目的地 ユニウスセブン 了解)

「さてと、これで大天使が着く頃には、ホームも着くでしょう。つ
て皆さんどうかしました？」

と皆呆然としながらも「アイツが、規格外なだけなんだ」と言われてしまった。

（そりや、運良く手に入れた公認チートだからね）と内心呟いてしまつシユウだつた・・・。

「しかし、ユニマックスセブンか・・・。何か有つた気がするんだが、何だつけかな？」

正直何か有つた気がするのだが忘れてしまつたシユウだつた。

そして3週間後ユニマックスセブンに到着し、新たな火種がシユウヒアーチエンジニアのクルーに降り注いだ。

それは誰もが予想外すぎることで、考えられない事だつた。

PHASE 05（後書き）

はい、アークエンジェル内での拠点フェイズです。次は、シユウが
ユニアウスセブンに着くまでの暇潰しを書いて行こうと思います。
まあ原作知識は偶に忘れてる設定を掛けときました。

そしてアークエンジェルに降る新たな火種・・・。原作知ってる人
なら判りますね

そしてシユウは、生き残る事は出来るのか？

ご意見・ご感想あればドシドシ言って下さい

PHASE06（前書き）

はい、今回PHASE06・拠点フェイズを投稿しました。
まあ今回も上手に書けたかは謎ですが
それでも努力はしたので読んで貰えると嬉しい物です
それではPHASE06お楽しみ下さい

「ヒマだな・・・」
そうシユウは、ホームに帰るひつと思えば帰れるのだが、アークエンジュルのご好意に甘えて客室を一つ借りているのだ。

さて話は変わるが、キラ君はあの後ストライクのエールストライカーパックを付けてこっちに来ようとしたらしいのだが、他のジンの部隊と遭遇して戦つていたらしい。

一応倒したらしいが（幾ら初陣だからって時間掛かりすぎだろ。）
と思つてしまつた

俺の所に付いた時には、既に戦闘は終つておりクルー・ゼ機が火花を散らしながら撤退してたらしい。

ちなみにヘリオポリスは、1時間後にジン・D装備が来て崩壊してしまつた。

「考えてみりや原作通り進んではいるが、やっぱリクルー・ゼ戦じや俺の負けだよな・・・」

シユウは、余り強さに興味が無かつたのだ、強大な力を持つと自分に力に驕つてしまつからだ。

「だが周りの人を救うんだつたら、もつと強くならないとな
そつ眩きシユウは、シユミレーターのある場所に向かつた

（シユミレーター室）

先客が居るようだ。そして「キラ君とフラガ大尉？」と言つてしまつた。

「シユウさん？何故此処に」「シユウか。あと大尉は着けなくて良いぞ」
とキラ君に言われ

「ああシコミレーターを使ってトレーニングしに来たんだが使われてるらしいな。」と言つたが

「いや、使えば良いわ」とフリガちゃんに言われ

「本音は？」と聞き返したら
「ばれたか、正直言つてキラとシユウの実力を見せて欲しいもんでもれ」と言われて

苦笑しながら「わづですか」と返しておいた。

「キラ君やつてくれるかい？」「はい」と言いながらキラ君と俺は、シコミレーターに乗り機体情報を打ち込んだ。

ストライク（エールストライカーパック
イーゲルシュティイン×2
アーマーシュナイダー×2
57mm高エネルギー・ビームライフル×1
ビームサーベル×2

ジンアサルト改

76mm重突撃銃×2（〇〇 対装甲リニアガン）
重斬刀×1
28mmバルカンシステム内装防盾×1
二連装ハンドガン×1
各マガジン×3

「お～、シユウの方は、ホント重装備だねえ」と言われ

「ストライクのアビ装田麗の」呟つむかじりか謎なんで、取り敢えず多く武器を用意しつづのが良いこと思こまやんでね」と懸念をこぼしながら返しといた。

そしてシユウは、作り物の宇宙へと飛び出した

「セレストライクは、ラルフ・ラッセル・ラリー！」

シコウはすぐさま後方に下がった。そして命を奪う一筋のヒームが通り過ぎていった。

シユウは直ぐに撃つて来た方向に向きストライクをロックオンして
76mm突撃銃を打ち出した。
だがストライクには、PS装甲フェイズシャフトが有るので有効的な打点には成らないだろう。

「ショウさん、ストライクにダメージを取れると思っても無駄ですよ」と馬鹿にしてるのか?と思つ発言があるが

「判つてゐや」と返しておき、マガジン80発×2丁＝計160発を撃ち込んだ。キラ君も避けようとしたが、8割は確実に当つているだろ？。

そしてビームライフル連射の反撃が帰ってきた。

だが当る訳には行かないの、上昇・ローリング・宙返り等まるで曲芸士みたいに避けた。

「チツ！流石に当るとマズイんでな。ここは、他の場所に退かせて

貰う。」

そう、この作り物の宇宙には、二種類の場が用意されているのだ。
・今の何も浮遊していない宇宙

・数箇所に穴が開いて破棄されたと思われる300m級戦艦

・そして最後にMSを隠すには絶好なMSや隕石や戦艦の残骸が漂つて
ているデブリベルト

そしてシウウはデブリベルトへと身を隠しに向かった。それを追撃するように追つてきたストライク

(そうだ、そのまま付いて来い) と思いながら

デブリベルトに隠れ、76mm重突撃銃のリロードを開始し始めた。完了した時には、ストライクが来たがこちらの位置が判らない様だ。

今自分は、9時方向のデブリベルトに居るのだがストライクが3時の方向に向いた瞬間

「そういう時は、身を隠すんだ!!」 そつとつてストライクに2丁の76mm重突撃銃を撃ち込み始めた。

「なつ！？」 シウウの予想外の位置にキラは、反応出来ずそして2丁の突撃銃の弾を全弾受けてしまった。

そしてシウウの狙い通りストライカーパックは、破損しPS装甲は
EN^{エネルギー}切れで起動しなくなつた・・・。

キラは舌打ちしたが、シウウは「此れで対等だ」と言つて2丁の7

6mm突撃銃を捨てた。

そしてシュウとキラの第2戦が始まった。

「やはりPS装甲が起動しなくて、性能は落ちない物だな」と咳きながらアーマーシュナイダーを持つて突っ込んで来たストライクを重斬刀で防いだ。

そしてシュウは、ブースターを巧みに操り、ホバーの真似事をしながら後方に下がり28mmシールドバルカンを撃ち込み始めた。

だが当ればストライクにとつても命取りに違いないのだから回避され、今度はイーゲルシュテインを撃ち込みながら突っ込んで来た。

「避けるのは簡単だが、次のアーマーシュナイダーの連激に繋げられるのは厄介だな」と咳きながらシールドを構えてイーゲルシュteinを防いだ。

そして次に繋がるアーマーシュナイダーを後方に下がるのでは無く、直撃する前にショルダータックルを喰らわして怯ませ、デブリ群に隠れたが

どうやらさつきのショルダータックルでアーマーシュナイダーを右肩に刺していたようだ。

そしてストライクは、先程の事を考えて身を隠し始めた様だ。

「先程の教訓を生かしたようだな。だが此方の機体には、高性能索敵機とサーモグラフティが装着されてるのを忘れていたのは、失敗だつたな」と呟きながら

サーモグラフティと索敵機をフル活用しストライクの位置を特定した。

そして必要最低限のバーニアしか使用せずにストライクの後方に回り、そして「終わりだ・・・」と呟きながらPS装甲の起動しなくなつたストライクのロッククピットに重斬刀を突き刺した。

バトル終了

「ありがとうございました」と言われ、「いや、こっちも良い経験に成ったよ」と返しておいた。

「しつかし改造ジンでストライクを倒すなんて凄いな」とムウさんに言われ

「機体の持つ機動性の発揮・デブリの有効活用・武装の選択どれか一つでも間違えてたら、きっと自分が負けましたよ」と言いながらシユウは、自分の実力を謙遜していた。そう自分の実力に酔わない為に謙遜するのであつた・・・。

「あ、そうだ。アーマーシュナナイダー一本くれないか?」と聞いてみた

「アーマーシュナナイダーを一本ですか?」と不思議そうに聞いてきたので。

「うん、さつきの事でアーマーシュナナイダーの有用性・使いやすさを考えてみると自分のジンに一本組み込みたいんだ」と言って「待つて下さい。聞いてくるので」キラ君が聞きて言つた。

そしてキラ君が帰ってきて、ナタルさんに話した所多少泣かれたらしいが。

「ストライクに乗るキラを倒したのだから御褒美みたいな感じにあげて良い。一本じゃなくて一応2本渡しとけ」とナタルさんに言われたらしい

「よつしゃーー一本貰えたのは予想外だが、ホームが来るまで派生武器でも考えるか」と嬉しそうに割り当てられた部屋に戻りに行つた。

「元気ですね」「元気なこつて」と後ろで何か言われた気がするが氣のせいだな。と思つたシユウだった

そして深夜・・・。

今のシユウの表情はシユミレーターでは無かつたけわしい表情が有つた。

「今とのじゅいレギュラーで有る俺が動いてても未来は変わらない様だな。だが余り派手な行動をしない様に気をつけるか・・・。」
と呟いた

そしてPCを起動しおつた設計図が目の前に表記し始めた。

N O 1 : ストライク I W S P パック (これは、原作無視に成るから見せない様に永久凍結と・・・)

そう思いながらプランが見られない様に何十にもロックを掛け始めた

N O 2 : 射出式内臓ワイヤー アーマーシュナイダー

これは、アーマーシュナイダーの持ち手にワイヤーを括り付けて射出・回収式だから見られても構わない物だなど。とロックを掛けずそのままにしておいた。

そして最後にNO3：「キマイラ」これを使用するのは、まだ早いな。それに此れは元は出来ているがパーツが足りないな・・・。

「作成はするが、今データを見られるのは、正直マズイな。」そう呟きながら持てる技術を使ってキマイラのデータにロックを掛けた。

そして気付いたらユーワスセブンの到着まで1週間を切っていた。

シユウはユーワスセブン到着までの残りの時間をキマイラの開発に回していた。皆を救う為の力を得る為に・・・。

PHASE 06 (後書き)

どうだったでしょうか？今日はクルーゼに負けてしまった様な物ですから。

トレーニングとしてキラ・ヤマト vs シュウ・K・ライティング戦を出しました

キラ君が負けて不快に成ってしまった人申し訳ないです。O-TZ

さて主人公専用オリジナル新機体を名前だけ登場させました。

どんな機体と成るのか楽しみですね。w

自分ですら名前を考えただけで機体は全然考えてません。すいませんまあそれでもマトモな機体にする予定なんで期待してください。

そしてシユウは生き残れるのか…まあこれは、後書きのお約束と言つ事で。

感想・レビュー何か有りましたらドンドン言つて下さい

ショウ「今回時間掛かつたな作者やるよお？」

抹茶「ええ、そりですね。ホントすいませんでした。」

ショウ「今回は、時間は掛かつたがちゃんと投稿したな。だが1週間越えは無いよなあ？」

抹茶「ショウさん、何でそんなにドスの聞いた声が出てるのかな？」

ショウ「ん~暇だったからかなあ。あと早くキマーラに乗せやがれ」

抹茶「拒否。時間掛かるから無理。むつ少し待て。」

ショウ「ぬつを拒否してきたな。まあ良い乗れる事を期待しておひ

ショウ・抹茶「では、本編お楽しみこ」

「さてヨニーウスセブンに着いたようだな。だが補給とは言え辛い物を感じるな。」シユウは呟いた。

「ああ死人の物を漁る物盗りみたいな感じだが、生き残る為だから仕方ないさ」とフラガさんと話した

「そう・・・ですね、せめてアルテミスで充分の補給が出来ていればな」

そつ言いながら氣を失っていた事を悔やむシユウだった。

「確かに補給が出来ていれば便利だったが、そう簡単に事が進む訳が無いだろう。」

後ろから女性の声が聞こえた、振り返ってみたらナタルさんだった。

「ナタルさんでしたか、何か用ですか？」

「ああアーチェンジエルから補給をする為にミストラルを出すんだが護衛をして欲しい」と言われ

「密室を借りているんだし、それ位やりますよ」

そう言つてジン改の準備をする為にハンガーへと向かった

(装備)

76mm突撃銃(OP AOCGスコープ)

背中 アーマーシュナイダー×2

左腰 重斬刀

右足 二連装ハンドガン

「さて出るか」と呴きながらカタパルトを使用せずにハンガーからブースターを使用して飛び出した

そして全体を見回せる位置に着いた

「どうやら、まだ始まってないようだな」と言いながら人が集まっている場所を確認した。

その瞬間凍りついたユニアウスセブンに折り紙の花々が一面に飛んでいった

「これは、生きている人が持つべき永遠の罪だな・・・。」

そう呴きながらシユウも黙祷を開始した

そして黙祷が終了後ミストラルが作業を開始し始めた

何分経つただろうか？判らなかつた。だが不意に索敵センサーが何かを捕らえたようだ

「他の奴は、気づいてないようだな。まあ俺が確認すれば早いか」とデブリに紛れ込みながら索敵センサーに引っかかった目標を確認に向かつた。どうやら強行偵察型ジンらしい・・・。

「気付かなかつたら放置、気付いたら落とす」そう言いながらアーマーシュナイダーを構えた

そしてジンは何かを探していたようだが見つからずに離脱し様としついたが・・・。

直後アークエンジェルの居る方向に向いてライフルを構え始めた。どうやらセンサーに何かが引っ掛けた様だ。

「チツ！ 気付かなければ良かつた物を！」と言いながらテブリから飛び出し強行型ジンに突撃していった。

瞬間ジンがこっちに気付いてライフルを構えてきたが・・・「遅い！」 そう叫びながら

1本目のアーマーシュナナイダーを頭部のモノアイを突き刺し2本目のアーマーシュナナイダーをコックピットに刺しパイロットを貫いた。そして強行型は、僅かに腕を動かし沈黙した・・・。

「やれやれ面倒事は、勘弁して欲しいもんだぜ」と愚痴りながら、強行型ジンを回収しジャンク艦のハンガーに入れておいた
「モノアイとコックピットを修復すれば、まだ使えるな」と強行型の有用性を考えていた

そしてホームから出て元の位置まで戻った瞬間にストライクが居ない事に気付いた。

さすがに一人じや警備も出来ないので通りがかつたミストラルに話を聞いてみた

・・・・・

聞いてみたところ救命ポッドを拾つてアークエンジェルに戻つたらしいそうだ。

「確か救命ポッドの中に入つてる人はラクス・クラインだつたはずだな」

と原作を思い出しついた。「だが、俺は興味が無いから見に行く気が起きないな」

「しかし彼女も戦争の為の道具扱いか……と人を道具の様に扱う事に苛付いたシユウだった

その後3時間くらいだらうか？補給は、安全に終わりシユウは久々に自分の家ジャンク艦に戻りくつろいだ。

「ただいまー、まあ何も帰つてこないんだけど寂しい物だな」と久々に一人に減つた事を思い出す。

「さて、この後事務次官と会えると思つが、Xシリーズ4機と戦うのか、危険だな。

わざわざ蛇の道を進むほど阿呆じやないんでな此處で一旦離れるか。

と咳きながらハンガーへ向かつた

「さて強行型を修理してジンの固定武装を追加するか

（新情報を追加）

強行型ジン 修理完了 使用可

ジンアサルト改 固定武装：左腕 内臓型射出式アーマーシュナイダー

「やはりキマイラは、元を変えるべきだなジンだと機動性と空中戦が期待できないな。

元はティンにするべきか？まだまだ改良の余地ありだな。」

と誰も居ないジャンク艦でシユウの声だけが響いた

「さて俺は、Xシリーズどご対面はイヤなんでな、それに今は力を

貸せるほど強い訳でもないし此処は、先に地球上に降ろせてもいいつか」と凶悪な笑みを浮かべた。

「おっと先に話を付けておかないとな」そういうつてアーチエンジニアルへと回線を開いた

「ラミニアス艦長 私は、用事が有りますので、此処で失礼します」と言つてみた

「えつ！？援護してくれないのでですか！？」と驚愕していた。

「例えジャンク屋でも長く連合と居たら怪しまれます、それで攻撃を受けるのは此方も御免なので」

とハッキリ言い切った

「そう・・・ですか、今まで有難う御座いました。無事な航海を祈っています。」と言いながら敬礼してきた。

「お互に無事で居ましようね」と言い、こちらも敬礼しながら回線を切つた。

そしてシュウは大気圏突入の準備を始めた。そう今回地球を目指す意味は、キマイラのパーツ入手する為に向かうのだ。

そして向かう場所はアフリカ北部、通称砂漠の虎が居る所で有名な場所を目指した。

PHASE07（後書き）

シユウ「今回俺は、地球に航路を取ったか正しい選択だな」

抹茶「ただ単に死にたくないだけでしょうが・・・」

シユウ「あつ？何か言つたか今？」

抹茶「ごめんなさい、お願ひだから、その拳銃を仕舞つてください」
シユウ「判れば良い、さて今回キマイラの元と成るMSは何に成る
んだ？」

抹茶「陸用のMSを宇宙も行ける様に考へてるんですけど。未だに
閃きませんね」

シユウ「そつか、良い機体を待ってるぞ」

抹茶「りょーかい。さてシユウは生き残れるのか？」

シユウ「生き残りたいがな・・・」

「ご意見・ご感想ありましたら、ドンドン言つて下さい

抹茶「はい、今から地球・砂漠の虎が始まります」

シユウ「砂漠か、クソ暑いのしか思いつかんな。」

抹茶「まあまあ落ち着いてくださいよ。この後本編で楽しい事が起きるんですから」

シユウ「お前の筆つ楽しい事が一抹の不安を覚えさせてくれるよ」

抹茶「酷いですね。これでも頑張つて書いてるんですよ?」

シユウ「はいはい、頑張つてるな」

抹茶「投げやりですね、まあ良いでしょ?」

シユウ・抹茶「では、本編お楽しみください」

「何でこんな事に成っちゃったんだろう・・・。」と不意にそう呴いてしまった。

そうシユウは今、地球に下りて十数分で戦闘に成ってしまった。相手はバクウ3機 1小隊の基本だなと思つてしまつた。取り敢えずさつきの事を振り返つてみるか。

（回想）

「ふうよひやく、地球に下りれたか、でも此処は何処だろ？？」と呴いた。

「とりあえず軍を見つけたら街までの道を教えてもらひうか・・・」と呴いた瞬間、近くにMSの反応が3つ有つた。

「ちょうど良い所に居たな、聞いてみるか」と言い乗つていたジン改で追い掛けみた。

「オーケイ、そのバクウ待つてくれー」と言いながら追い掛けたが・・・気付かれなかつた。

「ふざけんなよ・・・」「ラアアーーー待てやー」と言いながら試作型闪光弾を撃つた。

「あつ・・・やつと止まつた」と言い近づいたら急に撃つて来た・。

（回想終）

「うーん、やっぱり閃光弾撃つたの失敗だつたなあ」と言いながら迫つてくる8発のミサイルをバルカンシールドで全部撃ち落としただがミサイルは田くらましだつたようだ、1機のバクウが突進してきた、とっさにシールドで防いだが吹き飛ばされる

「グゥッ、やつてくれるな。だがこいつちもこいつちの戦いをさせてもらひ」と言ひスマートクグレネードを2個バクウに投げつけた

だがグレネードと勘違いしたのか右に避けられた、だが「それを待つていた!!」と言い収納型アーマーシュナイダーをバクウの左足に括り付け引つ張った。

「お前等が素早く動くならそれを止めてやるよ」と良いながら重斬刀で右前足と頭部を斬り戦闘不能に追い込んだ。

後の二機が慌ててレールキャノンを撃つて来て再び格闘に移るうとしていたが。

「一度同じ事されたらい一度田は喰らうかよ!!」と叫びながらワイヤーアーマーシュナイダーに括り付けていたバクウを2機居るうちの一機にぶつけた

だがもう一機は、構わず突っ込んでビームサーベルを展開していた。「チツ、当るとマズイな」と少々焦りながらも76mm突撃銃を構えて前足を狙い撃つた。

当たり所が良かつたのかキャタピラが煙を上げバクウが前のめりに体勢を崩した、そしてシュウは、すかさず重斬刀に切り替えモノア

イを潰した。

「ふう厄介な目に有つたな。だが砂漠の戦闘は初めてだから慣らすには丁度良かつたな」と一安心して呟いたが……「ビー・ビー・ビー！」と警告音が鳴り

背中を狙っていたビームキャノンの連射をとっさに左にローリングして避けた。

「やれやれ行き成りなご挨拶だな、砂漠の虎さんよお」と言いながら所々カスタムされたオレンジ色のバクウに向かってそう言った。「一応部下がやられてるんでね、その報復とでも言つておこうか、それに君の実力も気に成るしねえ」と言いながらキヤタピラを起動させ迫つて来た。

「本音は其処か？まあ良い、一応お前さんの部下は生きているぞ？無駄に殺す気には、成れないが。アンタの場合手抜が出来ないんで死んでも怨むなよ！」

と喋りながらもバルカンシールドで牽制し重斬刀で突撃した。だが相手は、砂漠の虎その程度ではかすりもしないだろう。

バルカンは、右に避けられ重斬刀は後方に下がられ当らなかつた。
「チツ！やつぱりこの程度の連激じゃ当らないか」「甘いねえ、もつと上手く狙わないと」

と苛立たせる様に挑発するが、そのような言葉にまどわされるほど腐つてはいない。

そしてラゴウのビームキャノンが放たれた。咄嗟にシールドで防い

だが、盾は少し溶けてバルカンが使い物に成らなかつた。

「本気で殺す氣だなあのオッサン」と言いながら。再び重斬刀を持ち斬りかかつた、だが避けられると思ったのだろう。次の瞬間必要性が無くなつた盾を

ラゴウに投げつけた、だが読めていたのか左に避けた、咄嗟に重斬刀を仕舞い右足に積んだ二連装ハンドガンと7.6mm重突撃銃をラゴウに向かつて撃ち始めた。

だが最後には、空中に避けられたが「これを狙つていたんだよ！」と叫びながらアーマーシュナイダーを射出した、そして左足に括り付けた。

だがさすがに砂漠の虎もマズイと思いワイヤーを斬つた、だがその一瞬が攻撃に充分な時間だつた。「うおおおお！」叫びながら重斬刀を持ちラゴウに斬りかかつた。

だが最後の最後でビームキャノンが火を噴き足を破壊しにきたが、今更気にはしない。無傷で勝てる戦いなど何処にも無いのだから。

そして重斬刀は当つた・・・だが当つたのは後方のキャタピラを斬り落としただけで終つた・・・。

そして足の無いジンを駆るシュウは、そのまま砂漠へと沈んだ。そしてコックピットを開き「投降する」と言いながら両手を上げた。

「ほう、もう終りかね？それに私が殺さないとでも？」と聞いてきたので「砂漠の虎は、無闇に人を殺さないと聞いているが？」と言ひ返した。

「ふふふ良いだらう、捕まえさせてもううぞ。抵抗しないでくれよ？」と言われ「判つてゐるさ」と後から来たザフト兵の指示に従いながら大人しく捕まつた。

抹茶「いやー、負けましたねえ」

シユウ「ああ、そうだな。幾ら俺でも能力は赤服よりけりと強い
ぐらいだから

砂漠の虎に勝てるはずが無い」

抹茶「そうですね。それに簡単に勝てたら面白くないですね」

シユウ「ああだが負けた事は悔しいが・・・俺は、この後どうなる
んだ?」

抹茶「さあ?どうなるんでしょう?」

シユウ「オイツ! 作者お前だらうが

抹茶「考えるんですけど結構迷つんですよね」

シユウ「やうか、まあ良しに展開に成つてくれるのを期待するよ。よ

抹茶「まあ期待して貰いたい。頑張りますので」

抹茶「さてシユウは生き残れるのか?」期待!..」

シユウ「だから生き残りたいって言つてんだらうがー。」

「意見・感想ありましたらコメント下さい!」

抹茶「はい、今回楽しい楽しいフォイズ⑨が始まりますよー」

シユウ「どうしたんだ作者、何時もと違つて何か投げやうな感じが
抹茶「んー昨日から頑張つて書いてたんだがちょっと変な気分なん
すよねー」

シユウ「寝てないんだな。まあ良い書いてるだけでも褒めて褒めて

抹茶「わーい、もつと褒めて褒めて」

シユウ「わーいわーいこひがしちー

抹茶「結構酷いな、まあ良こや。今回キマイラの全ぼうが遂に明か
されまー」

シユウ「おお、予告からー・2話位しか経つてない気がするがスル
ーだせ」

抹茶「だつてえーキマイラに必要なページが全部あれなんですよー」

シユウ「言わなくて良いからな? 本編読むからむしり囁つな

抹茶「そつ・じゅあ前書きを長かったけど

抹茶・シユウ「本編をお楽しみくださいこー」

「出ル」「セウザフト兵に促された。

そう、俺は砂漠の虎と戦つて敗北し、M51Jとレセップスでバナディーヤまで移送された。

そして一つの屋敷の前まで歩いた。「此処は砂漠の虎の要塞みたいなものか?」と呟いた

「止まるな進めと」と後ろのもつ一人のザフト兵に小突かれ歩を進めた。

そして、一つの部屋の前まで進んだ「隊長、入ります」とザフト兵が言い、続けて俺も入った。

「ダコスタ君」苦労さん、此処からは彼と一入りの方が良い」「なつー?しかし隊長もしコイツが暴れたら」と少し話していたが

「ダコスタって言つたつけアンタ?大体手錠付けられて丸腰の俺が何か出来るとでも?」と言つておいた。

「ほら彼もそう言つてるんだし」と砂漠の虎は、言つた「クッ!判りました隊長・・・命令に従います」と言つて俺を睨みつけながら部屋を出て行つた。

「良い奴だな、だけどあんまりいじめんなよ?砂漠の虎」と言つた「ダコスタくんは、イジメやすいんだよ。あと名前で呼んでくれア

ンドリュー・バルドフュルドだ」と言われ

「もうかい、じゃ俺も名前で呼んでくれ本名は、シユウ・K・ライトーングだ。シユウって呼んでくれ」名前を教えて貰つたので礼儀として、じゅうらも名前を教えた

「まあ、お互いの自己紹介が終つた所で、話をしようじゃないか」と言われ、まるで座れとも促してゐるので黙つてソファに座つた。

「さて、急だがシユウ君、君に一つ聞きたい同じM.U.Pilotとして・・・どうしたかの戦争は、終わるとゆづへ」と言ひ、鋭い瞳を突きつけてきた。

「戦争は、ゲームじゃない制限時間すらない、そういうじゃないか?ではどうやって勝敗を決める?何処で終わるにすれば良いのか?
・・・敵を全て滅ぼしたらかね?」と、まるで答えを求めるかのように聞いてくる・・・。

「(今俺は、試されてるんだろうな)俺は、判らない・・・。俺はそんなに賢くないし、強い訳でもない。でも確固たる信念を持つ人がその答えを見つけられると想つ」と試されてる事に対し自分の答えを馬鹿正直に言つた。

「ほう?なら君はパトリック・ザラやシーゲル・クラインはたまた連合のお偉いさんは、その意思を持つていると?」聞かれたが

「違う、あれはただ片方を滅ぼしたり話し合いで解決するだけのただ単に自己満足だ。それに、他にそれしか道が無いと考えてるだけだ。悩んで悩み続けた人が持つ信念こそが戦争を止められる。」

と力強く答えた

「君は面白いな、だがその人物が現れると思っているのかね？」
「ああ、居るぞ。まだ原石だが目覚めたら確固たる信念を持つ人間が
な」と答えた

「ほう、多少気に成るが、後の楽しみだな、それに君は面白いな。
一緒に居て飽きないよ」と笑いながら言われ「そりやどつも」と
軽く受け流した

そして、おもむろにバルドフェルドさんが一本の鍵を取り出した。
そして俺の手錠の穴に差し込んで鍵を解除した。

「なつ、何で鍵を！？」とバルドフェルドに問いただした。「そう
だねえ、君が面白いし。部下として欲しいからかな？」と軽く笑わ
れた。

「チツ！あのダコスタつて奴の苦労が一瞬だが理解できそつだな」と舌打ちしながら答えた「それで答えはどうだい？」

「そうだな、幾つか条件が有る。まず一つ目は、部隊はいらないか
ら、自由に動ける権限がほしい。

一つ目は、コイツは、俺独自に設計した奴が必要なバーツがザ
フト軍の物なんだ。それを用意して他の人には、黙ってくれれば良

い

「ほう、一つ目は飲むとして、一つ目の設計したMSを見せてもら
おつか」「良いだろ、コイツだ」とバルドフェルドに向かつて数
枚に纏められた資料を投げつけた。

「此れは凄い発想だね、でもパーティがどれだけ必要なんだい？」

「やうだな、まず『ディン』を丸々一機、ラゴウのビームキャノン、バクウのキャタピラ、シールドダガーは独自に開発するからシグーの盾、後は、『ディン』の頭部を俺の乗つてたジン改の頭部に変える。あと腕は、そうだな此れも俺のジン本体は使い物に成らないからそれをくつ付ける。それに宇宙でも使用可能にする為に色々とコーティングをかける。それがキマイラの形だ」

「なるほど、確かに色々な生き物がくつ付いてる神獣キマイラと全く同じだな。良いだろ直ぐ手配するから開発するための準備をしてくれ」

「それだつたら俺の乗つてたジャンク艦を使いたい、あれを使つと効率良く作れる」

「あい、判つた。それじゃあこれから宜しくだなショウ・K・ライトニング君一応キミは赤服扱いだからね」「オイオイ行き成り赤服扱いで良いのかよ?」

「良いんじゃないの? 実質取り仕切つてるの俺だし」と言つたので「やうだつたな」と苦笑しながら答えた。

「んじやま、俺は、ジャンク艦居るから完成するまでそつちの機体を代用させて貰つよ?」「いや、MSが完成するまで出なくて良い。君の機体が早く出来る事を期待するよ」

そつ置いて俺は一時的にバナディーヤの砂漠の虎のお世話に成った。そうキマイラが完成し、バルドフェルドが敗北するまで・・・。

シユウ「遂にキマイラ作成に着手したか

抹茶「そうですね、それに砂漠の虎に降る方がパーシが早く手に入
れやすいんで」

シユウ「成るほど。多少疑問点は残りそうな読者が居そつだがどう
するんだ？」

抹茶「うーん、活動報告で機体の武装・パーツ・キマイラの形を書
き出しておいたかと思うんで」

シユウ「絵で書いた方が早いんじゃ？」

抹茶「ピキッ！俺は絵は大の苦手なんだ――

シユウ「そ・・・そしだったのかすまなかつた」

抹茶「判ってくれれば良いよ。さて最後のあれをやるか

シユウ「結局俺も言わされるんだりつへ」

抹茶「もうひらん」

抹茶・シユウ「せひシユウ（俺）は生き残れるのか？次回お楽しみ
に！」

「」意見・「」感想あればどんぞと書いて下せ

疑問点なども言つてくれれば答えますので

PHASE10（前書き）

抹茶「はいPHASE10始まりますよー」

シユウ「今日は時間掛かったな？」

抹茶「やうやくですね。正直キマイラを強くしすぎたかな?って自分で軽くやりますがちやつた感が出てこます」

シユウ「やうか、まあ良い機体程生き残れる者や」

抹茶「そうですね、作者としてもシユウさん亡くなると面倒なんで」

シユウ「むしろ死んだら話進まないだろ?」

抹茶「どうでしょ?まあ常に新しい話を考えてるんで死んだ時の対策も当然練りますよ」

シユウ「やうか、って言つた俺は死ぬ展開じゃないかこれ?」

抹茶「氣のせいでしょ、って長くなつましたが」

シユウ・抹茶「では本編をお楽しみくださいーーー」

「ジャシク艦 ハンガー」

「ふう、ようやく完成したな」 そう呟き自分専用機であるキマイラを見上げた

「完成させたのは、良いがスペック確認しないとな」 そう言つて機体情報端末を開いた

(キマイラ 端末)

「機体情報・スペック表示つと・・・」

スペック 装甲B 運動性A +

射撃A 格闘C

「まあこんなもんだる、後はブースターのコミッター解除時の使用制限時間と生存率はと」

最高使用制限時間：5分 使用時生存率5%

「生きれる確立がたつたの5%か・・・。衝撃吸収剤でも居れて生存率を上げるとして、基本はキマイラの切り札になるな」

そして端末を閉じて一休憩し様と思つたらハンガーの扉が開かれた

「やあ、例の物は完成したかね?」 とバルドフェルドが訪ねて來た

「ああ完成はしたさ、スペックは当初の予想通りXシリーズの性能を超えてやがる」と自分の作った機体を自画自賛した。

「ほう、それは凄いな。だけど君は今キマイラを作つても足りなさ

「 そんな顔をしてるね」とセリフと言われた

「まあ否定はしないわ。だけど用件は、それだけじゃないんだろ?」
「 そうシユウは、キマイラだけじゃ満足しなかった。だが、もう一つの方も作成もしていた。

「おや、わかるのかね?まあ良いだろ?大天使が虎の領域に入ったんだよ」と笑っていた

「 そうか、でだ、いつ攻めに行くんだ?」と氣に成るよう言つた、
だがシユウは可能な限り武器を作成する為の時間が欲しいのだ。

「 明日から数えて1週間後だ。君はどうするかね?」と訊ねられた
ので

「 そうだな、初披露もさせたいが今は出さないわ。ストライクの戦
い方でも見学するかね」と言つといた

「 どうか、じゃあレセップスに君も乗つていいくんだな」「ああ勿論
だ。こんな所でレセップスとジャングル艦が一緒に居たんじゃ疑われ
ちまう」

「 さて俺はキマイラを使ってシユミーレーターで練習するわ」「判つ
た。シユウくん悪いがバクウのパイロットを鍛えられないか?」と
鋭い目付きで言われた

「 それは命令か?」と聞き返した「命令でもあるし命令でもないつ
て感じかな」と苦笑して来た。

「 んー、まあ良いだ。俺は最強とか自惚てる奴をボツコボコにす

れば良いんだろ?」と一応聞いてみた。

「ああ、そうだな。5人居るから実力の差つてのを教えてあげるよ?」「了解」そう言いながらシュウはバルドフェルドと共にシュミレーターまで向かつた

シュミレーター室

「やっぱ俺らって強いよなー」「そうそう、宇宙に居るXシリーズ乗ってる奴より強いだろ」「言えるわー」「毎回失敗する位ならこっちに回せつての俺等が上手く使ってやるからさ」

「ハツハツハツ」「……」「……」

そう言つた間抜けなモブ4人と女性が一人シュミレーター室に居た
「全員整列!」バルドフェルドがそう言つた瞬間5人が並んで敬礼した。

「さて急で呼び出して悪いが君達には、彼と戦つてもらつ

「シュウ・K・ライトニング、一応赤服だ」と言いながらも5人の能力で一番強そうな奴を探していた。

「さてとやり合う前に何か質問は有るかね?」と5人に訊ねてた

「隊長、もしかして彼はナチュラルですか?」とモブAがバルドフェルドに聞いている

「ああ、そうだ」と代わりにシュウは答えておいた「「「なつ! ?」「」」モブの4人が驚いていた。(此れで5人の中で実力が誰

が強いか判つたな……）と思つてしまつた

「何故劣等種が此処に居るんですか！！」「赤服なんて嘘だらうが！この雑魚が！」「はつ－じうせ上手く隊長に取り繕つたんだろ？」と他のモブからも言葉の暴力が出るが……

「彼が強いから軍に入れた。文句があるならシュミレーターで決着を付けたまえ」とバルドフェルドが言い出した

「ツ－了解」とワーダーらしきモブ兵が答えシュミレーターに入った
「バルドフェルドさん、男の4人は弱いが女的人は厄介だろ」と聞いてみた

「判つたのかね？」と聞き返していく「ああ、こっちを見続けて冷静に能力判断し様としてた」と返しといた

「彼女は強いよ、ただ敗北を知らなくね、是非実力の差つてのを叩き込んで欲しい」と頼まれたので「判つた、あいつ等に絶望を見せあげるよ」と言いシユミレーターに潜りキマイラの情報を打ち込んだ。更に今回作成した武器を1個を腰に付けた。情報を送り込んだ後キマイラとともに砂漠の世界に飛び込んだ。

「はつ－－ようやく来たな劣等種、コーディネーター様の力見せてやるよ！それに何だその変なMSはカッコ悪いんだよ－－」と言つたが完璧地雷爆破した。

「ふつ・・・ふふふふ言いたい事はそれだけか？てめーら一片の慈悲も無く潰す－－」と言いモブのバクウの一機の目の前までキャタピラとブースターを利用し

一瞬で距離を詰めビームソードシールドで右足を斬り落とした後、左手で腰の新兵器を抜き体勢を崩したバクウに撃ち込み即座に爆発が起きた。

「グレネードランチャー・爆炎弾 高威力だな」と呟いた

だが一瞬と呼べる時間の間に敵全員が正気を取り戻し「各機散解」とモブの一人が言った、そして4機のバクウが俺を囲んだ。

「ふむマズイな。だが「ウオオオオ」ほらこう言う功を焦るアホがいる」とバクウ一機がビームサーベルを展開して迫ってくる

「うーん死んじゃうかもなー、まあ少し本氣で潰しに掛かるか」そう言つて4枚の翼を広げて空へと飛び立つた。そして格闘後の攻撃で外したので体勢を崩していたバクウにビームキャノンを打ち込み撃破した。

だがビームキャノンを撃ち終わつた瞬間残りの3機のバクウミサイルとレールキャノンの雨が飛んできた！

「チツ！……15秒間リミッター解除」とボソリと呟き、そしてシユウの機体は爆煙に包まれた。

「はっ！所詮劣等種はお」「俺らには勝てないか？余り俺を舐めるなよ？」そう言つてグレネードランチャーをバクウに撃ち込んだ

爆破が起きた。「徹甲留弾これも使えるね」

「何をやつた！！」そう言つた後にバコーン……次は貫通し

「あとは雑魚が1人とお嬢ちゃんか、俺を本気にさせたんだから、

嬉しく思えよ？」

「なつ！何で落ちないんだ！」と叫ぶが、「さあ何でだらうな？まあ敵に教えるほど俺は優しくないんでな……30秒間リミッター解除」と最後だけ聞こえないように呟いた

そしてシュウのキマイラが消えた。いや消えたという表現は間違いだろう・・・。田視出来なくなつたと言つた方が正しいだろう。

そして氣付いたときには、モブの後ろに回りこみレールキヤノンに3発目を撃ち込んだ。そしてモブのバクウは後に下がつたが

「あつ今レールキヤノン撃つなよ？」と言つといた瞬間レールキヤノンが暴発した

「あーあ、人の話を最後まで聞かないから」と言いながらも「スパークリング弾は即効性だから使いやすいな」と言いグレネードランチャーを捨てた

「さて嬢ちゃん、残りはアンタだけだがどうする？」と聞いてみた
「あたしをさつきの人と同じ様に考えたら痛い目にあつわよ！」
言いながらミサイルをぶつ放してきた。

だが素直に当りたくないでの足のキヤタピラを展開し後方に下がり左腰のホルダーに行つて76mm重突撃銃を抜き出し収束して迫つてきているミサイルを撃ち落した。

そして右からバクウが飛び掛ってきたが、すぐさま反応しバクウの側面に入り込み撃ちこんだが、バクウがブースターを無理やり前に吹かし銃弾を避けたがバクウの頭から砂に突っ込んだ

「普通に痛そうだな……」と思わず呟いてしまった。そして「彼ら模擬戦とは言え今撃つたら後味最悪だ」と言い体勢が戻るのを待つた。

「ふんっ！お情け？舐めないで！」と言われ「いや、このまま終つたら楽しくないんでね。それに個人的に嬢ちゃん気に入つたし」と言つといた

「なつ・なな・・・何言つてゐの…？ふざけないで！」と言つて真つ直ぐ突つ込んで来た

「熱くなるのが君の悪い癖かな？」と言つてアーマーシュナナイダーを射出した、だが空中に飛びミサイルランチャーを撃つて来たがシールドで防御し着地点にビームキャノンを撃ち込んだ。

「此れ位避けれらるうな」と呟いたがビームキャノンは直撃して爆発が起きた。

「マジかよ」と呟いて

バトル終了

の文字が出てきた。そして俺が出たらモブ達が「これで良い氣になるなよー」と言いながらショミーティー室を出て行つた

「おーおー見事な三下セリフだな」とシユウは言つた。そしてバルドフードが「どうだったかな？」と聞いてくるので

「正直期待はずれですね、あの4人は早めに死んでも可笑しくない

けど、嬢ち「私にはシラコキ・カグヤって名前があるんです！！」。
・・まあシラコキには才能が有るんで鍛えれば強いと思いますよ？」
と言つといた

「ふむ、そうか。たしかシラコキは何処にも着いて無いんだつたな
？無いんだつたらシユウ君の部下になつとけ」と楽しそうに言つた

「了解しました」と言つて居るので俺は「ハイツの保護者みたいな事
をしないといけないのか・・・。

「はあ・・・」「なつ！なんでため息つぐのよー」「イヤ、なんで
も無いわ」と喋つていたら

「ではシラコキ、訓練じやシユウ君に頼れよ？嫌がつても私が強制
的に許可する！」とハツハツハと笑つていた。

「ちょつ・バルドフルドさん何言つてるんですかー」と返発しよ
うとしたが

ガシッ!!

「ヒツ・シ・・・シラコキさん？」「シユウさん楽しさ楽しい訓練
をしましょつね？」と笑顔で言つてくる、正直やつその負け氣にし
てるな・・・。

「たつ、助けて――――――――――――――

そして俺は襲撃までシラコキさんと訓練した・・・。マジで死ぬか
と思つた、だつて朝から夜までやるんだもん

そうそう、バルドフェルドさん覚えとけよ？

PHASE10（後書き）

ショウ「キマイラ強いな・・・」

抹茶「ね？ そうでしょ？ まあ少し早いフリーダムみたいなものと思えば良いだろ？」

ショウ「そ、ういえばシユミレーターでリミッター解除したが大丈夫なのか？」

抹茶「ええ、それは、大丈夫ですよ。あの生存率は、5分間ずっと動かし続けた時の生存率だから1分以内だつたら特に大きな問題はありませんよ？」

ショウ「そ、うか、まあもう一つ個人的な質問だがシラコキ・カグヤはこの作品のヒロインなのか？」

抹茶「さあ？ まあそれは後々考えます。もしかしたらヒロインになるかも？ って感じです」

ショウ「そ、うか、まあ期待してるわ」

抹茶「そ、うですか、待つて下さい。では何時ものあれをやりましょ」

ショウ「ああ、判つた」

ショウ・抹茶「さてショウ（俺）は生き残れるのか？ 次回お楽しみに！」

PHASE11（前書き）

抹茶「はいPHASE11何とか完成させました

シユウ「毎回思つたが、お前投降早いんだな？一体どんなチート使つてるんだ？」

抹茶「チートとは酷いですね？まあ良いでしょ、結構疑問に成った人も居るんじやないかと思うんで、お答えします。」

シユウ「で、どうなんだ？」

抹茶「はい、俺大学生なんですけど講義半分聞きながら書いてます

シユウ「さうか、ってお前真面目に受けますよ？ただ説明が下手糞な授業が

抹茶「結構、俺真面目に受けますよ？ただ説明が下手糞な授業が偶に有るんですよ」

シユウ「せうだつたが、でもそれ位自分で理解しようかな？」

抹茶「チツー判つましたよー。」

シユウ「え？ オイツー今舌打ちしたよなー？」

抹茶「氣のせいでしょう、では長くなりましたが

シユウ・抹茶「本編を楽しんでください」

「大天使ねえ、久々に見たけど今更興味も湧かないな」とシユウは呟いた

「ほう？君は、一時的に世話に成っていたのかい？」そうバルドフエルドに聞かれたので

「ああ中立でジャンク屋遣つていた時に一時的だが、まあ情報はお情け程度だが世話に成つてたから教えられないな」と話を切つた
「そうか、まあ良いだろう」と情報を教えなかつたのに文句一つ言つてこなかつた

「深く聞かないんだな？」「話すつもりの無い人に無理やり話させるのは、好きではないんでな」「そうか」と会話をきつて「砂漠の虎のやり方見せてもらひよ?」とシユウは呟き大天使に目を向けた。

そしてストライクが飛び出してきた。

「ランチャーストライクか、だがちょっと間違いかな」と言つてバクウとストライクの戦いを眺めた。やはり砂で足を取られるうえバクウの高機動に翻弄されアークエンジュルにまでダメージが蓄積した。

「やれやれ、感情をぶつけるだけで戦争に勝てる程こには甘くないぞ」と呟いた。

だが急にストライクが飛びバクウの連激を回避した。（ほう？）そ

してストライクがバクウに蹴りを食らわせ、もう1機は、突っ込んで来た所をアグニの銃口を押し付け撃ち出した。

そして炎が砂の海を照らし出した。

「どうするんだい？ バクウ1機やられちまつたが？」 バルドフェルドに聞いてみる

「なあに対策は練っているぞ」と言つた瞬間後ろから何か聞こえてきた、そしてアークエンジェルの近くまで行つたがイーゲルシュティンに撃ち落された。

「さあ大天使殿はどうするかな？」 とバルドフェルドは言つていたら

スカイグラスパーが飛び出しレセップスの方向に行つた。

「レーザー照射してそれを照準にして撃つつもりだらうが… 遅すぎだな」と言い切つた

「「え？ 何故そう言い切れるんですか？」 」 ピダコスタとシラコキが聞いてくる

「お前ら居たんだな…」 とボソリと言つたら「「居ましたよー。」 」 とはもつてくる

「そつか、さつきの質問だな。まず一つ目は敵の占領地に居ながら何も気にせずにのんびりしてた事、武装が積めなくても索敵するべきだつたんだよ。

二つ目は、最初の第一波は迎撃システムと回避運動で運良く当らなかつただけだ、しかもあの戦闘機は武装を積んでいても余り期待出

来そうに無いだろ？」とハッキリ言つといった

「それに第一波は防げないだろ、多分直撃だな……ドオオオン
ほらな？」と予想してた事を見事に的中させ、一人を驚かせた。

「さて、これでストライクは、どう出るかねえ？」とバルドフェルドが言つていた時に

（そろそろ種が割れる頃かな？）と一人物思いに耽つていた。

そう思つた瞬間ストライクの動きが変わつた、まず1機目のバクウに対し肩のバルカンで牽制し回し蹴りを食らわせた

その間にも第三波のミサイルが大天使に迫る、ストライクが破壊しようとするがバクウが割り込む、しかしストライクはバクウごとアグニでミサイルを叩き落す

そしてアグニでどんどんミサイルを撃ち落しているが、それを見たシユウは「やれやれENは無限に在る訳でも無いのにな…。このままじゃ確実にPS装甲^{フェイスシート}が落ちるな」と言つといった。

再びバクウがストライクに迫るので銃口を向けるが撃たなかつた。アジャイルも居るので後方に下がるが、コーディネーター同士ではストライクが乗っているパイロットが幾ら強くても弾に当たりENが減少していくだろ？……。

「そう言えば隊長何故ストライクは先程ビーム砲を撃たなかつたんですね？」とシラユキが聞いてくる

「お前は、もう少し勉強したり考える事を努力しろー・まあ良いスト

ライクは、ビーム砲を撃ちすぎるとEN消費も半端無い、しかもPS装甲にもENは取られるんだ。当然ENがなくなつた瞬間PS装甲は機能しなくなり、普通にダメージを受ける。XシリーズはEN消費率が半端無く酷いからな」と説明しておいた。

「ほう？じゃああれはEN切れしたら弱体化するのかね？」とバルドフェルドが聞いてきたので

「ああ、一概には言えないがそつかもな。しかも実弾武器しか反応しないから俺とバルドフェルドさんの持つビームキャノンとかのB EAM兵器は、PS装甲は、反応しない。
実弾武器しか持たない奴は、実弾の雨を食らわせて無理やりPS装甲を落とす以外方法が無いんだ」と教えた。

「おや、言わないんじゃなかつたのかね？」と言われ「気が変わつたんだよ」と返した

そして「素直じゃないですね」とシラコキが言つた瞬間に「シラコキ 後でショミレーターでたっぷりしごいてやる」と言つといった
その瞬間「すいませんでした」と震えながら言つたのでバルドフェルドさんが「な…何をしたのかね？」と聞かれたので

「速さに成らす為にキマイラのコミッター解除1分版をやらせてると凶悪な笑みを浮かべて居たのでバルドフェルドも少し引いていた。

再び戦場に目を向けるとアジャイルがミサイルを放ちストライクも落ちたかな？と思った瞬間ミサイルとアジャイルが撃ち落された。

そしてバギーがストライクの方向に走り出しワイヤーを張り付けた。

(あれは、ワイヤー通信かな?)と思つた。だが肝心のバギーの方が判らないので、バルドフェルドに聞いた。

「なあ何なんだあれ?」「ん?レジスタンスだよ。懲りない奴らだねえ」「命を無駄にするアホ共か...」と呟いた瞬間ストライクがある場所を目指して飛び出した

そしてバクウ3機も追撃する為に付いて行つた

「直ぐに考えれば、敵の意図ぐらい判る事だうが...」と多少イラついてしまつた。

そしてあるポイントに着いたのかストライクがバクウの方に向いた。そしてそれと同時にPS装甲が落ちた。

そして3機のバクウが格闘で止めを刺そうと思つた瞬間ストライクが高く後ろに飛び退き3機のバクウがストライクの居たポイントに足を踏み入れ、地面が陥没した。

3機はなすすべなく陥没に巻き込まれ、その後凄まじい爆発がバクウを呑み込みバラバラになつた。

「廃校の天然ガスを利用した罠だな...。やれやれ予想通りモブは全員死亡更に五機のバクウの損失...撤退だな?」と険しい顔をした砂漠の虎に聞いた。

「そうだな、撤収する」

そしてダコスタとシラユキを見ると、悪い夢でも見たような顔をし

ていた。だが悔しいがこれは、現実なのだ……。

「しかし、あのパイロットはナチュラルじゃないんだろう?」と俺に聞いてきた。

「ああ、会つたら気に入るかもしれないな」と言つといた

「それは楽しみだ。まあいづれにせよ今回の敵は、手応えの有る相手のようだな」

そして俺と虎の視線の先にはストライクと大天使の姿があった。

「バナディーヤ~

「さてバナディーヤに戻つてきたが此れからどうするんだ?」とバルドフェルドに聞いてみた

「そうだねえ、レジスタンスの連中にお仕置きしに行くんだけど君はどうするんだい?」と逆に問われた

「そうだな・・・昨日の今日だ損失もテカイんだし俺も出るわ

「判つた、じゃあ前と同じで夜の1時にタッセルを落とす」「了解、俺は準備があるから一旦自分のジャンク艦に戻るわ」そう言って上官室を出て時間を確認した。

「今は、作戦から帰つたばかりだから10時か、作戦開始までに完成させる」と言つて有る物を完成させる為に走り出した。

「取り敢えず食料・水・医療薬品を入れられる何かを作らないとな。
。。。ジャンクパートで不恰好ながらもコンテナ作つて武器庫とで

も言つて騙すしかないな

シユウは、この後タッシリが壊滅的打撃を受けるので用意をし始めた。「老人に子供、戦争に關係無い人達だけは、死なせたくない…。」

そう咳きながらも時間は掛かつたが医療キット・コンテナ版を完成させた。

「今何時だ?」（15時51分）

（マズイな、薬と食料は余り軍の奴等にはばれない様に内密に行きたいな。ダコスタに言つてバギーを借りるか）そう思いながら再び走り出した。

（レセップス内）

「ダコスタ君! バギーの鍵貸してくれ!」と言しながら扉を蹴つて中に入った

「ウワツ! ? ビックリしたなあ。バギーの鍵ですか? 壊さないで下さいよ?」と言つて出した瞬間にヒックタクリ「恩に着る」と言つて走り出した。

後ろから「シユウさんのドロボー! ! 」と聞こえたが（俺には、何も聞こえねえし、無視してやる! ）と思いながら走つたらハンガーにシラユキが居た

「シラユキ今暇か? 暇だったら、一緒に町に行こう」と言つたら「ええ! も…もしかしてデート? でも幾らなんでもシユウさんは鈍感だし…」と何かブツブツ言つているが無理やりバギーに乗せて

街まで走り出していった。

「オイオイ、シユウさんとシラコキさんがデータだと…?」「驚くべき事実だ!」「号外だ号外!」「クツソオー俺が狙っていたのに」「急いで皆に知らせるんだ!」と何か色々と騒ぎに成ってしまった。

「おっちゃん!薬と水と食料あるだけ売ってくれ!」「え?まあ良いけど此れ位の値段に成るけど良いのかい?」と打ち出した電卓をこつこつに向けてくる。

「え?これだけの値段?今回大量に引き出して良かつた」と言って金を払っていた。「ふふふ・・・そうですよね。シユウさんだから仕方ないですよね?気にしないのよ私・・・」

(何か後ろから怖い声が聞こえてきたなあ、後で何かプレゼントしなくちゃいけないのかな?)と後ろかな何か変なオーラが出ていた。

そして何度も食料・水・医療系を買つては、バギーに積んで用途が済んで帰ろうとしたら。

途中でアクセサリーを飾つてあつた店が有り「シラコキちょっと待つててな?」「あはい、どうぞ」と気が抜けてたがホントに大丈夫かな?と思いつつも中を覗いた。

「へえ結構あるんだな?」と呟いたら、急に店の人来て「何かお探しですか?」と聞いてきた。「ああ幸運を呼ぶ石を探してるんだが?あるかな?」

「ええ有りますとも、此方なんてどうです?ラピスラズリのネックレスです。邪念を取り除き幸運を呼ぶと言われています。」と出し

てきたネックレスは、ロングロープとHugg型に削られた宝石で作られたネックレスだつた。

「へえ良い形だな。どれ位するんだ?」「此れぐらいですね。お密様は初めてなので2割引しますよ?」「そうか、だったら買おう」と言つてネックレスを買ってバギーに戻つた。

「おーい、シラコキ大丈夫かー?」と聞いてみた。「良いんです、良いんですけどせ私なんか不幸ですから」自分の世界に行つていた。

「やれやれ、仕方ない」と言つて先程買ったネックレスをシラコキに無理やりつけた。「へつ?あれ隊長お帰りなさい。あれ此れは?」「ああ何だ良く似合ひげじゃん」と言つた瞬間

「え?これ隊長が買つてくれたんですか?」「ん? そうだけど気に入らなかつた?」「いつ、いえいえ寧ろ嬉しいです」と顔を赤くして答えていた。熱でもあるのかな?

「でも隊長これら合わせると結構高かつたんじや?」「ん?普段給料とジャンク品売つて必要最低限の生活用品しか買わなかつたから、キヤッショ】にまだ金有るんだよ」と答えた。

「そうですか。ありがとうござります」と言われたので「気にすんな」と言つてシラコキを基地まで送つて再びジャンク艦に向かつた。

♪ハンガー内♪

そして今回買つた物を全てコンテナに入れて、キマイラの腰に付けて。「要約完成したけど・・・つかれたー」と言つて時間を確認した。(22時34分良い感じに作り上げられたな)

「失礼します隊長、バルドフェルド隊長がレセップスまで来て欲しいそうです」「判った。キマイラはレセップスに積んだら良いのかな?」「そうですね。そして下せ!」と喋りキマイラを起動させレセップスまで移動した。

そしてハンガーに付き、キマイラを降りて、近くを通りがかつた整備兵にバルドフェルドの居る場所を聞いた。

「バルドフェルド隊長ですか?艦長室だと思いますよ?」「そうか、ありがとな」と言って艦長室に向かう前に後ろから大量の「リア充死んでしまえ!」と聞こえた気がするが気のせいだろう(それに誰と誰が付き合ってんだ?どうしてこっちに矛先が?謎だなあ?)と少し首を傾げてしまった。

（艦長室）

「入るぞ!」そう言って入った瞬間コーヒーの匂いが漂ってきた。「これはハワイコナだと!」と思いつきり言つてしまつた・・・。

「おや、判るのかね?」「ああコーヒー好きなんでな。貰えるかい?」と言つたら「そこに有るから好きにしたまえ」とコーヒーメーカーを指をさして居た。

そして傍に置いてあつた「コーヒー カップを取り特製「コーヒーを入れて一口飲んだ後「用件は何だ?」と睨み付けた。

「なに、君はタッセルの人間を救う気なのかね?」「ああ、此れが俺の意思であり俺の全てだ。戦争に関係ない一般人を巻き込みそのまま放置つてのは、我慢できないからな」

「そうか、君の意思を聞けただけ充分さ」「怒らない上官は、初めてだな。まあ理由を聞くなんて今はコービーを楽しむ時なんだから無粋な事は聞かないわ」

その後作戦時間が来るまで、バルドフュルドさんとコービーを語り合い・飲みそして楽しんだ。正直言ってバルドフュルドさんの知識の量は凄かった。

急に「ダコスタです。失礼します」と言ひ声と共にダコスタが入つて来た。そして「うつーたつー隊長換気しないんですか?」と辛そうに言つて来た。

「わざわざ、そういう事言つに来たの?」「いえ、、そう言つ訳では」と話していたので「ダコスタくん諦めろ、今の時はコーヴィッシュには常識が通用しない・・・」

「そうですね。隊長 出撃の準備整いました」「「了解」」

そして俺とバルドフュルドとダコスタはハンガーに向かつた。そして俺はキマイラに乗り込み、バルドフュルドは指揮者に乗り込んでいた。

「さてこれより拠点に対する攻撃を行う!昨日はレジスタンス共がおいたが過ぎた、お仕置きをしてやれ!ー!」と一言多いながらも命令をしていた

(こんなマイペースな上官でも実力は俺以上なんだよなあ)とつい思つてしまつ。

「目標 タッセル! 全機出撃!ー!」と言つて少数精銳 俺のキマ

イラ・シラコキのバクウ・あとはそこそここの実力のモブ兵のバクウ2機がレセップスから出撃した。

そしてタツシルに向かい、ほどなくして着いた。街は、家々の灯りが消され殆ど闇と同化していた。

「これから街を襲うんだが、あまり良い気に成らないな」とシラコキと話していた。

「そうですね。無力な人たちを襲うんですから良い気には成れないですよ」と少し落ち込み気味だった。

「そうだな。しかしバルドフェルドも救う氣は有るらしいぞ?」と助言しといった「えつ!?」と言つてダコスタが歩いて向つているのが見える。どうやらダコスタが何かを言い始めたらしい。街が騒がしくなってきた。

そしてバルドフェルドからの通信で「各機に告げる15分経つたら街に攻撃を開始する」と告げられた

「ほらな?」「良かつたです。殺さなくて」と言つていた。（シラコキも俺と同じ考え方を持っているのか?）と思ついたら、「でも街壊すって事は、その人達生き残れませんね」と泣きそうに成つていたが「作戦終了時に俺について来い。俺のやりたい事を見せるよ」「え?あつ、はい判りました」と了承していた。そして作戦時間が来て攻撃を開始した。

キャタピラで家を踏み潰し・銃で大きな物を破壊し燃やしていった。そしてタツシルは直ぐに炎の海へと変わつていった。

作戦終了の合図が来た後ダコスタがバルドフェルドに何か話しているようだ、そしてバルドフェルドから通信が来て「そつちの用事をやつていいぞ」と言われ「有難う御座います！！」と言つて街の人々が居る場所に向つた。「隊長、私もついていきます」「ああ、好きにすりやいいよ」と言つて住民の目の前まで行つた。

だがキマイラを見たタッセルの住民達はみんな親しい人と抱き合つて死を待つている様な感じだが「殺す気は無いんだ、今から医療品・食料・水の入つてるコンテナをパージするから好きに使え」といつて腰にぶら下がつてコンテナをパージし扉を開けた、住民は驚きは隠せなかつたようだがそれでも感謝する人間も多数居た。

「さて部隊に戻るぞ」と言いながら部隊に戻る時に「お優しいんですね隊長」と言って「ああ死ぬべきじゃない戦争に無関係な人間が死んで行くのは辛い物がある」と言いながら部隊と合流した。

しかしシュウは多少焦つていた（幾ら救済したとは言え男達が黙つてないだろうな……。しかもストライクが来るかも知れないからな、最悪一人で戦う事を想定しないとな）と思いながら撤退をしていました、そしてシュウの思惑は見事に的中した。

PHASE 1-1（後書き）

ショウ「今日は長めに書いてたんだな？」

抹茶「そうですね、中々話が切れなくて結構書いていました」

ショウ「そういえば、シラユキをメインヒロインに上げたんだな？」

抹茶「そうですね、原作キャラとイチャイチャさせたわけねえーだろうが」「うが

ショウ「確かに、って言づかあれ出でてくる女性殆ど付き合っては別れてるよな」

抹茶「そうですね、男女関係は難しいですね」

ショウ「いや、リアルあんだけドロドロな恋愛関係だったり何時か刺されるだろ？」

抹茶「ですね、女性を怒らせると怖いんで気を付けないと駄目ですね」

ショウ「全くだ」

抹茶「そういへ、」感想をくださつたみつきさん有難う御座います

ショウ「有難うな、ガンダムSEED 閃光のライティング 楽しみでくれよな」

抹茶「では、そろそろ後書きを閉めさせてもらひますか」

ショウ「やつだな、じゃあ何時ものあれやるぞ?」

ショウ・抹茶「わいショウ（俺）は生き残れるのか? 次回お楽しみに!」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン書いて下さい

あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば治しますので

一閃光のライトニングー 次回お楽しみに!-

PHASE1-2（前書き）

抹茶「さてPHASE1-2完成させました」

シユウ「おお、ここ最近結構投稿しているがちゃんと寝ているのか？」

抹茶「一応寝てますよ?でも多少寝不足ですね。まあ小説を書く事は好きなんで、辞めませんけどねw」

シユウ「そうか、投稿するのは良いが無理はするなよ?」

抹茶「そうですね。人間ぶつ倒れたら厄介ですから」

シユウ「良く判つてるじゃないか、さて今回は、どういつ展開だ?」

抹茶「そうですね、今は取り敢えずタッセル壊した後、バナティーヤまでの帰路の時に起きた事を書きました」

シユウ「やうか、どうなるのかは判らないが楽しみだ」

抹茶「そうですか、作者の自分は、もう判つてるのですけどそれでも読みたくなりますw」

シユウ「やうか、前書き長いけど大丈夫か?」

抹茶「大丈夫じゃないですね。問題大有りですよ」

シユウ「そつか、何かさつきのヒルシャイのセリフの気がするが

無視だな

ショウ・抹茶「では本編お楽しみトセコ」

「頼むから何も起きないでくれよ?」と思わず呟いてしまった

「どうしたんですか隊長? 何か心配事ですか?」とシラコキに聞かれ「ああ、幾ら俺が支援物資を渡したとは言え街を壊されたんだ黙つては無いだろうな」と答えた

「そうですね…何故レジスタンスの方々はMSに勝率が低いのに挑んでくるんでしょうね?」と不思議に思つて此方に聞いてきた。

「憶測だが、此処は元連合やザフトの占領地奪つただけ奪つてヤバく成つたら逃げる、そう言う自分勝手な行動に怒りを感じて、レジスタンスを立ち上げたんだろうな」と考えた事を言ってみた。

「それでも、幾ら奪われるからと黙つて武器を持つてMSに喧嘩売るつて唯の自殺行為ですよ…。悲しそうになります」と泣きそとに成つていた。

「そうだな、悲しい事だ。だが俺らは、一介の兵士なんだ。変えるには、軍を抜けるか新たな考え方を持つ人が出て来ないと流れは変えられないんだ」と自分の無力さに苛立ちを覚えたシュウだった。

「じゃあシユウさんは、新たな考え方を持つ人が現れたら如何するんですか?」と質問してきた。

「まずは、見定める…。力を貸すに値するのかね。それで力を貸すに足る人物だつたら俺は、軍を抜けてその人達のグループに就くかもな」と答えておいた。

「その時は、私も連れて行つて下さいー」とシラコキが思いつ切り言つてきた。

「へつ？良いかシラコキ、そんな簡単な事はすぐに答えぢや駄目なんだ。ゆつくり考えないと駄目だぞ？」と軽く諭した。

「私は本気です！大体私が見張つてないと何しでかすか判りませんからね、それに私は貴方の部下ですから」モニター越しで微笑んでいた。

「あつ、ああ・・・ありがとうな」と言つて（シラコキのあんな笑顔始めてみたな。何故かな？体温が少し高いな、熱だらうか）と少し物思いに耽つた。

だが、それも一瞬のうちに終つた何故なら……後ろから小型の何かが索敵センサーに引っ掛けているからだ。

「チツ…やつぱり来たのかよ、命を無駄にするバカ野郎が…！」とシユウは向かってくるバギー群に叫んでしまつた。

「あーあー聞こえるかね？バギー群が迫つて来ているが、向こうが攻撃して来るまで一切こっちから手を出すな」とバルドフルードさんが通信をしてきた。

「万が一攻撃して来たら？」と少し震えた声で聞いた。そして「殺せ」と冷たい声が聞こえてきた。

「ツー了解しました」と唇を噛みながら答えた。通信が切れた後「クソッ！これしか手段が無いのかよ…」と苛立つてしまつた。

そしてバギー群がバクウに対してミサイルランチャーを撃つてしまつたので「正当防衛だ、やれ」と聞こえてきた。

「クソッ！クソオオオオ！」と叫びながら76mm重突撃銃を抜きバギー群に向かつて構えた。

（何か手段は……？待てよ？確かに地面に対して銃弾を撃つと何から衝撃が出るはずじゃ？一か八かの賭けだ！バギーに当らない様に銃弾を撃つて、衝撃で転ばさせる！）そう思いバギーに当らない様に撃ち放ち、衝撃で転ぶバギーが大量に居た、そして大抵のレジスタンスは投げ出され地面が砂だから、悪くて重傷あたりで済んだ。

そしてシユウは、それを全部成功させ（何とか殺さずに済んだな）と思っていた。

そして「隊長、任務完了です…。」とシラユキが暗い面持ちで話しあげて来た。「そうか、こんな任務二度と遭りたくない物だな」と言った瞬間…ビツー！ビツー！ビツー！

「ツ！シラユキ避ける！！」と言つたが「えつ？」と状況について行けず、シラユキのバクウの頭がビームライフルで撃ちぬかれた。

「カグヤアアアア！」と思わず叫び、通信を開きシラユキの端末の情報を調べた。

（シラユキ・カグヤ　パイロット状態　気絶　MS状態　移動不安定）と表示されたが、こんな事を許せるのか？許せない・・・許せない・・・許せない！

「バルドフ^フルド隊長、ストライクと殺り合わせてください」と懇願してみた。

「…良いだろ？、シラユキの方は別のバクウのパイロットに任せるが、5分だ。5分経つたら戦場から離脱しろ」と言われ

「充分すぎる時間ですね？」^{フェイズシフト}P.S装甲を落とすには充分だな」と言いシラユキを傷つけた、エールストライカーを睨み付けた

「さあ、殺しあおうか？ストライクのパイロット」と声を変声機で変え、そう言い放った

「何故こんな事をしたんだ！」と叫んできたが「何故？先に仕掛けたのは、お前達だろ？が！…………コミッター解除 5分！」と危険な切り札を解放した。

そしてシユウの駆るキマイラは、シユミレーターで起きた事の様に、目視では既に確認出来ない速さへと移った。

「なっ！？」と驚いて居たが、シユウは容赦しなかった。（もうヘリオポリスでの優しさは、甘さは出さない。目の前の敵を潰す！！）そう思いながら、左右に入ってる腰のホルダーの90mm散弾銃と76mm重突撃銃を抜き撃ち放つた。時にローリング・格闘を仕掛けると思わせて、近くでショットガンを撃ち放つ・素早さによつて背中に回る等、徹底的にP.S装甲を落としに掛かつた

「お前は、力を持ちすぎた、そのせいで傲慢に成り更には、友人に対して傷付けるのはかまわなくなつて來た、違わないだろうストライクのパイロット？そして女性でも出来たのか、ソイツを守る為だけに力を振るうのか？それだったら君には、失望したよ」と言い

ながら銃弾の雨を続ける。

そして一瞬だけ立ち止まつた所を撃ち抜こうとこっちに銃口を向けるが既にキマイラは居ない、と言つ事を何度も繰り返した。

「貴方に僕の何が判る！ そういう貴方は、どうなんだ！ レジスタンスを殺しておいて！」と言つて来たが

「殺す？ 人聞きの悪い、近くで倒れてるレジスタンスの連中は悪くて重傷だ、それにタッセルには、俺が物資支援を行つた」と答えた。

「だが貴様等連合は、人の事を言えるのか？ 取れるだけ物資を取り、危険になつたら自分達だけ逃げる、少し傲慢すぎやしないか？ 少しは考えてみろ。戦う意味をな・・・」と咳き一回リミッター解除を辞めた。此処までの間に3分間は、リミッターを解除したが肉体への負担が大きすぎた。

「クツ！ それは、僕！ 「僕には、関係無い・・・か？ 所詮お前も目の前で暴力を行われているのに、自分が良ければ其れで良いと曰をそむけるのか、違うだろ？」と言つてみた。

「つるせー、僕は、僕はー！」と言つてビームサーベルを抜いてこつちに突撃してきた。「戦う意味すら持たないお前が、俺に文句が言える立場じやないだろが！！」と言つてキャタピラを起動させ側面に回り込みコツクピットの有る場所を格闘でぶん殴つてパイロットを氣絶させ「仮にもP.S装甲があるんだ、命を失わなくて良かつたな」と言つとした。

そして少しだけ冷静に戻り「君は、もつともつと強く成れるんだ。だからこんな所で道に迷わないでくれ… キラ君」と懇願するようだ

咳きその場を離れた……。

そしてシユウは（バナディーヤに全員着いたのだろうか？何故だかとても疲れてしまった。リミッター解除をしたからかな？）と色々と思っていた。

「少し休むか……」そう言ってオートパイロットを使用し基地までの間シユウは少しの休みを得た。そしてのちにこの戦闘が、更にキラ君を進化させる切欠の一につなった……。

PHASE 1-2（後書き）

ショウ「いやあ、暴れたなあ」

抹茶「暴れさせ過ぎましたけど、キラ君の砂漠の虎編は自分は苦手なんで、オリキヤラで制裁？をさせて頂きました」

ショウ「今回ストライクがフルボッコだが結構批判出でくるかな？」

抹茶「そうですね。例えば何故キラを種割れさせなかつたのか？等が取り上げられそうですね」

ショウ「だらうな、何か言い訳でも有るのか？」

抹茶「そうですね、砂漠の虎編の間は種割れは、自分が死に掛けるか・戦艦がボロボロに成つて発動してると独自解釈をしています。不快に成つてしまつた人には申し訳ありませんでした」

ショウ「そうそう、今回も感想が来ていたな」

抹茶「そうですね。みつきさん・ジョンさん、ご感想有難う御座いました」

ショウ「二人とも有難う」

抹茶「みつきさん、何時も閃光のライトニングを楽しんでもらい有難う御座います。

ジョンさん、反省点を言つてください有難う御座います。日々精進していきます」

ショウ「感想をくれた2人に感謝だな。反省点が判ると次から気を付けられるから他の人もドンドン言つてくれ」

抹茶「さて長くなりましたが何時ものあれ遣りましょう」

抹茶・ショウ「さてショウ（俺）は生き残れるのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたら、どんどん言つて下さい。

また間違っている所・直して欲しい所等ありましたら言つて下さい。

PHASE13（前書き）

抹茶「さてPHASE13書き上げました」

シユウ「何時もどおりお疲れさん」

抹茶「有難う御座います。自分としては1~2時越える前に投稿したいんですけど中々大変なんですよ」

シユウ「そうか、まあ頑張つてるから良いんじゃねえのか?」

抹茶「そうですかね?まあ読んでくれている方々が居るだけで自分は、充分嬉しいんですね」

シユウ「やうか、今回はどうな話なんだ?」

抹茶「はい、今回はバナティーヤの基地に戻った後の拠点フェイズと成ります」

シユウ「やうか楽しみだな」

シユウ・抹茶「では本編をお楽しみトセー!」

「ん、此処は何処だらうか?」と辺りを見回して情報収集をした。
(どうやら俺はさつきまでベッドで寝てたようだな)と思いつつ背伸びをした

「ありますよー。シユウ隊長起きますか?」とシラコキの声が聞こえてきた

「ああ、起きてるから入って良いぞ」と返しといたら

「バーン!」「隊長起きたんですか! 体のほうは大丈夫なんですか?」
と扉を思いつきり開けて入つて来た

「心配してくれるのは嬉しいが、思いつきり扉を開けないでくれ壊れるからさ」と突つ込んだ

「あ、すいません」と謝つてきた「それでだ、一つ疑問なんだが何で俺は医務室で寝てたんだ?」と聞いてみた

「それはですね、隊長はキマイラのオートパイロットで帰つて来る
つて通信は来て知つてはいたんですけど、ハンガーに到着しても隊
長が幾ら待つても降りて来ないんで不審に思つて開けたら気絶して
たんですよ、しかも体の所々に内出血が有つたんで即医務室行きで
したよ」と長つたらしい説明だったが大体の事情を理解したが

何か聞いたそうな顔をしていたシラコキが居た

「シラコキ何が聞きたそつだな？だが時には、知つてはいけない事もあるんだ」と教えずに帰そうとしたが

「隠しても無駄ですよ隊長。あれは、バルドフェルド隊長が私だけに秘密で情報をくれました」と既にこの状態の真相を知つていたらしい

「そりが、嘘・偽りじゃないか、正確に聞いていこうじゃないか」とこれから言われる事を聞いてみた

「はい、あの機体は隊長自ら設計し作成したMS・キマイラ今までのΖΑＦΤ軍の機体のどれよりも性能が高くて隊長が軍に入る為の条件でしたね。

そしてあの機体は普通に運用すれば問題無い最高の機体です。でもあれでは、不完全リミッターを解除したら最強の名前を有るがままに出来る

でも一度リミッター解除して最高稼働時間5分まで使つてしまえば生存率5% 勝てない敵も確実に落とそうと思えば出来ますが代償としてパイロットの命ですね」と聞いていたがシラコキは、危険なMSの真実を話していくたびにどんどん悲しそうな顔に成つて行く。

「そこまで、言われていたか。それで真実を知つて一体どうするんだ？」とシラコキに問い合わせ始めた

「何でそんな自分の命を奪うMSに乗つてるんですか！自分の命が失うんですよ！…」と叫んできた。

「そうだな、俺も死ぬかも知れないな、今回3分間起動させただけで体中が内出血だ。正に命を狩つてくる化物だな」と答えといった

「だったら「悪い、それでも俺はこの戦い方を止められないのかも知れない」とシラコキの言つ事を遮り自分の考えを言い切った。

「ツー隊長のバカ！命知らず……」そう言つて部屋を出て行つた。

「はっ……ハハハ、馬鹿に命知らずか正に俺につつてつけの言葉だな」とシユウは言つてしまつたがむなしくなつてしまつた。

「これでまた独りに戻つたか、周りの人間を傷付けない為にも独りで動く方が良いんだ」と言つたが

「あれ？何で涙が？独りには成れてた筈なのに」と涙を流す理由が判らずに泣いてしまつた。そしてシユウは、泣き疲れ再び眠りに入つてしまつた。

「ふあー朝か、取り敢えずシラコキに謝つて、バルドフェルドさんに会いに行くか」そう思い横にたたんで置かれていた赤服を着込んでいたが

「たいちょーお早う御座います」「へつ？シ…シラコキ？」と言つて上着を着込んでる最中であつて今俺上半身は裸だった

「キツ、キャアアアアアアアアアアアアア」と言つて叫びながら部屋を出て行つた。

「悲鳴！？」シラコキの声か！」「シユウ隊長が何か遣らかしたんだな！」「何をやつたんだ！変な事だつたらぶつ殺してやる！」「俺も参加するぜ！」

と下から数人の兵士の声が聞こえてきた。

「あるえ？」と言しながらも服を着込み

（結構嫌われたと思つたんだけどな）と思いつつ 何故？と訳も判らず首を傾げてしまった。

「…………」さあ異端審問会議の時間です。シユウ隊長お覚悟は宜しいでしょ？」「…………」と黒いローブを着た男性陣が扉の前に居た。

「あれ？俺シラコキと話する前に生き残れるかな？」と思いつつ逃げ出した。「罪人が逃げたぞ！追え！追え！」と言つて追い掛け來た。

「…………止まれええ！シラコキさんに何やつた…………」「…………止まるかアホ共！大体俺がシラコキに何かすると思つてんのか！」
と言つて朝一番の命懸けの鬼ごっこが始まった。

（一時間後）

何とか誤解が解けて異端審問会議に掛けられなくて済んだ。「朝からもう疲れてきたわ」と軽くため息が出て来そうに成っていた。

そしてシラコキが部屋にまた來た。「お疲れ様です、シユウ隊長」と苦笑いしながら話し掛けて來た。

「ああ、一度とやつたくないな。男性陣の田が純粹に恐ろしかったわ」と言った。

「さてと、昨日の事で嫌われたんだと思つたんだが何故来たんだ？」と聞いてみた

「隊長まあ一つ間違つてますよ、私は嫌つてはいませんよ。ただたんに怒つただけです。それに私昨日部屋に帰つて悩み続けました。それで私それでも隊長には、離れませんむしろ隊長のストッパー役に成ります。だから一緒に強くなりましょうよ」と言つてきた。

「それがシラコキの答えか？」「はい、そうです。あなたが味方を守る為に力を振るつなら、私は一緒に戦場に出てあなたを守ります。それが私の答えです」と覚悟ある田だつた

「やうか、お前の決めた覚悟なら俺は止めないよ。しかし俺を止めるには、正規のM51じゃ無理だから俺がシラコキ専用機を作つてあげるよ」

「やうですか、ありがとうございます。後作るなら私にも隊長と同じコツォー解除を付けてください」と言つてきた

「良いのか、危険なんだぞ？」と聞いた「あなたと同じ境遇で居たいですから」と言つてショウの危険性を分かち合つとしていた。

「やうか、判つた。時間は掛かるが少しだけ待つてくれ」と言つて右手を差し出した。「えっと、なんですか？」と不思議に思つていたので

「ん？これから改めて宜しくな。って感じの握手なんだが、何かマズイか？」と聞いてしまった。（そうだった、シウ隊長って鈍感でしたね）と軽くシラコキはショックを受けつつも握手した。

「さてと俺は、一旦バルドフェルド隊長に会いに言ってくるわ」と言つて部屋を出て行き、バルドフェルドの居る部屋に向かった。

そしてこの後キラヒシュウは再び会う事に成ってしまった

PHASE 1-3 (後書き)

抹茶「さて今回は、キマイラの真実を知ってしまった。シラコキの行動を出してみました」

ショウ「そうか、そろそろSHIDEを登場させた方が良いんじやないのか?」

抹茶「そうですね、色々と努力は、してはいるんですけどまだ練習中です」

ショウ「そういうやあの異端審問会議ってなんだ?」

抹茶「あああれですか? あればバカテスを参考にしてみました」

ショウ「そうか、あれのせいで死にそうに成ったが小さい事は気にしねえ」

ショウ「そういえばシラコキ専用MSを登場させる奴なんだってな。どうするんだ?」

抹茶「うーん、考えてはいるんですけど結構悩みます。一つ出来上がっているんですけど原型が連合のMS使っちゃってるんで個人的に拒否りました。」

ショウ「そうなのか、結構シラコキ専用機でたら嬉しがる人も居ると思うからちやんと考えないとな」

抹茶「そうですね」

シユウ「そうそう、今回も新しい方が感想をくれたんだよな？」

抹茶「はい、スミスさん・4576さん・Kさん」感想有難う御座
いました」

シユウ「ありがとな、これで作者の方が一つ一つ直して行ってより
良い形にするから期待してくれ」

抹茶「それでは長くなってしましましたが、後書きを閉めさせてい
ただきます」

抹茶・シユウ「さてシユウ（俺）は生き残れるのか？次回お楽しみ
に！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します

PHASE 1-4（前書き）

抹茶「はい PHASE 1-4 書きました」

シユウ「はい、お疲れ様 つ旦 お茶どうぞ」

抹茶「悪いね~しかしあ前何気にお茶淹れるの美味しいな」

シユウ「一ヒー淹れれば自然と…」

抹茶「そつか、まあ良いだわ」

シユウ「せひ今回はどうんな話なんだ?」

抹茶「まだまだ拠点フェイズですよ」

シユウ「いい加減拠点フェイズから抜け出せよそろそろ読者が戦闘シーン出せ~って言つて来ても可笑しくないぞ~」

抹茶「やうやくすね、でも拠点フェイズも軽いは重くとも良こじゅん

!」

シユウ「逆ギレしないでくれ」

抹茶「すいません」

抹茶・シユウ「それでは本編をお楽しみ下さー!」

「入るぞー」そう言ってバルドフュルドさんの部屋に入った。

「おお、どうしたのかね？しかし君は赤服はそこまで似合いでくそうだねえ」と言われてしまった。

「うひうひ、それより何で話したんだ？」とバルドフュルドに真意を聞くとしたが

「何の事だい？」とわざとばぐらかして来た。

「何の事って言わないと判らないのか？キマイラの事だよー」と流石にイライラしているシユウだった

「おや、キマイラの真実を話したのが気にくわなかつたのかい？」と不思議そうにバルドフュルドが聞いてきた

「ああ、シラコキに話したら確實に止められるのは、田代見えていたからな…。」と少し真実を知られるのは辛かつた。

「でもシラコキ君はキミの傍に居たって言ったんだうひー・彼女の意思も尊重しなきゃ」とシユウが怒っているのにも拘りずしつちを諭してきた

「盗み聞きか？余計にタチが悪いんだなアンタは」と睨み付けた。

「盗み聞きではないわ、あの真実を話していたら急に面持ちが暗くなつて行つてね、最終的には考え方と来た、少し考えれば判る事さ」

と真剣な声に変わった。

「そりゃ、じゃあ俺の勘違い + アンタの話の流れに乗ってしまったか、これ以上話す事は無いな、危うく俺の真相すら話しそうだ」とかるく笑いながら言つた

「ふつ、キミの真相も気に成るが今は聞かないでおこう」と深くは聞いてこなかつた。「そうしてくれると助かるよ」と聞いて来なかつた事に感謝するシユウだつた。

「それよりキミは昼は食べたのかね?」と突然変な事を言い出した。「はつ? 何言つてんだアンタ?」と逆に聞いてしまつた。

「いやいや他意は無いんだよ、ただ単にもう昼飯時だから外で食事しないか? って事さ」と笑つて言つていた。

「アンタ此処の隊長なんだからもうちょい何か威厳らしい物を…いや、あんたに何言つても無駄だつたな」と軽くバルドフェルドの行動を考えれば無理だつた

「でだ、アンタもしかしてそんな格好で出るのか?」と田の前のバルドフェルドだつた人物を見る。

「何か変かな?」と言つて自分の服装に疑問の文字すらなかつた。そう今バルドフェルドが来ているのは派手なアロハシャツ・カンカン帽・更には大きめなサングラスと来た

「えーとだな、多分今街に行つたら結構目立つな、うん確実に目立つ」と何度も目立つ事を言つてしまつた

「まあ良いじゃないか、さあドネル・ケバブを食いに行こう!」と
テンションが高かつた。

「判つた、付いて行くから引っ張らないでくれ。あと俺も着替える
から待つてくれ」と説明して、着替えに行つた。

そう言つてシユウは自分の部屋に言つて半そでのYシャツ・青のジ
ーパン・黒のサングラスを付けて外出した

「そつちの方がキミらしいねえ、今度からそれで基地内歩いたらどう
だい?」と冗談で言つてきたが

「勘弁してくれ、こんな格好で歩いてたらシラユキがダコスタがま
ず怒るのが目に見えてる」と言つてしまつた

「キミも大変だねえ」とバルドフェルドが慰めてくるが「大変さの
原因には、お前も入つていいんだけどな?」と呆れる様に言つた。

「でだ、店は此処なんだな?」と話していたら着いていた。「ああ
此処のドネルケバブが美味しいんだ。特にヨーグルトソースを掛け
ると美味しい!」と気持ち悪い位に力説していく。

「そうかい、じゃあヨーグルトソースで食つてみるか」とドネルケ
バブが出て来るのを密かに待つてしまつた。

そしてパンの上にトマトやレタス等の野菜それとこんがり焼けた牛
肉だろうか? 美味しそうな肉のスライスが乗つていた。

「普通に食つても美味そだな。でもこの肉なんなんだ?」と疑問
に成つた事を口にした。「ん? 羊だよ羊、羊肉が使われてるんだよ

と持つて来てくれた店員さんが答えた。

「そつか、いただきます」と言ひてヨーグルトソースを掛けて食い始めたシユウだった。「な?美味しいだろ」とバルドフェルドさんが同意していく。

「ああ、コイツは飽きない味だな。此処に住むのも中々悪くないな」と思つた事を口にしながらドネルケバブを食つていた。

そして食い終わつて食後のコーヒーを楽しんでいた時に大量の荷物を持つた少年と金髪の少女が来て直ぐ横の席に座つてきた。（ツ！キラ君にあれがカガリ・コラ・アスハ）かシユウは思つてしまつた。

そしてドネルケバブが出て来た時にキラ君が「何此れ？」と珍しそうに言つていった。（うん、俺も最初は思つたけど美味かつたぞ）と心の中で言つといた。

そしてカガリがチリソースに手を取つた瞬間「あいや待つた！」と目の前のバルドフェルドが止めに掛けた。

二人は驚いていたがそれとはお構い無しに「ケバブにチリソースなんて何を言つているんだキミは！此処はヨーグルトソースを掛けるのが常識だらうが！」と力説していた。

「はあ？」とカガリは不思議そうに成つていて、「話はまだ続く」「いや常識と言つよりも、もつとこう！ヨーグルトソースを掛けないなんて料理の冒涜に等しい！」と話をしていた

「なんなんだお前は・・・」とカガリが言つてしまつた。（うん、誰もが最初は思つちゃうよね）とカガリの言つた事に頷いていた。

そしてカガリはドナルケバブを掛け「他の人間に私の食べ方をとやかく言われる筋合いは無い！」と言つて見せ付ける様に食つていた（言つている事は正論なんだけど大人気無いな）とついつい思つてしまつ。そしてキラ君が未だに何も掛けないので一人がどつちにするか口論していた。

「正直ジーでも良い氣がするな」とポツリとシュウは呟きながらローハーを楽しんでいた。

そして口論が終つたのか急に静かに成つたと思つて再び見たらキラ君のケバブはどつちでも無くミックスになつていた。

（はあ、大変そうだな）と思つていたが「ほら君も来たまえ」とバルドフェルドに引っ張られた。

そしてシュウは溜息をつきながらキラとカガリの席に行き再びローハーを頼んだ。

「しかし凄い両の買い物だねパーティでもやるのかい？」とバルドフェルドが聞いて買い物袋を覗き込んだが

「よけいなお世話だ！だいたいさつきから何なんだ？誰もお前等を招待してないぞ！」とカガリが怒つてきた

「それなのに勝手に座つて・・・」と言つてキラがカガリをテーブル越しに掴んで、すかさずシュウがテーブルを跳ね上げ女性であるカガリを引っ込めると同時に何かが店内に入つて來た

「クッ！無事か！？」とシユウは聞いて他のテーブルを盾にし腰に掛けであつた銃を抜いた。

「死ね！」「デイネーター！」「青き清浄なる世界のために！」と言つて襲撃者が怒号を飛ばしながら銃を撃つて来る。

だが店の物陰から次から次へと民間人に変装した兵士が出てきて襲撃者を撃ち殺した。そして他にも何人か出てきて応戦していた。

「かまわん！全て排除しろ」と聞こえて、シユウはハンドガンで先に連射率のあるVZ21のマシンガンを持つ奴を撃ち殺し武器を奪つた。

「つたく！撃ち合いたいんなら別の場所でしやがれ……」と叫びながら確実に一人一人殺していくシユウだった。

しかし一人のテロリストがバルドフェルドに銃口を向けた、だがキラが飛び出て近くに有つた銃を投げた。

そして銃は暴発しそれに怯んだテロリストに対して蹴りを喰らわせた。「ヒュウ～ やるねえ」と言つてしまつた。

そしてブルーコスモス達は全滅したが店内には硝煙の匂いが漂い、死体・怪我人が至る所にあつた。

なにやらキラとカガリが言い争いするが取り敢えず現状確認を開始し始めた。「どうやら死んだのはブルーコスモスだけで怪我人は民間人か、何人か怪我をした民間人を手当てして遣れ！」と的確に指示を出していった。

そして部下の一人が「隊長達」無事でしょうか！？」と聞いてきたので、「ああ大丈夫だ」とシユウは答え「ああ、私も平気だよ。彼のお陰でな」と言いながらサングラスを取つたので俺もついで取つておいた。（変装とは言えサングラスは面倒だな）と場違いな事を思つてしまつたシユウだった。

そしてカガリから「アンドリュー・バルドフールド」と言われキラは、「シユウ・・さん？」と敵側に回つていた事を曇然としていた。

（基地）

「あ、あの僕等本当に良いですか？」とわざわざからキラが何度も繰り返しその言葉を言つてゐるが

「駄目駄目！お茶を台無しにして、その上命を助けて貰つたんだ、このまま返すわけにも行かないでしょ、ねえ？」と言つてこつちこ話を振つて來た

「ああそうだな、仮にも俺の上官と認めたくないが助けてくれたんだ感謝するよキラ君」と言つてこた。

「いえ、それよりシユウさんば、何故ザフト軍に？」と不思議そうにしていたが

「まあそれは、何時か話すよ」と言つて話を切つた。

「だいたい彼女なんか服ぐちゃぐちゃじゃ無いか。せめてそれだけでも何とかさせて欲しい」と言つたが

「いやつ、私は全然平氣だから！」と言つて首を振つて拒否のうとしたが。

「それじゃボクの氣がすまないさ！」と言つていた。「カガリ嬢こいつには、感謝する時は相手の遠慮を無視して来るから氣をつけろよ」と苦笑していたシユウだった

「おまえなあ人事だと思つて……。」と恨めしそうに言つたが「だつて他人事だもん」とサラリと言つた。

そして目的地に着き、車から降りて基地に向かつたが「隊長！ブルーコスマスに狙われたんですって！」とダコスタが飛び出して聞いてくる。

「そこまで知つてるなら聞く必要性無いんじゃないのかな？」と思わず言つてしまつた。

そしてバルドフェルドが「客人の前だよ」と言つてダコスタが「あ……これは失礼しました」と言つて道を退きそのまま行つていたら後ろからため息が聞こえてきた。

「気にしないでくれたまえ」と相変わらず気さくにバルドフェルドが一人に言つた

「彼は僕には勿体無い副官なんだが、どうも人生の楽しみ方を知らない。シユウ君みたいに気軽に成れば良いのにねえ」と言つて来て

「ホントだよな、この前なんか小言を長い間聞かされたし」と自分の事なのに苦笑していた。

「あの…街を出る時つて何時もあんな感じなんですか?」とキラ君が尋ねてくる。

「ああ、護衛の事かい? 鬱陶しいからよせとは、『つんだけじ辭めないんだよねえ』と笑っていた。

「アンタは一回自分の身分を理解してくれ。まあ言つても無駄と判つてるんだけどな。まあ俺はいつたん着替えて来るわ、2人とも『ゆつぐりどうわ』とバルドフェルドと一緒に言つて部屋に戻った。

（部屋内）

「ふう、しかしキラ君と遭遇するとほね、予想外だったよ」とブツブツ呟きながら赤服に着替え込んだ。

「隊長、」無事でしょうか!?? と言つて部屋に入ってきた。しかし俺はまたまた着替え中な訳で・・・「キャアアアアアアアアアアア」と叫ばれてしまった。

「またか」「シユウ隊長も運が悪いよな」「鈍感で運も悪いつて泣けるよな」「何時もの事か、無視だな無視」と兵士に同情されるわ無視されるわで、マジで心が折れるよ?~

「つ、すいません」とシラコキが顔を赤くしながら言つてくる「ああ気にしてないから大丈夫だつて、それより隊長に呼ばれてるから行つてくるわ」と言つて部屋を出た

（バルドフェルド部屋前）

「ドレスを選んだのはアイシャだよ。それに毎度のお遊びとは？」
とバルドフェルドは聞き

「変装してお忍びで出かけてみたり住民を逃がして街だけ焼きそれにお情けで物資を提供つて事だよ」と言い返してきた。

「ふむ、お情けで物資を与えたのは、間違いだね」と軽くバルドフェルドが答える。「何？」とカガリが疑問を口にした。

「だつて物資をあげたのが情けじゃなくて本心だつたら如何するんだろうね？」と問うた。「お前等」「コーディネーター」がそう言つ事有る訳無いだらうが！」と叫んでいたが

「さて本当はどうぢかん？ナチュラルのショウ・ム・ライトニング？」とこいつを見て話しかけてきた

「なつ！お前が物資を渡してくれたのか？それにナチュラルって…」と自分の言つた事に対してしまつたと思つた顔をしていた

「はつ、ハハハ俺がやつてたのはお情けなのか？だつたらとんだ面白い偽善者だな俺は」と笑つてしまつた。

「ちつ違う、お前のやつたことは「今更遅いよ。彼は戦争に巻き込まれる人を本心から願つて救おうとしたのにねえ」ツー？」そう言ってカガリが言おつとした事に対してバルドフェルドが本当の事を言い出した。

「失礼する」やつ言つて部屋を出て屋上へと向かつた。

（屋上）

「今まで俺のやつてきた事は何だらうな?」と自分自身に問いかけ始めた。「一般の人を殺したくないから戦うのは、悪い事なのかな?」と呟き始めた

「多分悪い事じゃないと思いますよ」と別の声が聞こえた。「シラコキか、慰めにでも来たのかい?」と聞いてみた。

「いえいえ慰めるなんて甘い事しませんよ。隊長普通に立つてください」と言われたので立った。そして パシーーン 叩かれた

「なつー!?

「今更何甘い事言つているんですか、貴方は他人に軽く言われただけで挫折するんですか!違うでしょ、その一心が有るから頑張れるんでしようが!だったら貴方は迷わずその道を歩き続けて下さい、私はそれに従つて道に迷つたら正してあげますから。」と笑つてきた

「そりゃ、小さな事に迷い過ぎなのかもな俺は、ありがとうな」とシラコキに感謝した。

「どういたしまして」とお互に笑つていた。

そして基地の入り口でキラと遭遇し「キラ君次会う時は戦場だ。だからキミも容赦なく撃つて來い、そして君の戦う意味が速く見つかる事を期待しとくよ」と言つとこた

「はい、ではお元氣で」と言つて会釈をしてキラと別れた。

PHASE 14（後書き）

シユウ「次の話では戦闘に成るんだな？」

抹茶「ええ、そうなりますね」

シユウ「楽しみに待つているが今回感が否めなかつたんじやないのか？」

抹茶「いや、気のせいでしょう？」

シユウ「いや、気のせいじゃない気がするぞ？」

抹茶「確かに落ち込み氣味の主人公を元に戻す方法がテンプレ過ぎましたかね？」

シユウ「さあ？それは読者が決める事だ、さて今回も感想が着てたんだよな？」

抹茶「ええ、鉄人8号さん・みつきさん御感想有難う御座いました」

シユウ「ありがと」

抹茶「いつも愛読してくれる方が居るだけで主の力になります」

シユウ「でも無理するなよ？」

抹茶「そうですね。でも書きたい時には思いつ切り書きたいんですね」

ショウ「やつか、では後書きを閉めよつか」

ショウ・抹茶「わいショウ（俺）は生き残れるのか？次回お楽しみにー。」

「ご意見・ご感想ありましたらドンドン書いて下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します

PHASE 1-5（前書き）

抹茶「はい、PHASE 1-5の完成しました！」

シユウ「お疲れ様、毎日投稿しているがお前にネタ切れという4文字は無いのか？」

抹茶「え？ 有りますよ、ただ書いてる間に色々と閃いてくるんでスラスラ書けるだけです」

シユウ「まあ時々 ~~ある~~ 感・誤字脱字見つけたりしたら落ち込むんだろ？」

抹茶「そうですね、毎回慎重に書いてはいるんですけど、それでも誤字・脱字が見れるから訂正出来る所は可能な限り訂正してると」

シユウ「そうか、取り敢えず前書きは此処までだな」

抹茶「ええ、今回は前書きは何も閃かなかつたです」

抹茶・シユウ「では本編をお楽しみトトセー。」

「隊長、バルドフュルド隊長がお呼びだそうです」とシカコキに言われた

「ああ判つた。直ぐに向かひよ」そつ言つてバルドフュルドの入る部屋に向かつた

「おーい、入るぞー」と聞いてみたが「ああ入りたまえ」と少々怒氣が入つてゐる声が聞こえた

「どうしたんだ? 苛つこちまつて。お前らしくないぞ」と聞いたら

「これを見たら判るわ」と書類をこいつに渡してきた。

「ひつやうジーラルタルからのM5輸送の情報だが…此れは酷いな。

「確かに此れを見たら苛立ちも覚えたくなるわな。バクウじやなくてザウートつてタダの的だな」

「ああ、今回ばっかしは、戦力全部回さない限り勝てないもんか」と苛立ちが要約収まつてこいるよつだ

「しかも、この砂漠でXシリーズを一機回されても困るものじやないのか?」と疑問を口に出した。

「ああ、しかもかえつて邪魔に成りそつだな、だつて地上戦の経験無いんでしょ?」と今入つて來たダコスタに聞いていた。

「ええ、ヒリート部隊ですからね」と相槌を打つていた。

「正直厄介なお荷物だな。クルーゼ隊ってのは、プライドも高いし扱い辛いはずだ。もつと柔軟な思考を持つてた部隊ならな」と正直クルーゼ隊に期待する事を諦めたシユウだった。

「それにクルーゼは気に食わん、俺はアイツが気に食わん、君もう思うだろ?」とこつちに降つて来たので「ああ仮面で他人に目を見せない奴を信用するのは無理な話だ」と返しといた

「ハハッそれは僕も同意するよ。さてそろそろ×シリーズのパイロットが来るらしいから迎えに行こうじゃないか」と言って俺らは甲板へと向かった。

そして甲板に着いたとき、「うわ、なんだよこりゃ酷いところだな!」と金髪の青年が文句を言いながら手をかざして砂混じりの風を防いでいた。もう一人の白髪の青年も驚いて顔をしかめていた。

「砂漠はその身で知つてこそが重要なんだよね」とバルドフェルドが言つて笑みを浮かべながら近づいた。だが一人は、砂で目を遣られながらもこっちを警戒してゐる様だった。

「ようこそセッブスへ。指揮官のアンドリュー・バルドフェルドだ」といつた瞬間、二人が敬礼し「クルーゼ隊イザーク・ジュールです!」「同じくティアック・エルスマンです」と答えてきた

「宇宙から大変だったな、歓迎するよ」と心にもない事を言い出していた。「ハツ!ありがとうございます。それより隣の方は?」とディアックが俺の事について聞いて聞いてきた

「ん、彼かい？遊撃隊兼僕の戦場での補佐かな」と事実でもない適当な事を言われたが「シユウ・Ｋ・ライトニングだ、宜しく頼む」と敢えて嘘とは言わず自分の名を言つといった

「さて戦士が消せる傷を治さないのは、それに誓つた物が有るからだ、と思うが違うかね？」と上官のスッパリと言つたがイザークは戸惑つた後気分を害してそっぽを向くが

「そう言われて顔を向けるのは屈辱を受けたその復讐の為に残しているのかね？」と更に追い討ちを掛けた

流石に苛ついたのか怒鳴るように「そんなことより足つきの動きは！」と言つたが「あれば、アークエンジェルだ。更に読み方じや大天使覚えとけよ青年」とシユウは一人に教えといった

「なつ、貴様何故その事を知つている！」と怒りの矛先がこっちに向かってきた。「アホらし、そんなのちょっと調べれば判る事だろうが」と言つといた

「それよりもバルドフェルド隊長 話を切つたのはすいません、続きを」

「ああ、あの艦なら此処から西方180km離れた地点、レジスタンスの基地に居るんだよ映像見るかね？」と無人探査機のデータを抜き出していた

そしてバルドフェルドは搬送された一機のXシリーズを見上げて「成る程、同系統の機体だな、アイツと良く似てる」と呟いた。まるでこの後戦うストライクに魅入られてる様だ。

そしてディアツカが「あの、バルドフェルド隊長は既に連合のMSと交戦したと聞きましたが」

「ん？ 交戦したのは、僕じゃなくて彼」と言つてコッチを指差してきた。「なつ！ で、どうだつたんですか？」といひちに今度は聞いてきた

「ストライクと殺しあつて正直ガッカリしたけど、まあ次は同じ事は無いだろうね」と言つといた。しかし二人は何の事が全く理解出来てない様だ。

しかしそんな軽い沈黙が「隊長！」と言つ声で壊れた。「動き出しちゃつたの？」とバルドフェルドが来た兵士に問うた。

「はつ！ 東に向かい進行中です」とオペレーターだったのか伝えて元の場所に戻つて行つた。

そしてイザークが「足つきが来たか！」と興奮して声を上げる。すぐさま近くの兵に地図を持つて来させて大天使達が向かう場所を確認した

「タルパティア工場区跡地に向かつているのか。まあ、此処を突破しようと思うなら僕が向こうの指揮官でもそう動くだらつ」と大目に見るよう言つてやつていた

「隊長どうするんですか？」とダコスタが聞いてくる

「うーん、もうちょっととゆっくり出来ると思ったが仕方ない」「出撃ですか！」とイザークが今か今かと出撃を待つている

「レセップス発進するー。ピートリーとヘンリー・カーターに打電しろー。」「はっ！」途端にクルーが慌ただしく動き始めた。

「つーん女性に先にアクション起じさせたなんて悪い事をしたなあ」と言っていた（あつとアイシャさんの事を言っているんだうつな）と思つていた

「んじゃ俺はちょっと先に動きますよ」と言つて自分の機体に向かつていった。「地雷撤去かね？」と聞かれ「ええ母艦を壊されるとシャレに成んないんで」と言つてハンガーに向かつて行った。

「隊長出るんですか？」とハンガーに居たら聞いてきた。「ああキマイラで地雷を破壊してくる、今回は地雷を踏まない為にも空中で動ける奴が良い」と言つて乗り込み

「ショウ・K・ライティング キマイラ 出るー」と言つて4枚の翼を広げ空中へと飛び出した。そして今回も新兵器を持ち出した。0mm口径の6連装ガトリングを構え地面を撃ち始めた。

そしてショウが狙つた場所は大量の地雷が有りガトリングに当つたのか次々に爆発し最終的には誘爆していつた。

「破壊完了、撤収する」と言つて誘爆する地雷を背にレセップスよりもガトリングをこれ以降も使う為にホームに立ち寄りハンガーにガトリングを入れてレセップスに戻つて来た。

そしてレセップスに着いた時には他の空母二機が戦闘に成つてゐるら

しい「補給頼むわ」と整備兵に声をかけバルドフールドの居る所に向かつた。

「バルドフールド隊長!」トイザークがイライラしていた「納得できません!どうして我々の配置がレセップスの艦上なんですか!?」と怒っていたが

「おいおいクルーゼ隊つてのは上官命令に對して反抗しても言い様に出来ていたのかな?」とシユウがたずねた。

「いえ、しかし!ストライクとの戦闘経験では俺達の方が・・・」「負けの経験の間違いでしょ?」トイザークが言っていた

「アイシャさん流石に言い過ぎでは」とアイシャさんが言っていた
「なに!?」トイザークが怒っていた。

「それに一つ言わせて貰うけどさ、君たち砂漠のバクウのスピードに付いてこれるのかい?空も飛べずに重たい装甲と銃持つちゃつてさ、付いてこれないでしょ?」とシユウは流石にトイザークの身勝手さに苛々していた。

「そんなことは」となおも言こやうなのを「もうよせ、トイザーク。命令なんだ。失礼しました」と言つてトイザークを引きずるようになり場から離れた。

「彼のような真似誰にでも出来るわけ無いしな、いや一人居るかな?」とこっちに向けて言つてくる様だが「流石に買ひ被り過ぎですよ」と答えておいた

「それじゃ自分はそろそろ出ますよ」と言つて再びキマイラの元へ

と向かい始めた。

「隊長出撃ですか？」とシラコキが聞いてくる

「ああ、今回は大天使とストライク潰しに掛かるが付いて来れるか？」と敢えて聞いておいた

「ええ、貴方を守ると決めた時から離れませんよ」と決心があった

「ありがとな、出撃するー」と言つてショウはキマイラにシラコキはバクウに乗り込んだ

「そろそろ隊長、私にもザウート貢つたんですけど私にはバクウがあるので隊長の戦艦のハンガーに積んでおきましたよ」と言われて

「そりゃ、戦場前で喋る事じゃないが、今回専用機作る時にパーツが足りなかつたんで正直助かる」と言つてカタパルトに付いた。

「キマイラ出るー」と言つてシラコキの事も考えて今回はキャタピラを使用して動き始めた

「さて行くぞシラコキ！」「はいっ！」と言つて火線飛び交う中ストライクとアークエンジェルを目指して進んだ。

「見つけた！今日は遣らせてもらうぞー」と言つて今回持ってきた特化重粒子砲とキャットウス500mm無反動砲を構えて撃ち始めたがやはり今まで落ちて来ないのも有るのか

特化重粒子砲は戦艦を動かしギリギリ避けられキャットウスに至ってはイーゲルショーンに撃ち落される。

「チツーのらりくらりと避けやがつて！」と言つてキャットウスを腰に掛け特化重粒子砲をチャージ式に変更しアグニと同じ様に火線を強くして放とうとしたが

「アークエンジュルはやらせない！」と言つてストライクがこつちに膝蹴りをしてきた、「ガツ！ふざけんなよ！」と言い重粒子砲を捨てキャットウスを構えてストライクに撃つがストライクがサイドステップで左に避け、そしてキャットウスは偶々ストライクの後ろに居た友軍のザウートに当たり爆散した「あつ・・・やつちまつた」と思わず言つてしまつたがもう遅い。

「なつ！シユウ・ベ・ライトニング貴様裏切つたな！」とシラコキ以外のザフト兵に言われ火線がこつちに向いた。

「チツーこうなるとは流石に予想外すぎるわ！」と言つて今度はキヤットウスを捨て腰に有る左右のホルダーに入つて、76mm突撃銃を二つ抜き出し始めた

「ナチュラルに死を！」と言つてザウート3機とバクウが2機そして上にはアジャイルが5機居るが「俺を止めるならもつと持つて来い！」と言つて翼を広げ空を飛び、アジャイルを撃ち落し始めた元々戦闘機がMSに勝てる筈も無く難なく落せたが、5機のMSが地面に存在しザウートのキャノン砲がそしてバクウのミサイルとレールキャノンがこつちに撃とうとした時、一機のバクウが横から撃たれたレールキャノンによつて爆散した。

「なつ！シラコキ何遣つてるんだお前！」とモニター越しに叫んだ「言つたでしょ隊長、貴方は私が守るつて。それに貴方が軍を裏切つても私の隊長は貴方だけです！」と言つて他の4機と戦闘をし始めた。

「やめてくれ！そんな事して何に成る！お前の人生無茶苦茶じゃないか！」と言つたが

「私も養子でちゃんとした親がないんですよ、意外でしたか？コーディネーターの中でもそんな事はあるんですよ。そして急に私の父と母だった人は、理由も無く離婚し私の前から離れて行つた、だから私は独りは寂しくて、独りには成りたくないから軍に入つた。でも結局は、一緒だった養子で捨てられた子が軍でも劣等みたいな扱いだつた。でも隊長だけが私を見捨てなかつた、だから付いていくんです！」と自分から離れるのを頑なに拒んだ、だが一機のザウートがシラコキのバクウに狙いを定めたが

「わかつた、俺の負けだ。お前の好きな事をしたら良いさ」と言って狙いを定めて居たザウートに対しビームキャノンで貫いた。

「はい、好きにしますね」と言つて、今は敵であるバクウとザウートに対し俺とシラコキは武器を構えた。

「俺がバクウ一瞬で壊すから1機のザウートを落してくれ」と頼んでおいた

「はい」

「リミッター解除30秒」と言つてバクウの後ろに一瞬で回りビームソードシールドでバクウを縦に切り裂いた。

流石に化物を敵に回したと思ったのか後方に下がるつとするが「戦場で勝手に敵扱いした上にこっちを殺そうとする奴は実力の差つてのを判つてなかつたな」と言つて76mm突撃銃で武器の部位を攻

撃し戦闘能力を無くして置いた。

それでも一機のザウートも煙を上げながら撤退していた。「さて此処には、もう用は無いが大天使に恩でも売つて置くか」と呟き大天使の居る方向に向かつた。

「ひからカラギ アークエンジェル応答しろ」と言つて通信を開いた。「今からそつちを援護する、中立のマークを出すから撃つなよ？」と言つて通信を無理やり切つた。

そう言いアークエンジェルの近くに面るアジャイルを撃ち落した。そしてザウート数機がこつちに對して狙いを定めてくるが

「動きの遅いMSが俺のキマイラを落そなんて甘い考えするなよ？」と言つてビームソードシールドでモノアイカメラと肩のキャノン砲を切り裂いていく、だがシュウも普通のパイロットだから隙も見せるが「隊長はやらせない！」と言つてシラユキがその隙をカバーしてくれる。

そして自分達の周りが片付いたので他の援護に回らうとしたら、どうやら戦闘機がレセッブスと戦つて被弾してしまつたようだ「戦場で気を抜いたら落ちるが今は運が良かつたな」と近づいてそう言った、「なつ！ザフトの機体！」と言つてこつちに武器を構えるが「落ち着いてくれこつちは向こうに敵扱いされて今そつちの援護してんだよ、アークエンジェルまで運ぶから静かにしてくれ」と言つて戦闘機を持ち上げ

羽を広げて再びアークエンジェルに向つて行つたが

工場跡区の鉄材に引っ掛つてゐるが、動けないのでビームソードシ

ールドで切り裂いた。だがその直後警告音が鳴り響いた。そしてすぐさま反応しシユウはブースターを使い咄嗟に右に避けた、その後バスターの砲撃が横切つて、一安心したがカガリ嬢が「もつと丁寧に運べ！」と怒っていた

戦闘機をアーケンジエルのハンガーに置いた後に

急に敵の機体の動きが止まつた、どうやら指揮官であるアンドリュー・バルドフェルドが落されたらしい。そしてジブラルタルに撤退していった。

「ふうようやく終つたか、いやこれで連合も此処を狙い始めるかな？」とシユウは一人予想していた。

だが（ビツービツービツー）MSの警戒音が鳴り響いた。「そこのMS止まれ！」と言つて後方にさつきの戦闘機の2機目も居た。

「やれやれ、あんたらに俺が止められと思つなよ？」と流石にイラついた。「この状況で何を言つている！警告は一回までだ！」と言つてきたが

「アホらし、帰るか・・・リミッター解除15秒」と呟きスカイグラスパーですらも目視できない速度で後方に下がつた「なつ！？」流石に驚いてるようだが

「また会いましょうね大天使殿」と言つて自分の戦艦に戻つた。

PHASE 1-5 (後書き)

ショウ「今回ばかりコキの過去が明かされたな

抹茶「そうですね、今度後書きで呼びましょつか?」

ショウ「やめてくれ、何かカオス化しそうな気がする

抹茶「そうですか、ではまた今度にしましょ?」

ショウ「それよりシラコキの過去をどうしてあんな風にしたんだ?」

抹茶「うーん、これと書いた物は無いんですけど、良く展開で「私は孤児だったんだ!」って書いたんで!」

ショウ「あまりテンプレ使いと読者が怒るぞ?」

抹茶「だからオリジナルストーリーを開いてるじゃないですか」

ショウ「オリストーリーは当たり前だからな?」

抹茶「そうでしたね。そういう今回も」感想を下されたみつきさん
有難う御座います」

ショウ「みつきさん結構感想くれるから主は嬉しがってるよ

抹茶「否定はしない」

ショウ「そつか、じゃあ後書きを閉めよつか?」

シユウ・抹茶「さひシユウ（俺）は生き残れるのか？次回お楽しみに！！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します

PHASE16（前書き）

抹茶「PHASE16の完成です」

シユウ「おお、毎日投稿してるが大丈夫なのか？」

抹茶「ええ大抵は脣に書き上げて夜は誤字・脱字してるとかぞ、それでも残るつて不思議ですよね」

シユウ「それはお前の注意力散漫だからだろ？」

抹茶「言わないでくれ結構気にしてるんだ」

シユウ「まあ読者の方も主の努力だけでも認めて欲しいものだ」

シユウ・抹茶「では本編をお楽しみ下さい！」

「ジャパンク艦」

「隊長此れから如何するんですか?」とシラコキに聞かれた

「ん? そうだな今更ザフトに戻った所で俺等に居場所なんて無いぞ、だから中立国連なるインド洋を抜けてオープに向かおう」

「オープですか?」と不思議そうにしていた。

「ああ、あれは中立国と名乗っているが実際は自衛と言つ理由でMSを開発してる所なんだよ。更にはXシリーズ・アークエンジニアリングにては、オープの上層部が関わってる」と言つて資料をシラコキに渡した

「凄い、でもこれって普通じゃ入手出来ませんよね? ビジウムって手に入れたんですか?」

「俺の一一番得意なハッキングで盗んだ、他にも色々見たがオープの造つてるM-1アストレイは、マトモに動かせない位のものが最悪だ。そのMS完成をさせる代わりにM-1を一機貰う」と言つといった

だが結局はオープも同じだ、平和の國と名乗つておきながら最終的には国民を巻き込む。

(今の世界に善や悪なんて無いな。戦争してゐる人間全員が腐つてやがる。だが俺も人の事を言えないな)と色々と物思いに耽つた。

「そういうえば隊長は何故M-1アストレイを欲しがつてゐるんですか?」と聞かれ

「それは、『イツを見てくれれば判る』と言つて機体の設計書を渡した。

「これはM-1アストレイだけど形が少し違つてしかも4枚羽なのに更に追加で8枚の羽ですか、それにこの武器つて正規じゃ使われて無い武器ですね」と言つてきたので

「よし、一通り田を通したな？ソイツはキマイラと原理は似てるが少し違う、まずM-1アストレイの羽の4枚追加するのに必要なディンの羽は、キマイラを造つた時に予備として2セット置いてあるから大丈夫だ」と話して

「まあ簡単に言えばM-1の背中のバックパックにディンの羽4枚着けて空は飛ぶわ、完成したらキマイラの運動性を遥かに超える。武器は2つのガンソードがメインだが、剣と同時に銃も使える様考えたら不思議とそう言つ結論に至つた」と話したが

「どうですか、隊長は一機田の自分専用機を作るんですね」と何か勘違いを起こしていた。

「えつ？これは、俺専用機じゃなくて、お前専用機だぞ？機体名はエンジェルにしてる」と言つといた

「くつ？」だが未だに状況について来れないらしい。

「いや、だからな『イツが完成したらお前が乗るの。ほら前にキマイラには正規のMSじゃ付いて来れないから造つて遣るつて言つたじやん』と言つといた

「ありがとうございます」私は、しかし何故M-1アストレイを原型にしてしまうとするのですか？」と不思議そうにしていた。

「ん？個人的な意見だけど、M-1がOSをビリにかすれば一番マトモな機体だからかな？」と適当に答えた

「んじゃ、話も終わつた事だしオープに行きますか」と言つてオートパイロットの目的地をオープに設定しといった。

「あの隊長はオープに付くまで何をなさるのですか？」と聞かれたので

「ん？以前見せた爆炎弾あるよね、あれを改造してフェイク弾を作る」と答えておいた

「え？フェイク弾ですか？」と何が何だか謎のような顔をしていた。

「えーとね、簡単に言えばMSに衝撃を与えて体勢をずらし更には煙を出して壊れた様に見せる弾だ」と弾の説明をした。

「何故そんな弾を？普通に爆炎弾を使って破壊した方が早いのでは？」と言われ

「んーそりなんだけど、大天使がオープに立ち寄りそうな気がするんだよね」と答えた。

「なんですかそれ？もしかして隊長の勘ですか？」と聞かれたので

「あーうん、まあ勘で良いかな」と軽く笑っていた。

(まあ事実としては、原作じゃオープ出で直ぐにオノ「ロ島で一ノ
ル君死んじやうから救済策かな? あとは、トール君は盾がコックピ
ットに直撃で死ぬからスナイパーライフルで盾をずらして生かすか
と色々と救済策を考えたシユウだつた。

そしてジャンク艦は、アーケンジエルよりも早く出ていたのでモ
ラシム隊に絡まれる事無く無事に海を渡れたるが…。

「悪いシラコキ先にオープに行つといってくれ、オープには着港の許
可を貰つてゐるから、後はオートバイロットに任せれば勝手に着くさ」
と言つといた

「え? 隊長はどうするですか?」と聞かれたので

「キマイラを使って周囲の探索をする、幾らジャンク屋とは言えど
此處で襲われるのは癪だからな」と言つてキマイラに乗り込んだ。

「そうですか私の機体は海には行けないので、いじ無事帰つてくる事
を祈ります」とこつちを見上げて言つてきた。

「ハハツ美女に見送られるつて最高だな」と笑いながら機体を発進
させた。

（シラコキSIDE）

隊長が美女つて言つてきて正直恥かしかつた。しかし何故いきなり
出撃を行つたのだろうか?

彼は何時もそだ考え方をしては、真剣な顔で物事を考えて勝手に
どつかに行つてしまつ。

それに今回作つた新しい弾何かを成す為に作られた感じだ。そういうの先誰かが殺されるのだろうと予測は出来るだらう。

まだ私に言つてない事が多くあるのだろう。……「もしかしてまだ信用されてないのかな？」と隊長に向かつた先に目を向けながらため息をついてしまつた。

（SIDE END）

「さて此処かな？」と言つて辺りを見回した。やはり索敵センサーにMSの反応が多く有つた。

どうやら交戦してゐる様だ。「さて今回も援護するかね」と言つて「面倒だから母艦から壊すか」と咳きながら索敵センサーを確認した。どうやら此処から北西に2km離れた場所に居るらしい。

「高みの見物する野郎は、痛い目を見ないと判らないのかな？」と言ひながら片腕でガトリングを持つて潜水艦の居る場所へと向かつた。

そして予想通り見つけれたので「んじゃ……死ね」と言ひながら水中に居る潜水艦に向かつて討ち始める。

どうやら当つたのか緊急浮上してきた。「ボズ」「ロフ級潜水母艦か」と咳きながらガトリングを腰に掛けグレネードランチャーを左腰のホルダーから抜き出した。

「さて出される前に鬱陶しい物は吹き飛ぼうか？」と言つてMSの居そうな場所に勘でグレネードランチャーに事前に入れといた徹甲留弾を数発撃ち込んだ。

そしてシュウの勘が当つたのか潜水艦が爆発していく。やつとMSが誘爆していつてゐるのだろう「ふう、呆気ないな、潜水艦言つても潜れなきや意味無いし、更にはMSを出すまでに壊せば戦闘不能なんぞ目に見えてる」と砂漠で貯まつてたストレスを潜水艦にぶつけた。

「でもやつすきあちやつたかな?」と遣りすぎ感を否めなかつたシユウだつた。

だがその感情は一瞬で消えた何故なら（ビッヂー・ビッヂー）アグーの火線がこっち來たからだ。

「やれやれザフトの次は連合か?」と呟いてしまつた

～ムウ・ラ・フラガシード～

俺と嬢ちゃんはグーンとゾノを出撃させた、潜水艦を探していた、だが直ぐ近くで黒煙が上がつたので確認しに行つた。だが「オイオイ何だよこつや?」と言つたがこの惨状を見れば言いたくも成る

砂漠で会つたティンを元にしていりやつたMSが潜水艦を相手に無傷で落していだ、どうやら異常に強こじらしげ、此処で敵に回られたら厄介だな。

先手必勝つて事で落そつとアグニを撃つたが当らなかつた（この程度じゃ掠りもしない相手か!）

「嬢ちゃん、潜水艦狙いは止めだ、アイツを止めるぞ!」と呼びかけ「判つた!」と帰つてきた。

さて今まで本氣で相手は戦つてないようだが俺の力が何処まで通用

するものかね？

「SIDE END~

「やれやれ道を遮る敵を潰してやつたのに何で俺を狙うかねえ？」
と言つてみた

だが敵である自分にそんな事を答えてくれる筈がない。

「仕方ない、別のグーンも潰しに掛かるか」とため息を吐きながら
グレネードランチャーをしまいストライクとアークエンジュエルの居
る場所へと向かつた。

やはり戦闘機でも改造したキマイラの速度には追いついて来れない
よつだ。

そして早い機体で良かつたのかストライクとアークエンジュエルは水
中の敵に対して未だに戦闘を繰り広げていた。

「やれやれやつぱり手伝いに来て正解だつたな」と咳きながらサー
モグラフティを起動させグウンの居る場所にガトリングを撃ち始め
た。どうやら空からの攻撃に予想出来なかつたのか被弾する機体が
多く居た。

そして大半の機体を損傷させたので、そのまま帰ろうとしたら通信
が来た。大天使からの様だ。さてさて何ようかね？

「そこでのMS援護感謝いたします、だけどこのまま帰す訳にはいき
ません一度ハンガーに着艦して貰いませんか?」ヒマリューさんに
聞かれたが

「何故?俺にメリットが無い、それに苦戦しているから助けてやつ

ただけだ」と返した

「ではその機体の名前だけでも教えてください」と引き下がらないので

「キマイラだ。これで充分か?」と言つたが（ビツービツービツー）とロックオンの警戒音がなった。

「そうか、これがアンタ等のする事か、覚悟は良いんだろう?」と言つてガトリングを肩に掛けながら問うた。

「ええ悪いけど信用出来ないのでね」と言つて通信を切られた。

「はあ、昨日の味方は今日の敵ってか?」と言つながらも少々こちらの分が悪い

「仕方ない軽く一当りしてから引くか…リミッター解除1分」と言い、すぐさまアークエンジンに撃つても問題無い場所をガトリングで撃ち「残り30秒か撤退だな」と呟きジャンク艦に向かって誰も追い付け無い速度でその場を去つた

♪マリコー・ラミアスSODE♪

「ふう、去つて行つてくれたわね」と呟いた

「ええしかしあの機体は何なんでしょう?」とナタルが聞いてくる

「多分キマイラがあの機体の名称なのでしょうね、しかしあの機体はザフト軍の機体に良く似てたけど何なのかしらね?」と不思議に成っていた

「やういえば被弾状況は？」と聞いてみたところ「そ…それが」と言い辛いらしい「酷い状況なの？」と深刻なのが聞いてみた。

「いえ、むしろ弾が当つても殆ど意味が無い場所だけ撃たれました」と言われ

「じゃああの機体のパイロットは手加減をしていたの？」と手加減できる力量に恐ろしさを感じた
(今は敵に回らない事を祈るばかりね)と少しだけ思つてしまつた。

→ SIDE END ←

「さてとジャンク艦は・・・」と見つけた」と言つてハンガーに着艦した。

「ただいま」と言つてみた「おかえりなさい隊長」と言つて笑つていた。

「そういえば俺もつ隊長じゃないだからショウつて普通に呼んでくれ」と言つてみた

だが「ええ!」と言つて居るので「何かマズイのか?」と聞いてみた。「いつ、いえ判りましたシ・・ショウさん」と少々顔があかかった。何故だろうか?

そういうしている間にどうやらオープ領に入ったのか

「そこのジャンク艦、すぐさま転進せよ、それが認められない場合自衛権を使って貴艦を排除する」と言つて来だが

「1週間前に着港すると伝えたシユウ・ム・ライティングだ。確認して欲しい」と言つて

「エンジンを切つてその場で待機している」「了解」と書いてエンジンを切つた。

「隊長大丈夫なんでしょうか?」と不安げに聞いてくる

「攻撃して来たら誰に喧嘩売つてるとか判らせるから大丈夫だよ」と微笑んで答えた。

「顔は笑つてもやる」とが最悪じゃないですか!」と怒つてきた。

「貴艦の情報は確かに有つた。着港してくれ」と聞こえてきたのでエンジンを起動させドックに入った

「ほりな?無事に入れただろ」と言つてジャンク艦から降りたが「着いてきてください」と何人かの兵士に囲まれた。

「シユウさん・・・全然無事に入れて無いじゃないですかあああ!」
とシリコキが叫んだ

「シユウはオープに着港してもまだ残るようだった

PHASE 16（後書き）

抹茶「はい、今日はオープ軍に捕まつた所で終了させてもらいます」

ショウ「今回で捕まるの2回目だな…」

抹茶「細かいこと気にしちゃ駄目ですよ」

ショウ「せうか、それより今回他のSHIDE出したけど如何してなんだ？」

抹茶「常々SHIDE出した方が良いんじやねえか？と友人に言われたので使ってみました。」

ショウ「ええ、適当にキャラの心情とか出した方が良いと想いまして」

ショウ「わづか」

抹茶「んじゃ後書き閉めますか」

抹茶・ショウ「わづショウ（俺）は生き残れるのか？次回お楽しみに！」

「ご意見・」感想ありましたらドンドン書いて下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
またSHIDEで何か有りましたら書いて下さー

PHASE17（前書き）

抹茶「PHASE17完成！」

シユウ「お疲れさん、さて今回はどうな話に成るんだ？」

抹茶「はい、まずシユウは拉致られた後監さんも良くなつてゐる場所に行きます。

そこで有るものを作り手伝いをします。そしてシユウの過去が今回なんと出されます」

シユウ「ああ忌々しい過去だな。あいつ等のせいだ」

抹茶「はーい今ちょっとシユウが危ないモードなんでのまま本編入りたいと思いまーす」

抹茶・シユウ「では本編をお楽しみトセー！」

「全くオープは好きだが苦手な此処に来る事になるとわな」と悪々しげに呟いた

「すいません、しかし貴方の力が必要なのです」と申し訳無をそつにしていた

そして車は一つの格納庫に入った。

「すいません、此処で降りてください」と言われたので指示に従つて降りた

「久々だなエリカさん、俺としてはアンタとは一度と会いたくなかったんだけどな」

「ええ本当久しぶりねショウ君 一応話だけでも聞いてくれる?」
と言つて

「一応話を聞いたって言つかもう知つてるんだけどな」と判りきつた事を言つた

「どうせM1アストレイの事だろ?せいぜい俺の能力を買ってモルゲンレー^テに尽くしてほしいとかだろ」

「なつ!何で判つたの」と少々焦つていた

「ハッキングすれば調べやすい事だ。あんたら隠す気あんの?」
聞いといた

「ええ、だから貴方の力を借りたいの」と言つてきたが

「正直言つてイヤだね」とハツキリ言つといた「理由を聞いても？」と聞いてくる

「理由？判つて無いなら教えて上げるよ、まずはXシリーズ・アークエンジニアおまけにM-1アストレイ自由の国とは、良く言つたもんだな。確かに侵略しない・侵略を許さない・他国の争いに介入しないだけ？それを堂々と破るようなものだもんな。それにXシリーズやアークエンジニアはウズミのせいじやなくても、最高責任者としては許されない事だ。

そしてヘリオポリスもオープの物つて考える所が氣に食わない」と苛立ちを隠せなかつた。

「やうだつたら何をしたら考えてくれるの？」と聞いてきた「判つてるじゃないかM-1をこつちに一機回せ、その代りOS作りは遣つてやる」と言つといた

「正直M-1は厳しいけど動かせないMSを動かせる様に成るんだから納得するしかないわね」とため息をついた

「んじゃ案内してくれ、本来ならオープで心身休めたのに無理やり移動させられてこつちも気が立つてんだよ」と今回の事には苛立ちを隠す氣にすら成らなかつた

「こんな統率者の乱れの有る国なんかに希望はある物かよ…」よ懲しそうに呟いた。

「アサギ・マコラ・ジュリー！」とエリカがインカム越しに言つた

はーい」「その人誰ですか?」と一人のパイロットが答えたが

「さつさとMSを動かしてくれ」とシユウは頼んだ「りょーかいしましたー」と言つて機体を動かしたが・・・遅い

「これじゃ連合のスカイグラスパーの方が断然マシだな」とため息を吐いた「そうですね、このままじゃ戦場出ても即撃破されて死にますね」とシラユキが言つた

「ひつどーー」「人の苦労も知らないで」と言つて来たが「ああ、そつちの苦労なんて知りたく無いね自分達だけ安全な所で見ておいて、苦労?笑わせる」と冷たい表情で言い放つた

「とつととのSを見せてくれ有る程度基礎を作り直して帰るから」と言つて田の前のSを確認しながらキーボードを打つていく。

そして突如キー ボートを打つのを止めて「シラユキ先にオープの街に入つても良いぞ?」と聞いてみたが「いえいえ、大丈夫ですよ。待つてますから」と返ってきたので

「直ぐ済ませる」と言つて再びSの方に集中した。

（10時間後）

「よっしゃ、完成だ」と言つて背伸びをした。「どんな感じに仕上げたの?」とエリカが聞いてきた。

「新しい量子プルーチンを構築して、シナブス融合の代謝速度を40%向上、更に一般的なナチュラルの神経接続に適合するようにイオンポンプの分子構造を書き換えといた。まあ言うより遣つた方が早い」と言つて席を離れて帰ろうとしたが

「やっぱりモルゲンレーテで働かないの？」と再びたずねてきた。「拒否する、次もう一度言つたら今度はお前等のモルゲンレーテを潰す」と言つといた

「じゃあ墓参りにでも会いに行くの?」「いえ、会いには、行きませんよ。もう悲しめないんですから。それに俺はあんた等はどんな事が有つても絶対に認めませんよ」と言つてモルゲンレーテを去つていった

→エリカSIDE

「私とした事が最悪ね」と呟いてしまった

そう彼の両親はモルゲンレーテで働いていた。

でも彼は仕事だからしじうがないと何時も我慢していた。

でもMS開発時に死んでしまった。

そう原因は病死 皆ライトニング家の両親には期待していた。期待しそぎて仕事を押し付けた人も多く居た

そして働きすぎで病に掛かり病死していった。

当然皆泣いた、でも私は恐ろしかった皆泣いてる中シユウ君だけこつちを殺すような目付きで睨みつけていた事を思い出す

「絶対に復讐してやる」そういう目付きだった覚えがある。今は過去の事を悔やみながらも立ち直つてゐるのか

でも「私達に対する恨みは変わらないんでしょうね」そう呟いた
～SIDE END～

「ジャングル艦」

「クソッ！苛々するな、此処の連中は俺を利用して、また親父とお袋の二つの舞にするのかよ！」とやり場の無い怒りを叫んだ

「シユウさん苛立たないで下さい。落ち着いて」と言つてシラコキが落ち着かせてくる

「怨みたくても怨めないんだ！親父とお袋の育つた地を壊したくな
いつて気持ちも混ぜ合わさつてこの怒りを何処にぶつければいいか。
・・判らないんだ！」と泣き崩れ始めた

「シユウさん、大丈夫です。大丈夫ですから…私が着いていますか
ら」と言つて抱き寄せてくれた

そして思いつ切り泣いた。慰めてくれる人が今まで居なかつたから
…。（ようやく安心できる人が傍に居てくれる）とシユウは思った。

そして泣いた事を恥かしがりながらもシラコキには感謝したが「シ
ュウさんの泣き顔というレアな物が見れたので役得です」と笑つて
いた。正直「嫌がらせですか？」と聞きたくなつたが彼女なりの「冗
談だろ」

「ふあーしつかし良く泣いたな」と昨日の事を思い出していた。
しかしシラコキは昨日の事を気にしなかつた様に「おはようござ
りますシユウさん」と普通に挨拶してきた。

「ああお早う、んじゃ今日はオープ市内回りつか」と言つてみた「はいっ楽しみましょうね」そして一人でオープ市内に出かけていった

～3時間後～

「大体楽しんだな」「ええ、そうですね。久々です」こんな日々」と喋つていたら

だが急に街が騒がしく成つて来た「何でこんなに街が騒がしいんだ」「オイッあんた等もシェルターに逃げよ(ハゼー)」と市民が言つてきた
「何で皆さん逃げ回つてるんですか?」とシラユキが聞いていた「連合の船が来ているんだよ!」と言いながら避難していた

「シユウさん連合の船といつたら・・・」「ああ間違いなくアーチェンジエルだな。災厄を持つてきやがつて!」と言しながら現状を眺めておく

「やれやれ、このままじゃ絡まれるから一旦ジヤンク艦に戻るか」と呟きながら、来た道を戻つた。

「シユウさんこれから如何します?」「そうだな、アーチェンジエルと絡むと良い事が無い、エンジエルの完成を創りつか」と言つといた

～ジヤンク艦 ハンガー～

「さてガンソード一本と盾がコイツの基本装備なんだが如何する」とシラユキに聞いた

「如何するとは?」「んー他にも武器が付けられるんだけどバラン

ス型か格闘型か射撃型の3つがあるんだ」と三種類の説明をした

バランス型 その名の通り射撃と格闘どっちも行えるオールマイティなタイプだ

格闘型 ガンソードに付いてる射撃武器以外全て格闘しか出来ないようにカスタム 機動性と格闘性能を上げる

射撃型 機体の武器が付けれる場所に射撃武器しか着けないで格闘はせずに中・遠距離専用だ レーダーと装甲の機能を上げる
「どれにする?」「ではバランス型をお願いします」と頼んできた
「ああ判った、一応パーザが余れば状況次第で武器の換装が出来る」と他の二つの可能性も有ると教えといた

そして「今のところ俺たちは可能な限りアークエンジェルには関らないつもりで居るからな」と教えといた「今の所ですか?」と不思議に思つたらしい

「ああ今からアラスカ基地に向かうらしいがきっとお前も驚く展開で帰つてくるぞ」と笑いながら教えといた「シユウさんが驚くつて言つと毎回怖い氣がするんですが」と言われ

「気のせいだ」と言つといた。「さととアークエンジェルが出たら俺らも出るからな」と教えといた「何をするんですか?」と任務を聞いて「ようとして

「人命救助」とだけ答えといた。シラコキが不思議そうな顔をしていたが（絶対にトール君とニコル君は救つてみせる…）と固い意志を持つていたシユウだった。

そしてエンジニアルを完成させシユウは「少し出かけてくるわ」と言つてジャンク艦を後にした。

（墓地）

「ただいま、親父 お袋俺帰つてきたよ」と田の前の前の2つの墓にそ
う呟いた

「結局あんた達は何一つ言わずに俺を置いていつたんだよな、でも
さ俺一人を怨んじゃいないよ」

「だつて俺はあんた達の遺言で「怨まないであげてね」って言われ
たけどやっぱりモルゲンレー^テの連中だけは、許せなかつた」

「その後は死を認められなくて宇田に上がつちまつたよ、でもあん
た達の血をやっぱり引き継いでるのかな？電子系工業系得意なんだ
よね。でも今更こんなこと言つても何も起きないや」と言つて持つ
てきた花束を静かに置いた

「そつそつ俺信用できる人を見つければよ、今度来る時は連れてく
るよ」と言つてその場を離れようとしたが…

「何でアンタが此處に居るんだよ！」と目の前の一人に言い放つた。

そつエリカ・シモンズとウズミ・ナラ・アスハの二人だ

「すまなかつた」と一言だけ言つてきた

「ハツ！ 独りに成つた俺に対して情けか？ ふざけるな！ あんた等結
果が出ればその間の工程はどうでも良いみたいな考えには苛立ちを

「違ひー・違ひのー」とヒリカが言つてきたが

「違う? 何が違うんだ? 結果的には俺は両親を殺されたのには違いない、今はM-1は完成すらされたが元の図は両親が書いた。そして今までの努力で死んでいつて悲しむ人は居ないでしようつてか? もう懲り懲りしてんだよ。そして昨日は俺をモルゲンレー テに誘つた、俺を両親みたいに利用するだけ利用して殺す気なのか? 答えろよウズミ・ナラ・アスハ!」と塞ぎ切れない怒りが爆発した。

「 「……」

「やつぱりあんた等は何も答えられないんだな、正直言つてガツカリだよ。この国の命運が尽きるのも速いな」と言い放つてジャンク艦へと戻つていった

（帰路 道中）

「居るんだろうシラコキ?」と細い道でボソリとつぶやいた。

「ええ、判りましたか?」と聞いてきたので「ああ、足音が聞こえたしな」と言つた

「他人に対して怒りをぶつける俺に幻滅したかい?」と聞いた

「いえ、誰だつて怒りたい時だつて有りますよ、でも幾らなんでも悲しすぎますよ。シユウさんだけ残されて独りぼっちに成り続けるなんて」と泣き出した

「大丈夫、大丈夫なんだ。俺は確かに大変だったかも知れない、で

もシラコキと会つて言つ最高の幸せが来たんだ。充分満足だ」と
言つてシラコキを抱きしめながら笑つた

（全く女神様のくれる幸せって充分良い物だな）と思つた

「どうですか？困った時は私にも相談してくださいよ？信頼できる
人が出来たつてさつきお墓の前で言つてたじゃないですか。」と泣
き止んで笑つていた

「判つた、ちゃんと相談するわ。今日は泣かしちまったから何か一
つするぞ」

「やつですかじやあ罰としてテガートを奪つてやること」と言つてきた

「ああ良いぞ、好きなだけ食つて良いからな」と言つたが後にこの
言葉を言つたショウは真面目に悔やんだ

「女性はテガートになると幾らでも入るんだな…。」と言つて軽く
なつた財布を眺めてしまつた。

PHASE 17（後書き）

抹茶「はい意外な過去お疲れ様でした」

シユウ「ああ、しかしモルゲンレーテの連中にはウンザリ来るな
抹茶「さて取り敢えずシユウの怒りの対象は何処まで入るんですか
？」

シユウ「ん？まずモルゲンレーテの連中とウズミだけ許せないな」

抹茶「ではオーブの街は好きなのですね？」

シユウ「ああ仮にも俺と両親の育つた地だ怨める筈が無い」

抹茶「そうですか、復讐が全体まで言つたらシン君みたいでパクリ
じやんつて感じがするしね」

シユウ「それ次の作品のキャラなんだがまあ良いか」

抹茶「小さい事を気にしないで下さい、さて今回もじ感想を下さつ
た、みつきさん有難う御座います」

シユウ「ありがたいな、最近主は一応書いてはいるんだが「ネタを
ください！」って叫び出すほど重傷なんだ」

抹茶「酷いですね、事実ですけどそんな事言わないで下さい」

シユウ「良いじゃねえか」「うこう主の生存報告しないとマズイし」

抹茶「ほほほ毎日こ近い位投稿してるので生存報告いらないですよ」

ショウ「わつか、んじゅ後書きを閉めるか

ショウ・抹茶「さてショウ（俺）は生き残れるのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン書いて下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～SODEで何か有りましたら書つて下さー

PHASE 1-8 (前書き)

抹茶「さて今回は1-8と1-9同時投稿します」

シユウ「ほう、何でそつしたんだ?」

抹茶「いや、今回は読者をお待たせしたのも有るナゾ、今回はオーブ後の戦いに成るので、歯切れ良くする為に×ナンバー戦は終了させたいなと思つて」

シユウ「なるほど、んじゃ今回はネタが無いからそのまま本編だな」

抹茶・シユウ「では本編をお楽しみください」

「そろそろか」とシユウは呟やいた

そしてアーチエンジェルが出航された。

「取り合えずだ、オープでMSなんか出したら後が面倒だから、俺らもジヤンク艦で戦場近くまで行くか」と言つてオートパイロットを使用した

「シユウさんでも着いていつたばれるのでは?」とシラコキに言われたが

「ばれても構わないし、艦から目視出来ない程度まで離れるだけ。それに戦場に行くなら速めに到着したいしな」と言つとてオートパイロットの設定を終えた

「さて俺らも準備をするか」「了解しました」と言つて一人でハンガーへと向かった

「隊長今回はどうなるんですか?」と作戦内容を聞いてきた

「ん? そういうえば説明してなかつたな、まず一つの機体を見て欲しい」と言つて一枚の機体が書かれてる紙をシラコキに渡した

「まず黒いMSはブリッツだ、この機体はソードストライクによって破壊されるんだが何か救う手立てがあるかな?」と案を聞いてみた。

「こ」の前作ったフェイク弾をプリツツに何発か食らわせて体勢を崩す事により当る所が悪い所にしないのが重要だと思いますが」と答えてきた

「だよなあ、結局それしか思いつかないんだよな…。もう一つの戦闘機だが、これは戦闘が初めての初心者が乗つててイージスの盾が投げられて破壊されるんだ」

「これは盾を何かで行く方向を変更させないと死んでしまいますねやつぱり考える事は似てるらしい様だ。

「うーん、でも都合の良い武器つて言つても前に強行型ジンから手に入ったスナイパーライフルがあるんだが、俺は生憎射撃が得意じゃないんだ。」と言い切った

「では私のエンジニアで機体を隠しながら盾を微調整させましょうか?」と聞いてきたので

「ああ、頼む。こつちはやられた一人を直ぐに回収する」と言つたが

「隊長流石に戦場で傷を負つてる可能性もあるので今回キマイラに緊急医療セットを付けて行きませんか?」と聞いてきたので

「ああ判つた、一応エンジニアにも医薬品を積んでおいてくれ」と言つて機体の準備に移つた

（機体武器）

キマイラ

グレネードランチャー

腰の左ホルダー 各グレネードの弾丸

腰の右ホルダー 76mm重突撃銃 × 2

腰 緊急医療セット

右足 二連装ハンドガン 右腕 ビームソードシールド 左腕 収

納型射出式アーマーシュナイダー

エンジェル

左右腰 ガンソード × 2

ビームサーベル × 1 右手スナイパーライフル × 1 左腕 耐ビーム・コートティング・シールド

緊急医療キット

「んじゃ行くぞシラユキ準備良いか?」と聞いて「はいっ! 何時でも行けます」と行ったので「じゃあ先に出るから少し後から来てくれ」と言つてキマイラで戦闘区域に飛び出して行つた

作戦

・ニコル・アマルフフイとトール・ケーニヒの救出

ストライクがブリッジに対し斬り付けを行う際にフェイク弾を用いブリッジの体勢を崩させコックピット以外の場所を斬りつけさせる。トール・ケーニヒの場合潜伏させたエンジェルの狙撃によって盾の方向をずらしパイロットを生存させる爆破しそうになつた場合コックピットの部分を切り取る

「取り敢えず一度中立と言う立場で戦場に立つべきだな」と言いながら中立軍のマークに変更した。

→キラ・ヤマトSHIDE→

僕達は出てきたXシリーズ4機と戦闘を行つていた。

ストライクのランチャ―ではXナンバーには当らないようだ。取り敢えずアグニのEN供給ケーブルを抜いて少佐のスカイグラスパーからエールストライクパックを受け取つて戦うしかないだろう

だが不意にレーダーが他の機体を捉えたようだ「この区域に何かが近づいてくる?」とキラは近づいた機体を確認した。どうやら中立軍のマークを発してゐる様だが機体は…キマイラ!?

「何故キマイラが此処に?だが中立軍と言う事は此処に攻撃を仕掛けてくれる事は無いのかな?」と呴きながらエールストライクのパックをつけて再び戦闘を行つた。

↓SIDE END↓

「おーおーやつてるねえ」とボソリと呴いた。「どうやらテュエルとバスターはグウルが破壊されて海に落ちたようだな」と冷静に状況判断を開始した。

「どうやら残つたのはイージスとブリッツだけ、後は小島に入れば原作通りだな」と言ってグレネードランチャ―に弾を込め始めた。今回使うのはフェイク弾そして徹甲留弾がメインだ

そして戦場を眺めていたら一機は巧みに連携を取つてゐた。イージスが射撃で牽制しブリッツで格闘戦を仕掛ける。だがストライクは咄嗟にシールドで攻撃を防いだ。そしてブリッツがグレイプニールを放つたがストライクは咄嗟に判断しサーベルで切り捨てた。間髪入れずにブリッツが右手のトリケロスを構えて放とうとするが、スカイグラスパーが突つ込みブリッツの右腕にミサイルを撃ち放つた。そしてブリッツの方はスカイグラスパーに気を取られ、ストライクが一気に敵の懷に入り込みサーベルで右腕を斬りおとした。

「戦場で一点にだけ集中しすぎると、ああなるから怖いんだよな」と全体に注意を回してないブリッツに対してもう咳いた

そしてそのままブリッツをグウルから蹴落とした。だがパイロットが上手いのか海面すれすれで体勢を立て直した。

しかし「ブリッツって右腕落されると武装が一気に減るんだよなあ。これじゃ一旦撤退した方が良いんだが原作じゃそのままストライクに攻撃しかけて大破だから辛いんだよな」と言い放つた

そしてブリッツから田を離しイージスとストライクに田を向けるとグウルが撃ち落されて小さな島に着地していた。このまま撤退した方が良いのかも知れない、だがイージスはジャンプシアーケンジエルに攻撃を仕掛けていた。そしてもう一機のスカイグラスパーがストライクのEコを気にしたのかソードストライカーを射出した。

「おっとやんそろ気をつけないとな」と呟きイージスの背中に回っていた。だが一機はこいつの事を無害と判断したのだろうか、何の反応も示さなかつた。

そしてイージスの方は余りにもアークエンジェルの通過が認められないのか攻撃を繰り返していたが、遂にアークエンジェルからミサイルとバルカンの直撃を受けてしまった。

そして今までイージスが無視していたストライクがイージスに斬りかかるが咄嗟にイージスは後ろに下がり斬られたのはライフルだけで済んでいた。

だがストライクの方が何か不味い事を言つたのかイージスが危険な状況でビームサーベルを抜いて斬りかかつたが全く機体にかする事

すら出来ていなかつた。そして怒り任せに遣つた結果だらうかイージスのPS装甲が落ちた。

「やれやれそろそろか」と言つてブリッツの出現予想地点にグレネードランチャーの銃口を向け始めた。そしてくアスラン下がつて！>とブリッツのパイロットが言つてランサーダートを一本持つて突撃していった。

そしてシユートゲーベルが弧を描いてブリッツに切りかかるうとするが咄嗟に「さて原作ブレイクだ」と言つてシユウはブリッツの背中に3発のフェイスク弾を背中に撃ち込んだ。そしてブリッツは衝撃によつて前に倒れようとすると所をストライクによつて斬られた、しかし切られた場所はコックピットではなくコックピットより少し上の部分を切り裂いて爆破した。

「これで一つ目の仕事は終つた」と呟いた。そして今頃に成つてバスターとデュエルが島に上陸したが後の祭りだ。一応デュエルとバスターがブリッツが遣られたのに気付きストライクに対して攻撃をしようとしたがアークエンジェルによる援護射撃でマトモに近づけなかつた「仲間が殺されたのに近づけられないで仇を討てれないか、辛いものだな」とシユウは言つた。

そして、こちらを一度だけ見たらストライクは退艦命令を受けたのだろうアークエンジェルへと戻り最高速度でアークエンジェルは戦場を後にして。そして残つたXシリーズも追撃が出来ないので撤退していく。きっとブリッツのパイロットの事で頭が一杯でこっちに気が回らんないんだろう。そして戦場にはブリッツの残骸とキマイラそしてこちらに近づくエンジェルしか残されなかつた。

アスランのイージスを庇つて僕のブリッツは大破してしまった。

僕は死ぬんだろうか？体中が痛くてもう何も出来ない。だが不意に何かが着地する音が聞こえた。何だろうか？

そして足音が聞こえてきた。誰かが機体に近づいてくる。そして機体のコックピットを覗いてきた様だ

「オイツ！少年生きてるか？今すぐ助けるから待つてろよ」と男性の声が聞こえてきた。痛みに耐えながらも声が聞こえた方に顔を向け目を少しだけ開いた。黒髪の男性が僕を救う為に必死にコックピットをこじ開けて僕を救出してくれる。「直ぐに応急処置するからそれまで頼むから死なないでくれよ」と咳き声が聞こえてきた

この人は戦争とは関係ない優しい人なのかな？と思い意識を失った。

↓ SIDE END ↓

「なつ、オイ大丈夫か！」と聞いたが何も帰つてこないが苦しそうな呼吸だけが聞こえてくる。「どうやら気が失つたようだが安全じや無いんだろうな」と咳き降ろしていた。医療キットコンテナへと運び入れた。

「シユウさん直ぐ此処に乗せてください」と言つてベットに乗せて生命維持装置と必要最低限の傷に対する治療を行い、一度機体と医療コンテナをジャンク艦に戻し医務室へと運び入れ再びオープへと向かった。

「頼むから生きててくれよ。死んじまつたら残されたお前の友人が悲しむだろうが」と言つて少年の容態を見続けながらオープの病院へと搬送した。

「どちら死に掛けらしいが緊急措置が役立つたのか一命は取り留めたそうだ。

「良かったですねショウカセ」と安心してひづて言つてました。

「ああ、だがもう一つ仕事がある」と言つて再びジャンク艦に搭乗し、最高速度でアーチエンジエルの墜る場所へと向かった。

次はトール・ケーニヒを救う為に

PHASE18（後書き）

PHASE19へ続行

PHASE 19 (繪書)

では本編をお楽しみください

「シュウさん、幾らジャンク艦の最高速度を出しても、間に合わないかもしないです！」と考えてきた事を語ってきた

「うん、確かにこのまま艦の速度で行つても救いたい人物が救えないと知れないな」

「はい、此処は私達のMSを出しでもう一気に先行して予定地点に艦を待機させる他ありません」と話してきた

「うん、シラユキの言つてる事が正しいな。じゃあキマイラとエンジェルは先程の武装のまま戦闘しに行こう」と言つといた

「はい、直ぐに行きましょう」と言つて一人は自分の専用機に乗り込んだ。

（機体武器（再度確認用））

キマイラ

グレネードランチャー

腰の左ホルダー 各グレネードの弾丸

腰の右ホルダー 76mm重突撃銃×2

腰 緊急医療セット

右足 一連装ハンドガン 右腕 ビームソードシールド 左腕 収納型射出式アーマーシュナイダー

エンジェル

左右腰 ガンソード×2

ビームサーベル×1 右手スナイパーライフル×1 左腕 耐ビー
ム・コートイング・シールド

「行くぞ、シラユキ 今回は、戦闘機のパイロットだから当たり所が悪かつたらフェイク弾ですらダメージになるからな」と言い先にキマイラが飛んで言つた

「はい、判りました。予定では群島の見付かり辛い場所にて狙撃ですかね」と作戦内容を聞いてきた

「ああ、俺は状況によって特殊弾を使い分けて撃ち込んでいくから、シラユキはフェイク弾でも何でも使って良いから盾が戦闘機のコックピットに当らないよう頑張ってくれ」とシラユキの能力を見て頼み込んだ

「了解しました。その任務果たして見せます!」と言つてエンジールが身を隠す為に先行して行つた

「あれだけやる気があれば成功するな。さて俺も行くか」と言つて進行速度を上げていつた

そしてシュウは時間が掛かつたが戦場に着いたがどうやらアーケュンジョルが不利な状況だ。

「親しい友人が殺されたたのが原動力か。確かに怒りが原動力の時は強いがその分足元が疎かに成るな」と上空から戦場を眺めていた

どうやら今はストライクがまたグゥルに乗つたデュエルを海中に落としたようだ。だが唯で落されるわけにも行かないのだろうデュエルがライフルを連射した。そして撃つた弾はストライクのライフルに当たり咄嗟にライフルを離し爆散してしまつた。そして爆破を防ぐ

為にシールドで防いだがその隙をイージスが逃すわけも無く盾をかざして体当りしストライクを吹つ飛ばした。

そして先程からバスターがアークエンジェルに攻撃を仕掛け続け遂にはその銃口は艦橋を狙つて撃とうとしていたが、スカイグラスパーが攻撃を仕掛けグウルを破壊した。咄嗟にバスターは飛び上がりスカイグラスパーに銃口を向けた。そして両者は撃ち合いすれ違うバスターは二丁繋げた対装甲散弾砲をスカイグラスパーはアグニを撃つた。そしてバスターは右腕を破壊されスカイグラスパーは左翼に散弾を受けて火を出したが大破する事無く波打ち際に着水した。

そしてアークエンジェルは主砲をバスターに向けるが、コックピットのハッチを開けて投降していた。「動けないんだから、それが正しい判断だな」と言い切ったシユウだった

そしてシユウはイージスとストライクの戦闘に再び目を向けた。二機はなおも戦闘を続けていた、サーベルで斬り合い互いにぶつかり合つては、再び離れそしてまた打ちかかる。

「しかし完璧にイージスのパイロットは我を忘れてるな」と言つといた

そう怒つて戦いに勝てる何て甘い事は存在しない。故にイージスが今の状態で幾ら打ち合つてもストライクにダメージを与えられない。サーベルで斬りかかっても右手を素手ではねのけられ、シールドで突き飛ばされる。正直言つて技量の差が違すぎる

「差が大きいのは当然だな、今までアークエンジェルの人達は厳しい戦いを何度も切り抜けて来たんだ。幾らいージスのパイロットにも戦闘経験が幾らか有ろうが、お互に遭り合つてきた戦場を見た

「うう、ちがより強くなるかイヤでも判る」とシユウは怒り心頭して、イージスのパイロットに對してそう言い放った。

そしてストライクがサーベルで斬りかかって行くがイージスはそれを見切り後方に下がり飛び上がった

そのまま空中で変形しスキュラを放つ、ストライクは急な攻撃に虛を突かれギリギリの所でスキュラを避けたが大きく体勢を崩した。

そしてその隙を見逃す訳が無く攻撃を仕掛けようとしたが、もう一機のスカイグラスパーが飛んできた

「慢心つてのは怖いな…時に自分の命すら危険に晒すんだから」と咳き、シラコキに何時でも撃てる様にコールを掛けておき自分はグレネードランチャーを構えた。

そしてイージスは突っ込んで来たスカイグラスパーに対しシールドを投げた。まるで邪魔をして来た虫を追い払うように。

だがシユウは投げた瞬間に咄嗟にフェイスク弾をスカイグラスパーの支障の無い場所に打ち込み体勢を大きく崩した後、他の孤島に潜伏していた、エンジェルがスナイパー・ライフルでシールドを撃ちシールドの向きを多少変更した。

そしてシールドはコックピット以外の場所をえぐり爆発を起こした。だがコックピットは森に突っ込みパイロットは重傷を負っていた。だが、そのコックピットが無事な事はキラには爆発が邪魔して見えていなかつた。

「ふう、何とか生き残つてくれたが、雨は体力を奪うからな、早め

に戦闘が終つて欲しいものだ」と呟いた

そして再びシユウは一機に目を向けたが、既に人の戦いでは無かつた、確実な殺意しかなく機体がボロボロでも構わずに戦闘を続けていた。まるでどしどしが死ぬまで終らない獣の戦いのようだ。

そして遂にイージスがMA形態に変形してストライクに組み付きスキュラを放とうとしていたがEN切れを起こしたのかスキュラは放たれずPS装甲が落ちた。

だが暫く見守つているとイージスから爆発が起き一機は吹き飛んだ。
「やはり全て原作どおりか…」と何も出来ない無力感を改めて実感したシユウだった。

だが何時までも物思いに耽つてはマズイだろう、だが急に索敵センサーにMSの反応が起こつた。

「敵MS…ティンが3機か、しょうがないシラコキに任せて俺は負傷したスカイグラスパーのパイロットを救出だな。アスランとキラを助けて原作が可笑しくなつたらマズイし」と黙つてシラコキに通信をした。

「シユウさんどうします?」と先程の「ティン3機の対処を聞いているのだらう

「今回はエンジールの性能をしつかり確認しておきたいなら遣り合つても良いぞ、ガンソードは近・中距離武器だから問題無いだろ?」と返しといた

「判りました。私が対処しますので隊長は、パイロットさんを救出してくださいね」と言ってエンジェルはティンの居る方向に飛んでいった。

～シラユキ SIDE～

「さてエンジェル私達も頑張ろつか」と言って機体をティンの前まで飛んで行つた。

さすがに田の前の3機は中立軍で何処でも見たこと無いMSを見て焦っていたようだが、一人が馬鹿にしたのかな?こっちに突っ込んで来た。

「シユウさんが作ってくれたMSを馬鹿にする事は私が許しません!」と言つて腰に掛けてたガンソードを一本抜き始めた。

だが射撃メインのティンは76mm突撃銃を撃ち放つてくるが、エンジニアの機動性の前では掠りもしなかつた。そして一気に距離を詰めガンソードで「ツクピットを切り裂いた。

だが実体剣だから其処まで通用しないと思うのは甘い事なのだ。剣の部分が急に超伝導し始めた。そう剣が細かく振動しているからそこら辺の装甲なら両断できるのだ。

そして「ティンは胴体と足が別れ爆発した。「シユウさん結構えげつない物作りますね」と使つたシラユキですら軽く苦笑いしていた。

そして二機は咄嗟に危険性を理解したのか二手に別れエンジェルに攻撃し始めた。そしてシラユキは上に上昇し二本目のガンソードを抜き剣に付属してリボルバー式の銃で攻撃をした。

一機は易々と避けるがもう一機は避ける必要性すら無かつたのか腕をクロスさせ防御に入つたが腕を貫き頭部を破壊した。そして目の前が見えないディンに止めとばかりにガンソードで切り裂いた。

「避けないと駄目ですよ。全て貫通弾ですからね」と落ちていくディンに対し眩きその後爆発が起きた。

もう一機は勝てないと判断したのか逃げ出しだが、「遅いです！」と言つてディンの背中の羽を斬りおとした。そしてディンは空を飛ぶ事が出来ずに地面へと墜落していく

だが羽を落した位では沈まないのは当然だらう、ディンが再び76mm突撃銃を撃ち放つてくるが「そんな攻撃当たりません!」と言つて何事も無かつたように簡単に避けた。

そしてエンジェルは落ちていぐディンが地面に着地しかがんだ所を狙い縦に真つ一つに切り裂いた。

「しかし、はじめて使う武装・機体なのにまるで手足のように動きますね…。ですがシユウさんです、予想以上のMSを作り出すんですから。此れだったらリミッター解除を使う必要性もありませんね。成るべくななら使いたくありませんけど」と言つてキマイラの居る地点に戻つた。

～SIDE END～

何とか必要最低限の治療を済ました、そして直ぐにエンジェルが帰つてきたようだ。

「どうだつたシラコキ? エンジェルを使った初の戦闘は」と聞いてみた

「結構乗りやすいですし、武装もガンソードが有ればそこそこ戦えますね」と返してきた

「ああ、そりやガンソードはソイツの固定武装だしな。それに超伝導の剣は中々に驚き物だったろ?」

「ええ確かに驚きましたよ、しかもエゲツナイ位強かつたですしごと言われたので

「そりや、エゲツナイ強さにしたかつたから色々な事考えてあの結果だ」と笑つて話していたら、何かが近づいてきた。

「シユウさん如何します?」と聞いてきたので「攻撃はするなよ? あれはオープから来た救出艇だな」と言つたら

「そしたら、今回助けた人預けて私達はこっちの任務を続けましょうか」と言われたので

「ああ、次の戦闘場所はアラスカだが今は、この機体を確認させるわけにもいかないジャンク艦の中に隠しこう」と言つてハンガーに倒した状態で入れ、ジャンク品を上にかぶせた。

そして隠しきれた時に近くに要約救出艇が来た。

「お前等何故此処に?それにシユウとか言う奴お前ザフト軍じゃ? とカガリ嬢が聞いてきた

「ん? 移動中だつたんだが戦闘してたんだな、それにザフト軍は面倒だから抜けたよ」と敢えてわざとらしく言った。

「嘘をつくな！さつきまで戦闘していたのに近くに居たお前等が気付かないはずが無いだろ？！」と怒ったので

「ああ、嘘だけど何か？情報は常に本当の事が入ると思つたら大間違いだよ？」と言ひ

「なつ！お前は私を舐めているのか！」と言つて来だが

「あなたの方の仕事はお喋りするんじゃなくて人命救助でしょ、はやくしたら？！」とシラユキが言つていた

「なつ！お前に指図されなくともこっちもやろうと思つてたんだ！」と言つてMSに近づいていった。

そう言いながらストライクに近づいて行つたが人が居ない事に気付いたのだと、こっちに再び戻ってきた。

「おい、お前等キラを知らないか？」と聞いてきた

「ん、キラかイヤ見ては居ないぞ？」とシユウは言い返したが、当然嘘だ。シユウは有る程度トルの治療をし終えた後、次はキラの治療に移りマルキオ導師に預けた。彼はキラ・ヤマトの存在を知つていたので引き受けてくれた、後でフリーダムでも受け取つて戻つてくるだろう。）とシユウは思つていた

「ホントか？嘘じゃないだろ？！」と言つてきたが「嘘をついて利益を得れるんなら幾らでも遣つてるわ。俺が助けたのは別の人間ソイツは前救出した人と一緒の病室にしてくれ」

と言つてジャンク艦の医務室に何人かオープ兵を入れてトール君を連れて行つた。「ご協力感謝する」とキサカが言つてきたが

「救える命を救つただけだあんた達が感謝する理由が何処にも無い」と言い返した。「しかし何故、前回助けた人と同じ部屋にするんだ？」とカガリが聞いてきた

「んー何か救つた二人が何か気が合ひそうだつたからかな?」と言つておいた。「なんだそれは?まあ良い、そつちが助けた人なんだ要望位は聞くぞ」と言つて二人一緒の病室を約束してくれた。

「そういえばお前達はこれから如何するんだ?」と最後にカガリが聞いてきた。「ん? ブラリブラリと地球の旅を楽しむさ」と言つて別れた。

そして救出艇は先程助けたイージスのパイロットヒートール君を乗せて去つていった。

「さて俺等も準備するか」と言つた「ええアラスカで戦うんですねかかなりの激戦を考えたほうが良いですね」と言つてきたので

「ああ武器コンテナを用意する。あとアラスカには恐ろしいものが眠つてゐるから移動中に説明しておく」と言つて一人はジャンク艦に乗りアラスカを目指した。

アークエンジェルそしてキラが乗つたフリーダムと会う為に…。

PHASE 19（後書き）

シユウ「今日は此処までか

抹茶「ああ、そうだな」

シユウ「次はアラスカ戦だな」

抹茶「超激戦なんで、戦闘描写も大変ですよ」

シユウ「手は抜くなよっ。」

抹茶「ええ、でもフリーダム対キマイラ・ハンジュルはしないと思
います」

シユウ「しない」と思つて言葉はやる可能性も有ると嘗つ意味でも
居るんだが?」

抹茶「えりでしょつ、希望があれば少しだけ出しますよ?」

シユウ「フリーダムとやつあつと大変そうだが楽しみだ」

抹茶「さて今回みみみさんとRGU・80れんじ感想有難つ御座い
ます」

シユウ「ありがたいな」

抹茶「ええ、今回はPHASE 17の悪い所を多く言われたので向
上心が出てきます」

ショウ「全く慢心なんかするなよ？」

抹茶「はい、気を付けます。では閉めましょうか」

抹茶・ショウ「さてショウ（俺）は生き残れるのか？次回お楽しみに！」

シユウ「今日は時間が掛かつたな？」

抹茶「ええ、少しネタが足りなくて大変でしたね」

シユウ「やうなのが、一瞬作者が寝落ちが多いのかと思つていだが」

抹茶「寝落ちはしません。と言つたか毎日書いてると少しづつネタの消費が激しいんですよ」

シユウ「やうなのか、まあ今回は少し多めに書いたんだろう？」

抹茶「ええ何時もは2000～4000文字なんですが今回は7000文字位書きました」

シユウ「頑張ったな、まあ本編も気に成つて來たから此処で閉めるか」

抹茶・シユウ「それでは本編を楽しんでくださいー！」

（シラユキ SIDE）

「幾らアラスカで調べたい事が有るからって、連合の兵に紛れ込んでもしたい事ですか！！」

とシラユキが一人ジャンク艦で叫んでいた

「はあー何で私あんな事言つたんだろ」とうなだれてしまつた

（回想）

「うーん、アラスカとザフトの情報が欲しいなあ」とポツリとシラユキが言つたので

「そうですねえ、情報が判らないと安心して戦闘なんて出来ませんからね」と情報の無さに困つていた

「一機で作戦始まつてから突入しても良いけど、それやつても自分の位置が判らなきゃ無意味だし」

と情報の手に入れ方を考えていた

「いつのこと、シユウさんがアラスカに連合軍志願の兵つて事で行つたら良いんじゃないですか？」と冗談で言つてみたが

「あつ、その手があつたか」と言つて真面目に受け取り始めた

「えつ！？冗談で言つたのに採用するんですか！？」と冗談で言つた事を真面目に捉えてたので焦つてしまつた

「冗談でも使える案は採用するよ?」とシュウは言つて、これはもう本気で遣りそうだ

「言つたんじゃなかつた…」と冗談で言つた事を眞面目に悔やんだシリコキだった

「んじゅ、準備したら、とつとと出るわ」と言つて準備をして行く予定をしているが

「ちょっ、キマイラ如何するんですかー?」とキマイラを如何するのか聞いてみた

「あつ、そうだね。んじゅアラスカのレーダーがキマイラに干渉できぬいプログラムとMSを隠せるマントでも着けて森に隠すわ」と言つてキマイラに乗り込みプログラムの作成を開始していた

「ああ、もう好きにしてください」と軽く呆れ返つてしまつたシラユキだった

（回想終了）

全くシユウさんアラスカの内容が知りたいなら、此処からでも調べそつなのに現地まで行かないと駄目なんでしょうか?

あの人の唐突な行動は砂漠の虎と比べたら話は一応聞いてくれるけど、自由奔放さは全く一緒です…。

「まつたく、もう少し考えて動いて欲しいのです」と呟きながらエンジエルの準備を始めた

（SIDE END）

俺は今アラスカ基地で採用試験を受けていたが、余りの能力の高さに即採用されてしまった

実際に今までの事を考えれば当然なことかな?と思えてしまうほどだ

「しつかしキミも大変な時期に入つたねえ」と土官の人人が言つてくれる「いえ、大変な時期だからこそ遣り甲斐も有りますよ」と思つてもない事を口にした

「ははっ、そうかい。今人事部の人人に問い合わせてキミの配属先聞いてるから待つてくれよ?」

「了解しました」と答えたが（情報さえ手に入れば此処からはおさらばだ）と思つシユウだった

「うん、キミの配属先はアークエンジエルのメカニック兼パイロットあと暇があれば電子系だね。よりもよつて君も大変なところに配属されたねえ」と同情の言葉を言つてきたが

「いえ、ザフトの領地を抜けて此処まで来れたアークエンジエルには尊敬してたので嬉しいですよ」と適当に答えておいたシユウだった

「そうかい、まあ今はアークエンジエルの中には搭乗出来ない事に成つているんだ」と情報を教えてくれた

「入れない?何故ですか」と疑問に成つたので聞いてみたら

「理由は判らないが、司令部のザザーランド大佐の命令なんだよ」

と教えてくれた

「はあ、では暫くはお暇を貰えるのですか?」と聞いてみたが

「取り敢えずキミは暇なんだから書類整理をしてくれ、邪魔に成らないよう一人部屋の方が良いだろ?」と聞かれたので

「ええ、やつしてくれた方が作業がはかどります」

と答えた

「そうか、部屋は幾つか空いてるから案内しよう」と語りて土官に着いて行つた

「此處だ、好きに使なさい」と語りて部屋を開けてくれた

「どうあえず、後で書類は持つてくるけど、此れは鍵だ。無くさないでくれよ?」と鍵を渡され去つていった

そして部屋のものを再度確認した。日に付いたのは机とY字型ベッドと一般兵用の端末が置かれていた

「これは、俺の予想以上の速さで目的を済ませそうだな」と語りて端末から「コードを伸ばしロープに繋げた

「さて今回は、目的はアラスカ基地に隠されてる物と地図だな」と呟きながらハツ キングを開始した

だが、さすがに最高機密のようで幾重にもロックが掛かっている

「さすが最高レベルの機密だ、そう簡単には覗けさせてはくれない

か…だが、この程度のレベルじゃ俺は止められない」と言ってハッキングを完了させた

「地図はダウンロードするから良いとして、アラスカに隠されてる物を覗こうか」と言つて更にフォルダを開いた。

「やはり狙いはサイクロプスによるザフトの戦力の大幅的な激減が目的か」と言つて苛々し始めた

「やはり一般兵はコマ扱いかよ…こんなんじゃ何時まで経つても戦争は終らないな」と呴きながら他のデータを開いた

「次はザフトだが、やはりパナマ侵攻の噂は有ったが、ガセか。まあ本拠地を潰した方が乐つて考える奴の方が多いんだろうな」と言いいドンドン情報を手に入れたショウだった。

「さて戦争が始まるのは明日から数えて三日後…夜中にキマイラに戻つてジャンク艦に撤退だな」と言つて、今後も使えそうな一般兵用端末を持ち夜を待つた。

（深夜）

「よし寝静まつたな」と呴きながら入り口を田指した。

カツコカツコツ 急に足音が聞こえて来た「ヤバイ警備兵か」と言つて柱の陰に隠れやり過ごした

「ふう危なかった。あと少しだから頑張りつ」と呴きながらキマイラまで難なく辿り着いた

「よし、コイツに乗れば後はこいつのもんだ!」と言つてMSを起

動させた。

だが気付けないだろ？未だにキマイラに干渉できないプログラムが付いているので確認するには目視しかなかつたが、キマイラ見つけれる機体等無いに等しいだらつ

「ジヤンク艦ハンガー」

「全くこんなに速く戻つて来られるのは計算外だつたよ」とキマイラに降りながらそう呟いてしまつた。

「まあまあ、それでも速く無事に戻れた事と色々なデータを入手出来たことを喜びましょうよ」

「ああ、そうだな。とりあえずアラスカが攻められるのは明日から三日後だ、準備を済まして待機だ」と言つて機体の武装を確認し始めた。

「ショウジュルの方はショウさんがいな内に済ませて置きましたので、いつも手伝いますよ」と言つて手伝ってくれた。

「ああ、ありがたい。だけど取り敢えずアラスカ基地の地図とともに一つの資料を読んでみる」と言つて一つの資料を投げ渡した

「ショウさんの探していたのはサイクロプスなんですね、半径10kmって確實にザフト軍に大打撃ですけど残された兵士はコマ扱いですか」とシラコキも兵のコマ扱いに怒りが出ていた

「ああ、しかもアークエンジェルも防衛隊入りだ、ようするに使えない物を厄介払いするには良い所つてわけだ」と返して、武装の取り付けを開始していた。

「よし、これで俺も準備完了だな。一応今は取り敢えずは現状のまま待機だ。戦争が始まつたら一番にアークエンジェルの護衛が最優先その後は周りの敵を確実に落としていく事だ」とシラユキに任務の説明をした

「了解です。最終的にはアークエンジェルの味方に付くんですね」と聞いてきた

「ああ、あの部隊だけ今の連合に疑問を感じている所だ、守つて損は無いだろ。しかもどうせサイクロプスの事を知れば軍から抜けてオーブみたいな中立に着くのは田に見えてる」

そう言ってシユウ達は戦争が始まる三日後まで艦内で大人しく待機していた。

(武装確認)

キマイラ

左手76mm突撃銃 右手90mm対空散弾銃 左右ホルダー グレネードランチャー・各種マガジン
腰100mm6連装ガトリング + 基本装備

エンジェル

左手ビームライフル 右手対ビーム・コーティング・シールド 左右腰ガンソード

（三日後）

遠くから爆撃音が聞こえて来た。

「戦争が始まつたか、人間は争わないと駄目な生き物なのかね？」と悲しそうに呟いた

「仕方ないですよ、今やナチュラルとコーディネーターって言う差別みたいな扱いですからね」

「ああ、だから何時かは、この戦争の元凶を潰して遣りたい物だな。
さて話は御終いだ。出るよ」

「了解」

「シュウ・K・ライトニング キマイラ出るー」「シラコキ・カグ
ヤ エンジール出ますー！」

そう言つて一機は背中の翼を広げて戦場へと飛び出した

「取り敢えずゆっくりでも良いから成るべく被弾せずにアーチエン
ジエルまで行くぞ」と言つて進んでいくが途中でグウルに乗つて
るジン隊がこっちに銃口を向けてくるが

「遅いな」と呴きながら90mm対空散弾銃を構え突撃しコックピ
ットに銃口を押し当て撃ち込んだ、もう一機は突然の行動に驚いた
のかもたついて居たので76mm突撃銃を連射しMSは沈黙した。
もう一機の方を確認したら、エンジエルが一本のガンソードで武装
を斬り落した後もう一本でコックピットを貫いた。

「うーん、ガンソード高威力にしそぎたな」とシラコキから話は聞
いていたが実際に見てみると凄く強いという印象しかなかつた。

しかしやはり此方を遂に敵と認識したのか何機か再びこっちに近寄
つてきたが

「邪魔だー」と叫びながらビームソードシールドで切り裂きエンジ
エルがビームライフルで付近のMSを撃ち落していく

「チツー！つ数が多いと鬱陶しいんだよー」と叫びながらシラコキ

に持つていた銃を投げ渡し「援護してくれガトリングで一掃する」「了解」そして腰のガトリングを抜き撃ち始めた

シュウの狙いはMSを撃ち込むのではなくグウルを撃ち込み始めた、そして「ディンは羽をと言つ感じで空を飛んでる奴を地上に落してエンジェルが先程渡した銃で地上の敵ザウートやバクウの砲撃を止め」という役割分担をし始めた。だが弾が尽きたので腰に再び仕舞いシラコキから銃を返してもらい再びアークエンジェルへと向かつた

「マリュー・ラミアスSIDE

私達はアラスカ基地正面ゲートの防衛をしていた、流石にMSも何も居ないので戦況はこいつのまゝが最悪だ。

だけど任務なのだから仕方ない、此処で朽ち果てるわけには行かないけど生き延びてみせる。だが「艦長2時方向の敵MSが壊滅したよですー」「えっ！嘘でしょ」と返した

しかし嬉しい誤算だつた未だに敵が攻めてくる中敵数が減るといつのはダメージを受ける量も減つてくる、しかし

「更に2時方向からMS二機 十方はデータバンク照合無しももう一機はキマイラです！」とオペレーターの声が飛んでくる「何でこんな時に…」と舌を噛んでしまった

（もし彼等が敵なら私達は一瞬で落されるだろう、あの機体と何度も戦つたが実際に勝てた事は一度も無い、此処でわたし達の命は尽きるのだろうか…。）と思つていたら

「聞こえるか、アークエンジェル？此方キマイラのパイロットだ。直ぐに此処から撤退しろ！」と言つて直ぐ傍まで近寄つたMSを撃

ち落していた。

「え？ 何で撤退を？」と誰かが聞いていた。「あんた等は此処のコマなんだ。今資料を送るから直ぐに撤退しろ」と言ってデータを送られてきた。

そして直後に「アークエンジェル聞こえるか、直ぐに撤退しろ！」「イツは酷い作戦だ」と言ってムウ・ラ・フラガの声が聞こえて来た
「この地下にサイクロプスが仕掛けられてやがる、アラスカが攻められた時にザフトの戦力を吹き飛ばす、連合の人間達を犠牲にしてな、それが上の考えたシナリオだ！」と叫んでいた

「此れで判つただろ？ あんた等は唯のコマとして扱われていたんだよ」と言い放った

(そんな… それじゃあ私達の今までのやつてきたことは何なの?)
とマリューが思っていた時に「こいつのが作戦なの？ 戰争だから？ 私達軍人だからそう言われたたら言われたとおり死ななきやいけないの？」とミリアリアが泣きそうな声で言った。

「どうする？ 助かりたいなら、俺はお前達を援護する」と言って來た。(今は敵だった彼も援護してくれる… なら決める事は)

「ザフト軍を誘い込むのがこの作戦の目的と言つなら、本艦は既にその任務を果たした物と判断します！ - なおこれはアークエンジエル艦長であるマリュー・ラニアスの独断であり乗員は一切この判断に責任はありません！」と言い切った

「あんた等の覚悟見せてもらつたよ、今からそひうの援護を開始す

「…」と言つて通信を切られた

（彼は一体何者なのかしらね？）と思いつつも「本艦はこれより現戦闘海域を離脱します！」そう言ひアーヴェンジュエルを前進させた。この馬鹿げたシナリオから逃げる為に

～SIDE END～

「ふう、覚悟も聞けた事だし少し本氣を出しますかね」と言い始めた「シラコキ悪いがちょっと暴れるわ」と言つて「余り外しそぎないで下れこよっ」と心配された

「もしもの時はお前が俺を止めてくれるんだろう？」と笑いながら田の前の2小隊と向き合つた。「まあ無茶しないでくださいね」と言われ通信を切り

「コミッター解除1分」と言いキマイラの運動性を上げた。そして空を飛んでいたディン2機をショットガンで翼を吹き飛ばしビームソードシールドで切り裂いた。

咄嗟の移動で反応が遅れたが残りのジンとディンがそれぞれ銃を構えてくるが

「その程度の速さだつたら遅いね」と言つてジンの後ろにまわり射出型アーマーシュナイダーをジンの足に括り付けもう一機のジンにぶつけた。

そしてグウルから落された一機はもつれ合いながら海に落ち掛けている中キマイラの肩に装備しているビームキャノンによつて撃ちぬかれ爆散した。

そして残りの一機のジンとディンが連携を取つて攻撃していくが、「

それだつたらオープで見たブリッツとイージスのパイロットの方が上手かつたな、片方が片方の進行方向邪魔して馬鹿か」と言い、ディンの進む方向に狙いを定めアーマーシュナナイダーを射出し左腕に括り付け取り外そうとしていたが「残念、それ中々切れないのでコートティング掛けてるから」と言つて引っ張りビームソードシールドで斬りおとした。

そしてジンが残り一機に減りジンのパイロットも自分が勝てないと判断しアークエンジエルの艦橋に銃口を向けたが…銃は発射されず一筋のビームが銃を爆発させ1機の機体がジンを斬り飛ばす

「ようやく来たかザフトの最新鋭機フリーダムそしてキラ・ヤマト君」と呟いた。

そして何か会話した後に「ザフト・連合両軍に伝えます。アラスカ基地は間もなくサイクロプスを起動させ自爆します！両軍とも直ちに戦闘を停止し撤退してください」と言う通信が戦場に回った。がデュエルがフリーダムに攻撃をし始めた。

だが戦いは呆氣無く終つた、デュエルががむしゃらに斬りかかろうとしたが楽々と避けられ腰に付けてあつたビームサーベルを抜き両足を斬りおとされ、そして蹴り飛ばされた。そして落ちかけている所を、ディンが捕まえ撤退していく。

そして戦場で再び前へと前進して逃げ切れそうな時に、アラスカ基地内に強烈なエネルギー放射を確認した。そして基地を中心とした爆発が起きた。

次々とMSがサイクロプスに呑み込まれ、そして爆発していく、建物は砂の塔の様に儂く碎けて倒壊していく

そして「Jのままでは、アークエンジュルも飲み込まれかけるだろ」「アークエンジュルは巻き込ませる者かよ！」と叫び後部の方に手を当てブーストした。

「Jのままじゃ、まだ当る可能性が有るのかよ！此れだけは余り遣りたくなかったが、リミッター解除！」と言つて艦の速度が上がり何とか当る事無く撤退する事は出来たが…。

「ショウさん！大丈夫ですか！」とシラコキの乗ったエンジュルが近寄つて来る「ああ…何とかな、しかし3分使つたから体中がいてえや。悪いけど飛ぶの手伝つてくれ」と言つた

「了解です。肩貸しますから一緒に飛びましょ」う」と言つてエンジエルの方に姿勢制御しながらアークエンジュルの止まつた島に行つた。

そして話をしている所を眺めていたが、不意にキラ君達がこっちに顔を向けてきて「キマイラともう一機のパイロット降りて話をしないか？」とムウが聞いてくる。

「拒否する、話がしたいんだつたら力ずくで掛かつてきな」と言い「判りました。それが貴方の望む事だつたら」と言つてキラはフリーダムに乗り込み、こっちに機体を向けてくる。

「此処じや被害が出る、他の小島でやりあうぞ」と言つて一機は飛び去つていぐが「隊長辞めてください。今戦つたら貴方が死んじゃいます！」と悲痛な叫びが聞こえて来た。

「関係無いだ、邪魔はしないでくれ」と頼み込んだ。

～シラコキシード～

「どうすれば、どうすれば隊長を止められるんだろ。あのフリーダムのパイロットに頼むしか」と言ひてフリーダムのパイロットに回線を開いた

「お願いです、あの機体に乗ってる人を止めてください…あのままじゃ確実に死んじゃいます！」と叫い放つた

「えっ…？」と驚いて聞いてきた「あれは、何度もあるよつな速さを出せるわけじゃないんです、あれはリミッターを外してるので長く続けたら自分が死ぬような代物なんです！」と泣きながら機体の真実を話した

「お願いですから、あの機体に乗ってるショウさんを止めてください…お願いします」と頼みこんだ

「判りました、あの機体は絶対に止めて見せます」と言ひて通信を切つた。（お願いですから、私を置いて死なないでください、ショウさん）と思つたシラコキだった

～SIRO END～

「さあ戦いを楽しもうかフリーダム」と言つたが「止めてくださいショウさん！戦うならショミーレーターだけで良いじゃないですか！」と言つて来た

「教えてくれたのはシラコキか、アイツもお節介焼くのが好きだな。戦いに理由なんて無いぞ、ただキミとは戦いの決着を付けたかっただけだ！」と言つて76mm突撃銃を構えグレネードランチャーを構え撃ち始めた、だがフリーダムには掠りもしなかつた。

「流石最新鋭機この程度じゃあたりもしないか」と言いながらジー・ムソードシールドで切りかかるが盾で防がれ蹴り飛ばされる

「グッ…やつてくれるな！」と言ひてビームキャノンを体勢を立て直し打ち込むが「止めてください貴方も限界でしょう！」と未だに戦闘をする気は無いようだ

「本氣で遣れよ！お前は俺を舐めてるのか！」と怒りてしまいグレネードランチャーを撃ちこむがビームサーベルでグレネードランチャ―を切り裂かれてしまった

「クツ！判りました。僕は貴方を全力で止めます！」と言ひて急に動きが変わった。きっとＳＥＥＤが割れたんだらう

「ハハツこんなに楽しい戦いは久々だ。バルドフェルドさん以降は全く楽しめなかつた。でも君との戦いも楽しいよ」と言つて90m対空散弾銃を撃ちこむが盾であつさり防がれ羽の部分を斬りおとされるが「甘いっ！」と叫び盾を足で蹴り飛ばし地面に着地した。

「クツ…ショウさん…僕は貴方を撃ちたくない！」と叫んでくるが

「戦場はそんなに甘くないところじゃねえんだよ！キリラクス・クラインとマルキオ導師と出会いて戦う意味を見つけたんだる、今更迷うんじゃねえ！」と言い射出式アーマーシュナイダーを打ち込むがワイヤーが斬りおとされた。

そして「僕は貴方を落したくない！だから僕は貴方を全力で止める」と言つて突っ込んできてショルダータックルを食らわされ銃口を口ツクピットに向けられた

「判つた、降参だ」と言ってコックピットを開けて手を上げる…が
シユウは倒れ込んでしまった。

「シユウさん！？大丈夫ですか！？シユウさん」と言つキラ君の声
だけ聞こえてシユウの意識を失つた。

ショウ「今日は俺もチョット無茶振りしちゃったもんだな」

抹茶「ええ、そうですね。しかしシラコキの静止位聞いてあげても良いじゃないですか」

ショウ「それは判つてるんだが、如何しても戦いたかった」

抹茶「あなたは何処の闘争本能丸出し人間に成つてんだよ」

ショウ「ああ？でも「ぶるああああ」とかは言に出さないから安心してくれ」

抹茶「何でだらう作者なのに一抹の不安を感じてきたよ」

ショウ「気のせいだら、さて次はどんな事が起きるんだ？」

抹茶「うーん、取り敢えずオープ編と懐かしい友人との再会を出そうかな？」

ショウ「せつかく助けたのに会わせなかつたら酷いしな」

抹茶「はい、そうですね。まあ問題は何処で登場させようか悩み中」

ショウ「せつか。まあ楽しみにしてくれよ」

ショウ・抹茶「さてショウ（俺）は生き残れるのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン書いて下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～S I D Eで何か有りましたら言って下さい

PHASE 21（前書き）

ショウ「今日は時間掛からなかつたな？」

抹茶「ええ、疲れましたけどそれでも書くのが好きなんで筆は置きませんよ」

ショウ「さうか、今回はどうな話だ？」

抹茶「アーケンジョルに捕まつて質疑応答する場面です」

ショウ「と言つ事はキマイラの秘密をクルーに明かすと言つ事だな」

抹茶「そうですね。何時までも隠し通せると思つたら大間違いです」

ショウ「さうか、まあ正論だな」

ショウ・抹茶「では本編をお楽しみくださいーー！」

「此処は…また医務室か、俺はあれに乗つてゐる限りこの縁はずつと続くのかねえ」とため息をついた

「しかも此処見覚え有ると思つたらどう見てもアークヒンジュルの医務室だな。やれやればれちまつたか」と愚痴つていたら

パシューんと言つヒアロックの外れドアが開く音が聞こえた。

「おひ、もう起きたんだな。コイツは速めに話が聞けそうで丁度良い」とムウさんが話しかけてきた

「んー一面と向かつて立つのは久々だね、念つとこひも前と一緒にだと苦笑したが

「今回は、世間話をしに来たわけじゃない判るな?」と冷静な声で聞かれた

「ああ、判つてますよ。どうせ聞きたいのは、キマイラのことだろ?」と聞き返した

「話が判つてるなら良い、だがコイツは一個人で済まされるほど甘い話じやない。何故俺らの敵に回つたんだ?」と聞かれた

「んー此処で話しても良いですけど、ブリーフィングルームで話した方が皆事情も判るんじゃないですかね?」と返した

「まあ、それもやうだな」と言つて両腕に手錠を付けられた。

「悪いな暴れられる」と困るんでな」と本当に悪かつた様に言つてくるが

「いえ、此ればかりは仕方ないと思いますよ。」この判断は間違いでも無いですし」と言い切った

「そうかい、そう言つてくれると嬉しいもんだね、じゃあ行こうか」と言つてムウさんの後ろに付いて行つた

「ブリーフィングルーム」

「隊長もつ体は大丈夫なんですか?」とシラコキが近寄つてきた

「ああ通常通り体は動かせる。まあこれから話をするから座つてくれ」と言つて部屋の一一番前行つた

「まずは、そうだな。今まで敵に回つた事申し訳無いと思つ、可能な限り質問に答えていくつもりだ」と言い放つた

「さうだな、まずはあの機体は何なんだ?」とムウが聞いてきた。

「アーツは俺が開発・作成したMSだ。一応フリーダムよりはちょっと劣るが使い方によつては同等に戦える」と言い放つたらキラ君が多少驚いていた。

「当然だろ?、最新鋭に少し劣るが同等な性能を持つ機体を作り出せるのだから

「え、じゃああの機体は何で動いてるんですか?」とキラが疑問に思つていたが

「残念だがキラ君の予想は外れるよ、あれは一般的のMSにも積んであるバッテリー駆動のエンジンだ。一定時間動かせばEN切れで動けなくなる」と答えた

「じゃあ何時あのMSを作ったんだ?」ヒマードックさんが聞いてきた

「あれは砂漠の虎の時に一時的に雇う条件としてキマイラの作成のパートを全部回してもらった」

「だったら前持つてたジンは如何したんだ?」とムウさんはなくなったジンの行方を引き続き聞くので

「ああ、あれは雇われる前にバルドフールドさんの乗るワゴンに足を壊されてキマイラに使える所全部移植したから、もう無いよ」

「そうですか、では何故私達の敵に回ったの?」ヒマリューさんから自分が敵に回った理由を聞かれた。

「うーん、こっちとしては穩便に済ませたかったんだが、そっちが攻撃してくるから正当防衛って所かな?あとは前のレジスタンスみたいに命を馬鹿みたいに使用する奴等を予測出来てだからあえて敵に回って救うみたいなかんじかな?」と答えたが

「ふざけないで!そんな理由で私達の敵に回ったの?...」と聞いてくるが

「確かに砂漠のときの決戦で攻撃を仕掛けたのは悪いと思ってる。だが他の場所ではこっちに攻撃する意思が無かつたのに攻撃しそう

とした。それとも何があの時々攻撃を受けるとでも?」と聞いた

「そんなつもりは…」と言つて詰まつてたが

「悪い、少し言いすぎた。最近悪い事しか起きなくてね」と素直に謝罪した。

「そういえばシユウさん、何故貴方はあの時小島郡の場所に居たんですか?」とキラ君が痛い所を付いてくる。「ん?まあ、それは後々教えるわ」と言つて居た理由を話さなかつた。

「最後に一つだけ、あのMSは何なの?」と誰もが疑問に思つた事を聞いてくる。

「あのMSを一言で言い表すのは正直言つて難しいね。まあ簡単に言えばパイロットの命を食つ化物かな」と返した

「「「「命を食つMS?」」」と事情の判らない人達は疑問すぎた
「つーん、言つよつ見せた方が速いな」と言つて唐突に上着を脱ごうとしたら

「何をやつてるんですか!?」と皆から言われた。

「良いから黙つて見とけ」と言つて脱いだ瞬間皆の顔が蒼くなつた。

「シユウさん、それって…」とキラが恐る恐る聞いてきた

「ああ、此れがキマイラ操る人間の代償だ」と言つて体中内出血を起している体を見せた

「今日は3分とちょっと使つていた、これで済んだ事を寧ろ喜ぶべきだな」と溜息を付きながら再び上着を着た

「それで使い続けると如何なるんだ?」とムウさんも聞いてきた

「言わなくても想像出来る人も多数居るでしょう?」そのまま使い続ければ確実に来るのは死だけだ」と冷え切つた声で言った。

「じゃあ、あの時の目視出来なかつた速さの理由って……」とサイがそういつた瞬間

「ああ、コミッター解除を使つたからだ」と答えた

「何でそんな危ない物を使うの? 貴方ほどの腕だつたら……」と聞かれたが

「俺にはパイロットとしての素質は其処まで無いんだ、だから俺は自分の命を駆け引きに出しても戦わないと弱いままなんだ」と答えた

「何で、其処までして戦うんですか?」

「そうだな、戦う理由が自分が大切に思つてる人達を守りたいから守るじや傲慢すぎるかな?」と軽々しく笑ってしまった

「そんなどつたら尚更力を持つ人に頼ればシユウさんだつてそんな傷負う必要無いじゃないですか!」とキラが怒鳴ってきた

「君の感情的な所は初めて見たね。まあ良いや、じゃあ逆に聞こうか守れるだけの力が有るのに逃げ出すのと守れるから全力を尽くす

のどちらが良い?』と聞いた

「…………」「…………」

「悪い質問だつたかな?まあ良いぞ。簡単に言つちやうと死ぬのは、しうがない事だと感じてる」とハツキリ答えた。其れを言つたらみんな唖然としていた。

「何か大きな力を持つ又は何かを成し遂げよつには、何時かは大きな反動が来るものだ。その一人に俺も入つてるだけなんだ。乐して良い結果が手に入れられるのは物語だけ、だから俺はキマイラに乗り続ける、この自分自身が朽ち果てるまでね」と言つて席を立つた。

「シユウさん何処行くんですか?」とシラコキが聞いてきた。

「少し長話したから疲れた、寝るよ。……それに俺は一度死んだ身だ、今更命は惜しくない」と最後の方だけ聞き取りづらくしてブリーフィングルームを出て行つた。

→キラ・ヤマトSIDE

「何であの人は、あんな物に乗るんでしうね?」とそいつを答えて教えて貰つても納得できなかつた

「あんな戦い方してれば寿命だつて削れて行く様なもんだぜ」とムウさんも軽く同意していた。

「シリコキさんでしたっけ?シユウさんは何であんな物を?」と常にシユウさんを慕つていたシリコキさんに話を聞いてみたが

「判りません、あの人は前聞いた時も大切な物を守る為としか答え

てくれませんでした」「

（あの人は何を考えてるんだろ？まるで自分の命を惜しまない戦い方、そう言つなれば死に対して恐怖を抱かずに戦い続ける何か…）
とキラは物思いに耽つていた。

「取り敢えず彼の行動には要注意しましょ、毎回あんなんじゃ何時死んでも可笑しく無いわ」とマリューさんがそう言つた

「さうですね、成るべくあの人には戦闘では負担掛けたくないですね」とキラも今のシユウの戦い方には同意すら出来なかつた。

（シユウさんは何を思つて戦つてゐるのかな？少し疑問に成るなあ）
と思いつつ今後如何するかを話し合つていた

～SIDE END～

シユウはゆっくつと医務室に歩を進めていたが「グゥウウ…」
呻き片膝を付いてしまつた。そう3分間とは全くの嘘だ、今回使つた時間4分3秒そう生存率など言つまでも無く最悪な数字に成つている筈だらう。

だが、それでも生き残れたのは衝撃吸収剤を少しでも積んでいたからだろ。そして急に咳き込んでしまつた、手で慌てて押さえそして確認した、手には血が付いていた。

「全く脆い体だな、せめて最低でもドミニオン決着の場面まで保ってくれよ…」と毒づきながら壁に肩を預けながらも医務室に向かつていた。

そして要約医務室に付いたが、体は未だにリミッターを解除しそぎ

たせいか激痛が走つてゐる。

（「マイツは骨にヒビでも入つてゐるのかな？」と痛みの中そつ考へてしまつた。）

「あの時の質問の時に良く顔に出でやすに耐えられたな、俺自身驚きだよ」と誰も居ない医務室の中で呟いた。正直言つてあの質疑応答の時ですら激痛で体中が痛かつたのだ

「体が壊れるのが速いか、戦争が終るのが速いか勝負だな」と言つたが、この先リミッター解除無しで戦いを挑む事は厳しくなつていくのは至極当然だろ？。

（唯でさえ控えてるのがフォビドゥン・カラミティ・レイダー・デュエル更にはプロヴィデンスだ。完治して、またリミッター解除して吐血した所見られたら搭乗禁止も良い所だな）と自嘲氣味に成つていた

「守りたいから守るのは傲慢…かな？それでも俺はこの命を捨てても皆を救いたいんだ、元々この世界のイレギュラーで有る俺はそれ位しか遺りたい事無いしな」と悲しくなつて來たが

急に眠気が襲つてきた「やっぱりもう一つの反動は睡眠欲が強くなる事かな？」と思いつつも再びベッドに潜り込み目を閉じた。この身を戦いに投じる為すこしでも体を休めたかった。

今はもうそれしか思いつかずに眠りへと入つた。次なる激戦も生き残るために

抹茶「はい、今回キマイラに乗ったシユウの代償を出しました」

シユウ「うーん、このままじゃ俺死ぬんじゃないか？」

抹茶「まあ何時か肉体補正でも掛けますかね」

シユウ「それ、何か怖いぞ」

抹茶「冗談ですよ。しかし場合によつてはそんな考えもしないとマズいかも」

シユウ「その時が来ない事を期待するよ、そういうえば今回4分だったが生存率つて何%になるんだ？」

抹茶「ああ、4分使う20%の確率での生存なんで有る意味運良かつたですね」

シユウ「20%つて良く生きれたな俺」

抹茶「まあ今死なれると話が進まないので、寿命削り+吐血で済ませました」

シユウ「やつか俺自身生き残りたいがどうなるんだろうな」

抹茶「さあ？まあ考えときますよ。さて今回注意点を申じ上げてくれた『おさんみみさん』有難う御座いました」

シユウ「注意点が多こと反省する所もある」

抹茶「全くもつてその通りですね。では後書きを閉めましょーつか」

抹茶・シユウ「わいシユウ（俺）は生き残れるのか？次回もお楽しみにー！」

「ご意見・ご感想ありましたらドンドン書いて下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～SHDEで何か有りましたら書いて下さい

PHASE 22（前書き）

抹茶「さてフェイズ22の始まりですね」

シユウ「やうだな、今日は長めに書いたのか？」

抹茶「ええ、でも一つ問題が」

シユウ「なんだ問題つて？」

抹茶「それが俺オープ壊滅する所つる覚えなんでヤバイかも」

シユウ「オイイイーまあ多少の誤差くらいは許してもいいんだろ？」

抹茶「そうだと良いんですけどね」

シユウ（ヤバイこのままだと作者がネガティブ思考に変わる…それだけは阻止しなければ…）

シユウ「や…それでは本編お楽しみトモトモ…」

「んっ、此処は？」とシユウは辺りを見回した。此処には見覚えがあつた

そう何も無い白い部屋、以前自分が死んだときに来た場所だ。

「すいませんね、貴方が眠っている間に呼び出しました」と軽く挨拶してきたが

「前置きは良い、俺はまだ死んでないはずだ。呼び出した理由を聞かせてくれ」とさわざと用件を終えたかつたシユウだった

「そうですか、取り敢えずキマイラに取り続けると確実に死ぬのは知っていますね？」と確認してきた

「ああ、設計・作成したのは俺なんだ。そんな簡単な事判らない筈が無いだろ」と軽く答えた

「そうですね、取り敢えず、このままだとドリードー・オンと決着をつけた後にキマイラに乗り続けた代償として確実に死にます」

「そうかい、一応俺の望んだ所までは生きられるんだな」と軽く言つてしまつた

「まあ、そうですが。一応救済策も有りますよ?」と助かる事が出来る事を言つてくれるらしい

「まあ用意してくれてるなら一応聞いておくわ」と言つて救済策を

聞いておいた事にした

「そうですね、キマイラに乗っても永遠にリミッター解除で死ぬ事は無いし削られた寿命も返ります」と言つてきただが

「正直に言つてそんなもんだったらいらんわ」とハッキリ断つた

「えつ？理由を聞いても」と不思議そうにしていたので

「自分から望んであの機体に乗っているんだ。それに俺と同じ運命に成ってくれてる奴が居るんだ、もしソイツだけがリミッター解除で死んだら、俺は自分を許せないだろ？。ただ望める事が有るんだつたら…」

「そうですか、しかし他に何を望むんですか？」

「一つ目はヤキンドウーハの決戦が終るまで生かしてくれ、二つ目は……を望むよ」

「たったそれだけで良いんですか？」と本当にそれだけで良いのか聞いてくる

「ああ一度は死んでしまった身だ。こんな俺でも人を最後まで救つて死ねれば本望だ」と言い切つた

「そうですか、起きた頃には貴方の望んだ事は起きているので頑張つてください。帰りは後ろの扉を開ければ目覚めます」と教えてくれた

「ああ、ありがとな。今度会う時は俺が再び死ぬときだな」と言つた

てシユウは扉を押して消えていった

「本当に貴方はそれで満足なんですか？」と女神の呴きだけが部屋に響いた

「もつ屋か…アーチエンジールの人たちには世話を成ったんだし挨拶だけして自分の船に戻るか」と言つて体を起こしたら

「シユウさんようやく眼が覚めたんですか？」とシラコキが入つて来てそつまつて来た。

「へつ？…ようやく眼が覚めたって俺は何日寝てたんだ？」と恐る恐る聞いてみた

「2日ですね」と言われて

「マジか…まあ良いや。リミッター解除の反動の怪我も治つたんだし長く寝てたのは正解かな？」と体を伸ばしてた

「そういうえばシユウさん此れから如何するんですか？」と予定を聞いてきた

「んーアークエンジールの皆に感謝しようと思つて挨拶しようつたけど予定変更(飯食つたら出かけるわ)

「何処まで行くんですか？」と聞いてくるが

「病院だよ。救出した2人が居る病室まで顔を出すんだよ」と言つて部屋を出た

「取り敢えず何かお見舞いの品でも持つて行くか」と言って病院まで向かつて歩き出した

（病室）

「よつ！一人とも元気かい？」と言つて一人の居る病室に顔を出した
「えつと…どちら様でしょか？トール君知ってるかい？」「いや
覚えてないわ」と話してたが

「まあ俺の事は後で良いじゃん、此れお土産ね。フルーツ問題ない
よね？」と一人に渡した

「「ありがとうございます」「」と感謝してきた

「いえいえ、どういたしまして。取り敢えず俺はキミ達を助けた人
間だよ」と教えた

「「えつ！？」と驚いてたが「すまない、救出を遅れてしまつて
と頭を下げた

「何で貴方が謝るんですか！？」ヒーロル君が言つて来て

「貴方は俺達を助けてくれただじゃないですか！」とトール君にまで
言われた

「いや、もう少し速く助けて遣れれば君達もこんな大怪我をする必
要も無かつたんだ。本当に申し訳ない」と頭を深く下げたが…

ブルルルルブルルル　と電話が来てしまつた

「失礼、少し席を外すわ」と軽く謝つて部屋を出て通話可能エリアまで進み送信者の名前を見たらシラコキの名前が出ていた。

「シユウだがシラコキどつかしたのか?」と電話の通話ボタンを押した

「シユウさん、それが明日もしかしたら連合が攻めてくるかもしません」

「何?如何言つ事だ。ハツキリ説明してくれ」と詳しく説明を頼んだ

「それがもし明日までに連合の方に味方しなかつたらザフトの方に付くという認識でオープに攻め入ると言つ最終通達が来たそうですねと悲しそうな声が聞こえた

「如何有つても世界を一分したいのかよ連合とザフトは!」と苛立つて怒鳴った

「シユ…シユウさん病院で大声はちよつと不味いかと」と注意された周りを見回したら驚いてこっちを見ていた「すいません」と謝つといた

「で、俺らは如何するんだ?」と今後の態様を聞いた

「はい、もし明日攻め入られるようだったら此方からも迎撃と言つ事で反撃するらしいそいつです

「オープを火の海に変えるつもりなのかよ、連合の連中共は」と手

を握り締めた。余りに強く握りすぎて片手には少々血が流れた

「取り敢えず一旦戻つて準備した方が良いかもしませんね」と言つて来たので

「ああ判つた。一度そつちに戻るからエンジェルとキマイラの準備をしといてくれるか?」と一機の準備を頼んだ

「了解しました。それでは失礼します」と言つて電話を切られた

「さて此れからが忙しくなるな…連合の連中攻めて来たなら死ぬ覚悟もしどけよ?売られた喧嘩は数倍にして返してやるからよ」とオーブに攻めてくる敵に対してそう呟いた

「と詰つわけでちょっと明日からまた忙しくなるから来れなくなるから御免ね」と一人に謝つといた

「えつ如何言つことですか?」とトールが聞いてくる

「どうやらザフトと連合は世界を一分したいみたいでね。連合が此方に戦争吹つ掛けてくるからそれを迎撃しないと駄目なんだよ」と彼等は一応此処に居るのだから最低限の情報を教えといた

「それで僕達は如何すればいいんですか?」とニコル君が聞いてくる

「そうだな、キミ達はアスラン君とキラ君の説得に回つて欲しい。今死んでると勘違いされてるから顔を見せて安心させて欲しいもんだよ」と教えたら

「えつ!?.俺達って死んだ事に成つてるんですか?」と驚いていたが

「結構二人からの視点から見ても殺しちゃつた感じが出てたから皆
気付かなかつたんだと思うよ」と教えた

「まあ俺は明日の準備があるから一度戻るよ」と言ってキマイラが
収容されてるアークエンジェルへと向かつたシユウだつた

「アークエンジェル ハンガーハー

「シユウさんどっちの機体も最低限準備を完了させました」と入つ
て直ぐに教えられた。

「了解だ。新しいグレネードの弾丸の考えをこっちも纏まつたし準
備を開始するよ」と言って機体へと歩き出した

「さあ今回も、大暴れしようか。ただしリミッター解除は余り使わ
ないのが大前提だがな」と言った

そしてシユウは明日始まる戦争まで準備をし続けていた。

自分の故郷を攻撃する物は例え何者でも許さないと思つていたシユ
ウだった。

「始まるのか…人は戦争をしないと全てを決められないのかね?」
と悲しく呟いた

「仕方ないですよ、今の連合とザフトは殆ど穩健派な人間は少ないと」シラユキが言つて来た

「どううな、穩健派のクライイン派も止められないんだ、この戦争全ての元凶が撃たれない限り止らないか」と言つてカタパルトの準備を始めた

「キマイラ発進どうぞ」とオペレーターの声が聞こえた

「キマイラ シュウ・Ｋ・ライトニング出るー」と言つてカタパルトから射出された。

どうやら既にストライクダガーが進行を開始しているようだ。

「数だけ多くても多すぎたら唯の的にしかならねえんだよ」と言つてガトリングを構え撃ち始めた

やはりMSに乗り込むのが始めてのパイロットが多いのか次々とガトリングの弾が被弾していく

だがそれでも避ける奴は避けるのか空中にジャンプして軒に斬りかかるつて來たが

「単機で突つ込む威勢は認めよう……だが相手が悪かったな！」と言つて射出型アーマーシュナイダーをコックピットに向けて放ち、そのままダガーは避けれずにコックピットを貫いて機能を停止した。

アーマーシュナイダーを回収する時に血が少し付いていたが戦争だから仕方ないと今は納得するしかなかつた

周りを見るとキマイラの能力の高さに驚きを隠せないのか後方に後ずさる機体が多くつたが

「死ぬ覚悟も無い奴が戦争を吹っ掛けてくるんじゃねえぞ！」とその行動に苛立ちを感じた

そして両足に付けているキャタピラを展開しダガーの群れに突っ込んだ。

しかしふィームライフルも撃つてくる機体も多かつたが盾で防ぎつつもビームキャノンで確実に撃ち貫いた。そして近くまで進みビームソードシールドで縦に切り裂いた。

流石に敵陣の真ん中に来すぎたのか後方から斬りかかって来るが咄嗟に足のブースターを使い回し蹴りを食らわせダガーの頭を破損させた。

「突っ込みすぎたな」と反省しながらも4枚の羽を広げて後方に飛び下がりグレネードランチャーを撃ち込んだ。次の瞬間4～6機くらい居たダガーが次々に爆発していった。

「グレネードランチャー拡散弾　弾の中に爆弾を詰め込んで一つ一つ爆発を起こしていく防げなかつたら確実に落ちていく、集団専用武装だが中々の強さだな」と呟いた

そして不意に何かがレーダーに映った人のようだ…

「ハッ！此処は確かフリーダムの攻撃でシン君の家族が死ぬところだ！」と言つてフリーダムの方を見たらやはり新型機3機と遣りあいレール砲が山に向いていたので咄嗟に山を防ぐように盾を構え防

いだ

「ヤー」の民間人！死にたくなかつたら早くシェルターに避難しろ」と言つて避難できるまで機体を盾にして防いでいた

「ありがとうございます」とシン君？らしき少年が感謝してきたが

「感謝は後で良いからさつと避難してくれ」と言つて弾を防いでいた。幾らキマイラといえども何度も弾を受けていたら限界がある物だ。

そしてようやく避難が完了したのか、サーモグラフティで見ても山には民間人は居なかつた。

「さあダガー達よくも撃つてくれたね。さあ此処からは俺の反撃のターンだ」と酷く悪い笑みを浮かべていたが

警告音が鳴り響いた。「なにっ！？」と言つて咄嗟に横に避けようとしたが「このままじゃ避難してゐるシェルターに当つちまう！」と言つてシールドで防いだがドロドロに溶けてシールドが使い物にならなかつた。敵を確認したらカラミティだつた…。

「オイオイ、何で悪の三機の一機を俺が相手せないけんのだと愚痴つてしまつた

「まあ、やれるだけやつてみるか」と言つて撃つてる時に荷物に成るガトリングを地面に落とし76mm突撃銃を放つがすぐさま肩のビームキャノンで弾を消され左腕に付いてるケーファ・ツヴァイとバズーカで此方を撃ち落そうとするが、キマイラの機動によりケーファ・ツヴァイは難なく避けバズーカはビームキャノンで破壊しそ

のままカラミティを狙うが、やはり避けられる。

「アイツは格闘を積んでない、なら… アークエンジェル悪いが対艦刀をこっちに射出してくれ」

「えつ…? 「悪いが事情は後で言つ。今はビーム格闘兵器で威力の高い武装が欲しいんだ!」 ッ…」解しました。直ぐに射出せます。1分耐えてください!」 と言つて通信を切つたが

「速くしてくれよ、こっちは、簡単には耐えられない相手なんだからな」と言つていたがカラミティが攻撃を一瞬だけ止め衝撃を防ぐようにかかんだので「マズイツ!」 と言つてキマイラは空に思い切り飛んだ。

次の瞬間カラミティに積んであるスキュラ・ビームキャノンがキマイラの居た場所を通り街を火の海に変えてしまった

「チツ! あの攻撃を受けたら幾らキマイラが丈夫とはいえシャレにならねえぞ」と毒ついた時

「シコウさん今から対艦刀を射出します!」 と通信で言われた「了解!」 と言つて射出された対艦刀を掴み取り対艦刀を起動させ肩に担いだ

「さあお遊びは、此処までだカラミティのパイロット次は俺の本気を見せてやるよ…リミッター解除」

と言つてカラミティの前方に居た筈のキマイラが目視できなくなつた。

そして次の瞬間カラミティは一瞬だけ反応して左に避けたが右腕を

斬りおとした。

「へえ、此れを避けるんだ。楽しい戦いに成りそうだ」と呟いて、対艦刀を構えて再び斬りかかるとしたらレイダーが攻撃を仕掛けってきたので咄嗟にブースターを使い右に避けた

「クソ、こんな時に」と言つてビームキャノンをレイダーに対して撃つがMA形態で動いてるので簡単に避けられた。そして反撃とばかりにスキュラをこっちに一発放ってきた。難なく避けたが隙が生まれてしまいレイダーはこっちに攻撃を仕掛けずにカラミティをすぐさま回収し海上にある戦艦に向かつて撤退していった。

少し安心して周りを見るとM1アストレイが最後のストライクダガーの部隊を撃ち落していた所だった

「ふう、取り敢えず終わりか」と言つて対艦刀に送ってるENを切つてフリーダムの方を向いた

どうやら紅い機体と話しているようだ。そしてモルゲンレーテの工場へと向かつていた

「あれがフリーダムと対なす機体ジャスティスか」と言つたが

「シウウさん大丈夫でしょうか?」とシリコキの通信が来た

「ああ一応大丈夫だが、お前戦闘中何處いたんだ?全く姿が見えなくて撃ち落されたと思つたぞ」

「なつ!ヒドイですシウウさん。私ずっとストライクダガーの部隊と戦い続けてたんですよ!」と怒つてしまつた

「ああそつなんだ。スマン許してくれ。」うちも色々と大変だったんだ」と返してモルゲンレーテの工場に向かつた

「ふう、疲れたな。」と言つてキマイラを降りてキラ君とアスラン君の所に向かつた

どうやら話が終つていたらしい。

「お一人さん少しお話しが有るんだけど良いかい?」と一人に聞いた
「シユウさん、どうかしましたか?」と言つてきて

「キラこの人は誰なんだ?」とアスランが此方に少し警戒していた
「悪いが警戒しないでくれ、俺はシユウ・Ｋ・ライトニングだ。宜しく頼むよアスラン君」

「何故俺の名前を?」とより警戒してきた。

「そりやザフトの英雄扱いされた人間の名前を知らない奴なんざ居ないだろ」と言つといた

「俺は英雄なんてもんじゃ無いです」と反論してきた

「せうかい、ただ君を見ていると英雄という肩書なんて邪魔で仕方ないと言つ顔だね」と言つといた

「はい、仮にも友人を殺そうとしたんですからそんな肩書はいらぬです」と正直に言つてくれた

「それよりシユウさん用事は何ですか？」とキラ君が聞いてきた

「おお、すっかり忘れていたよ。とりあえず着いて来てくれ、俺があの時小島郡に居た理由を教えて上げるよ」と言つて一人を着いて来させた

（病室前）

コンコン「入るよー」と言つてドアを開けた

「さあ一人も入ってくれ、感動の再開だ」と言つて一人を入れた瞬間驚愕した

「一二ゴル」「トール」と言つて「久しぶりだねアスラン」「よおキラ、久しぶり」と返していた。

「シユウさん もしかして居た理由って」「そつ、この一人を救う事だったんだよね」と教えた

「だつたら何である時止めてくれなかつたんだ!」とアスランが怒つたが

「お前あの時マジで怒っていたから、真実言つても止まるかどうか謎だつたんだよ。その後トール君の乗つてるスカイグラスパー叩き落しちやつて最終的に二人ともマジ切れしてたから止める事出来なかつたんだよ」とやれやれといった口調で話した

「まあ良いじゃないかアスランこうして一人とも生きてたんだから」とキラがアスランをなだめていた

「んじゃ、まあ久々に友人と会つたんだから積もる話も有るだろ。俺は帰るからどうぞ」「おつべつ」と言つて病室を出て行つた。

「何で世界を一分したいのかね。全く戦争に巻き込まれる人達の事も考えろつての」と一人呟いた

「取り敢えず今度アイツ等見かけたら再起不能になるまでボッコボ」「にするべきかな」と逃がしたガンダムに対してもう呟いた。

「さてと俺もモルゲンレー^テで自分のMSと機体の武器を何かに代用して直す事に専念しようつかな」と言つてモルゲンレー^テへと歩いていつたら

「あの…すいません」と少年の声が聞こえた

「ん? キミは?」と誰だか判らなかつたので聞いてみた「いえ、その山に攻撃が来てる時に防いでくれたMSのパイロット知りませんか?」と聞いてきた

「ああ、あの時の少年か家族は無事だったかい?」と聞いてみた

「貴方でしたか、はい貴方が攻撃を防いでくれたお陰でマコも家族もシェルターに避難できました」と嬉しそうだつた

「そりか、キミ達が無事なら俺も嬉しいよ」と笑顔で答えた

「本当にありがとうございました。俺シン・アスカです。貴方は?」

と名前を聞いてきたので

「俺かい？ シュウ・K・ライトニングだ。んじゃ俺用事有るから帰るわ。シン君も気をつけて帰れよ」と言ってシン君と別れた

「さてと、俺も頑張って俺の救える範囲内で無力な人たちを救うべきだな」と呟きながら改めて戦いに對して決意を持ったシュウだった

抹茶「取り敢えず一旦此処でオープ編を切りました」

シユウ「確かに次は宇宙に撤退するんだよな？」

抹茶「ええ、如何しようか商議します」

シユウ「逃げ出すのに何を迷うんだ？」

抹茶「いや、キマイラとエングルもクサナギみたいに戦艦の一部に引っ掛けられて上昇するか、他の事をするかで大悩みです」

シユウ「頼むから普通に宇宙に上げてくれ」

抹茶「まあ、色々と考えますのでまた少々時間食いますね」

シユウ「時間を食うのは当たり前だろ。そういうえば今回も感想来てたよな？」

抹茶「ええ、55#さんに注意点を少しヒロアキ141さんにちよつとした質問が有りましたね」

シユウ「そうか、良かつたな」

抹茶「ええ以前からも注意点を上げられて最近本腰入れて直して行きましたよ」

シユウ「お前なぁもう少し早く本腰入れるよな」

抹茶「ナーセン」

デキコハヅキロン

シコウ「わたくしは作者はとある事情で蝶れなくなつたがちやんと咲つと
くから安心してくれれ」

シコウ「え、わたくしは生き残れるのか？ 次回お楽しみに！」

「」意見・「」感想ありましたら下記にてアドバイス
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また「SHOGE」で何か有りましたら書いて下せ
て

抹茶「はい、今回でオープ編終ります」

ショウ「速いな、しかしオープ編最後はどうなるのか楽しみだな」

抹茶「そうですか、気に成りますか」

ショウ「ああ内容喋らなくて良いからな?」

抹茶「ごめんなさい、頼むから前回の後書きみたいな惨状は辞めてくれ。あの後怪我治すの大変だったんだ」

ショウ「だつたら迂闊に内容喋らうとか思つてたじやねえぞ?」

抹茶「すいません、まあそれでも今回も必死に書いたんですけどね」

ショウ「1週間以内には書きたい訳なんだな」

抹茶「ええ、そうです。読んでくれる読者が居るだけで書けますよ」

ショウ「ええ、此れからも頑張れよ」

抹茶「ええ、頑張ります」

抹茶・ショウ「それでは本編をお楽しみ下せー!」

「しかし、すいませんね。急とは言え斬艦刀を借りてしまつて」とマリコーさんに言った

「いえ、しかし何故斬艦刀を必要としていたのですか?」と改めて借りた理由を尋ねてきた

「それがですね。成り行きでシェルターを守る時にカラミティの攻撃のせいで盾が溶けちゃつたんですよ。それでカラミティの武装を所々見ても射撃武器しか着いてないのでバスターの派生で格闘武器は一切着けてないと判断し借りました」と理由を話した

「成るほど、判りました。しかしビームサーベルは取り入れないですか?」と聞かれた

「うーん、欲しいんだけど威力が心許無いから…正直言つと斬艦刀が欲しい」と本音を言った

「そ、それは流石にフラガ少佐に聞かないとマズイですね」とマリコーさんも了承し辛いようだつた

「まあ、駄目元で聞いてきますよ」と書いてシユミレーター室に居そつな予感がしたので向かつた

（シユミレーター室）

「やつぱり居た」と予想を当てれた事が少し嬉しかったシユウだった

「おっ、シユウか如何したんだ?」と聞いてきた

「あのですね、ムウさんってソードストライカー良く使いますか？」と聞いたが

「へつ？ 乗り始めたばっかりなのに何でそんな事を聞くんだ？」とムウさんも疑問に成っていた

「その、もしムウさんがソードストライカー以外のパックで出る時は斬艦刀を借りても良いですか？」と聞いてみた

「え、そりや何でだい？」とますます理解が出来ていなかつた

「あつ、すいません実はですね……」と先程マリゴーさんの時に話した事をムウさんにも話した。

「成る程な、判つた。俺が使わない時は使っても良いぞ」と許可をくれた

「ありがとうございます、それでは失礼します」と感謝して自分のジャンク艦に向かった

（ジャンク艦）

「さてと、次は盾だけど此れは、右腕にいつその事何かをくつつけ様かな」と考えていた

「シユウさんどうかしたんですか？」ヒシリコキが聞いてきた

「ああ、この前カラミティとの戦闘で盾が完全に使い物に成らないから、新しく作るんだけど、どんな形にしようか悩んでるんだよ」と答えた

「と、いつかショウさん貴方余程の事が無い限り被弾しないのに盾欲しいんですか?」と呆れて来た

「時と場合によるつての、今回はシェルター守る為に消費したから次も有ると考えた時には如何しても欲しいんだ」

「それなら今回戦闘した時に大量のダガーとM1アストレイの盾が落ちてるんですからどっちか付ければ良いじゃないですか」と当たり前のように言つて来た

「そう言えば今回大量のMSが壊れたんだから良い物位落ちてるか」と言つて戦闘の有つた場所に向かつた

少しだけ戦死して行つた者達に黙祷をし周りを見回した「あん時は激しい戦闘で余裕が無かつたが改めて戦場を見ると酷い光景だな」と惨状を見て呟いた

「最初来た時はあんなに綺麗な景色だったのに……」と同意していた

「悲しみたいのは、皆同じだ。だけど俺らは立ち止まっちゃ行けないんだ。戦争が終るまで」と言いながら使えそうな物を探していた

そしてそこまで壊れ方が酷くないM1アストレイの盾を見つけた
が……

「何をしているの?」とヒリカさんが近寄つて来た

「アンタには関係ないさ」と関りたくないのをうなづいたが

「シコウさんのMSの盾が無くなつたんを使えそうな物を回収して
ただけです」とシラコキが答えていた

「シ…シラコキなんで教えてるんだ?」と軽く唖然としていたが
「えつ?何か良い物くれるかも知れないじゃないですか」と言い切
つていたので

「何となくだけど事情は判つたわ、モルゲンレー^テでストライクの
盾渡すから好きに使ひなさい」と答えてきた

「何で俺にそんな事をするんだ?そつちにメリットは無いだろ?」
と聞いてしまった

「そうね、ただ答えるなら貴方もオープを守つてくれる人間だから
かしらね」と何とも曖昧な答えが帰つてきた

「そりゃ、まあ貰える物はありがたく貰つておくれよ」と軽く答え
ておいてストライクの盾を貰つた

「しかし貰つたのは良いんだが、どう改造しようかな?」と再び問
題に成つてしまつた

「そりいえば、シコウさん毎回思つんですが、あのガトリングつて
軽量化出来ないんですか?」と聞いてきた

「ちょっと難しいな、あれでもMSの腕一本でも持てる様に軽くし
たんだが撃つ時は如何しても両手を使うんだ」と答えた

「そりなんですか、もしガトリングの軽量化を出来たら盾に付けて

も良いんじゃないかな?って思つたんですけど」と言つて

「そつか、その手があつたか、すっかり忘れてた。I W S Pの盾つてストライクの盾にガトリング付けてたな、ガトリングを4連装にすれば何とか成るな」と言つてストライクI W S Pの盾に酷似した盾を作り出すシユウだった。

だが次の日……

「シユウさん再び連合が攻めてきました!」とシラコキが駆け込んできた。

「はあ、またなのか」と原作通り話は進んで居るがオープに戦闘を吹つ掛けて来る連合に頭を悩ませられそうだ

「取り敢えず直ぐに準備をして迎撃をして欲しいそうです」と言つて來た

「判つた、取り敢えず今回徹夜で仕上げて本当に良かつた」と呴きながらキマイラの右腕に装着されたガトリングシールドを見つめた。

「取り敢えず出るか、今回もシラコキは如何するんだ?」と聞いたら

「へっ?一応エンジェルに乗つてダガーを迎撃する予定ですが」と言つてきたが

「駄目だ、お前は今回は出るな。一応アークエンジェルの格納庫に積んどけ」と言つた

「えっ?何ですか?理由を教えてください!」と言つて來た

「良いか？良く聞け」のままだとオープは自爆して連合の思い通りにはさせる気は無いんだ。だから此処は俺が出てべきなんだ」と言つたが

「そんなの理由に成つてません！」と言われ

「判つてくれ。それに良いか、此処で脱出するにはマスドライバーで宇宙に上上がるしかない、それで俺は最後に飛ばされるクサンギに掴まって一緒に上がる。…それにお前は、まだリミッター解除を使つた事無いだろ？」と聞いて

「ツー……はい。リミッター解除は、まだ一度も使ってません」と言つてきた

「大丈夫だ、責めてるわけじゃない、ただぶつつけ本番でリミッタ解除は少し危ないんだ」と言い聞かせた

「判りました、シユウさんの指示に従います。…ただ無事に帰つてきてくださいね！」と言われて

「ハハツ、俺が今まで一度も戦場で落とされた事なんて無いだろ？今回も大丈夫だ」と言ってキマイラに乗り込み出撃していった。

隊長がキマイラに乗つて出撃していった。しかし私は何故か胸騒ぎがして止まらなかつた

（シラコキシード）

そう一度と帰つて来ない様なそんな気がして止まらなかつた。しかし「帰つてくる」と約束したのできつと戻つて来てくれる筈です。

「シユウさんお願ひですか。無事に帰つてきてください」と私は
ただただ願う事しか出来なかつた

（私がリミッター解除を恐れたせいでシユウさんにも負担が掛かる。
私も何時か誰かを守れるくらい強い人間になるのかな?）と思いつ
つもエンジンに乗り込みアークエンジンへと向かつた。

～SIDE END～

とりあえず斬艦刀を射出して貰い「クッ！敵の数が多くる」と言
いながらも田の前に居たダガーを切り裂いた。

だが壊し続けても敵は何時まで経つても数が減らない…寧ろ増えて
ると言つた方が正しいかも知れない

「こんだけ数が多かつたら迎撃するのも大変だつての！」とバス
ターのパイロットティアッカも愚痴りながら2つの銃をくつ付け収
束火線ライフルの方で敵を薙ぎ払つていた。

「ヒュウ～ ディアッカやるじゃん」と言つてガトリングシーラード
をダガー達に向けて撃ち隙が出来た所をビームキャノンと射出型ア
ーマーシュナイダーで落としていくが

「余所見すんな馬鹿野郎！」と怒られてしまった。

「そつだぜ、あんまし余裕扱いてると足元すべわれや」とムカセ
んにも言われて

「良い事言つじやんおつさん」とティアッカが言い「おつさんじや

無い！」と注意していた

「余裕はこく暇が有つたらこんな事してねえ…よーっと、それに漫才する暇が有つたら戦えっての！」と言いながらダガーがビームサーベルで振り上げて攻撃して来た。だが左腕でビームサーベルを持つてる腕を掴みガトリングシールドでコックピットを撃ち抜いた。

動力系を貫いてないので爆発は起きなかつた、そして掴んだダガーを敵の方に投げつけ爆炎弾を撃ち込んだ。結果としては周りにも少數だが爆発でダメージを与えたが反撃とばかりにビームライフルの雨が帰つてくる。

「クソツッ！幾ら撃つても数が一向に減らないじゃねえか！」と咳きながら盾を構えて後方に下がり始めた所で

「今オーブの為に戦つているMSパイロットに告げる、これよりオーブはマスドライバーで戦艦を打ち上げた後自爆する！至急退避せよ。奴等連合の好きにほせん」と言つて来た

「マジかよ、如何するおっさん」とオーブの決断に驚いてたティアツカはこれから如何するか聞いてきた

「おっさんじゃない！取り敢えず俺らはENが少ないから撤退するしかないだろ」と言つてアークエンジュルの方に向きを変えて行きかけてる途中で

「シユウも来るんだ！」とムウさんに言われた。

しかし「いえ、俺は此処で少しでも足止めをしつきます」と言って敢えて残る方を選択した。

「馬鹿野郎！死にたいのか」とムツさんに怒鳴られたが

「大丈夫です。まだリミッターは解除していないんでギリギリに成つたら自分も撤退します」と言いながら迫つて来ているダガー達に76mm突撃銃や拡散弾を撃つて反撃していた

「判つた…。無事に帰つて来いよ」と唇を噛んで答えていた

ストライクとバスターはそろそろENが足りなくなつて動けなくなむ、そうなつたら援護では無く。

むしろキマイラの邪魔に成るのだ。最後には、若い奴に戦場を任して撤退する自分を恨めしく思つムウだった…。

そしてストライクとバスターがアークエンジェルに収容されてる所を見て

「さて、此処もそろそろマズイな」と言つてマスドライバーの方を横目で確認したら、アークエンジェルが飛び出していた。どうやら一機を律儀に待つっていたのだろう

「ふう、取り敢えず俺も撤退するべきかな?」と言つて、戦況的に見ても、もう此処は持たないと判断し

羽を広げフリーダムとジャステイスが居る場所へと向つた。

「キラ君・アスラン君そろそろ撤退だ。もう少しでクサナギが飛ばされる。それを逃したら宇宙に上がる事がキミ達は出来無い」そう言って近づいてくるフォビドゥンに斬艦刀を振るう、しかし僅かに

後ろに下がられ空振りと成り隙が出来てしまった。

そしてフォビドゥンが一ースヘグを振り上げキマイラ田掛けて攻撃してくるが、ジャステイスがフォビドゥンに蹴りを食らわせ吹き飛ばす

「大丈夫か？」とアスランが聞いてくる

「ああ、すまない。助かったよ」と言つてロミッター解除を使う前に救われたので身体的危険は無かつた。

だが…地上の敵に対してもう一度気を抜いてしまったのが運の尽きなのか後ろから大きな衝撃が走った

「グツ！」と言つて地上を確認する。カラミティがこっちはバズー力を向けて放つたらしい

「チツ！ 気を抜いてたのは失態だな」と舌打ちするがカラミティに対して斬艦刀を振り上げる。

だが右に避けられる…しかし「甘いんだよ！」と言いながら斬艦刀を地面に突き刺し、それを支点として機体のブースターを巧みに使い機体を回転させ蹴りを放つ。

とつさの予想外の行動に反応し切れなかつたのか蹴りはカラミティの頭部に当たりカメラが破損していた。

そして「シユウさん！ そろそろクサナギが出ます、行きましょうー」とキラ君が言ってクサナギを掴んでいた

「直ぐに行く」と言って機体の羽を動かすが少し煙が出ていた。注意して、使わないとな」と呴き羽を広げてクサナギの後方に出ていく取っ手を掴んだ。

そしてクサナギは発進された。だが連合にもメンツが有るのかこつちに攻撃していく。

そして普段のシュウなら、撤退戦なら盾を構えてMSには被弾はしなかった筈だ。

そうMSなら被弾はしなかつた。だが運が悪かつたのか、後方に有るキマイラの掴んでいる取っ手に弾が被弾した。そしてキマイラは空中へと身を投げ出された。

「クッ！」そう言ひ羽を広げて空中に留まる。しかしクサナギは宇宙へと飛びだつた。

（どうせ狙いはキマイラなのだろう）ヒシュウは思つてしまつた。これだけのMSを作り出せるのだからパイロットもさぞかし優秀と判断されたのだろう。

だが「俺はあんた等連合には絶対に拘まつたくないね」と言ひて、再び上昇した。

そして「リミッター解除5分」と呴きブースターを解放し可能か判らないが単機で宇宙へと向つた。

（たつた… そうたつた5%の確立だ。これで死ぬ確立は95%。だが俺はまだ死ぬ気は更々無い！）と思い飛び立つた。そして機体が宇宙に到達したのか体が急に軽くなつた。そして危険性のあるテ

インの羽をバージして安心した。だが、そこでショウは意識を失った

「キラSHDE」

「アスランー・ショウさんか！」と思わず絶句してしまった。

「判つてるーだけどー」と軽く諦めてしまいそうだった。

まさかキマイラだけがオーブに取り残されるとは…。さつきまで隣の取つ手を掴んで居た機体は存在しなくなつた。

「そんな…そんな事つて」とキラは泣き出しそうに成つていたが、何かが近づいてくる？

「あれは、キマイラ！？」 単機でここまで上がって来たのか！ とアスランが驚愕した。

当然だ。MSと言えども単機で宇宙に上がるには、色々とバースターガが必要なはずだ…。

つまりリミッター解除を使つたとしか考えられない…。そしてキマイラは宇宙に上がつたと判ると動かなくなつた、そして羽の部分がページされたが、何故か全くと言つて良いほどキマイラが動いていない。

「アスランー・マズイあのままじゃショウさんが死んでしまうー」と言つてキマイラの危険性を思い出しすぐさま機体に近づいた。

「！？ どう言つ事なんだキラー」と流石にアスランも事情が判らないのでイキナリ死ぬといつ単語には、驚いたらしい。

「事情は後で！今は直ぐにショウさんを！」と言つてキマイラを掴みクサンギのハンガーへと入り込みコックピットを開けた…。

「うじきその場に居た全員が青ざめた、そう大量の血を吐いていて意識が無かつたのだ…。」

「すぐ医務室へ！」と誰かが言つていた。そして直ぐに担架が来て運ばれていった。

パイロットスーツの下もきっと酷い事が起きているのだろう

ただキラは、この惨状を呆然と受け止めるしか無かつた。

↓ SIDE END ↓

抹茶「はい、少し速いですが此処でオープ編が終わり宇宙編へと話が変わります」

シラコキ「そんな事は如何でも良いんです。シユウさんはどうなるんですか！」

抹茶「えつ？今回新しく入ったパートナーってヒロインかああああ
あ」

シラコキ「当然じゃないですか！シユウさん居る所に私有りです！」
抹茶「はいはい、判つた判つた。取り敢えず惚氣話は要らないから
な」

シラコキ「なつ…なんで判つたんですか！？」

抹茶「何かそんな氣したけど、まさか正解とは自分でも予想外だ」
シラコキ「まあ良いです。取り敢えずシユウさんはどうなるんです
か？」

抹茶「その質問一回目だな。答えたなら面白くないだろうがー」

シラコキ「すつ…すいません」

抹茶「判つてくれれば良いよ。まあ死ないと困つ」

シラコキ「そうですか、そういえば今回も感想着てましたね」

抹茶「ああ、三ノ丸さんから来たね。有難う御座います」

シラコキ「ああ、そう言えば作者は、感想貰えるとテンション上がるタイプなんですか?」

抹茶「お前は俺の友人と一緒に事聞いてくるな。まあ良い感想貰えるだけで頑張る気は起きるや、テンションまでは上がらない」

シラコキ「残念です。テンション上がる人だと思つたのに」

抹茶「お前は俺に何を期待してんだけ?取り敢えず後書き閉めるか」

抹茶・シラコキ「さてシロウ(さん)は生き残れるのか?次回お楽しみに!...」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン書いて下さい

あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します

また〜SHODEで何か有りましたら言つて下さい

シラコキ「はい、フェイズ24始まりますよー」

抹茶「ちょっと…俺のセリフ取るなよ…」

シラコキ「良こじやなこですか、どうせ此処でしか会話出来ないから影薄いから」

抹茶「影薄いって酷いや、シユウの時はもうちよい扱いが良かつたの」

シラコキ「そんな事言われても仕方有りませんよ、作者が小説介入は禁止ですからね」

抹茶「そんな無粋な事はしないっての」

シラコキ「ついでに書いたシユウちゃんの復活も…」

抹茶「馬鹿な事言つてないで本編入るぞ」

シラコキ「あつ、もうですね」

シラコキ・抹茶「それでは本編をお楽しみください…」

「えつ……？如何言ひ事ですか、それって嘘ですかね？」と今聞いた事をとてもじやないが信じられなかつた

そう、自力でシユウは宇宙まで上がつて来たが反動で意識不明の重体と成つてしまつたのだ。

「残念ながら、嘘じやないんだ」とムウは答えた、何故自分だけが無事で彼が瀕死の重体に成つたのだろう、あの時に無理にでも撤退をさせてればこんな事には成らなかつたはずだ。とムウは思つていた

「今シユウさんは何処に入るんですか！」とムウさんに居場所を聞いた

「クサナギの医務室に居る……だが」と言おうとしたが

「その次は言わないで下さい。言つたら例え5%の確立でも私は最後まで奇跡を起きた事を信じます」と少し声に怒氣が入つていた。
そしてシラユキはクサナギの医務室へと向かつた。

「シユウさん！」と言つて医務室に入った。だが他の人達も居た…。

全員が全員複雑な表情をしてこつちを見てきた。

「重体の人人が居るんだから静かにしろ！」と金髪の女性に注意されたが、今はその言葉すら耳に入らなかつた

そして肝心のシユウを確認した。正直見るに耐えなかつた。体全体

に痣や内出血が有り口には血を吐いたと思われる後があつた。更には骨が折れているのかヒビが入っているのか謎だが、ギブスが体に付けられていた。そして右腕に点滴をのチューブが付いており体内には心電計のコードが張り付いていて呼吸も荒かつた。正直まだ生きてる方が不思議なほど怪我だつた

「なん・・で・?何でこんな事に?」とそう言つしかなかつた。オーブのハンガーで無事に帰つてくると…今回も大丈夫と聞いたのに何故こんな事に?

「シラユキさん大丈夫ですか?」とキラ君が尋ねてきた。だが「どうして?どうしてこうなつたの?無事に帰つててくれるつて…言つてくれたのに」と他人の言葉すらも耳に入らず、そう呟いて涙を流した。

さすがに見るに耐えなかつたのか「オイッ大丈夫か!しつかりしろ、お前にとつて辛いが此れは現実なんだ受け止めろ!」と金髪の女性が言つてくるが、この言葉に何故かシラユキは怒りを覚えた

「あなたに…貴方に何が判るんですか!何もしら(パンツ!)…ツ!」シラユキはカガリに怒りをぶつけようと仕掛けたがキラに叩かれた

「叩いたのはごめん。でも悲しいのはキミだけじゃないんだ。カガリだって父親を亡くしてるんだ、だからそんな事は言つちゃ駄目だよ」とキラが謝りつつも自分の間違いを言われた。

叩かれて少し冷静になつたシラユキは自分の言つた事を少し反省してしまつた「…すいません皆さん感情的に成つて、私ちょっと頭冷やしてきます」と言つて医務室を出て行つた

「私最低だな…」と呟きながら「しつこく来るまでに乗つてきたエンジエルまで向かつた。

来た時はシュウさんの事で頭が一杯だったがM-1アストレイが並んでるなかキマイラが目に付いた。

何故か違和感を感じたので近づいてみた。良く見ると所々機体がボロボロに成っていたキマイラが居た。後方を確認すると前有つた筈の背中に付いていたディンの羽が存在していなかつた。

「ヒドイ…こんなに成るまで戦わないといけない激戦だつたなんて」と思わず呟いてしまつた。幾らエンジエルを使っていても、未だにシラユキはシュウには勝つた事が無い。もし自分が出ていたらこの程度の損傷で済んでいたのだろうか?と思つていたところを

「あらつ?貴方確かにシュウ君と一緒に居た」とエリカさんが近づいてきた「シラユキ・カグヤです。この機体どうなりますかね?」とシユウの愛機が如何なるか気に成つてしまつた。

「正直言つて最悪ね、機体が悲鳴を上げてる様な物だわ。それに所々ケーブルが焼ききれで修理に時間が掛かりそうよ。正直他の機体に乗りえた方が速いんじゃないかしら?」と言つていたが

「すいません、でも此れはシュウさんが一番大切にしてる機体なんです。何とか直してあげて下さい」と頼み込んだ。

「ふう、判つたわ。シュウ君を大切にしてる子にまで頼まれたら引き下がれないわ。何でシュウ君はこんなに可愛い子なのに鈍感なんかしらね?」と溜息を付いてしまつた

「仕方ないですよ。シユウさんって何か機械をいじる事が好きですから、そのせいで鈍感に成つても可笑しく無いです」と軽く諦め気味に成っていた

「あつ、そうだ。もし良かつたらキマイラの中に残つてた戦闘の映像でも見る?」と言つてきた

「戦闘データが残つてるんですか!…さつきコードが焼ききれなかつて言つたからデータも一部無くなつてると想つてたのに…」

「データは少し破損してたけど何とか元には戻せたわ。此れを見て戦闘パターンを増やしてみる事ね」と言つてUSBメモリーを渡された。

「ありがとうございます。では失礼します」と言つてエンジエルに乗り込み。ジャンク艦へと向かった

今回得た戦闘データを少しでも真似をするために神経を研ぎ澄まし、本物と見間違える事の無い技を得る為に一人に成りたかった。

だが…「シユウさんと私のメインとしてる戦闘全然違うじゃないですか!…これじゃ全く参考にも成らないかも」そうシユウとシラコキはお互いにメインに使つて居る武器が違うのだ。

シユウが射撃をメイン・シラコキは格闘を面に戦つて居るせいで格闘戦以外の場所は全くと言つて良いほどに経験に成らなかつた。

そして一つだけ大きな差が出ていた。

そうリミッター解除を使うか使わないかの差だ。正直言つて彼女は

畏怖していたのだ、エンジールとキマイラはリミッター解除を使つか使わないかによつて戦闘の状況が例え不利でも一気に覆せる

でも命の危険性の有る物をそこまで使いたく無いと言つ本音も有つた。

「はあ、私つて全然駄目だなあ」と思つて映像を見続けていた。そして機体がバズーカの着弾を由にした瞬間に驚いてしまつた。

「うそっ・・・あのシュウさんが敵の攻撃を避けれないなんて」と由の前の光景に絶句した。シラコキが今まで戦場に出て側で見た所ではシュウは弾はかすつても、直撃をする事は余り無いのだ。反応すら出来ず、マトモに食らうのは既にこの時に何かが有つたのでは?とシラコキは思つしかなかつた。

「シユウさん貴方はまだ何か隠しているんですか?」と呟く事しか出来なかつた。

→シユウS-I-D-E

「はあ・・・何でこうなつたんかねえ」と言つしかなかつた。

「それは貴方がアホだからですよ」と女神が頭を悩めながら言つてくる

「アホってヒドイですね。しかも頭痛大丈夫ですか?」と聞いてみたが

「誰のせいだと思ってるんですか?今回で此処来るの3回目ですか?予想外も良い所です」と言われたが

「俺も好きで来てんじゃねえよ、コニッター解除の反動で死に掛け
て来てるだけだ」と言い返した

「やつぱりあの救済策必要だったんじゃ?」「どうシッシュ言つてるが
無視するシコウだった

「まあ体の方が目覚めるまで精神は此処に滞在させてもいいんだ?」
と聞いていた

「えつ? まあ目が覚めるのも早いですけど、直ぐにはMSの方には
乗れませんね」と言われて

「はつ? どう言ひ?」とだ。今俺の体どうなつてんだ?」と聞いてみた

「自分の体を見たいんですか? 濕死の体なのに……」と言われたが
「5分経つたら体がどうなるのか確認したいんだ。まあ、よつはMSを作り出した物として責任持つて最後まで確認してやるもんだ」と言つたが

「この機械オタめ……」と言われながら目の前に映像を出された。

「ふむふむ、5分間使うと体はボロボロに成るんだな。しかし自分の体酷い有様だな」と自分の体を見てそう呟くしかなかつた

(はてさて、この瀕死の状態から復活したら全員何を思つかねえ?)
と其処を気がかりに成りつつもデータを取つていた。

暫くボクーとして宇宙眺めていたシラユキだった。

~ SIDE END ~

しかし見ている途中でフリーダムとシャトルが飛んでいった。

「何か有ったのかな?」と呟いた。このまま進路ではヤキン・ドウ一工方面だ。多少気になりハンガーへと向かった。

「シユウさん今回だけ借りますね」と言つてシユウが使っていたガトリングシールドを装備し出撃した

そしてシャトルとフリーダムに近づき「如何なさったんですか」と聞いてみた

「父上に話をしに行く」とアスランが答えた

「そんな態々死に行くような物じゃないですか」と言つたが

「大丈夫、僕もアスランもシユウさんも貴方もまだ死ねないはずだと思います」とキラ君が言つて来た

「そうですね、まだ私達は死ねませんね」と言つて機体が進める領域まで進みシャトルを見送った

「取り敢えず此処で待機しましょう」とシラコキが言つて「そうですね、待つときましようか」と言つて帰つて来るまで待つていたが

（一時間後）

エンジェルとフリーダムの索敵レーダーにMSと戦艦の情報が出てきた。

「行きましょー」と言つてエンジェルを起動させ戦艦へと向かつ

た。少し遅れながらもフリーダムも付いてくる。

そして確認したところではミサイルがピンク色の戦艦に当たるとして、いたが「やらせないっ！」と言つてガトリングシールドで叩き落した。

そしてジンとシグーが一機ずつ突っ込んできたが…。

（怖い…怖い…怖い…怖い…怖い…怖い）とシラコキは思つていたが、

（それでもシユウさんは私を信頼してくれた、今こそその信頼に応えてみせる！）と思い切り

「コミッター解除…30秒間」と唇が震えながらもそう呟いた。シラユキは怖かつたが、シユウを心配させない為にもそつ茲を機体を動かした。

直後エンジェルは目視出来ない速度に入り固まつて動いていたジンはブレードで切り裂かれシグーは咄嗟に危険性が判つたのか散開しだが

「遅すぎますね」と眩き1機はガトリングシールドで移動先を予測し撃ち放つて機体を蜂の巣にし、2機目もキマイラが遣つたように体を捻らせ蹴りを放ちカメラを壊した後に追い討ちを掛けるようにガンブレードの貫通弾を撃ち込んだ。

そして最後のシグーが爆破したと同時にエンジェルのコミッター解除は終了した。

そして初のリミッター解除で呼吸が速かつたが使いこなせば強くなると確信したシラユキだった。

フリーダムの方を確認したひりHターナルの艦長と話しているようだ、流石に邪魔をしたくないので

「Hンジエル今から帰還します」と言って充実感を持ちながら戦艦へと戻つて行つた。

PHASE 24（後書き）

シラコキ「いやあ、みやべへコリッター解除出来ましたね」

抹茶「正直言つて遅いと思うがな」

シラコキ「酷いです。そんな事言わないで下さー」

抹茶「いや、仕方ないだろ、皆からしたら要約コリッター解除使い始めたかと思った人も少なくない筈だ」

シラコキ「うう、本当だつたら辛いですよ、でもあれを今まで使わなかつたのは死ぬと叫ぶ恐怖が有つたからですよー」

抹茶「そつかい、まあでもこのまま使い続けられそつだろ?」

シラコキ「ええ、未だ怖いですけどシロウさんの期待に応えるのと慣れたいですからね」

抹茶「そつかい、じゃあ後書きも閉めるか」

抹茶・シラコキ「さてシユウウ（せん）は生き残れるのか？次回お楽しみに！」

「」意見・「」感想ありましたらドンドン書いて下せ
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また「SHIDE」で何か有りましたら書いて下せ
いて下せ

PHASE25（前書き）

抹茶「ようやくハイズ25を書き上げれた」

シリコキ「お疲れ様です。しかし今日は時間掛かりましたね？」

抹茶「終盤に入れば入るほど話を書くのも難しくなるって物だよ。いついつの時自分の駄文の怨めしと他の作者の文才能力が羨ましい」

シリコキ「はあ、そうですか。そういえば今回どういった話に成つてるんですか？」

抹茶「ん？ 今回はドミーランが初登場する場所だ」

シリコキ「メンテルクロニー付近での戦闘ですね。判ります」

抹茶「まあ本編読めば大抵内容は判るわ」

抹茶・シリコキ「では本編をお楽しみ下やこー」

「ふう・・・」シラコキはショミレーターから出てため息をつこうとした。

前回エターナル防衛線でリミッター解除を使い始めたが一刻も早く慣らす為に同等のGをショミレーターに掛けて1分間の事を30分の休憩を入れて訓練をし始めた。

しかし戦場で戦う時と同等のGが掛かるせいか疲労感が半端無く、休憩無しでやるとショウの一の舞に成る恐れが有るので慎重にやつてはいるが…。

「それでもショウさんみたいにリミッター解除上手く使えないなあと愚痴をこぼしてしまった

そつ、リミッター解除は速度に慣れないと逆にテブリに突っ込むなど等色々な危険性も残るのだ。

シラコキは今さつきから何度も練習しているが何度もテブリに突っ込んでいるのだ。その点ショウは、ほぼ練習無しで使い続けているので才能が有ると言えるだろ？。

「はあ、ひじひじ考へても無駄ですね、この後の進路聞かなきや」と言つてブリッジへと向かつた

そしてブリッジに入った瞬間に久々に見た顔が有つた。

「バルドフルード隊長！？」と生きていた事に驚きを隠せなかつた

「やあシリコキ君じゃないか、久しぶりだね」と陽気に挨拶してきましたが

「ええ、お久しぶりです。隣にいる女性はラクス・クラインさんですか?」と気になって聞いてみた

「ええ改めてラクス・クラインですわ。共に平和な時代を創りましょ」う」と微笑んできた

「シリコキ・カグヤです。これから宜しくお願ひします」と語りて軽く会釈した

「やつ言えばショウ君は如何したんだい?何時もシリコキ君と一緒に居ると思ったんだが」と気まずい事を聞いてきた。

「ショウさんは今キマイラのコリッター解除の影響で意識不明の重体です」とシリコキは答えた

「じゃあ、あの時ミサイルを叩き落してくれたMSのパイロットってシリコキ君なのかね?」と聞いてきた

「ええM-1アストレイを改造した機体 シュウさんはエンジニアと名付けてます」

「やつかい、良い機体を彼は造ってくれたんだね」と語ってくれた

「はい、やついえば今私達は何処に向かってるんですか?」と行き先を聞いた。

「今は私達はレ4メンテルゴロニーに向かってるわ」とマコニーさんが答えてくれた

「確かにあの場所は特に大きな損傷は無くて今は廃棄されたゴロニーでしたね」

「では私は、用事があるので失礼します」と言いつてプリッジから出て行った。

「さて・・・とシユウさん様子でも見に行きましょうかね」と言つて医務室へと向かった

未だ目覚める余地が無くてもそれでもシラコキは暇が有る間はシユウを見に行つていた

「シユウさん、そろそろ起きて下さいよ。貴方が起きなきゃ皆何時までも心配しますよ?」と眠つてゐるシユウに話しかけた

だがシユウは未だに目が覚めようとしない

「何でこんなに成るまで無茶したんですか?私の力が足りないですか?」と軽く涙目に成りかけた

「如何してこんなになるまで戦い続けるんですか?もつと私を頼つて下さいよ!」と涙を流しながら怒つた

だが涙を零していくなか出撃要請が鳴り始めた。咄嗟に涙を拭いて

シユウの方を向いた

「私は次は絶対に止めて見せます、貴方が無茶しても私が止めれる
ように頑張りますから見てて下さい」と自分の力を見せる様に言い、エンジェルへと向かった。

ハンガーでエンジェルに乗り込もうとしたら

「嬢ちゃん頼むから壊さないでくれよお」とマードックが声をかけてくる

「判つてます、被弾したら死ぬかもしれないの当たりたくないで
す」と言つてハッチを閉めた

「あつ、そうだ、もしかしたら使うかもしないので借りて行きま
すね」と言つてシユウが使ってたグレネードランチャーを取つてカ
タパルトに着いたが

「あつ！嬢ちゃん待つたーーー」と聞こえたがもう遅いエンジェ
ルは宇宙へと飛び出した

そして目の前の光景シラコキは驚いてしまった、目の前にもアーク
エンジェルがいた。だが良く確認したら色が違つた。

と言つた事は同じアークエンジェル級でも名前が違うのだろう。

そして今は戦場に居るの了些細な事は気にせず目の前の事を見な
ればと思い目の前のダガー達に斬りかかって行つた。

敵からも突然の事で驚いたのだろう、少しだけ振り向き防ごうとは

したがダガーは両腕を切り落とされ戦闘能力を失った。

そして此方を脅威と受け取つたのか3機のダガーが陣形を組んで迫ってきた。同型機だから連携を組み易い筈だがお互いの動きを邪魔し合つてゐる様な物が目に付く。

だが通信で話し合いが終つたのか一機のダガーがサーべルを抜いて斬りかかつて来てもう一機がビームライフルを連射してくる。

（まあ一般的な攻撃方法としては此れも正しいですけど）と思いつながら、体を捻らせる等必要最低限の行動で回避していく、そして突っ込んでくる2機のダガーを体を捻らせた勢いで1機目を斜めに切り裂く。

だが大振りの攻撃で隙が有ると判断したのだろう、もう一機のダガーモ攻撃に参加する…が

「上半身だけに装備されてる武器だけでしか攻撃できないと判断しないで下さい！」と言つて残つた脚で一機纏めて蹴り飛ばした。

そして先程取つたグレネードランチャーを構えて引き金を引いたが、弾は何も発射されなかつた

「えつ？えつ？何で！？」と思ひながらモニターを見たら弾切れの文字が出ていた。きっと爆発を恐れてグレネードランチャーに入っていた弾を全て抜いたのだろう……だが今の状況で此れは酷い

取り敢えずシラコキは「マ……マードックさんのバカ

……」と叫んだいた

そして態勢を立て直したダガーが再び此方にビームライフルを向けるが、撃たれる事は無くダガー達がビームに貫かれ爆破した。

「何が？」と一瞬驚いたが「大丈夫か嬢ちゃん？」とムウさんが聞いてくる

「ありがとうございます」と感謝して再び意識を戦場へと向けた。だが「次から気をつけろよ」と注意された

しかし、確認しなかつた自分も悪いが最悪な事にエンジェルに弾等は積んでいない。此れではただの鉄の塊と何も変わらない。流石に使えない物を何時までも持つていっても無駄なので腰に再び掛けた。

そして少し落ち込んでいる所をキサカさんが

「すまないがクサンagiに何かが引っ掛ってる切つてくれ」と頼まれたので

「判りました、直ぐ行います」と言つてクサンagiの付近に迫った。

何かワイヤーらしき物がクサンagiに絡み付いていた。

だが「この程度でしたらガンソードでも切れます」と言つてワイヤーに向かってソードを振り下ろし簡単に切り離した

だが流石にワイヤーにも数があるのかクサンagiは未だに動かない、急いで切つていたが急に攻撃を表す警報が鳴り響いた。クサンagiに被害を出すわけにも行かないでのシールドを構えて防いだ

しかしシラユキはこの攻撃には見覚えが有った。そう確かキマイラの戦闘記録で見た事がある攻撃だ。

まさかと思い確認したが存在していたのはカラミティでは無くレイダーだった。

「何だ、あの青い機体じゃないんだ。まあ良いや撃退させるのは変わり無いんだし」と言つてもう一本のガンソードを抜き出した。それが戦闘の合図に成ったのか、レイダーがミヨルニルを放ってきた。

当れば流石に脅威には成ってしまう、だがそれは当ればの話だ。ミヨルニルは直線的なので避けるのも容易い、そしてミヨルニルが迫つてきている中敢えて前へとエンジェルは突っ込んだ。そして当たりそうな所を機体を左に傾けミヨルニルを掠らせながらもガンソードでワイヤーを切り落とした。そしてミヨルニルは宇宙を漂つた。

「さて反撃ですね」とあぐどい笑みを浮かべながら「リミッター解除30秒間」と言つてレイダーの側面に移動し腕を切り落とそうとするが…。

「クツ！」腕を切る事は叶わず装甲に切り傷を付ける事しか出来なかつた。

だがクサナギは他のM1アストレイがワイヤーを切るのを遺つてくれたのか再び動き出していたのが目に付いた。流石に灰色のアークエンジェルは不利と察したのか撤退し始めた。レイダーも撤退命令を受けたのかMA形態に変形し戦艦に向かっていた。

だが急にストライクがメンデルコロニー内に入つていた。後を追う様にバスター・フリーダムがメンデル内に入つて行く

「ああ、もう何遣つてるんですか、唯でさえ戦力が少なくて何時襲

われるのか判らないのに」とシラコキはつい愚痴つてしまつた。

流石に心配には成つたがこれ以上戦力を割くのは危険と判断してい
るシラコキは大人しくアークエンジェルへと戻つた。帰還したのは
良いが未だに警戒が解かれる事は無く、パイロットルームで待機す
る事に成つてしまつた。

だがシラコキは別の事をずっと考えていた。そうPS装甲への対策
がエンジェルには全くと言つて良いほど無いのだ。幾らエンジェル
の攻撃が強力とはいえ攻撃が通用しなければ意味が無いのだ。

「はあ、こんな時シユウさんが居たらガンソード改造してくれるん
だろうな」とついつい倒れている人頼りにしたいと思つていたが

「暫くはPS装甲着いてる機体には、仕方ないけどビームサーベル
とビームライフル使うしかないな。ガンソードよりENを食うけ
ど背に腹は変えられないよね」と自分なりに対策を考えた。

そして有る事を思いついた。「そうだー持つんじゃなくて着ければ
良いんじゃ?」と言つてクサナギまで向かつた。そうシラコキはあ
る人物へと頼ろうとした。

「そう、その人は…………エリカ・シモンズ他モルゲンレー
テの工場で働いていた人に会いに向かつた

「エリカさん居ますか?」と早速クサナギのハンガーへと入り聞い
てみた。

「ええ、居るわよ。どうかしたの?」と後ろから急に声をかけられた

「うひやあ！」と驚き変な声を上げてしまつたがそんな事は、後で良いと思つてしまつたシラコキだった

「あのですね。私なりにエンジニアの追加武装を考えてみたんです
けど手伝って貰えませんか？」と言つておずおずと設計図を渡した。

「ん？ ちよつと見てみるわね」と言つて追加武装を軽く眺めた。

そして「良いわね、確かにエンジニアもキマイラもロボ兵器持たないから、ある意味便利な武装に成りそうよ」と言つて手伝ってくれる事を了承してくれた。

「ありがとうございます！」とシラコキは感謝したが

「良いのよ、私達もショウ君の設計したエンジニアには興味が有つたから」と笑っていた

「そうですか、ではジャンク艦へ行きましょつか」と言つてモルゲンレーテの職員達はジャンク艦へと向かつた。

以前ドミニオンと戦う前にショウが使つて居るジャンク艦を見せたら

「此れ凄いわね。改造する為の設備が揃つて居るからクサンガよりも便利ね。シコウ君売つてくれないかしら？」と最後等へんが本音の様に言つていた。そして改造するならショウの戦艦が良いといつるオルが出来ていた

（2時間後）

流石にモルゲンレーテの職員総出で手伝つたお陰で直ぐに完成した。

今回新しく武装を着けたのは左肩にデュエルのシヴァを真似てビームライフルを装着させ、両腕にビームサーベルを着けた。

「ある意味相手が腕の物をビームサーベルって気付かなかつたら予想外の一撃として驚かせれますよね」とシラコキが思わず言つてしまつた。

「ええ、そうね。でも生き残れる為なんですから此れ位しなくちゃね」と言つて来た。

そしてシラコキはエンジェルを見上げた（この機体を大切な人達を救える力にしたいな）と物思いに耽つていると、ジャンク艦に付いていたモニターが開きマリューさんが映つた。

「シラコキさん聞こえる？ 直ぐに発進して欲しいんだけれど出れる？」と聞いてきた

「はい、エンジェルの改造も終了したので直ぐに出れます。しかし如何したんですか？」と聞いてみた

「前方からアークエンジェル級のドミニオン・後方から3隻ナスカ級が来てるの。今は強力な戦力が一つでも欲しいのよ」と言つて來た

「判りました。直ぐに出ます」と言つてシラコキはエンジェルへと乗り込もうとして「エリカさん達はクサンギに避難して下さい。ジャンク艦は戦闘能力が其処まで無いんで危険です」と教えた

「そうね、私達も避難するわ、気をつけてね」と言つて救命艇に乗り込みクサンギに避難して行つた。無事に避難できた事を確認したシラコキはジャンク艦を出た。

しかし次の瞬間ザフト軍の行動に驚きを隠せなかつた。 そつ戦闘が始まゐる直前に

く地球連合軍艦アーケンジエル級に告げる… 戰闘が開始する前に本艦において拘留中の捕虜を返還したいゝ

(こんな時に捕虜の返還? 一時的に戦闘の停戦でもするのかな?)
と思つたがその考えは次の瞬間打ち碎かれた。

そう返還したいと申しておきながらもザフト軍はMSを発進させた。
そして連合軍の方もそれに反応しMSを発進させた此れでは捕虜が流れ弾で死んでも可笑しくないものだ。

「クツ! ザフト軍は一体何考へてるの! ?」 とてもじやないが正気の沙汰では無いとシラユキは思つてしまつた

それに前後から攻められる為どつちか一方を強行突破せずにして待機し続けても結果は最悪な物だ。 どうやら戦艦の向きを見ると、
エサリウスはエターナル・クサンク艦に攻撃を仕掛けドミニオンにはアークエンジェルが遣りあつよつだ。

「正直どつちの援護に着くかは言わなくとも充分判りそうね」と言つてエターナルの方を援護し始めた。

正直に言えばNJ_C^{ニコートロンシャマーキヤンセラ}の積んである機体がアーケンジエルへ行つてゐる時点で戦力として充分すぎる。

逆にエターナル達の部隊は其処まで能力の高い兵士が居るとは見受けられないでのそつちの方が心配だ。

そして自分がこっちに来て正解だと思つ通信が来た「シリコキ君此処から一刻も早くこの宙域から脱出する為に我々の方で戦艦を落そうと思う、その為に周りが疎かに成る危険性があるから敵MSの注意を引き付けて欲しい」と頼まれた

「了解しました。任して下さい」と言つてガンソードを抜き出した。だがこのMSの脅威性を知つているのがデュエルASがサーベルを抜いて斬りかかつて来た。

「クッ！この機体相手じゃ私も周りに気が配れない！」と苦言しながらシリコキもビームサーベルをガンソードで受けると壊れると判断し早速ビームサーベルを展開した。

流石にXシリーズに乗つてゐるだけ有つてかパイロットもさぞかし強い事なのだろう

しかし「この程度なら…」と言つてもう一本のビームサーベルを下から切り上げる様にやつとおもつたらデュエルももう一本展開してきた。

「なつ！」流石にこの展開は予想出来ず愕然と合ひが起つた。そして後方に下がりバルカンで牽制し合つ流石にデュエルの方が痺れを切らしたのか再び斬りかかつてくる。

「こ」の程度で痺れを切らすなら、まだまだ弱いですね…リミッター解除1分間」と呴き移動する。目標を失つたデュエルは辺りを見回すが此方を見つけられないようだ。

まあ当然では有る、普通にXシリーズの機動性より高い機体が簡単に見付けられる筈も無い、そして「今回は腕一本で許します」と言

つて左腕を切り裂いた。咄嗟に後方に下がったが左腕を失った今エンジニアに勝てる術など向こうには無いだろつ。

だが急に横からジンがデュエルの援護の為に76mm突撃銃を撃つて来た。すぐさま反応したシラユキは落ち着きながら後方に下がる。そしてデュエルとエンジニアの間に弾が通り抜けた。流石のシラユキもジンの無謀さに呆れてしまつた。

「もお！ 敢えて見逃そうと思つたのに…」と言ひて苛々しながらジンの後方に移動しサーベルでX字に切り裂いた。そしてジンが爆破したのを見届けた後にナスカ級が落ちるのが見えた。

（此れで指揮系統は一時的に混乱するでしょうね。はあ、今日は連戦だからちょっと疲れたな）とついつい他の事を考えてしまつた。

そして「シラユキ君」苦労様。宙域を出るまで警戒してくれ」と頼まれたので、最後までエターナル付近を飛び回りながら警戒したシラユキだった。

30分後無事に戦闘宙域から出されたのでアークエンジニアのハンガーへ着艦し割り当てられた部屋に入り込みシラユキはベットへ倒れた。「はあ～疲れたあ～」と言いながら瞳を閉じて次の戦闘に備え眠り始めた。

しかし目覚めた後シラユキは連合の使つた手段に大激怒するのであつた。

シラコキ「今回良く生き残れましたね」

抹茶「んつ？まあレイダーと戦り合つて次はデュエルだろ？生き残れたつて事は実力が有るつて意味だろ」

シラコキ「そうですかね？まあ死ななくて良かつたと思いますよ」

抹茶「人間生きていのほつが何かと良い事有るしね」

シラコキ「そうですね、そつ言へば今回大きな指摘受けたそうです
ね」

抹茶「はいっ深遠の翼さんから」指摘を受け直ぐに訂正致しました。
本当に難いですね」

シラコキ「そうですね、早くシユウさんも復活して欲しいな」

抹茶「オイッ其れつて俺に書けつて言つてるもんだぞ？まあ良一や
そろそろ復活させよつと思つてた頃だし、次も頑張るか」

シラコキ「頑張つてください、では後書きも畳めましょつ

シラコキ・抹茶「さてシユウ（せん）は生き残れるのか？次回お楽
しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン言つて下さい

あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します

また、SIDEで何が有りましたか？

抹茶「さあ今日はシユウの大復活が起ります」

シラコキ「やつたーーー。まあわざと本編に移りましょう」

抹茶「オイオイ前書きはやんとしないとマズイんだよ」

シラコキ「もうですか。しかし最近投稿回数に時間掛かってませんか?」

抹茶「氣のせいだ。多分」

シラコキ「氣のせいじゃないですね。如何したんですか?」

抹茶「いや最終話に行くに連れて書くのも難しいんだよ」

シラコキ「もつと頑張つて下さこよ」

抹茶「ああ頑張るかな。さて前書きを閉めるか

抹茶・シラコキ「では本編をお楽しみトモーーーー。」

～？？？～

「『じめんシラコキ』お前は連れて行けない。」ヒシリコウの声が聞こえる

「えっ？ 待ってくださいー！ 私を一人にしないで！」とシリコキは止めようとして腕を伸ばそうとする、だが伸ばした腕はショウには届かない、どんどんシリコキとショウは距離が離れていく。追いかけたいのに体が全く動かない

「お願い、止まつてー！」と懇願するが既にショウの姿が消えていく
「『じめんな、そして今までありがとな』」と誓つてシリコキは消えた
～？？？～ END～

「私を置いていかないでー！」と叫びながらシリコキは目覚めた。

「何なの今の夢は？」と汗びっしょりになりながら手を頭に押されたり。まるで全員の目の前から消え去る夢を見てしまった。

(全く夢にしては最悪の悪夢ですね)とシリコキは思つてしまつた。そうシユウが消えるはずが無い、彼は毎回傷ついても最後には起きて助けてくれる。そう思い続けたこんな悪夢が現実に成らないよう願つて。

だが考え方をしている所を「起きたかね？少し伝えたい事があるから至急ブリッジへ来てくれ」とバルドフルドさんに言われた
何か用らしげが何故モニター越しで伝えないのだろうか、それほど

重要な事な事が起きてしまったのだろうか？直ぐにブリッジを向かつた。

「ブリッジ」

ブリッジに着いたが内容を聞く前に最悪な事だと判つてしまつた。全員が渋い顔をしていたからだ。

そしてバルドフェルドから口が開いた「要約来ててくれたか、シラコキ君最悪な事にボアズが落ちた」と言われたが

「えつ！？」と正直今聞いたことが「冗談だと思つてしまつた。

そうボアズは一度シラコキも軍に居た時に聞いた事がある。 そうプラントの前にはボアズ・ヤキンドウーエと言つ一つの拠点がある、シラコキも地球に居た時にモニター越しで見た事が有るが堅固な構えに充実した戦力決して生半可な戦力では落ちる筈が無いと考えていた、しかし、たつた今落ちたと聞いた。

「何ですか？あの場所には何時か攻撃されると予測は出来ましたけど、そう簡単に落ちる筈が無いです。何か決定打が有るんですか？」と正直落としたのは「冗談だと思つたが

「決定打は…………核だ」とその言葉を言つた瞬間ブリッジに居た人々は再び苦虫を噛み潰した表情に成つていた。

「えつ？核ですか？」と正直悪い「冗談にしか聞こえなかつたが全員の表情を見ても先程の表情と何一つ変わってすらいなかつた、。これまでシラコキも要約冗談では無いと判つてしまつた。

「そんな、また血のバレンタインの惨劇を繰り返すつもりなんです

か！？」と流石のシラコキも今回の事には、驚きも有つたが怒りが隠せなかつた。最悪だ、幾ら落とせないからと言つてこんな手段を用いてくるとは、誰も思いもしなかつただろう。

「判らん、しかし連合も核を使った事でザフトも核を使わないという確証が無くなつた。もしかしたらもつと最悪なものを出して来るかもしれん」とバルドフェルドも今回の件については信じられなさそうだ

「とりあえず次やる事は連合が再び核撃つてきた時に私達が撃ち落すんですよね？」と聞いてみた。

「ええシラコキさんが言つたとおり私達は連合の核をプラントに撃たせない事ですわ。核を使つたら新たな憎しみと悲しみしか生まないのに何故使うのでしょうかね？」とラクスも悲しそうな表情につっていた。

「戦いを遣つたつて、残るのは悲しみと復讐だけと何故判らないんでしょうね？：取り敢えず私も急いで準備するので失礼します」と言つてブリッジを出て行つた。

「もしシユウさんが今起きてこの話を聞いていたら怒り狂つて連合を潰しに行きそうですね」と今シユウがこの状況で眠つてゐる事に少しの安堵を覚えてしまつた。彼がこの事を知つたら如何いう行動を起こすのかシラコキでも想像が尽かないのだ。

ただ想像するならば、彼ほどの味方を守りたいと思つてゐる人物が連合が勝つ為の手段が核と知つてしまつた瞬間連合の情報を知り尽くして核を持つ戦艦を自分の身を滅ぼしても破壊しに掛かるのが目に見えている。

だが彼女は知らなかつた。シユウは眠つていても、この事態を既に知つてゐるという恐ろしい事が起きていたなど…。

「シユウシード」

「……そうか、連合は核を使つちやつたか」と表面上は冷静にしているが心の底では腹が煮え繰り返つているのだ。

「此れは酷いですね、同じ人間同士なのに如何してこんな事するんですかね?」と女神が言つていたが

「さあ、ただナチュラルとコーディネーターは同じ人間なのに体の出来が違うってだけで戦争だからなふざけてるよ。しかし此れじやザフトもジエネシス使用して来るのは田に見えたな」と言い放ちながら座っていたソファーから立ち上がつた。

「貴方も起きて戦うんですね?」と聞かれてしまった

「ああ、今回の件については、俺自身怒りを隠せないわ。こんなのは虐殺だ。どっちにも正義が有るんだろうが、こんなのは使つてる時点で言う資格すらない」と言い切つた。

「一つだけ聞かせてください。貴方はまた無理をして体をボロボロにしてまで戦うんですか?」と尋ねてきた

「何でそんな事再びを聞くんだ?」と流石に同じ事を聞いてくるので不思議に思つた

「良いから答えてください」と真剣な表情で聞いてくる。(流石に今回は冗談を言つより真面目に言つのが女神に対する礼儀だらうな)と思つてしまつた。

「そうだな…確かに女神様の言つた通り俺はまた無理して倒れるかもな。もう生き残れる時間が少ない俺は死にたいと思つてるのかな？」と自分の手を見つめながら皮肉げに言つた

「どうして貴方は其処まで無茶をするんですか？もつと仲間を頼つても良い筈なのに」と聞かれた

「判らない、ただ自分の信念を貫き通したいからかな」と笑つてしまつた

「自分の行う信念の為だったら周りが悲しんでも構わないと?」「少し女神の声に怒氣が入つてゐる

「ああ、俺自身本来はタイムリミット式で既に死んでいる様なもんだ。確かに皆を悲しませるのは悪いが、此ればっかりは止められない。俺自身誇りにしている信念を貫き通したいんだ」と言いきつた。

「ふざけないで下さい！何でそつ自分の命をそつ軽々しく扱えるんですか！私は貴方を再び死なせるために生かしたんじゃないんです！」と完全に怒つてきた。

「悪いけど、あんた最初に『貴方自身如何したいか良く考えろ』って言つたよな？俺が選択するのは、自分の命と引き換えで可能な限り人の命を救うつて選択だ」と冷ややかな声で答えた

「傲慢すぎますね。貴方のような人間が一人で持つには重過ぎる課題ですよ」と睨みつけてきた

「そうだな、確かに傲慢で一人が持つには重すぎる。だけど俺

は最低でも肩でも何とでも言われても良い。最初から諦めて立ち止まつてより自分が本当に遣りたい事が出来てこそ満足な人生つてもんだろ?」と自分の死などとに受け入れていると思わせる笑みを浮かべていた。

「卑怯者ですね。貴方は卑怯者です。そんなにも固い意志を持つていたら、もう何言つても無駄じゃないですか」と女神が悲しんでいる。こんな自分の命を軽々しく扱つてる自分の為に悲しんでいくれる。

「すいません、貴方まで悲しませてしまつて。でも、もう俺には時間が無いから自分が満足できる結果が残せるように向ひの世界に戻るよ」と言って扉に向かつて歩いて歩いていた

「そうですか、頑張つてくださいね。今まで言い忘れてましたけど、この部屋と現実世界の時間の経過少し違いますからね」と悲しみながらも今思い出すように言って来た。

「へつ?じゃあ今現実はどうなつてるんだ?」と逆に聞いてしまつた。

「そうですね、今は連合が戦力消耗してるのに2度目の攻撃開始していきますね」と言って来て

「なつ!最終決戦がもう始まつてるじやん!直ぐに俺も戦線に行かなきやー」と言って部屋を出て行つた

「全く最後まで慌しいですね。でも頑張つてくださいねシユウさん、貴方の遣つてる事は、現実の世界では認められないかも知れません。でも決して無駄ではないんです。貴方は自身を削つて人を救う行動

が私達から認められつつあるんですから」と微かに笑っていた女神がいた。

（SIDE END）

やはり連合の核を撃つた行動に対しての報復が遂先程帰ってきた。ザフトが秘密裏に開発していたジエネシス…最初の一度目が連合艦隊に向けて遂先程放たれた。流石の私達も一度目のジエネシス発射後は危うかつたから戦艦に撤退して補給を行っていた。だけど連合の方は半分以上の戦力を失つていながら全く撤退せず、態勢を立て直して再び直ぐに攻撃を仕掛けている。無謀な行動だと判っている筈なのに理解できぬのだろうか？

私達も連合の艦隊から2度目の核が発射されると言つ情報を聞いて、急いで飛び出してきた。だけどどちらも後が無いのだろう、戦闘が本当に激しい。

「クッ！こんなの一瞬でも気を抜いたら落ちちゃう…」と言しながらビームクロスを開いて迫つてくるゲイツを蹴り飛ばす。だがこの程度で安心してはダメだ。常に周囲に気を配らなければ、宇宙なので360度何処から攻撃しかけてくるか判らない。

つまり、咄嗟に背後から危険を感じたので左に移動する為に思いつきリブースターを起動させる。先程シラユキが居た場所にビームが通る、もし動かなければ間違いなくあの世行きだつただろう。

「全く危ないですね！」と言いながら背後に居た、ダガーを肩のビームライフルで貫く、だが今度は左右からシグー1機 ゲイツ一機が襲つてくる。

「あつーーもうコミッター解除！」と言つて機体を動かす（例え相

手が新型機でも動くパターンがある筈（）と書いてガンソードを抜いてビームライフルを連射する。ゲイツは、ビームライフルの連射を難なく避けるがシグーは避けきれずライフルが右足に貫通し焦つた所をガンソードで切り裂かれる。すぐさま誘爆を避けるため後方に下がる。すかさず2機がクローを展開してくるが…「その程度の実力じゃ甘いです！」と言つて内蔵された貫通弾を放つ1機は当たりたくない為か後方に下がるがもう一機は頭部を壊しながらも迫つてくるが「命を無駄にしたいのですか！？」と正気を疑いながらも腕のビームサーべルでコックピットを貫いた。もう一機は味方が敗れたという恐怖から逃げ出しが、近くに居たダガーによつて機体を貫かれ落ちて行く所が見えた。

今の光景に『戦争だからしょうがない』と一蹴しなければ自分もあると改めて自負してしまつたシラユキだつた。だが幾ら攻撃しても一向に敵の数が減らない「一体何時までこの攻撃は続くんですか！」と軽く疲労し掛けていた所を

再びジエネシスが発射シークエンスに入つてゐるのが通信で聞こえた「マズイですね」と言いながら範囲外まで離れる。その後極太のレーザーが通り抜けた。

「こういう危険な兵器は抑制の為に有る様な物なのに何故人は、使つたら自分達も虐殺する人と変わりない事に気付かないんですかね？」と悲しくなつてきたが、此処は戦場だ。甘い感情は今は余り持てない。

そして今発射された場所は判らないが、それでも連合にとつては重要な拠点だろう、なのに未だに退かない。死ぬ氣しかないのか？と連合の最高指揮官に問い合わせたくなるほどだ。

そして再び大切そうにミサイルを持ったメビウスが出てきた。正直攻めあぐねた連合はさつき落とされた拠点の報復の為に、プラントを落とそうと考えているのだ。

だが「核は撃たせません!」と言つてエンジェルは核を持ったメビウスを追つた。その後を続くようにつリーダム・ジャステイス・ストライクルージュ・バスターが来ている。

確実に連合の放った核は落とさなければ、こんなものは次の戦争の火種の切欠にしかならない、その為に今自分達が出来ることを精一杯するべきなのだ。

そしてやはりエンジェルも普通のMSだ。ミーティア装備の2機が先行して行く、そして一瞬シラコキはあることを思い出した。

（ルージュは今此処に居るけど、もう一機のムウさんのストライクは？）と思つてしまつた。そして彼女は有る噂が頭の中で思い出しつしまつた。

（前聞いた事がある、エンデュミオンの鷹とクルーゼはお互いの存在を感じ取り戦場であつたら殺しあう仲。つまり今此処に居る必要性があるクルーゼ機は存在せずストライクも居ない。つまり…考えられる事はムウさんとクルーゼは交戦中！？）と不安な事が頭に横切り、ストライクの位置を確認し不安に成りながらも向かつた。

やはり予想通りの事が起きていた、ストライクが灰色の新型機と戦つていた、暫く敵機の様子を見ていたが何も無い所からビームが放たれている。その不思議な現象に疑問を覚えながらも「ムウさん援護します！」と言つて新型機へガンソードで斬りかかった。だがやはり新型機一筋縄ではないか、新型機は咄嗟にビームサーベルを

抜いて、ガンソードを防いできた。そしてこつちを蹴り飛ばして距離を離された。この反応と動きから要約クルーゼが乗っているのだろうと少しだけ確信が出てきた。

だが「馬鹿野郎なんで来たんだ！」と叫ばれるが「ボロボロの癖に何言つてるんですか！この機体二機がかりでやらないと到底倒せません！」と逆に叫び返した

そして一瞬クルーゼ機が動きを止めて居た。その隙を見逃すわけ無く「今だ、これでも喰らえ！」と言いながら腕に仕込んであるビームサーベルを展開して斬りかかろうとしたが…再び何も無い所からビームが出てきて左腕を打ち貫いた。

「キヤッ！な・・・何で？」と言いながら危険を感じ後ろに下がる、再びビームが上から落ちてくる。レーダーを確認しても何も居ない。その事に疑問を覚えつつも機体を動かした。

（何か仕掛けが有るのは判る、だがそれが見付かるまでは動き回らなければ）と思い新型機にビームライフルを連射する、だが狙いも定まってないライフルは掠る事すらしなかつた。

正直化物だ、2機がかりで相手しているのに全く相手にすら成っていない、そしてムウももう満身創痍なのかビームによつてストライクの右腕と左足を撃ち貫いた。

「ムウさん…クッ、コミッター解除！」と言つて機体を動かそうとするが、「甘いよ」と言つて羽と両足を？がれる。

「なつ・・・何で」と言おうとしたら「君達の戦闘データを見せて貰つたよ、やはりミッター解除時に数秒静止しなければ成らない。

そこを狙えば動きを止める事なんて容易い事なのだよ」と人を馬鹿にした嘲笑いが聞こえてくる

「なつ！」シラコキですら知らなかつたリミッター解除の弱点を言われ彼女は絶望してしまつた。唯一勝てそうな手段は看破し破壊され、攻撃を仕掛けても再び何処からかビームが来るだろ。勝つ方法は無かつた。

「セヒキニ達とは悲しいがお別れだ」と言つて、コックピットに何かが近づいてくる。小さなビットやらしき物が辺りを漂つている。

「やつやく……やつやくビーム兵器の正体が小型のビットだと判つたが、此処で全て終わり……」「すいませんシユウさん、私此処までのようです」と言いながら扉を閉じた。

だが何時まで経つても痛みも衝撃も来なかつた。（死ぬときは何も感じないのかな？）と思いつつも目を開いた。そこには見慣れた機体が羽を広げてビットを落としていた。

「なつ！？何故ビットを落とせる！私が操作しているんだぞ！？」
と疑問めいた声が聞こえてくる。

「しょせんあなたが空間認識能力を持つて操作していると言つても6割がたは機械任せだ、次の行動への予想位置を立てて其処を擊ち始めたら後はそつちから勝手に当たりに来てくれるわけだ。その程度も判らないのか？」と人を馬鹿にしているが聞こえてくる懐かしい声「シユウさん起きたんですね」と思わず涙ぐんでしまつた。

「ああ帰ってきたよシラコキ、大丈夫か？」と心配してくれる「はい、もう大丈夫です！」と言つて機体を何とか起こそうとするが

機体制御のバー二アが機能しないようだ。

「さてアンタにはシラユキが随分世話に成っちゃったな？まあ……覚悟は出来てんだろうな？」と殺氣を撒き散らしクルーゼ機を睨みつける。

「クッ！だがドラグーンはまだ残っているのだよ！」と言つて再び射出してきたが「ふーん、あつそ……コミッター解除」と言つた。

「ハツ…キミは自分の機体の弱点を知らないのだね！」と言つてドラグーンをキマイラに向けて放つが「正直遅いね、その程度だつたら何回も落ちるぞ？」と言いながら既にクルーゼ機後ろに回りの右腕を切り落とした。

「なつ！？何故だ！リミッター解除の準備時間は如何したんだ！」と疑問から泣き喚いでいるが「はあ、機体を造った本人が弱点知らない訳ないだろ？」と呆れかえつてしまつた

「良いカリミッター解除には一つ条件があるんだ、一つはさつきシリユキが遣つたように動きを数秒止めて、起動させる奴 此れはまだブースターの準備すら終えてないんだ。もう一つは既にブースターのロックを解除している状態だ、これは止まつてる時よりリミッター解除発動までの時間は長いが、準備が出来たら後は好きな時に動かせる俺は此れをスタンバイモードつて言つてけどな。」と言つて再び動き始めた。

「クソッ！」のままじや目的が！」と言つてクルーゼは身を翻して逃げ出した。「はあ、余りに弱すぎるな」と言いながらブースターの解除を止めた。

そしてムウとシラコキは有る事を思つてしまつた。（（圧倒的過ぎるのは良いが来るタイミング良すぎじゃないか？））とつっこいつつ思つてしまつた。

「あつ、今来るタイミングよすぎだらーとか思つただら？」と一人の思つていることを言つてみた

「「ギクッ！な・・・なんのことだ（ドジョウ）？」と焦つて言つてきたが

「はあ、お前等か隠すの下手すぎ。まあ良いや、来るのはタイミング良いのは正直何処に居るか判らなくて探し回つてたんだよ」と言つて疲れてるポーズを見せてきた

「取り敢えず二人とも機体動かないようだから引っ張るぞ？」と言つてストライクの左腕を掴みエンジェルは射出型アーマーシュナイダーで括り付けて引っ張つた。

「つう何で私だけこんな運び方するんですかあ！」と愚痴を言つて来たが「お前はもう少しマニアアルでも読んでリミッター解除の勉強しろ！全くエンジェルボロボロにしゃがつてこの戦争終つたらたっぷり扱いてやるー」と怒りながら言つた。

「ううヒドイですー私だつて頑張つたのにー」と軽く涙を流していつたが「それでもお前が無事でよかつたよ」と照れ隠しながらもシユウは言つた。

「えつ？何でいつたんですか？もう一回言つて下さいよー」とわざと聞こえなかつた振りをした「もう良い一度と言わんー」と怒りながらもアークエンジェルへと向かつた。

だが「如何でも良いけど惚氣話なら戦争終つてからにしてくれ」とやれやれと言う顔をムウさんはしていた。だが「「あつ、」」めん忘れてた」」と一人はその存在をすっかり忘れていた。

「お前等が一番酷いと思つぞ俺は…」とムウさんが少し涙ぐんでたようやくアークエンジェルの近くまで戻れたが、最悪の事態が起きていた……。そうドミニオンがアークエンジェルヘロー・エングリンを発射しようとしていた。

「クツー・リミッター解除！」と言つて掴んでいた腕を放しワイヤーを切り裂いてアークエンジェルの前方まで行き右腕をドミニオンに突き出した。

「なつ、シユウさんダメ！それじゃ貴方が死んじゃう！」と言つてシラコキは前見た夢を思い出し恐怖してそう叫んだが

「大丈夫だ……解放」と呟いてキマイラの右腕の前に何か巨大な盾が出現した。そうシユウが望んだ一つ目の願いは一度だけ攻撃を絶対防御する技をくれと望んだのだ。

そして出てきた巨大な盾はアークエンジェルを包んだ。そしてロー・エングリンと触れた瞬間発射元が故障し爆破が起きた。「さすが現実では造る事が不可能なものだな。しかし頼んだものより少し凶悪に成つてないかこれ？しかし相手の攻撃防ぐだけじゃなく武器も壊すとわね、驚きだ」と言いながらもドミニオンのハンガーへと入つて行つた。この戦争に終止符を打つためにシユウは元凶を殺すのが目的だ。

「ナタルSIDES」

しうじき田の前の光景には驚きを隠せなかつた、突然大きな盾が出てきてアーヴェンジエルを包んだと思つたらドミーオンの発射した、ローエングリンは無効にして破壊まで行つたのだ、あの能力を持つてる機体は化物と変わりが無い位恐ろしい物じやないのか？

目の前の男アズラエルも絶望して顔を真つ青にしていた。「ふつ、悪事を働いた結果が此れか」と自分の体を見てそう呟いてしまつた。このまま私はこの艦と共に朽ち果てるのだろう。

流石に眠くなつてきた（そろそろ眠らせてもらおつかな？）と思っていた頃に後ろのシャッターが開いた音が聞こえた。咄嗟にアズラエルが後ろを向くが両肩が撃ち抜かれた。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアア」と耳障りな声が聞こえてくる。「うるせえよ、今まで殺されてきた奴等に比べれば安い痛みだ」と怒氣を含んだ声が聞こえてくる。

「たつ頼む命だけは助けてくれ。金は幾らでも払うからさ」と命乞いしているが「うつせえって言つてんだろ？喋んな」と言つて再び乾いた音が聞こえて来た。

どうやら相手は容赦なくあの男を殺しに来ているんだらつ。私も殺されるのだろうか？と思つていたが「まだ生きてるな？今から運ぶからもうちょっと辛抱してくれ」と言つて背中に乗せられた。

「お願いだ！置いていかないでくれ！」と後ろから聞こえてくるが「じゃあな、哀れな死の商人さん」と言つてブリッジから出て再びシャッターが下りた。

「直ぐにアークエンジェルに連れて行く、それまで死ぬなよ!」
私にいつてくれる「今更私にクルー達に会う顔が有るのか?」と思
わず聞いてしまった。

「さあな、でもなお互いに本音で話しあつて、それで謝れば許して
くれるさ、人と人の絆がそう簡単に切れるわけ無いだろ?」と笑い
ながら言つてくれる

「ああそうだな。そうかもしれないな」と言つて私は痛みから氣絶
してしまった。

↓ SIDE END ↓

「やれやれ、無茶しやがつて。ボロボロじやねえか」と言つてキマ
イラの後部座席にナタルさんを置いてドリードリオンから出て行つた。

「ショウ君? 何をやつていたの?」と聞いてきたので「ナタルさん
を救出した、大怪我だから直ぐに医療班を、あとドリードリオンは戦争
の元凶以外無人だから思いつきり遣つてくれ

「そうですか、有難う御座います。ではアークエンジェルはキマイ
ラ回収後にローエングリンを返します。宜しいですね?」と聞いて
きた

「艦長はアンタだろうが好きにしな」と言つて着艦した。直ぐにナ
タルさんは医務室に運ばれて行つた。弾は貫通していたから生き残
れるだろ?。

だが…未だにゴックピットからショウは離れようとしなかつた。何
故なら「ゴホッゴホッ」と言つて咳き込んでいた。そして次の瞬間
口から大量の血を吐き出してしまつた。

「ははっ、生きる時間を延ばしても、結局は痛みはくるんだな」と嘲笑つてしまつた。そしてシユウにひとつでも最悪の事態が起きてしまつた。

「シユウさん？…って如何したんですか！？その血何処か怪我したんじや！？」とシラコキが何時まで経つても降りてこないので心配になつてコックピットを覗いてきたのだ。

「クッ！すまないシラコキ！」と黙ってシラコキを押し飛ばしてコックピットを閉めキマイラを再び起動させた。「えつ？」とシラコキは呆然となつてしまつた。

そしてキマイラは再びハンガーから出ていった、数秒間シラコキを含め全員が呆然としたが、「この機体借ります！」と言つて近くに有つたM-1アストレイを整備兵から奪い取つてキマイラを追い掛け始めた。

「シユウさん！今さつきの大量の血如何？」「…ですか？ハッキリ説明してください！」と説明を頼もうとしたが

「説明したいのも山々だが悪いがシラコキ 僕にはもう生きる為の時間が無いんだ。だからお前とは此處でお別れだ」と黙つてグレネードランチャーを抜き始めトリガーに指をかけた。

「えつ？…嘘ですよねシユウさん？」と呆然としていたが、弾は放たれた。弾はM-1アストレイの右肩に直撃した。しかし弾は爆発する事無く機体のシステムをダウンさせてしまった。

「『』めんシラコキ お前は連れて行けない。以前教えただろ？何か

を成す為なら何時か大きな反動つまり犠牲が来るつて事だ。それが俺だつただけだ」とシユウの悲しそうな声が聞こえる

「えつ？待つて下さい、まだ教えて欲しい事も有るのに私を見捨てるんですか！？」と涙ながらに訴えた。あの夢と一緒に。目の前からシユウが居なくなる・・・。一度と私達の前に姿を現さなくなる。「ごめん、俺お前の事好きだつたよ、でも俺はお前を見捨てた訳じやないんだ。もう教える事も無いしお前に俺は必要ないと判断しただけだ。」と言つて機体が踵を返して消えていこうとする。

「待つて下さい！必要無いってそんな事無いです！お願いだから、もう私を独りにしないで！」と言つて何度も泣きながらお願いするが機体は止まらない、宇宙の闇によつて機体が見えなくなつていく。

「ごめんな、シラコキ。ありがとうでもこんな身勝手な奴よりもつと良い奴見付かるから俺の事は見捨ててくれ」と言つてシユウのキマイラの姿が見えなくなつた。

「イツ、イヤアアアアアアアアアアアアア！」と泣き叫ぶ、大事な人がまた居なくなる。

(何でシユウさんを失わなければ駄目なの！？シユウさんが何やつたつて言うの？私の力が足りないせいで居なくなつたの？)と思いつけても本人は帰つて来ず彼女は泣き続けるしかなかつた

「ゴホッゴホッ」と移動中も血を吐き続けていたシユウ 本人もわかつていた、自分と言う存在が無くなつていいくのが良く判る。シラ

コキを悲しませてしまったのは心残りだけど、それでも俺より良い奴なんてそこら辺に居る筈だ。さすがに休憩時間は長かつたが、もう終わりだろう。さきほどハッキングでヤキン・ドゥーハのカメラを確認したがアスランが再びジャステイプに乗り込んだのが見えていた。

「もう終焉が近づいてるな」と言つて機体の速度を上げた。そして殆どの機体は戦闘こそはするがキマイラ自体には全く攻撃が来なかつた。リミッター解除は使つては居ないがそれでも最高速度で動いているので一般の機体では追いつけないだろう。

だが一般の機体だけならば後ろから黒いMAが迫ってきた。

「チツ！レイダーか！」と言つてビームキャノンを放つ。パイロットが正気だつたら当るはずは無かつただろうが左翼に当たり飛行し辛いのが良く判る。

「パイロットが薬切れで狂つてるな」と冷静に判断しているがそれでも破壊衝動は有るのかスキュラを撃つてくる。「そんな直線的な攻撃当る筈無いだろうが！」と言つてサイドステップで右に避ける。

「お前も疲れただろう？楽にしてやる…リミッター解除」と言つて機体をレイダーの前まで持つていく。だがレイダーは何もせずただ突っ込んでくる。そして真つ直ぐ迫つて来ている所を斬艦刀真つ二つにする。

「悪いな、助けられなくて」と言つて再び機体を目的の場所まで動かす。

そしてシュウは目的のジョンネシス前に辿り着いたが、予想外の事が

起きていた、フリーダムがボロボロに成っていた。逆にプロヴィデンスは左足こそ壊れているがフリーダムより損傷は酷くなかった。

そして止めとばかりにサーベルがフリーダムを攻撃しようとしているが「クツ！リミッター解除！」一機の間に入り込みフリーダムを蹴つ飛ばして戦場から離れさせサーベルは既に体が限界なのか少しだけ動かしキマイラの頭部が切り裂かれ壊れた。

「シユウさん！逃げてください、あの男は僕が！」とキラが怒りながら言つてくるが

「冷静さも持てない奴にアイツを落とせる筈が無いだろ！調子に乗るな！役立たずはさつさと戦艦にもどれ！」と言つて罵声を飛ばしながらフリーダムにデータを送った。そう、此処に居たらジェネシスの爆破に巻き込まれる警告だ。

直ぐにキラも理解出来たのか此処から避難して行くが「シユウさんも速く！」と言つて来た。「直ぐにコイツを倒して戻るから、先に戻つておいてくれ」と嘘の返しをして通信をきつた

キラはその言葉を信じようと思つたのか撤退していった。そして正直此方も限界に近づいていた。それでもこの戦いに負ける訳には行かない。

「ウオオオオ！」と言つて斬艦刀を横になぎ払つた、とっさに後方に下がつて行くがそのまま斬艦刀で突きプロヴィデンスの頭部を破壊する。だがお返しと言わんばかりに左腕がビームサーベルで斬り落とされる。

正直お互い満身創痍だった。ENも底が近づき次が決着の着く事に

成るだろ。プロヴィデンスは残ったドラグーンでキマイラを全方位から貫こうとしたが「リミッター解除」と言って残った右腕で斬艦刀を突き出し特攻を仕掛けた。

ドラグーンはキマイラの両足を撃つて壊したが、もう特攻は止まらない。斬艦刀はプロヴィデンスのコックピットを貫いた。そして機体は止まる事無くジェネシスの中心部まで突っ込んでいった

シユウは機体を突っ込ませながら有る事を思っていた。（ロイツを手放して脱出できるほどENはもう無い…此れで全部终わりか）と考えていたら、途中で何かが横切つた気がする。

少しリストは違うが原作通りだとストライクルージュかと思いつつ中心部へと向かつた。プロヴィデンスごと斬艦刀をジェネシス中心部に突き刺しシユウはコックピットから降りた。

そして今まで一緒に戦ってきたキマイラを眺め今までのことと思い出した。

（そう言えば最初は小さな子供を助けた所から物語は始まつたんだよな。そしてその後女神様に会つて、この世界に送られた。そして最初のMSがジンだつたな。それで原作を知っていたからXシリーズを奪取された後キラ君達の救出、そしてその後は砂漠に向かつてバルドフェルドさんと出会つて、シラコキとも出会つた。そしてロイツが作られた。

そのあとの戦闘じゃ味方に撃つちやつて直ぐにザフトとは敵に成つたけどシラコキだけは付いて来てくれた嬉しかつたな。

そして次はオープでの小島郡でのトール君とニコル君の救出大変だ

つたな。そしてアラスカでのフリーダム登場そして決闘、そしてお互いの事情を喋つて仲間に成つてオープで一緒に戦つて俺が倒れた。

……本当に色々有つたけど楽しかったな）と思つた。そしてショウは皆が居た所を眺めた。周りはジョネシスの壁で見えないが、今でも鮮明に甦る。

「さよなら皆。判れるのは辛いが俺は楽しかったよ」と言つて近くに有つたジャステイスが爆発し、それに連動しジェネシスも爆発した。この日ショウは本当に死んだ。

シラコキ「ひよーー何でシコウさんを殺しちゃったんですかー！」

抹茶「へつ？ああ死んじゃったね。でも本編はまだ続ぐぞ？」

シラコキ「へつ？如何向いですか？」

抹茶「いや、彼には死んでも、まだストーリーはあるんだよ」

シラコキ「じゃあ生存フラグもー？」

抹茶「ああ、当然有るに決まってるだろ」

シラコキ「早く書いてくださいー！」

抹茶「判つた！書く書くから首から手を離してくれ。落ちるー・落ちるからーー！」

シラコキ「判りましたよ、でも嘘つかないで下さいね

抹茶「判つて、死後の世界でシコウも頑張るから」

シラコキ「うですか、では後書きも閉めましょうかね」

シラコキ・抹茶「さてシコウ（せき）は復活出来るのか？次回お楽しみに！」

「意見・感想ありましたらコメント下さい」

あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～SIDEで何か有りましたら言つて下さい

抹茶「はい、閃光のライティング今回で最終話（？）に成りますよ
～」

ショウ「やうか、今まで長かったな

シラコキ「やうですねー。しかし今回で終ると成ると寂しくなるものですね」

抹茶「それは自分も思います。でも最後に？が付いてるからどうなるか判らんぜ」

ショウ「如何とだと作者さんよ？」

抹茶「まあつまりですね。此れが終った後にアンケートを取りたいと思つてゐるんですよ」

ショウ・シラコキ「アンケートだと？（ですか？）」

抹茶「うん、つまりだ。この後のディスティニー編は読者の希望によって変わるんだ」

ショウ「成る程な。理解したよ」

シラコキ「それではそろそろ本編に移りましょ？が」

シラコキ・ショウ・抹茶「それでは本編をお楽しみトセー。」

「はあ、全て終つたか、俺の役目は此処までかな?」と言つて白い部屋で寛いでいた。

だが「ああシユウさん 此処に居ましたか、少し用事が有るので着いて来て下さい」と頼んできた

「ん?死んだ後の俺に用事?ああ、もしかして地獄行きか天国行きかを決める裁判か?」と思わず言つてしまつた。

「はつ?何を言つているんですか貴方は、もしその2択でしたら確実に貴方は天国行きになつてますよ」と少し呆れて言つて來た。

「ふうん、確實に天国ねえ、でも俺沢山の人殺してるからそんな資格あるのかな?」と疑問に成つていたが

「さあ、着きましたよ。この中に入つてください。くれぐれも無礼を働くかないで下さいね?」と田の前の豪勢な扉が自動で開いた

「んつ?無礼つて如何言つことだ?」と言つた瞬間に後から來た羽の生えた天使?が引つ張つて無理やり椅子に座らせた。

目の前に4人の歳は神でも結構離れてそうだが御爺さんが1人・先程の女神を入れて2人美しい女性・好感の持てそうな青年が座つていた。

(えつーと目の前の御爺さんって誰なんだろうなあ?女神様ですら無礼を働くないって言つてたから全知全能の神オー・ディンか?)と

シユウは思つていたら

「ホツホツホ最近の若者は博識なのかね?」と一人の爺さんが笑つて話してきた。

「くつー?思つてゐ」とが通じちゃつたのー?」と驚いていたら

「やうじやの、ワシ等神様じゃから考へてある事は判るんじやよ青年」と爺さんは笑つていた。

「ハハツマジかよ。よりもよつて神が4人居るつて俺なんか悪い事したかな?」

「いやつキミは何も悪い事してないよ?むしろ此方の関心を寄せた行動ばっかりやつたらさ」

「へつ?何で?そつにえは俺自己紹介してませんでしたね。シユウ・K・ライトニングです。話し合ひにおいて名前で呼んだ方が好感持てそうな気がするんで」と笑みを浮かべながら自分の名前を告げた。

「ホツ 礼儀正しい子じやの、やうじやのワシは先程思つたとおりオーディンじや」と白い髪を少しくわえて言つて來た。

「私はフレイヤと申します、初めまして」と金髪の三つ編みの女性が話しかけてきた

「私はアテナです、まあ紹介しなくとも今まで話しているから無駄ですかね?」と女神様が言つて來たが

「いやいや、女神とだけ言われて何の神かは知らなかつたよ」とシ

シウは今まで近くに居た女神が有名な人だとは予想外だった。

「さて最後は僕ですね、僕はフレイヤの双子の兄フレイ「ちょっと待って…はどうかしました?」とシユウが途中で遮ったのでフレイは疑問に成っていた

「あれっ?俺フレイって女性のイメージが有ったんだけど、本当の性別は男だったんだな」と少々予想外だった。

「アハハ そうですねたまに間違われますけど、自分は男ですよ。改めてフレイですよろしくお願ひします」と会釈してきた。ちなみに彼はショートだ。

「しかし、こんな自分一人の為に美・愛のフレイヤ 戰略のアテナ 豊穣の神フレイ 全知全能のオーディンが揃うとなると何か怖い物が有るな」と言つてしまつた。

「まあ怖がらずにリラックスして話しあいましょう」とフレイがフォローしてくれる

「そうですか、まあ良いや。取り敢えず何で俺は此処に呼ばれたんでしょうか?」とオーディンに聞いてみる

「ん?君が実に面白い子じゃから呼んだんじや」と白い鬚を揺らしながら言つてくる

「面白い?こんな自分が?傲慢な意思しか持たず皆を悲しませた俺が?」と正直目の前の神達の正気を疑いたくなつた

「ん~キミの場合その考えは傲慢かもしれないけど、その言葉を少

しでも行動に移してゐるんだよね」とフレイヤが言つてくる

「確かに手段は選んでは無いかも知れませんが、貴方は常に最良の選択をしていたので一度話し合いをしてみようと思い、何人か代表で出ようつて話で私達が抜擢されですよ」とアテナが苦笑してくる

「さうか、しかし氣に入られたつて言つてもねえ…実感が湧かないな」と言つてしまつた

「当然じゃ、神に認められるのは滅多に無い事じゃからの」と爺さんが言つてくる

「さうか、でもその反面何か言いたい事が有りそうな気がするけどね」とシユウは神々の考えてる事を言つてみた

「そうですね、貴方の行動は確かに素晴らしい物で目を見張る物では有りますが」とフレイが言い辛そうにしていた

「逆にその自分の命知らずの所が少し問題なんだよね」とフレイヤが言つてきた。

「グッ 戦争終つたから何言われても良いと思つてたけど命知らずとまで言わると流石に來るものか」と痛い所を少し突かれてしまった

「私何度も言いましたよね?でも貴方全く話し聞かずに結局死んじやつたじゃないですか。だからこいつはいつ会話の場を設けたんですね?」とアテナが言つてくる

「シユウの行動はアテナを通じて見せて貰つた、何故いつも一人の

力で全て行おうとした？仲間を信じきれぬのか？」と爺さんが聞いてくる

「俺はあいつ等の事は信じている、だけど心の何処かではあいつ等の事を疑つてゐるかも知れない」と呟いた

「仕方ないよね、人は信じたくても信じきれない時だって有るんだから」「フレイヤが言つて来た

「そして貴方は、疑つてゐる自分が妬ましくも有りまた眞実を話すのも怖いんですね？」とフレイが聞いてきた

「ああ、転生の事を話したら何を言われるか判らないんだ。怖がられるかも知れないし遠ざけられるかも知れない、それが怖いんだ」とシユウは悲しみながらも言つた

「バカモン！それ自体が主の甘えじゃ！良いか？人は確かにお互の意思是判らん。じゃがその為に言葉が作られ会話があり話し合つてお互いの意思をぶつける。そして双方が納得する結果を作り出すべきじやろ？が」と爺さんに思いつきり叱られた

「そうですね。確かにオーディン様が言つたとおり貴方が遣つてゐる事はただの甘えです。会話せずに一方的な考え方で決め付けるのは貴方自身が皆から逃げてゐるだけです」とフレイからも言われた

「俺の意思 자체が甘えで有つて、また逃げてるだけ？」と言われた事に納得出来なかつたが

「もし速めにそれに気付けられたら、何か運命を変えられたのかも知れないんじゃないのかな？」とフレイヤも言つてくる

「そんな…だつたら俺が今までやつて来た事は何だつたんだ?」と疑問が生まれてきた。

「主のやつてことは間違いではないぞ? ただ手段を間違えただけじゃ」と言われてしまった

「クソッ…なんで俺は今まで氣付かなかつたんだよ。心の中で随着时间が居るし、友も居る、常にシユウの後ろには仲間が居て御主を後押ししてくれても居るんじやぞ?」と爺さんが言つて来てくれた

「今まで一人で良く頑張つてきましたね。今だけは泣いても良いんですね?」とアテナが言つてくる

そして俺は泣いた。涙が枯れるまで泣き続けた。自分がやつてきた間違いを反省するためにそして自分が努力して、それは甘えだつたとしても無駄ではなく、むしろ神たちが自分の苦しみすらも判ってくれた。こんなにも嬉しい事が有るだらうか?

（1時間後）

「はあ、思いつきり泣くとスッキリするもんだな」と目を真つ赤にしながらさう言つた

「ホツホツホ今まで貯め続けてた分が出たのじやスッキリもするじやうつて」と言われた

「しかし気付くのが遅かつたな。自分が死んだ後にこんな大切な事を思い知らされるなんて」とため息を吐きながら言つたら

「ああ、それなんですけど余りにも貴方のやる事が他の神々からも尊敬と感嘆が有りまして、もう一回貴方の居た世界に戻るか・神格化する二択の選択肢があります」とフレイが言つて来た

「はつ？今なんて言つた？」と正直今言つた事が「冗談だと思ったかつたが

「えつーと貴方の居た世界に戻るか・神格化するかの一択ですか？」

と聞かれてしまった

「ああ何で俺が神格化するんだ？」と言つたが一般の人間が神化しちゃマズイだろ！」と言つてしまつた

「それなら大丈夫じゃ下級や中級の神からは主の神格化は大歓迎らしいそうじゃぞ？」と突つ込まれた

「ああ、そなんだと軽く自暴自棄に成りたかつたが、正直まだ有つた。

「それとですね、貴方の造つた機体つて神闘連の名前が有るじゃないですか、もし現世に戻るのでしたら是非とも自分達の名前を使つて欲しいと言う要望とか色々な希望がありますね」とアテナが山積みにされてる書類が出てきた。

「な…なんでこんなにも量があるんだよ」と目の前の見上げないといけないほどの高さの書類にシュウは唖然としてしまつた

「それがですね。今貴方が使つてゐる機体名のキマイラとエンジュルがキー・ホルダー化してゐるんですよ。あと貴方の生き方が多少脚色され掛けますが良い神様に成る為の見本みたいな感じでアニメ化されてます」とフレイヤが言つてきた

「む…無茶苦茶だ。と言つたか天界にもアニメやストラップ有るんだな」と思わず言つてしまつた

「そりや有りますよ。こっちの世界の生活も普通の世界とは余り変わり有りませんからね」とアテナに言われた。

「そうなんだ。なんか如何でも良い情報な氣がするけど、アニメ化だけは勘弁してくれ。俺はそう言つのは恥かしいんだ」と言つたが刺された。

「ああもう遅いです。既に放映されてるので」とフレイヤに止めを刺された。

「クツーなんてことだよ」とO型状態になつていたら

「バーンー」と言つて後ろの扉が思いつ切り開き何かが上に压し掛かつて來た。

「えつ？えつ？何が起きているんだ？」ヒシコウは混乱していたが、何かに舐められた。そしてハッハッハと犬の吐息が聞こえる。

「『ラッ キマイラ人を襲つたら駄目でしょうが！』とフレイが上の生物に叱り上の重みがなくなり確認したら

ライオンの頭・山羊の体・蛇の尻尾が目の前に居た。喜んでいるの

が、尻尾の蛇がぶんぶん振られてる…（酔わないのかな？）と思つていたら

「シユウさん もののシユウさんに名前使われて軽く貴方の事が好きで寝てますよ?」とフレイが言つてくる

「マジか…」と言つて頭を撫で様と腕を伸ばしたら逆に顔を擦り付けてきた。

「ヤバイ向この可愛い生き物犬みたいで凄く好きに成れそう」とついついやけてしまった。

「わざとほびづくるのかの?別に現世に戻つても良いぞ、死んでも結局神格化するの変わらんし」と爺さんが言つて来た

「さじや、もう一度現世に戻せてもうれますか?やり直したいこともありますし」と言つたら

「皆に謝るんですね?それと貴方には死んで欲しくないのでコニミシタ解除による寿命の削りと死ぬことが無くなりましたよ」と言つて来てくれた。

「ああそれなんだけど。俺のパートナーにもしてくれ」と頭を下げて頼み込んだ

「それでしたら、もうやつてますよ。でもこれでも充分お釣りが帰つてくるんですよね。後一つ位チート付けますけど何付けます?」とアテナに聞かれて

「んじゃ医療チートを後常に自分の船か医療コンテナには最新の設

備が全て揃つてゐ事をお願いするよ」とお願いした

「ホツホツホショウは欲が無いんじゃの。じゃがそれが御主らしい感じじや」と言つて爺さんが笑つてきた

「ハハツ 今度は皆と協力して頑張ろつと思つよ。間違いに気付いた今なら本当に大切な事が判る気がするし」と言つて自分の体が透けていった。

「貴方が今から戻つて辿り着く場所は戦争終結から3ヶ月後オープの自分の墓の前に居るので」と言われた

「ああ判つた。それじゃ今まで有難う御座いました」と言つてこの世界から消え去つた。

→シラユキSIDE→

シユウさんがMIA扱いされて3ヶ月経つた、最初は他の人も渋つたがシユウさんのMIAは了承され死亡」と言つ扱いが起きてしまつた。しかたが無い事だが彼の言つとおり物語は結局は誰かが犠牲に成る事で終わる事が多く、でも正直そんなことは、もう如何でも良かつた。全員とまでは行かないが既に何人かはシユウの死を受け入れてゐる。

私は何時までもウジウジしていたりシユウさんに叱られてしまつと思い立ち直つている。

未だに思い出しては涙を流してはしまつけどシユウさんに迷惑を掛けてしまつては駄目だと思い毎回忘れようとしている。ただ何一つ彼の持っていた物は無く、遺品など殆ど無いと言つても良い物だった

（しかし今夜は月が明るいですね。クリスマスは過ぎちゃいましたが、何か良い事が有りそうな気がします）と思つていたら

流れ星が降ってきた。それも星空一面に掛かっている、とても綺麗な光景だ。（しかし此れはシユウさんと居たらもつと良かつたんだろうなあ）と思つていたら、墓の方に流れ星が行き何かが光つて見えた。

「何だらう？あの場所はシユウさんの墓の方向ですね」と言ひて口一トを羽織つて外へと向かつた。

月明かりが道を照らしていく、彼は死亡扱いを受けたが何故か希望を捨て切れなかつた。（居ないかも知れない。でも見に行きたい、見に行かなきや駄目な氣がする。）そう思いつつも一步一歩脚を進めていくシユウの居るかもしれない場所へと

→ SIDE END ←

「ふう、やつぱり向ひの世界よりこつちの世界の方が気楽に過ごせるから良いねえ」とつこ笑みを浮かべてしまつた。

「しつかし、長らく留守にしてたとは言え俺はMIA扱いかよ」と愚痴りながらも墓を見つめていた。其処には

『シユウ・K・ライトニング此處に眠る』と言ひ文字が掘られたお墓があつた。

「全く生きてるのに、死人と勘違いされたら如何するんだよ。まあ良いか戦場で行方不明だつたつて事にすればこの墓も無くなるだろう」と言つて夜空を見上げた、そこには未だに流れ星が続いていた

「新しい平和への神様達からの祝福かな？」と苦笑していた所を後ろから足音が聞こえた。

「すいません、貴方もしかしてシユウさんでしょうか？」と後ろから女性の声が聞こえて来た。

（はあ……一番最初に氣まずい相手に遭遇するとはね）と思いつつも振り返る

「ただいま、シラコキ あの時は置いて行っちゃって悪かったな」と言つて頭を下げた。

「生きてたんですね。ずっと待つてたんですよ？ 貴方が帰つてくるの」と少しづつ涙を零していた。

「『』めん、でももう俺は何処にも行かない。お前を置いて消えないよ」とシユウは微笑んだ。

「シユウさん！」と言つて抱き付いて来た「もう離さないで下さい。私寂しかったんです、一度と会えないと思ってた。でも私の前に帰つてくれた。お願いだから一度と消えないで下さい、私を一人にしないで」と涙を零して頼んできた。

「ああ、消えないさ。一度と無茶もしないしお前を一人にもしない、そして俺はお前等に一つだけ隠し事をしているんだ。聞いてくれるか？」と自分の秘密を明かそうとした。

「はいっ聞きます。前言いましたよね？ 私も貴方と同じ境遇で居たって、つまり苦しみを背負つのも一緒にしますよ」と頼もしい事を言つて来た。

「じゃあ聞いてくれ」と言つてシユウはこれまでの事を話した。

自分がこの世界で生まれたが前世の記憶を持つてる事・この世界が話で作られたこと・神からチートを貰つた事・この世界の歴史を曖昧だが知つている事当然未来も、そして死んだ後に起きてた事も話した。

正直信じて貰えるかは謎だつたが全部話した。そして……

「にわかに信じ難い話では有りますけど、シユウさんが嘘をつくはずが無いですね。それに今までの事を考えれば説明も付きますし」と納得はしていた。

「信じてくれるのは嬉しいんだが、お前は俺が怖くないのか?」と恐る恐る聞いてみた

「怖いも何も、シユウさんは未来を知つていて。それを悪用せずに救える人を救つて自分の信念を貫くために使つた。別に喜ぶ必要はあっても怖がる必要性が無いじゃないですか」と言つてきた。

「ハツ…ハハハハハハ何だそれ、今までの俺の悩みがバツカじやねえか」と思いつきり笑つてしまつた

「ホントですね。そんな小さな事に悩んでたんですか?そつたと言つちゃえば良かつたのにもうちょっと信用して下さいよ」と軽くシリコキも怒つていたが

「悪い悪い明日キラ君達にも話すから付いてきてくれるよなシリコキ?」と自分のパートナーに話しかけた。

「当然じゃないですか、何時までも私はショウさんについていきます」と笑っていた。

（今に成つて判つたけど、自分は何て事を遣つてたんだろうか？全く最初から話しどけばこんな事には成らなかつたのかもな）と思つて笑つてしまつた。

「あっ、何笑つてるんですか？何か良い事でも有つたんですか？」とシリユキが言つてくる。

「ああ良い事が有つたさ、俺が此処に居られるつて言つ良こ事がね」と言つてショウは歩き出した。

自分の何時までも続く終らない明日へと

PHASE27（後書き）

抹茶「はい、今回で閃光のライトニング SEEED 編終」と成ります」

シユウ「オイッ！作者さんよ。最後滅茶苦茶臭い終り方だなー。」

シラコキ「正直こんな終わり方どん引きですね」

抹茶「グッ！まあ良いじゃないか。シユウは生き返ってきたんだから有る意味グッデンドじやん！」

シユウ「いやいや、何勘違いしてんのだ作者？主人公が死んだら話しそワタに成るのは理解してるだろ？」

シラコキ「まあ、もし死なせてたら私も許しませんけどね」

抹茶「はいつ理解しております。お願いだからその拳銃を仕舞つて二人とも」

シユウ「ひつゝ、しゃあねえな。シラコキ仕舞え」

シラコキ「了解しました。さてこの後は如何するつもりなんですか？」

抹茶「ん？ そうだな。まだ考えてないけど後日談を書くのも有りかな？」

シラコキ「じゃあ私とシユウさんの後日談もー？」

抹茶「オイ、パートナーが暴走してるぞ?」

シユウ「まあ放つとけば元通りに成るだろ?」

抹茶「どうも投げ遣りだな。まあ良いや、とにかく今まで読んでくださった読者には感謝だね」

シユウ「全くだ。主の駄文能力は俺も知つてたがそれでも集まってくれたんだ。感謝感激物だろ?」

抹茶「ええ、この場をお借りして挨拶とさせていただきます」

抹茶・シユウ・シラコキ「今まで読んでくださった読者の皆様方有難う御座いました」

抹茶「さてそろそろ後書き閉めますか」

シラコキ「寂しくなりますね」

シユウ「仕方ないだろ。取り敢えず其処の作者が再び筆を取るまで皆待ってくれよな」

シユウ・シラコキ・抹茶「それでは、また何処かで会いましょう。
わよひなら」

「ご意見・ご感想ありましたらドンドン言って下さい

あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
またSHIDEで何か有りましたら言つて下さい

アンケート（終ア）

はい、今まで読んでくださった。読者の皆様方本当に有難う御座います。

今回、*ガンダムSEED 閃光のライティング* を書かせて貰つた抹茶と申します

取り敢えず自分が小説を書いた始まりは大体2～3ヶ月前のことです。自分は最初こんな駄文しか書けない自分が小説を書いて良い物かとても悩みました。

しかし友人からも「まあ物は体験だから、色々やってみるのも有りだろ」と言われ

4月26日に初投稿させてもらいました。その後は戦闘シーンの描写・キャラのセリフ・主人公の行動等々考えるのに凄く苦労しました。

しかしそれでも読者の皆様方からのご指摘・ご感想を受けた事によって何とか完成まで持つて行く事が出来ました。本当に有難う御座いました。

さてアンケートの方ですが今から？・？・？・？・？のどれかを選んでもらいます

?「このまま*ガンダムSEED DESTINY*を書く事

? ガンダムSEED DESTINYを書きながらも他作品を書く事

? SEEEDで飽き飽きしているからDESTINY書かずに別作品書くこと

? 正直言つて主は駄文だから一度と書くな

? その他・意見

の5つに成ります、言葉遣いは最悪で本当にすいません。無理には言いませんが成るべくなら答えてくれると嬉しいです。

期限は6月25日までとさせて頂きます。応募承下せし

それでは、再び何処かで会いましょう

今日を持ってアンケートを締め切りさせていただきます。

アンケートにご協力して頂いた

exampleさん・ハッピーさん・優さん・和樹さん・ルリさん・俊さん・マサトさん・玉喜さん

ムーブさん・RayStationさん・三ノ丸さん・ホウメイさん・あわさん・絆さん・あさん

本当に有難う御座いました

抹茶「はい、読者の皆様お久しぶりです」

ショウ「久しぶりだな。まあ SEEED 編終つてから其処まで口にいち
経つてないんだけどな」

シラコキ「ショウさんそれは、言ひやや駄目な気がしますよ」

抹茶「そうだな、シラコキの言つとおりだ。読んでくれた読者
のお陰でこう言つ後日談が造れたんだぞ。感謝を言えれば良い物を愚
痴を言つのは言語道断だ！」

ショウ「クッ…すまない。それより今回は誰の後日談を取り上げた
んだ？」

抹茶「今回は SEEED 編で助けたキャラの中で余り登場しなかつた
ニコル君です」

シラコキ「それ以上言つたらフトンの方々に後ろから刺されますよ
？」

抹茶「そんな事言わないでリアルであつたら夜俺出られないとこ

ショウ「まあそんな事は如何でも良いとして、それから本編に行く
ぞ」

ショウ・抹茶・シラコキ「それでは本編をお楽しみトモー！」

俺が生き返つてから3週間経つた。生きていると言つ事を伝える為に色々な人の家にまわりに行く度に全員驚いてしまつたが、自分が生き返つた理由を一から話すと全員納得してしまつた。

大抵の人が「まあ、シユウさんはリミッター解除でも死なかつたんで、もう驚きしませんよ」

と呆れていた。なんだよそれ、まるで俺が死なない化物みたいじゃないか。

そして俺は全員に自分の正体も話した。だが「まあ不思議さが有つたんですけど、そんな事が有つたんですね」とあまり驚かなかつた。何かもう自分の思つてた事が馬鹿馬鹿しくなつて來た。

どうして怖がらないのか聞いたら「シユウさんは信頼しているので今更何が有つても裏切りませんよ」と言われた。これには正直涙を浮かべれた。

「しかしあいつ等も信頼してくれるのは嬉しいものだな」と笑つてしまつた。

「ねつ？私の言つたとおりでしょシユウさん」と言つてきた。

「ああ、でも此れも予想してたのか？だったら驚きを隠せないぞ俺は」と少し呆れながら言つた

「勘ですよ、今まで一緒に戦ってきた仲間を疑つ事は無いし、怖がる必要なんて無いですよ」と笑つてきた。

「そりが、しつかし今助けた人たちは如何してるかな?」と言つてしまつた。

取り敢えず今ナタルさんはオープ総合病院から退院して出てきているが……

「今の連合は少し信用できない。だから私は今は退職金でオープに住む予定だ」と言われてしまつた

「まあナタルさんは今は平穏に住んでるやうですが、家事に慣れてないやうですね?」と苦笑していた。

「仕方ないだろ、今まで軍に居たのに急に普通な生活だ慣れるまで時間が掛かるつての」

「そうですね……あつ二コル君から手紙来てますよシユウさん」と言つて綺麗な封をしたものを渡してくれた。

「んつ、ありがとう。しかし彼もプラント届くのに送つてくれるとありがたいね」と言つて封を開けて中身を読んだ

「シユウ・K・ライティングさん シラコキ・カグヤさんへ
シユウさんお久しぶりです。死んだと聞いて悲しみましたが再び死んでなくて生きてると聞いたときは驚きました。一体どんなことをしたのですか? まあ生きている事は嬉しいです。

それよりもシユウさんが死んだと聞いたときは僕の父さんと母さん
が『家の息子を助けてくれたのにお礼も言えなかつた。本当に惜しい人を亡くしたものだ』と悲しんでいましたが再び生きている事を

聞いた時には『彼とは一度食事したいから呼んでくれ』と頼まれました。

しかし普通にいつに来るまではお金が掛かるので呼べませんでした。ですが運が良い事に2週間後に僕のピアノの公演があります、リハビリも大変でしたが、沢山練習をしたのでは非聞きに来てください。

ニコル・アマルフィトイ

「そうか、彼も頑張ってるんだな。コイツは見に行ないと後悔ものだな」と眞中に入ったチケットを取り出した。

一枚入つているので席を確認すると…「おっ、一番良い席じゃん。充分楽しもうなシラコキ」と言つた

「はい、そうですね。しかし彼も頑張ってるんですね。オープに居た頃が懐かしいです」とシラコキは一緒に居た頃を懐かしんだ。

(しかし彼も第一の人生歩んでるんだからな、俺も新しい趣味が、それとも誰かと結婚して身でも固めるか?)とシユウは少し別の考えていた

「それで如何します?シユウさん」と何かを聞いてくる

「へっ?何がだ?すまん、話を聞いてなかつた」とシラコキに謝罪する。

「はあ、ボッタとするなとは言ひませんが、余り考え事しないで下

「さ、いよ？ 取り敢えずプラントに行く時にプラント行きのシャトルを使うか、それともシュウさんの艦のジャンク艦を使って行くかの話ををしてたんですよ？」と少し怒りながらも言つてくれる

「そうだったのか、余り怒らないでくれよシラコキ。今回はMSなんて物騒なもの使う必要も無いしシャトルで行こいつか」と言つてみたが

「そ、うなんですか？ 今回はてっきりジャンク艦を使つと思つたんですけどね」と言つてきた

「何でだ？ 今回行く道中使う必要性は皆無だろ？」とシラコキの言った事に疑問を覚えた。

「いえ、ただ単にシュウのキマイラは壊れちゃつたから、新しいMSを造る為に材料が必要なんぢゃないかな？」と思つちやつて「と痛い所を突かれてしまつた。

「そ、うなんだよなあ、キマイラはぶつ壊れて、今手持ちに有るMS言つたら前拾つた強行偵察型ジン位だしな」と今は必要なくても後々必要と成りそうなキマイラに代わる新しいMSが必要に成つて来る筈だ。

「それにシャトル使つたら利用費も掛かるのでジャンク艦の方が便利でしょ」と微笑んできた。

「ああ確かにそうだな。戦争終つたからつてジャンクが無いなんて事は無いし集めていつその事強力なMSでも造るか」と言い切つてしまつた。

「それじゃあ行く準備しましょうか」と言つて一人は久々にオープ港にある自分の艦に向かつた。

だが其処には一人ともジャンク艦に意外な物が置いて有つたのは予想が出来なかつた。

（オープ港）

「あらつ二人とも如何したのかしら?」ヒエリカさんが聞いてくる。

「んつ? ああエリカさんか、プラントに居る友人に呼ばれて今から向かうんだよ」と言つた。シユウはエリカとはもう和解したのだ。

彼も逆恨みだと判つていたが切欠が掴めずに悩んでいた所をシラコキが間に入つて仲直りしたのだ。

「そう、じゃあ直ぐに簡易的だけど完成しかけてるマスドライバー使わせてあげるわ」と言つて来た

「良いのですか? 私達みたいな一般オープ国民がマスドライバー使っちゃつて?」とシラコキが聞いてみるが

「良いのよ、貴方達には世話に成つたんだし此れぐらいしなくちゃね」と言つて微笑んでくる。

「どうか、有難う御座います。じゃあ俺らはホーム乗つて色々準備するんで」と言つて二人は乗り込んで色々と準備をし始めた。

そして発射時に「じゃあ氣をつけてね。一応大気圏突入パックはハンガーに積んで有るけど。何か変な物まで入つてたけど知ってる?」と聞かれてしまつたが

「変なのって何だよ？変なのって」と何の事かせりぱり判らないシコウはそう答えた

「シラユキは何か知つているか？」とシユウは取り敢えずシラユキにも聞いてみた

「いえ、私も何の事が判りませんね？宇宙に上がつたら確認してみましょう」と言つて通信を切つて宇宙へと飛びだつた。

そして十数分してジャンク艦は宇宙へと辿り着いた。そしてすぐさまホームのオートパイロットを始動させた。

（オートパイロット・目的地・プラント）「よし」こちちは準備OKだ。シラユキの方は如何だ？」と聞いてみた

「はいっ私のほうもプラントに着港の許可を貰いましたので、あとは大丈夫です」と準備完了の事を聞いた

「んじゃ、ヒリカさんが言つてた何かを確認するか」と言つて二人はハンガーへと向かつた。

そこには放射能マークが書かれたコンテナが二つ積まれていた。

「何だ此れ？こんなもの俺入れた覚えが無いぞ?」と思わず目の前の光景に啞然としてしまった

「取り敢えず中身確認をしましょう。と言つてコンテナの外側に出ているコードをパソコンに挿し中身確認を行つた。

そこには…（ニコニココンテナ一個入っています。外に出しても私達の力によって核爆発も起こさずに人体にも影響ありませんで、普通にMS開発に使ってください

by 神一 同を代表してフレイヤより）

パタンッ……「『めん最近目が疲れちゃってるのかな?変な文字が見えた気がするよ』と書いてパソコンを閉め目じりを押さえながらそう言った。

「そ…そうですよね。幾らなんでも入ってる物がニコニな訳有りませんよね」と言いながらコンテナの一つを開けてみた。

そこに大きな球体場の者が放射線マークの上に（有害じゃないです）と書かれた物が置かれてあった。

再び手にとつてパソコンを確認すると

（喜んでいただけましたか？それよりも何でパソコン閉めるんですか？酷いですよ）と書かれてあつた

「何で内容が変わってるんだよー可笑しいだろ普通に考えてもアーティストコンテナで今事にもう突っ込む事しか思い付かなかつた。

「取り敢えず頂き物なのでそのまま使いたいんですけど、条約でニコの使用禁止の案件出でますしね」

と貰い物が条約の違反に成るのを恐れてしまったカグヤだった。

「でも捨てるのも勿体無いし、此れに付いてはマジで後回しするよりかは今はこのコンテナから出して隠すしかないだろ？」と取り敢

えずの手段を決めた。

「やうですね。今回集めるジャンク品に埋める様な形で入れていきましょうか」と言つてコント内の方々を一いつ取り出しブルーシートをかぶせた。

「さてこれからプラントまで着くまでの距離が1週間程度だ、その間に色々と設計図でも書くか」と言つて作業スペースへと向かった。

「あつ、待つて下さいよ。私の分の設計図も書いてくれませんかね?」と上田遣いで言つてくる

「うーん、でもエンジュルつて殆ど完成形なんだよなあ。どんな機体にして欲しいかによって機体の形状が変わってくるんだ」とシユウはMSの設計でどんなタイプにするかによって機体を変えていくのだ、彼はキマイラに乗っている時は射撃がメインなので射撃型のMSとして色々な武装を積んでいたのだ。

「そうですね、私としては格闘のほうが得意なので格闘で殴りながらも少し距離の遠いMSは誘導性の有る射撃で攻撃したいですね。私射撃は少し苦手ですから」と格闘メインをお願いしてきた

「判つた、取り敢えずシラコキはその方向で造つていくわ。しかし俺とは待つたく真逆だな」とついつい言つてしまつた。

「くつ? 真逆ですか? どうしてまたそんな事を言つたんですか?」と不思議そうに言つてくる

「俺確かに格闘は出来るけど、格闘より射撃の方が得意なんだよ。ヤキンドウー工の時は流石に射撃だけじゃ乗り越えられないと思って斬艦刀持つてたんだよ」と言い切った。

「そうなんですか、と言つた私達つてキラ君とアスラン君のMSと似てそうですよね」と笑いながら言つて来た。

「そうだな。もし俺らがフリーダムとジャステイス乗つてたら確実にフリーダムが俺、ジャステイスがシラユキだつたかもな」と言つて苦笑した。

（ビツービツービツー 敵機接近敵機接近）と警報が成ってきた。

「なっ！何でこんな時に！」と警報が成つてシュウはキマイラが無い事を怨んでしまつた。

「大丈夫です！私がエンジェルで出ます！」と言つてエンジェルに乗り込みに向かつていつた。

「チツ！敵の数と機体は何だ！」と自分の戦艦のAIに聞いた。（MSは3機 機体はメビウス ダガー 2機です。多分動き回つてる宇宙海賊の部隊でしょう）と冷静に言つてくれる。

「そりが、だつたら大丈夫だな。でも戦場に絶対は無いから俺も出るか

と言つて残された強行偵察型ジンに向かつていつた

そして戦場に出た瞬間に報告していたMSと数が合つていなかつた。

「オイオイ増えてるじゃねえか」と言つてスナイパーライフルを起動させた。

「一対多数には俺は容赦しない。…撃ち落させてもいい」と言つてトリガーを引いた。

次の瞬間弾はダガーのコックピットを貫いた。敵は何事かと動搖していたが、その隙にエンジェルがガンソードで切り裂いていた。

そして後方を攻撃しようとした2機のメビウスが迫つてミサイルを放とうとしていたが

「悪いが、それは無理だ」と言つて再びトリガーを引き前方を進んでいたメビウスが爆発を起こしかけ、後ろに居たメビウスが避けきれず突っ込んで爆発が起きた。

「ふう」と息を吐いて再びエンジェルを確認すると、最後のダガーを落としていた。

「お疲れさん」とシラコキに声をかけた。「援護してくれて有難う御座います」とお礼を言つて来た

「いやいや、見る限り俺が居なくても楽じゃなかつたか?」と聞いてみた

「そんな事有りませんよ、攻撃するのに弾幕が厄介だつたんですけど、それを一時的とは言え止めてくれたんですから、戦闘が楽でした」とどうやら本音らしい事を言つて来た

「そうか、取り敢えずコックピット貫いたダガーだけ回収してヤキン・ドゥーハ付近のジャンク回収するぞ」と今後の予定を言つた。

「了解しました。しかしシユウさんは射撃だけは一人前ですね」と
痛いところを突いてきた。

「ああ、射撃だけが俺の取り柄だからな、まあ其の内誰かから習つ
さ」と言つてジャンク艦に着艦した

「じゃあ私と如何ですか?」と聞いてきた「んつ?如何言つ?」とだ
?」と疑問に成ってしまった。

「えつとですね、私の場合格闘が得意なのに射撃が駄目シユウさん
は逆つまり教えあいましょうって事です」つまりシラコキはお互い
の苦手な所を補おうと言つてるらしい

「んー良いね、んじや直ぐにシユミリーダー起動させて訓練に移ろ
うか」と言つてシユミリーダー室に向かつた。

そして彼らはヤキン・ドゥーHのジャンクが漂つている場所に着く
まで訓練をして過ごしていた。

「ようやく着いたな、今回シラコキはエンジンで俺はミストラ
ルで動くから」と言つたが

「何でシユウさんがミストラルなんですか!?.危険です」と反論し
てきた

「あのなあ、強行型ジンだと回収し辛いんだよ、だからミストラ
ルでついつい

ストラル使つてゐる、もしキマイラが残つてたらそつちで作業出来たんだよなあ」とつぐづく壊したのは失敗だったなと思つてしまつた。

「やういえばキマイラやエンジルつて少し便利ですよね、本来ならミストラルでしか出来ない行動も2機は可能つて」と今更ながらにエンジルの使い勝手の良さに感心するシリコキだつた。

「何か、今更だな。まあ良いか。無駄話は終わりだジャンクを回収するだ」と言つてミストラルでそのままで酷い壊れ方のしてないジャンク品を集めていった。

そのなかに有るもののが漂つてきた。そう見るからにフォビドゥンのゲシュマイティッヒ・パンツァーだ。

「コイツは凄いな、まさかこんな物まで漂つてゐるとはね」と言ってパンツァーの使える部分だけを持つてジャンク艦へと戻つた。

着艦したときには既にエンジルがジャンク品を一箇所に纏めてハンガーに掛かっていた

「先に着いてたのか早いな」と思わず言つてしまつたが

「シコウさん良い物が手に入りましたよ」と喜んでいる

「やうか、お前の良い者つて何なんだうつな?」と少し小馬鹿にしてしまつたが

「変なものじやないですよ!レイダーのミラールですよ!」と正しゃいでいた。

「へつ？でも俺前に斬艦刀で一刀両断した氣がするんだが、そんと
モルタル付いてなかつたのか？」と少し疑問に成つてしまつた。

「いえ、以前私がやり合つた時にワイヤーをガンソードで斬つたん
ですよ、もしかしたらと思つてその場所の付近を捜してたら見付か
りました」と言つてきた。

「そ…そつか、まあ有効活用するから置いといてくれ」と頼んで持
つてきたジャンク品を置いてミストラルから降りた。

そして大体のジャンク品を回収したので、彼らは再びプラント郡へ
と向かつた。今回彼らが訪れるのは、プラントの12市中の1市の
マイウス市へと向かつた。

「あーあーマイウス市のプラント聞こえるか？以前連絡したシユウ・
K・ライトニングの艦だ着艦許可を願いたい」

「了解した。指示に従つてプラント港に入つてくれ

「了解、通信終了」

そして指示されたとおりレーダー誘導されながらプラント港に到着
しプラント内へと入つていった。

「シユウさん、シラゴキさん」と近くから声が聞こえてくる。声の
聞こえた方向に振り向くと助けた少年ニコル・アマルフィイが居た。

「やあニコル君久しぶりだね。元気だったかい？」と久々に会つた
友人に挨拶する

「はい、せつらひがお変わりなくお元気で何よりです」と笑つてきた

「さて、取り敢えず予定の日に付いてしまったけど本当に良いんでですか？」ヒシリコキが再び聞いてくる

「大丈夫ですよ、家のお父さんお母さんも是非泊まつていて欲しいつてお願にしているんですから」

「やうか、悪いね。じゃあ案内してくれるかい？」と直ぐ近くに停めてあつた車に荷物を載せニコル家へと向かった。

「「おじやまします」」といつて一人はニコル家にお邪魔した

「やあ、こりゃいい良く来てくれたねコーリ・アマルフィだ宜しくね」と握手を求めてきたのでこりも手を出した

「これから数日間お世話になります」とシリコキが申し訳無さそうに答えた

「そんな堅苦しく無くていいのよ、自分の家みたいにくつろいでね」とのんびり屋みたいな女性が言つて来た

「もしかしてこりはコーリさんの妻でしょうか?」ヒシリコウは恐る恐る聞いた。

「ああ紹介しよう、妻のロミナ・アマルフィだ。さて玄関で長話もあれだしリビングまで行こう」と軽く自己紹介が終つたところで家を案内された。

「さて本題としては、まずはありがとつシユウ君 キリの隣の家の息子が生きてくれた」と頭を下げてきた

「いえいえ、結果的にあの場に居たので助けただけであつてもっと速く気づく事が出来たならこんな事には」と言つて感謝されるためにやつてる訳じやない事を言つた

「やうが、それでもキリには感謝を言わざる得ないよ」と笑つてき
た。

「ホントね。あなたみたいな人たちが居れば私達は争わなくて済んだのにね」とロミナさんから悲しい感情が伺える。

「その事についてなんですけど、自分は関つて居なくともヨニウス・セブンそしてボアズに核を打ち込んで申し訳ありませんでした」と謝る事で頭を下げる事などシユウは自分一人の頭で許して貰えるのならどれだけ下げるも良いと考えているのだ

「確かにキリは血のバレンタインの時以前から生まれてた、でも君自身は悪くないよ、だから顔を上げてくれ」と言つてシユウは恐る恐る顔を上げてこつた。

「まあ堅苦しい話は此処までとして、紅茶でも飲みなさい」と言つてロミナさんが紅茶を淹れてくれた

「あつがどうぞます」と言つて紅茶を飲んでいると

「やういえば貴方達つて結婚してゐのかしら?」とロミナさんから変な事を言われ

「ブツ！… ゲホゲホッ 何言つてるんですか、行き成り俺とシラコキはそんな関係じゃ！」 と言つて田の前に居た人物に紅茶が掛かつていたのを忘れていた。

「「J…」めんなさい、コーリさん、シコウさんも悪気はないんですね」と冷や汗をかきながら答えた

「ハツハツハ、いや今時の若い子はムキに成つて答えるナゾ、それじゃ肯定したいと言つてるような物だぞ？」 と言つて紅茶をハンカチで拭きながら笑つていた

「グウ、だめだこの人達とは口では勝てない氣がするよ」と言つて多少顔を赤らめながら言つた

「もう、父さんも母さんもシユウさんとシラコキさんを困らせないで下せい」とニコルが怒つっていた

「スマンスマンタゞにニコルの友人が来たからからかつて見たかつたんだよ」

「すいませんね、家の夫がこなんんで。わい、ニコル彼らと話したいことが有るんでしょ？」 と言つてきた。

「ああ、はい。じゃあ少し着いて来て下せい」と言つて席を立つて別の部屋へと向かつた。そこにはニコル君専用のグランドピアノが置いてあつた。

「父が好きに使つたら良いと言つて、この部屋をくれました。でも如何すれば良いか判らないんです」と何かに迷つていふみつだ

「今はシコウさん達といつ話は出来ますけど、何時またどっちから戦争の火蓋が切られても可笑しくない。そのとき僕は、如何すれば「ば」と凄く迷つていらしこ、多分今回は此れの事も聞きたかったんだろう

「正直言つて私は反対です。理由はシコウさんから話してもらえるはずですよ」と言つてシラコキはシコウに顔を向けた

「ああ、俺もシラコキと同じでニコル君の軍入りには反対の意思を隠せないな」と言つ切つた

「…なんですか？理由を話してください」

「それはだな。余りにも君が優しすぎるからだ。今回此れも少し予測して今までのブリッツの戦闘記録を見せて貰つた。君は大きな戦い以外は敵機を破壊するんじやなくて戦闘不能がメインだった。そして最後にはブリッツの武装を壊された事にも関わらずストライクに攻撃した事だ」

「あれは、アスランを助けるためであつて！」と怒鳴つて反論していくが

「確かに助けるという意思是認めよう。だけどなあの時俺が咄嗟に助けて無かつたら悲しんだ人も少なからず居た筈だ。だからあんまし無茶すんなキミが亡くなつたら悲しむのは俺も一緒なんだからさ。それにキミはパイロットに成らなくとも、ピアニストとしての腕があるじやないか、明後日キミのピアノ楽しみにしてるよ」と言つてシコウはピアノ室から出て行つた。だがそこにはゴーリさんとローリーさんが居た。

「ありがとう、キミには感謝しきれないね」とコーリさんが口を開いてそういった。

「もしかしてニコル君はあなた方には何も話していないなかつたんですか？」と疑問に成った事を口にした

「ええ、何時も考え方しているから如何したの？って聞いても「大丈夫だよ」としか答えてこないから心配だったの。でも、あの子今回のことであつきましたみたいね」

「そうですか、でも俺は相談を聞いただけで、何もしていませんよ。彼自身が切欠を見つかったのかも知れませんね」と言って部屋の方に向を向いていた。そこには綺麗な音色が聞こえてきた。

（3日後）

「本当に帰るんですか？」と再びニコル君が聞いてくる

「もうちょっと滞在しても良かつたんじゃないかな？」とコーリさんまで引き止めてくるが

「いえ、俺たちもそろそろ向こうに戻らないこと何か言われそうなんで」と曖昧な答えを言った

「そうなの？残念だわ。でもまた来てね。何時でも貴方達を歓迎するわ」とロミナさんも微笑んできた

「はいっ、何時かまた遊びに来ますね。良かつたらこっちにも来て下さいね。今度は私達がオープを案内しますから」と眞面目にプラント港へと歩き出した

「シウさん、また話を聞いて貰つても良いでしょつか？」と後ろから声が聞こえる

「ああ、何時でも話していい、それとお前は親父さんとお母さんにも頼れよ」と言つてジャンク艦内へと入つた。

「それじゃもう用事は無いしこのままオープに帰るか」と言つてオートパイロットを操作していた。

だが「家族があ、久々に見たけど良いな」と何かを懐かしんでいた。きっととずっと前に居た両親を思い出しているんだね。

その場に居たシウは何も言えずにただシラコキを見続ける事しか出来なかつたが

「まあシウさん帰りましょう、私達の家のあるオープへ」と言つて艦はオープへと向かつていつた。

抹茶「はい、今日は一ノコル君の悩みもついでに解決するところ話で
した」

シユウ「彼の心情はどうやって書いたんだ？」

シラコキ「そうですね。彼がピアニストに成りたいと言つて、心情つて
何処かに有りましたつけ？」

抹茶「ふつふつふ、それはだね小説版ガンダムSEED第2巻に書
かれて有るんだよ！」

シユウ「良くそんな細かい所まで読んでるな」

シラコキ「感心を通り越して呆れが出てきましたよ」

抹茶「二人とも酷い、後日談造るの大変だから何度も読み直して書
いたのに」

シユウ・シラコキ「「ああ、はいはい偉い偉い」」

抹茶「お前等何時か後ろを氣をつけろよ？」

シユウ「そんなことしたらボッコボコは覚悟しないよ~」

シラコキ「そのまえに今此処で殺つときますかね？」

抹茶「「めんなさい」、ちょっと調子に乗りますぎりやつたよ

シユウ「まあ何時までも後書きで喋つてゐる訳にも行かない閉めようか」

シユウ・抹茶・シラコキ「そひシユウ（俺）とシラコキ（私）はどうなるのか？次回お楽しみに。」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン書いて下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～ＳＨＤＥで何か有りましたら書いて下さい

次の後日談希望ありましたら書つて下さい。可能な限り速い物順に
書いていきます

また新MSのアイディアなどありました、書いて来てください。内容によつては採用したり取り入れたりしたいと思います。

PHASE29（前書き）

抹茶「今日は申し訳有りません、此方の身勝手によつて読者の皆様の期待を裏切つてしまつた事を改めてお詫び申し上げます。すいませんでした。今後このような事が起きない様細心の注意を払つて書く事を再開しようと思つます。」

「へっ？ 護衛だつて？ また行き成りな話だな」とシユウはカガリに頼まれた事に首を傾げてしまった

「ああ、今度プラントのアーモリーワンでギルバート・デュランダルに会いに行く、その時の護衛にアスランだけじゃ足りないからシユウとシラユキも付いてきて欲しい」

「私達は今の所暇ですから別に大丈夫でしょう、シユウさんも大丈夫ですよね？」と聞いてきた

「ああ、プラントの本拠地だから何も無いとは思うんだが、万が一も考えられる着いて行つて護衛はするさ」と支度をし始めよう立上がつたが

「お前らは如何するんだ？ アスランはアレックス・ディノという名前で本名を隠しているんだが」「

そうアスランは此方に移る時にアスラン・ザラと言う名前からアレックス・ディノと名前を変えてカガリのボディーガードをしているのだ。彼はアイリーン・カナーバ前議長の計らいで今のオープに居られるのだろうが、プラントからしたら裏切り者扱いにされるかも知れないだろう。

「そうだな、じゃあザフトの領地に居る時だけ名前を変えて過ごすとじょうかな」と言つて名前を考え始めた

彼ら一人も良くも悪くも連合からもザフトからも尊敬と畏怖を浴び

せられるほど有名なパイロットなのだ。ヤキン・ドゥー工終了後シリュキ・カグヤの存在を欲しがっていたプラント側は再三教官に成らないかと言う要求は出ていたが、彼女は頑なに拒んでいたのだ。逆に自分の方は生きていると知っている人はあんまり居ないので知つてゐる人は少ない。

だからと言つて戦場に居たころの異名がシラコキの駆るエンジエルは『断罪の天使』そしてキマイラのほうは『閃光の殺戮者』と結構キマイラの方が名前は酷いのだ。

まあ個人的に厨二病にしか見えないが今更生きてました何て言つたら、本当にやばそうな厨二病を覚悟しなければ成らない気がする。

「じゃあ私は古都春 真衣つて名乗りますね、普段一緒に居る時は古都春か真衣つて呼んで下さい」

「俺は朝倉 和真にするか、呼び方はカガリに任せよ」

「判つた、和真に真衣だな。これからアーモリーワンまでの間は宜しく頼む」と言つて手を差し出してきた

「ああ、こちらこそ宜しく頼むよ、何かと苦労が多いかも知れないが頑張つてくれ、出来る限りボディーガード兼サポートはする」

「そうですね、以前戦つたもう氣を許し合えるほどの中間ですから何でも頼つてくださいね。可能な限りやる事はしますから」

二人ともカガリに力を貸すのは厭わないし、むしろ頼つてくれた方が嬉しいとも思つてゐるのだ。今は認められない人物も多いかも知れないが、彼女は彼女なりに努力をしているので支えたいと思つた

い。

「ああ、そうか。有難う一人とも、じゃあ明日には出るから準備を
しておいてくれ」と言つてカガリが家から出て基地に戻つていついた

「ショウさん一つ聞きたいんですけど、やっぱりアーモリー・ワン
で何か起きますよね?」と聞いてきた

「ああ連合のファンタムペインって部隊が新しく作られたガンダム
を狙つて攻撃を仕掛けてくる」

何故彼女がこんな事を聞いたか: それはシラコキにだけ未来を知つ
ていると告げたのだ、其れゆえ彼女は原作が起きる時にだけ対策を
練つてしているのだ。

「やうですか、やはりパイロットは全て改造されているんですかね
?」と唯一の気がかりを聞いてきた

「ああ、全く何時まで経つても連合のやり方には反吐が出る。それ
にザフトもザフトで浮かれすぎて警戒を怠るとは笑い者にも成らな
いぞ?」と思わず言つてしまつた

「2年間戦争から離れれば平和ボケも起きるから仕方有りませんよ。
しかし相手はガンダムですか。厄介な相手ですね」と呴いていたが
無いから世界に復讐は無いな」と言つたが

「クローンまで戦争に出しますか、ますます呆れ帰りそうですよ私

は」と顔に手を置きやれやれと首を振っていた

「まあ愚痴を言つてもしょうがない、さつさとこんな理不尽な戦争には蹴りをつけたい物だよ」

「でも未来を壊すと不祥事を起つるんじゃないのですか?」とさも当然な事を言つて来た

「ああ、それでも。本来殺されるようなパイロットは救う、それが俺らのやることだ」と可能な限り救うことを決めていたのだ

「ええ、死ぬな・生きろ・そして可能な限り人の命を救えですね。私達の信条を汚させる訳には行きません」と意気込んでいた

「さあ、頑張ろつか」と言つてプラントに行く為機能性を最優先にしたスースを用意した。

「待つたか?」と次の日シャトル乗り場でついつい聞いてしまった。

「いや、時間ピッタリだ。流石に時間厳守と仕事に尽くす精神は褒めるところだな。これから宣しきだなシユウにシラコキ」とアスランが挨拶してくるが

「今は和真だ。教えられた偽名を頼むから使ってくれ、あくまで俺等は田立たないようすに護衛をしているんだ。それを三人もヤキン・ドゥー工で生き残ったパイロットが居たらどうなるか判つた者じゃないぞ?」と本名を言つた時に起きる事を危惧してそう告げた

「ああ、すまない。取り敢えずカガリはもうシャトルで待っている。もつ乗る」と言つてアレックスを先頭にシャトル内に入り込んだ

「さてと、今日は何でアーモリーワンに行くんだ？途中まで来る時には火急の件と聞いたんだが？」

「ああ、その事か。再三オーブ戦で流出した国の技術と人的資源の軍事利用を辞めると言つているんだが中々要求に応えてくれなくてな。今回会いに行つて如何言うことか聞きに行くんだ」

この件はザフトから返答が無くてカガリも頭を悩ませているんだろう 「成る程な、でも今回議長に就任したギルバート・デュランダル相当の切れ者らしいからなららしくらいと回避されるかもしれないな」と多少の警戒を払いながらそう言つた

「そうなのか、と言うか和真は何気に私より知つている情報多いんじゃないのか？」と聞いてくるが

「仕方ないだろ？此処1年間色々な情報を集めていたんだ、デュランダル議長の政策も何度も耳に入るし他の情報だつて何時かは聞く事に成るさ」と言つて懐からスタンロッドを出し天井を突いた

「なつー何をやつているんだ和真！」とカガリが怒鳴つてくるが

「落ち着け…ツやつぱりな」と言つて破損した何かを取り出してきた

「何ですかそれは？」とシラコキが頭を傾げ聞いてくる

「此れは少し形は変わつてはいるが、盗聴器だ。多分少しでも情報を得ようとしたんだろうけど正直言つてこっちを舐めているのかね

？」と言つて盜聴器を握りつぶした。

「何で壊したんだ？それが有つたら議長に対して弱みを握れるだろ？」とアスランが聞いてくるが

「いや、多分コイツを突きつけても証拠不十分で知らぬ存ぜぬでのらつくりと逃げられるのが良いオチだ」

「つまり、どうすれば良いんですか？議長が言い逃れ出来ない様にするには」

「まずは、命令や脅迫などの命令をした声やしげさ等の行動が必要なんだ。それが無いと、付け入る隙が全く無い」と言つて今後如何行動するか考えていたが

「それを考えるのも重要だが、和真今はスタンロッドは仕舞つとけ他人が見たら何事？って思つて押さえつけられるぞ？」とアスランに指摘された

「おっ、すっかり忘れてたよ」とスタンロッドを衣服の中に再び隠した

「何をやつてるんだお前達は、全く頼むから議長の目の前では変な行動を取らないでくれよ？」と心配された。

「判つてる、まあ問題は起こさないはずだよ…多分だけどな」と流石に自分で自分の行動を大丈夫か不安に成ってしまった

「まあ、和真には真衣が付いているから問題無いだろう、私は少し眠る着いたら教えてくれ」と言つて眠りに入った

「アレックス少し聞きたいんだがカガリは最近眠つてないのか？」

「ああオープの首長に成ったんだ。幾つかの問題は解決されたとは言え未だにやる事は多く有る。彼女を支えてやりたいんだが如何しても一人で頑張ろうとしてるんだ。全く頑張りすぎと言いたい所だよ」

「そうだな、まあ俺等は影からしかサポート出来ないんだ。そこへんは編考えて動かないとな」と言ひて一人は会話を打ち切つてアーモリー・ワンに付くまで口を開かなかつた。

「着いたか取り敢えず先にアスランを出して、警戒その後カガリが出て、俺ら一人が後ろを警戒するとしようか」と護衛方法を聞いた

「ああ、それで良いと思う、というか和真も何気にボディガードの才能有るんじゃないのか?」とアスランが咄嗟に言つて來たが

「ボディーガードも良いがそれじゃあ本来俺がやろうとしている事が出来なくなる。だから俺はバスだな」とボディガードに成る事は嫌だとハッキリ応えた

「やはり、君の意思は変わらないんだな。でもそれが君自身の魅力だと思つから俺は反対しないよ」とアスランは残念そうにしても反対はしないようだ

「そろそろお喋りは辞めましょつ、行きますよ」とシラコキに促され順番に出て行つた。

そして出て直ぐに力ガリを待つていた駐在員が近寄つて話している、そしてシュウは先ずは駐在員を警戒したあと問題無しと判断し回りを確認した。正直言うと彼自身ウンザリしてしまった。そう彼らは新しい戦艦の有用性について語っていた。確かにユーラス条約で持てる機体の数は決まっているからと言って、この話を聞く限りでは再び戦争でもしたいのかと正氣を疑いたくなる。

そして歩いている最中にガラス越しからアーモリー・ワンが見えていた。正直に言つて浮かれているようだ。浮かれるなどまでは言わないが警戒すらしないのは正直連合の人間を舐め切つているのか？と思つてしまふ。ただでさえ警戒のなさで最新鋭のカオス・ガイア・アビスを奪われるので笑えやしない。

「和真さん、予定じゃあのモビルスーシハンガー群のどれかから例の3機が出てくるんですね？」とシラコキにだけ渡した小型の無線から声が伝わってくる

「ああ、そうなつたら互いに行動を開始するぞ、酷いようだが機体はどれであるうと絶対に入手した方が良いかもな」とどんな機体を拾つても対応できるように考えていた

「はあ、こんなことなら私達の専用機を持つて来るべきでしたね」と少し涙声になつていた

「専用機と言つてもキマイラやヒンジェルは呼び出せば使えるかも知れないが例の一機は使えないぞ？あんなもん使つたら何言われるか判つたものじゃない」と作り上げた一機の存在は隠しておきたいのだ。あの機体を教えた瞬間欲しがる人物は多いはずだ

「うう、仕方ないですね」と話していく途中でビリヤーの執務室の前に着いたようだ。

そして中に入つていった。目の前にギルバート・デュランダルが座つていて、力ガリにソファーに座るように勧めてくる。自分達はソファーの後ろに立つて周りを警戒しながら会話に耳を傾ける。

「で？この情勢下、代表があ忍びで、それも火急の用件とは、一体如何した事でしようか？」

快活に尋ねてくる、聞くまでも無くこっちの用件なんて知つてゐるくせに聞いてくるとは喧嘩を売つてゐるのだろうか？

「我が方の大使での伝える所では複雑な用件と言う事ですが？」確かにザフトからすれば技術者を取られるんだタダで持つていかれるのは複雑だろう

「私には、そう複雑には思えぬのだがな」と軽く脱力して呟いた

「だが、未だにこの案件に対する、貴国の明確な返答を得られないと言う事は、やはり複雑な問題なのか？」と挑発的な口調で言い放つてゐる

「ほう……？」室内に入る双方の随員が彼女の喧嘩腰な物言いに緊張したが、こちらからしたら何時も通りに思える。前大戦でもこんな感じなので今更焦る必要すら感じない。

それにデュランダル議長の方は氣を悪くしたような見えず、むしろ興味深げに首をかしげている。

「我が国は再三再四かのオープ戦で流出したわが国の技術と人的資

源の、そちらでの軍事利用を即座に辞めて頂きたい、と申し入れて
いる」

だがテュランダルは眞面目に受け入れるつもりは無いようでその表情はまるで子供のイタズラを大目に見る教師の物だった。この結果をシユウは予想して少し呆れてしまった

そしてテュランダルは突然工廠を案内しようと言つて司令部から出て行く。周囲には格納庫が並びときおり広い路面をモビルスースが地響きを立てて横切る。

シユウは警戒の為にカガリの近くを遠ざからず離れすぎずを行いながらMSを確認していく。ガズウートやゲイツR他にもジンやシグ一が警戒しつつも動き回っている。そしてたびたび来るオイルの匂いが自分が本来居た場所を思い出させる。

「姫は先の戦争でも自らモビルスースに乗った戦われる勇敢な方だとハンガーの中を時折指示して解説しつつこの行為を言い訳するようになつた

「また最後まで圧力に屈せず、自国の信念を貫かれた『オープの獅子』ウズミさまの後継者でいらっしゃる」カガリは父の名を出されて悲しそうな表情をしていた

（和真さん何時ガンダムは動くんですか？このままじゃどう対応して良いのかわかりませんよ）とテュランダルの言つてゐる事にウンザリしているようだ

（判らん、でもそろそろ動くはずだろ？あいつ等も今回の件で自分達の間抜けっぷりには、反省してくれる事を願うよ）

（そうですね、同じ人種と言つても此処まで呆けていると、私自身も叱りたい気分です）

（頼むからおまえ自身も自虐はするなよ？真衣は他の人と比べて優秀なんだから、それに俺自身も大切なパートナーを失うのは辛い）
と悲しそうな声を出した

（はい・・・ありがとうございます。私も貴方を置いて死なないの
でシユウさんも置いてかないで下さいね）と会話をしていた時に
警報が鳴り響いた、シユウとシラコキは周りを見回しながら移動を
開始した。

そして一つの格納庫から扉を貫いてビームが撃たれた。扉は溶けて
開きビームの飛んで行つた向かいの格納庫で何かが誘爆する。

すぐさまザフトのMSが出てきている。それを横目で敵機を確認し
ながらMSを探し始める

今は他のMSが出撃し3機のガンダムと撃ち合つているが普通のパ
イロットでは返り討ちにあうのが鬱の山だろう。

そして移動中に近くのハンガーにビームが撃ち込まれた。

「クッ…見境無しに攻撃しやがつて危ねえな」と思わず言つてしま
つたが

当たり所が良かつたのか一機のガイツRが目の前に倒れこんだ。

「良し、MSさえ有ればこっちのもんだ」「
と言つて迷わず機体に乗り込んだ。そしてゲイツRを立ち上げらせ、
目の前の3機を睨み付けた。

「ザフトもこんな物作り上げるからー」と言つて機体のバーニアを
吹かせてアビスへと突っ込んだ。

だが直ぐに此方に気付いたアビスはすぐさま連装ビーム砲を連射
していく。

だがその攻撃を盾で防御しそのまま突っ込みショルダー・タックルを
喰らわす、そして体勢がよろけた瞬間を狙つて左足のブースターを
吹かし膝蹴りをコックピットに喰らわした。

それでもフェイズシフト装甲のせいで凹みはしなかつたが、少し空
中に浮き腰に付いていたレールガンを連射する。流石にガンダムタ
イプでもこの連激を防ぎ切れなかつたのか、ビルまで吹っ飛ばされ
る。

「何なんだよお前はー」とアビスのパイロットが激怒して言つてく
るが

「さあな、自分で考えてみろよ。誰を怒らせたらマズイかきつかり
教えてやるよ」と言つて何時でも格闘が出来るように構える

そして再びアビスが体勢を戻す前に叩こうと再び攻撃しようつと突撃
したが、すぐさま危険を感じ左へとローリングした、左肩が地面に
擦つたが今更メンツ等気にするべき物ではない。直後シュウが居た
場所にミサイルと銃弾が降つてきた。

もし反応し切れず直撃していたら、運悪く死んでいたかもしない、そして追撃する様に2つのポッドが迫つて此方に銃口を向けようとしたが、1つのポッドがビームに貫かれ爆散した。

「ああ、ようやく来たか、少し遅刻してないかシリコキ？」
との行動を予想し敢えて何もしなかったのだ。

「仕方ないですよ、私だつて使えるMSを探すのに必死で大変だつたんですよ?」と愚痴を言いながらもう一機のゲイツRが自分の横に着く

「そういえば、アスランとカガリは如何したんだ?」と心配になつてしまつた

「ああ、それなら今ガイアとやりあつていますよ?技量の差は圧倒的過ぎますけどね」と言つて機体の居る所を見る。今は互角だが直ぐにアスランの方が優勢に成るだらう

「まあ良い、今は破壊じやない足止めで良いんだ」と言つて目の前の機体の行動に注意払つていた

「了解、前大戦で生き残った実力相手に見せ付けて上げます」といつて、目の前の機体がどのように動いても対応できるよう考へていた。

そしてお互ひの準備は整つたのだろうゲイツ一機がカオス・アビスへと突つ込んでいく

だがアビスは肩の3連装ビームとスキューラを放つて、此方の固まつて動く事を阻止しようとした。

二機は咄嗟に左右に別れビーム砲を避けるがシユウにカオスのビームサーべルがシラコキにビームランスが迫った。

シユウはサーべルを防ぐ事をせずゲイツの左腕を犠牲にし肘打ちをカオスに喰らわせ、あまりの衝撃で後ろによろけて腕をコックピットに押さえていた。当然その様な隙を見逃す訳が無く左足で首を狩る様に振りメインカメラを割つた

「幾らガンドム系としても機体を最大限使用してない奴に俺は負けない」とメインカメラを割つてサブカメラだけを使って未だに後方に下がろうとしているカオスに言い放つた。

一方シラユキの方は突いてくるビームランスを機体を半身にしランスを横切らせた。そのまま持ち手を掴みアビスから引っ張つてぶん取つた。

しかしアビスのパイロットも直ぐに反応しランスから手を放し再びスキューラと3連砲ビーム砲を放つてくるが

「クスッ…直線的な攻撃ほど読みやすい物は無いんですよ?」と微笑しながら先程の攻撃を大きく空振りし隙が出来た所を左腕の関節部にランスを突き刺し手を離した。

直ぐに連激に繋げようと思つたが、後方に下がられ右腕でランスを引き抜いていた。だが今は全く使い物には成らないだろう。

そして、ふと上から飛行音が聞こえて来た少しだけ確認すると戦闘機と何かパーティを引つ張つて動いてい来るのが見えてきた

→シン・アスカSIDE→

誰かがカオス・アビス・ガイアの三機を奪取したと聞き直ぐに奪い返して貰う為ソードシルエットを持ったコア・スプレンダーでアーモリー・ワンまで進んでいった。

「誰だか知らないけど、また戦争でもしたいのかよ！」と激怒してしまったが今は直ぐに対処しなければ成らないと思い目の前の惨状を叩撃した。

あたりには大量のMSの残骸と燃え盛る格納庫だけしかなかつた。

そして肝心のカオス・ガイア・アビスを探して発見したが正直目の前の光景に自分の目を疑つてしまつた

今回造られたカオス・ガイア・アビスは、どのMSよりも性能は高いはずだ。

今はザクウォーリアがガイアと戦つて対等に遣り合つてゐるが此れはまだマシだ。

何をやつたのか、ザクウォーリアよりも劣るはずのゲイツRが何故ガンダムを上回つてゐるんだ？

普通だつたら逆の展開が普通な筈だと思うのだが今はカオス・アビスが押されている、正直パイロットは化物じやないのか？と思いたくなるほどだ。

もじこのあと会える物なら是非会つて見たいものだ。

→SIDE END→

「ふう、ようやくインパルスが来たか」と言って機体に不具合の有る力オス・アビスを睨み付けた

流石に増援が来て不利と判断したのか一機は最高火力をロードーの壁に撃ち出し自己修復を無視して溶けた所から抜け出して行った。そしてガイアも後を追う様に出て行った。

そしてインパルスは後を追うように壁から出て行った。そして他の赤と白いザクが出てきた。

シユウは、それを見て少し安心しながら有ることを言ってしまった。

「これで再び戦争が始まる。一部の上層部の身勝手な行動のせいでの多くの命が失われる」と少し悲しくなってしまった

「連合の此れを図つた高官共覚えてろよ?」のツケは何倍にも返してやるよ

と何処かに居る者達に対してもシユウは怒りを含めながらも冷たい声で言い放った

PHASE29（後書き）

今回は謝罪なので後書き念話はあります、申し訳ありません
ご意見・ご感想ありましたらドンドン書いて下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～SILEで何か有りましたら言って下さい

PHASE30（前書き）

抹茶「はい、フェイズ30を今回速めに書き上げました。」

ショウ「2日で速いと思っているのか？」

シラコキ「本当に早い人だつたら1日で次話書き上げますしね」

抹茶「ガンダム系統は長いから書く量も不思議と増えるんだ」

ショウ「そうか、やはり今回速めに仕上げたのは」

抹茶「ええ、自分なりの謝罪です。言葉を詰つより行動で示した方が速いと思って」

ショウ「せつか、じゃあ今回は自信作なんだろ？」

シラコキ「話の内容は？」

抹茶「それは読んでからのお楽しみで、それじゃあ本編に移らうか」

抹茶・シラコキ・ショウ「それでは、本編をお楽しみトモー。」

「何故こうなったんだろうなあ」と思わずシユウは今の状況に愚痴つてしまつた。

「仕方ないですよ。状況は状況だつたからとは言えザフトのMSを使用したんですから、銃を構えられますよ」とシラコキも苦笑いになつていた。

（回想）

そう、彼等はカオス・アビス・ガイアを打ち払つた後護衛対象の力ガリが負傷してしまつたらしい。流石に自分たちも目の前の戦いに忙しかつたので決してアレックスを責める事は無いとしてもこちら側が怒られるのは仕方ないと思つていていたのだが

「今は、そんな事をやつている暇は無い。力ガリを治療したいから今回造られたミネルバに保護を求めよう」と言つて力ガリが目を覚ましていたので話しかけていた

「判つた、取り敢えず俺と真衣が先行する、アレックスは後ろから着いて来てくれ」と言つて機体はミネルバに向かつた。

先程の戦闘で機体はボロボロで不恰好だが守る為なら機体を気にしてる暇など無いだろ？

そして片腕を失つたゲイツRと田立つた損傷は無いが所々擦れいるゲイツRが入つた瞬間色々と注目を浴びてしまつた。そして後を追うようにザクウォーリアも着いてくる。

先に俺と真衣がMSから降りる、そして直ぐにアレックスとカガリが降りてくるので、容態を確認する為に近づいて確認する

「如何なんだシユウ？カガリの容態は大丈夫なのか？」とアレックスが心配してくる

「ああ、大丈夫だ。少し頭を切つているが、これなら針を縫えば直ぐに治るだろう。あとは、コイツは軽い脳震盪だな。アレックス肩を貸して運んでやれ。今は歩くのは辛いはずだ。」と的確に言い放つた。

「じゃあ俺がカガリに肩を貸しているから和真と真衣は誰か呼んでもくれるか？」とアレックスは余程カガリを心配しているが（何で原作だとカガリ捨てて最後メイリンとくつ付くのかなあ）とついつい思つてしまつた。

「ああ、判つた。直ぐに人を「そこの4人動くな！」…はあ、何か前もこんな事有つた気がする」と言つて軽く呆れ掛けてしまつた。
「回想終了」

赤服の女性と数人の軍人がこちらに銃口を向けて叫んでくる。咄嗟にシユウとシラユキはカガリとアスランの前に立ち衣服からデザートイーグルを抜き出した。

だがお互いに睨み合つていると艦内放送が流れてきた。

〈本艦は此れより発進します！各員、所定の位置に就いて下さい〉

（やはり発進か、全ては原作通りに始まつて来ているんだな。だが

今この状況を如何するかだな）

とツイツイ今の状況に呆れながら溜息を吐き出した。

「そこの4人動くな！その一人も銃を捨てろ！」と艦内の放送に驚いていたが、直ぐに此方に叫ぶ。

まあ当然の反応だ。文字通り部外者の俺らが、まるで自分の機体のようにザクとゲイツRに乗り込み軍艦にまで来たのだから

「何だお前達は？軍の者ではないな？何故ザフトの機体に乗つている！？」次々と聞いてくるが。結構気が立つてるようだ。まあ当然だろうさつきまで同じ様な部外者に最新鋭のMSを奪われたので嫌でも疑いたくなる。

だが「銃を降ろせ、こちらはオープ連合首長国連合代表 カガリ・ユラ・アスハ氏だ」とアスランが高圧的に答えていた。

さすがに此れに付いては驚いたのか赤服の女性と周りの兵士から銃口は降ろされどよめきが走った。

「俺は随員のアレックス・ディノ。そこの一人はアスハ氏のボディー・ガードをやっている古都春 真衣と朝倉 和真だ。デュランダル議長との会見中騒ぎに巻き込まれ、避難もまま成らないままこの機体を借りた」

とアスランが説明し、此方の身元が判明したと思いショウヒシラコキはお互いに銃を懐にしました

「オープのアスハ？」

赤服の女性は曖昧に内容を繰り返す、正直アスランの言葉を疑つて

いるのだろう。だがこちらがVIPで有る以上、確信が持てないうちは相手も慎重に振舞わざる得まい。本物であるうと偽者であるうと。アスランは居丈高に要求を突きつけた

「代表も軽いとは言え怪我もされている。議長は此処に居るのだろう？お目に掛かりたい！」

此方を取り囲んでいた兵士達は困惑で田と田を交わしていた。

そして一人の兵士が近くにあつた端末に連絡をいれていた。

「取り敢えず代表の怪我の応急処置をしたいと思いますので、着いて下さい」

と赤服の女性が周りに指示を出し着いて来る様促していた。

そして医務室に向かっている最中にシステムコントロール全要員に伝達。現時点を持つてLHM-BBO1ミネルバの認識コードは有効となつた。ミネルバ緊急発進シークエンス進行中。A五五M六警報発令、ドックダメージコントロール全チーム、スタンバイ

›

とこう放送が聞こえて来た。この艦は今から宇宙へと進んでいくのだろう。此れである艦が連合の物と判つてしまえば再び戦争が始まるだろ。シユウは再び戦争が始まると悲しく思つていた

そして意識が少しだけハッキリしてきたカガリが心配そうに「避難するのか、この艦？プラントの損傷はそこまで酷いのか？」と自分が傷ついてるのに未だに他の事を心配している。

女性は肩越しから此方を見やつたが何も答えない。一応前後をシユウとシラユキで固めているが未だに武装した兵士に周りを囲まれて動いている。

守るといつより此れは監視の類に近いだつて、シユウも今の状況は理解できるが余り気持ちの良い物ではない。

そのとき艦内に警報が流れ始めた
「コンディション・レッド発令！ コンディション・レッド発令！ パイロットは直ちにブリーフィングルームへ集合してください」シユウは原作を知っていたから、理解はしていたが正直今の戦力で勝てるかどうかすら謎だ。

彼自身力ガリに頼まれば出撃するかもしれないが、ザフトに頼まれたら素直にNOと言えるだろう。第一この事態の元凶はザフトでもあり警戒を怠り過ぎた故に成った事だ。自分達の不始末は自分達で片付けると考えている。

「戦闘に出るのかー？」の艦は…

驚くべき事態にアスランがきつく問いただすと女性の方も戸惑った顔を此方に向けた。きっと彼女事態も現状を理解し切れてないのだろづ

「アスランッ」その名に女性が反応した「アスラン？」

とたんに真っ正直な力ガリが口を押さえる。非常事態の連続なので混乱し思わず偽名を使わなかつたのだろう。だが救いは此方の本名まで言われなかつた事だ。言われてたらきっと大変な事に成つていただろう

そして女性はさつきまで疑問の田だつた筈だが、今は違う田付きに成っていた。そうこれは好奇の目だった。そして今度は此方にも目を向けた。多分此方にも何か有るんじゃないのかと考えているのだ

るつ。

そして彼等は医務室へと着いたが此処からはシユウの独壇場だった。「一応俺も医務の資格は持っているアスハ氏の治療を任せてもらいたい」と言つて資格を見せびらかした

一応偽名になつてゐる。そう此れは簡単に光の反射で見る所によつて名前が変わる加工を加えているのだ

「行き成りなんですか？貴方達は護衛対象なんでその場でじつとして貰いたい」と女性に叱られそうに成つたが

「私は軍の医務より彼を信頼している。だから私の治療は彼に任せたいと思つ」とカガリが言つて女性は渋々と下がつていった。

「それで如何しますか？針を縫えば治癒は早くなりますが、少し痛いですよ?」と問いかける

「構わない、糸で縫つてくれ、1分1秒でも早く治したいんだ」と言われたので

「判りました。少し痛いですが我慢してください」といつて消毒しそうさま針を通した。この分なら1針で終るので痛みも一瞬で済むだろうと思つたが…

「痛いっ！もっと優しくしてくれシユウ！」と思いつきり本名を言つて來た。

「私は和真です代表、勘違いしないで下さい。前大戦の英雄の名前を私が名乗るなどおこがましい程です。それとあと少しで終るので我慢してください」と言つて黙々と作業を続け、最後に上から傷を

触らないように水を弾くテープを頭に張り包帯で巻いて治療を完了した。

シラユキ達の方に振り向いたら、今度は女性だけでなく多くの兵士が興味を持った目でじっと見てきた

「取り敢えず代表の方の治療を終えました。艦長の方に連絡していただけますか?」ヒシュウは苦しみ紛れに頼み込んだ。

そして一人の兵士がブリッジと連絡を取り合って直ぐに返事が返ってきたのか

「議長達が艦長室でお待ちです。着いてきて下さい」と再び誘導され始めた

だがシユウはそんな事は如何でも良く感じてきた。今はこの事態を開しなければ正体がばれる。

「シラユキ如何すれば良いと思つ?」と思わず無線機越しに話しかけてしまった

「あつ、あはは仕方ないですよね。アスランさんに引き続きシユウさんまで正体ばれそうなんですか?」

「全く笑い事じゃないぞ?今でも後ろから視線を感じるし、だからと言つてボディーガード役だから後ろ振り向けないし」と少々ウンザリしてしまった。

「確かに、後ろから幾つか視線感じますね、それにそろそろ私の正体を勘ぐってる人も何人か居ますし」

「……」いつだけカガリの生真面目さが裏田に出てしまつたな。だけど今はしようがない。まあだったらザフトのデータバンク荒らしまくつてそんな事気にしてられないよつにしてやるうかな」とあくびに事を考えてしまつた。

「中にどうぞ」と言ってガガリたちは艦長室内へ入つて行く

そしてデュランダルとタリア艦長が座っていた。カガリとアレック
スに座るよう促して自分たちはカガリの後ろに待機した。

そしてデコランダルは「本当に、お詫びの言葉も無い」と憤りかな口調で話しかけてきた

「姫まで、このよひな事態に巻き込んでしまひます。ですが如何か
ご理解頂きたい」

ようやくミネルバの艦長室に通されて議長の面会を果たした。これからどれかの艦が戦闘に向かうのは判つていたが、まさか力ガリの安全を図ろうとして避難したのによりにもよつて行くのが戦場というのは、悪い冗談にしか思えない。

力ガリは青ざめた顔を俯けている。多分考えているのは襲つて来た部隊の事だろう。

「あの部隊については、まだ何も判つてないのか？」とやはり考えていた事を言つていた

「ええ、まあ… そうですね。艦などにも、はつきりと何かを示すような物は、何も」デュランダル議長もその部隊の背後に居る者は大体想像しているが確たる証拠が無いので明言できないのだ。

シユウも弱みを握ろうと以前入手した端末から調べようとしたが、流石に別のデータに入れてるのか証拠は一切手に入れられなかつた。

「しかし、だからこそ我々は、一刻も早くこの事態を收拾しなくては成らないのです。取り返しが着かない事に成る前に」とデュランダル自身もこの件には焦りも感じてるのだろう

「ああ、判つてゐる。それは、当然だ議長。今は何であれ、世界を刺激するような事は有つては成らないんだ。絶対に……！」

シユウは当然の事だらうと思つていた。そう今の世界は表面上は平和を保つてゐるかも知れない。だがそのギリギリの状態で保たれてゐる平和に少しでも刺激が来た瞬間に平和という物は崩れ去るだろう。これまでの一 年間はプラントも地球も多大なダメージを先の大戦で受け、お互に回復するために平和と言うな元に手出しを避けていた。

だが今その平和がたつた一つの部隊のせいで崩れ去るうとしているのだ。

「ありがとうございます。姫ならばそう仰つて下さると信じております」と力ガリに笑みを浮かべているが、此方にも笑顔を向けている。だが此れは演技にしか見えなかつた。

シユウは油断せず常に警戒を払つてゐた。この人は此方が気を抜いた瞬間恐ろしい事をやつて來るのではと危惧していたのだ

「よろしければ、まだ時間の有るうちに、少し艦内を御覧に成つて

下さい」と情報を教えてくれるとかと錯覚しそうに成つたが、

流石の艦長が「議長！」と警告を発していた。まあ至極当然だらうザフトの最新鋭を他人に見せびらかすのは、正氣の沙汰ではないだわい。

だが議長は平然と「一時とは言え、いわば命をお預けに頂く事になるのです。それが盟友としての、我が國の相応の誠意かと」議長がそう言うと最新鋭の艦長だとえど反論できない。反論などしよう物ならそれは盟友関係を否定してくるような物だ。

（ザフト兵SIEGE）

「しかし信じられないよな、マジで嘘みてえ」と赤いザクのコックピットに頭を突っ込んだヴィーノがそう言い放つた。

「何でイキナリこうなるんだろ？だよ」と軽く戸惑っていた。当然だろう明日進水式もまだなのに、行き成り実戦なのだから戸惑いが出来るのは当然としか思えない。

「でも一番怖いのはこのまま、また戦争に成っちゃったりはしないよね？」とヴィーノが声を潜めて同僚に聞くと

「起きなことは思つけどね」とコウラン自身も肩をすくめてしまつた。

だが彼らが一番気に成つていたのは

「なあ、あのゲイツRとザクを使ってたパイロットって誰なんだ？」と大きな疑問に成つていたらしい。流石にゲイツの腕を一本切り落としたのは激怒したいが、あそこまでガンダムを翻弄するパイロッ

トは初めてだ。

「ああ、あれに乗っていたのは、オープのアスハとその護衛」とルナマリアが答えていた。

彼女は自分の機体に乗りながら疲れたように肩をすくめる「それでさつきは大騒動だつたんだから」

だがその言葉にシンは反応し「オープのアスハ！？」とシンは直ぐに戻ってきた。

ある一人のパイロットのお陰で家族は死ななかつたが、オープを焼いて自分達だけ逃げ出したのだから彼自身恨みを持っているのだ。

「うん。私もビックリした。こんな所でオープの姫様に会つとはね」とルナマリアは言つたが、再び有る事を無造作に聞いた。

「でも何？あのザクとゲイツはどうかしたの？」

「ああ、いや……ミネルバに配備される機体じゃないし、それにパイロットの腕が気になつて誰が乗つてたのかなつてね」とシンは言葉を濁してそう言い放つた。

「操縦していたのは護衛の人らしいよ。たしか名前はアレックスと朝倉と古都春つて名乗つてたわね」と言つていたがシンは少しだけ疑問に成つてしまつた。

（何故此れだけの腕前が有つて誰にも気付かれなかつたのだろうか？）と考えている時に

「でもアスランとライトニングかも」とルナマリアが秘密みたいに囁いていった

「「「えつ?」」」とその場に居たシン・ヨウラン・ヴィーノは驚いてしまった。

彼等は目を瞬かせた。アスランはジャステイスに乗つて大戦を終わらせた。英雄だった。そしてシユウ自体も『閃光の殺戮者』という名で有名に成ってしまった。

「代表が咄嗟に言つちゃつたのよ。その人達の事を『アスラン』『シユウ』って、でもアスランの方はオープに居るつて噂でライトニング自体は死んだって事で有名な筈なのにね」

アスラン・ザラ 当時のプラント評議会議長パトリック・ザラの息子にしてザフトのエースパイロット。

大戦中、敵の新型モビルスーツを単機で倒し、ネビュラ勲章を授与されて、特務隊フェイスに配属。しかしその後軍を脱走し行方は不明だつたはずだ。

彼のその後の中にはオープに亡命したという説があつたのだ。

だが一番彼らが衝撃だつたのがシユウ・K・ライトニングの存在だ。彼は一度砂漠の虎の配下と成りバナディーヤで既にフリーダムと同等の性能を持つキマイラを单体で造り出し、更には整備士として一流なのだ。

また彼の行動は、全く持つて不可解な点も多かつたが、彼の行動でニコル・アマルフィの生存をさせた。ある意味ザフトでも一目置かれた存在だ。

シン事態も彼にはオープで世話に成つてたが、ジョンネシスの爆破に巻き込まれ死んだと聞いたときは回りが真つ暗に成つてしまつた。

「アスラン・ザラ シュウ・Ｋ・ライトーンング」とシンは自分の先輩の名を呟いた。たしかにこの一人ならどんなMSに乗つてもガンダム系を圧倒しても不思議ではない。

しかし何故あの有名なパイロット達がアスハの護衛などを行つてゐるのだ？シンは少しの間釈然としない思いを抱いた。

→ SIDE END ←

「しかし、この艦も、とんだ事に成つた物ですよ」

「進水式の前日に、いきなりの実戦を経験せねばならない事態になるとはね」とやれやれと思つた所なんだろう。

ちなみに今自分たちはレイ・ザ・バレルに案内されてゐる。途中ですれ違つた兵士が一行に敬礼しアスランも反射的にやつていた。これじゃもう偽名を使っても意味を為さないだろ？と思つてしまつたそして「ここからモビルスーツナックキへ上がります」と書いてエレベーターへと乗り込んだ

（正直言つならば此処まで見せて良い物か？まあ盟友つて言つ位だし此れ位はするか）と思つてしまつた

「艦のほぼ中心とお考え下さい。搭載可能機数は無論申し上げられませんし、現在その数量が乗つてているわけでもありません」

まあ教えられないのは当然だらう、戦艦の中にビューリーのMSを

乗るのかに知つた場合には脅威に成る時だつて当然あるのだ。つまり敵対した時に数を抑える為にMSを多く持つてゐる戦艦を潰すのは定石だらう。

そして目の前の緑色の機体の前で立ち止まり「NGMF-1000ザクは既にご存知でしょう。現在のザフト軍主力の機体です」という説明を受けガガリとアスランは感嘆しているが

（正直主力言つけどそこまで魅力を感じないんだよな。此処までも充分強いけどパーティクルを使わないとそこまで大きい所は見えないし、単体でパックを失つた時に使い易い様もつとチヨーニングしないのか？）と色々と批判をしそうに成つてしまつた。

「そしてこのミネルバの最大の特徴とも言える、この発進システムを使うインパルス工廠でご覧に成つたそうですが？」とアスランに聞いてるようだ

「あ、はい・・・」話を向けられてたが彼は何故か落ち着いていかつた。

「技術者に言わせると、これは全く新しい、効率の良いモビルスーザンシステムなんだそうですよ。私には専門的な事は判りませんがね」と言つていたがシュウもこれには同意した。

「そうですね、このガンダムは戦艦から出ても一々戻つてパーティクルを取りに帰らずに戦艦から射出してくれるし、レーザー誘導を行つてるので外す事も無い。それに移動時は戦闘機に戻つていちはやく戦場を行けるので便利と言えば便利でしょう」とシュウはこの機体の良い所を見つけつい口に出してしまつた

「ほう、そうなのかい？しかしボディーガードの身分でありながら詳しいね？」と此方に視線を向けてきた

「ええ、まあ此れでもボディーガードに成る前は技術者でも有つたので、機体の特徴がわかるんですよ」

と適当に答えておいた。正体を懲々明かすまで無いが自分の仕事は喋つても大丈夫だろうとシユウは判断していたのだ

「……しかし、やはり姫にはお氣に召しませんか？」

「議長は嬉しそうだな」とカガリの単純な言葉についデュランダルは苦笑していた。

「うれしいと言う訳では有りませんがね。あの混乱の中から皆で懸命に頑張り、ようやく此処までの力を持つ事が出来たと言つ事はやはり」

「力か…」カガリはやりきれない表情で咳き、手を上げた。「争いが無くならぬから力が必要だとおっしゃったな議長は」

「やはりカガリさんも憤つてますねシユウさん」と無線機から声が聞こえた

「ああ、一番平和に心から願つてているカガリだ。ザフトで造られた機体がザフトを破壊したんだ。力のありようにも疑問を持つさ」

「しかし、何時の時代も人争いを止める事は出来ないんですかね？」と一番の疑問を投げかけてきた

「それは先の時代に成らないと判らないさ、でも人は力が有る内は

争いを止めない。だからこそ俺らが居るんだ。争いが起きても何時かは誰かが止める為に尽力する。それが運命だ」と言い切った。

そのときに会話に集中しすぎたせいか内容は判らないが叫び声が聞こえた「さすが、綺麗事はアスハのお家芸だな!」と馬鹿にした声が聞こえた。

「シン!」と直ぐに此処まで先導したレイという兵士が止めに掛けた。だがシンはそれも聞かずくつくりとアスハに振り向き怒りに染まつた目を向けた。

シユウ自身も見た事がある。これは以前のキラとアスランが争った時に見られた憎しみと怒りしかない目だ。

そしてカガリがその目にたじろいた時く敵機捕捉距離8000mすぐさまアラートが鳴り響いた。〈コンティショングレッド!バイロットは搭乗機で待機せよ!〉

「最終チェック急げ!はじまるぞ!」とたんに凍り付いていたスタッフがその空気を忘れ慌ただしく動き回り始めた。そして激怒していたシンはモビルスーツデッキから飛び出していく。

「シン!」と呼び掛けた後直ぐに此方に向き直り「申し訳ありません議長!この処分は後ほど、必ず!」といつて彼も自分の機体へと向かつていった

デュランダルが今更ながら取り直すようにカガリに弁明した。

「本当に申し訳ない、姫。彼はオープからの移住者なので。よもやあんな事を言うとは思いもしなかったのです」

「えつ・・・？」 最初は訳が判らなかつたカガリだがすぐさまその言葉に衝撃を受けシンの消えた方に目を向けていた。

そしてすぐさま「取り敢えず私達はブリッジへと向かいましょう」とデュランダルが今度は案内してくれた。

そしてすぐさまブリッジに付いてデュランダルが艦長に話しかけて許可を貰つた。すぐさま後ろのシートにデュランダルとカガリそしてアレックスが座つていつた。ショウとシラコキは席が空いてないので立つていた。

「ブリッジ遮蔽、対艦、対モビルスーツ戦闘用意！」カガリとアスランは驚いていたが、ショウとシラコキはそこまで驚かなかつた。今までの戦艦の欠点を無くしたような物を要約着けたのだから驚く必要性も無かつたのだ。

そしてオペレーターが早口で何かを言つてゐる。速くて上手く聞き取れなかつたがザクとインパルスの出撃だらつ。

「ボギーウンか」唐突にデュランダルがアスラン・シラコキ・自分に視線を回して話しかけてきた。

「本当の名前は何といつたんだつね、あの艦の？」と行き成り話を吹つ掛けられ

「「は？」」とシラコキとアスランは焦つていたがショウは知つているしこの行動は原作で知つてるので戸惑つ事も無い。

そしてシュウは議長の詞に耳を傾けながら、モニター越しに映った宇宙を確認した。今はプラストインパルスが先行して後を追うようにゲイツR一機がついていく

「名はその存在を示すものだ」と話は未だにもつたいくぶる様に続く

「ならばもし、それが偽りだつたら？それはその存在そのものも偽りという事に成るのかな？」と議長は実存主義的な話をしている。だが次の瞬間爆弾を落とされた。

「アレックス・ディノ 古都春 真衣 朝倉 和真……いやアスラント・ザラ君 シラユキ・カグヤ君 シュウ・K・ライティング君？」と言つて来た。既に正体はばれていたか。

直ぐに艦長が此方に振り向いてきた。一人だつたら振り返りはしなかつたのだろうが3人も居るのだ確認すらしたくなる。

「ランチャ - ワンからランチャ - シックス、一番から四番『ディスペール装填！ C IWSトリスタン起動！ 今度こそしとめるぞ！』と矢次でどんどん指示を出している中

此方をにこやかに見てくる議長にアスランは睨み返す。こいつは隠すまでも最初から気付いていたのだ。

「議長それは・・・！」とカガリが腰を上げて言つがそれを制するよつに議長は穏やかに笑う

「全てでは私も承知済みです。カナーバ前議長が彼らに取つた措置の事はね」カガリは再び座りなおすが、判つてゐるなら何故今この場で正体を暴露するんだ？と思つた人物は多いはずだろつ

そして正体が気に成るのかモビルスーツ管制の少女が此方をチラチラと此方を確認する。ただ要約警戒心を取り戻したアスランは不信の目で議長を睨みつける。

「ただ、どうせ話すなら本当の君達と話がしたいのだよ、それだけのことや」と言つて来た。

シユウは諦めたように掛けていたサングラスを外してある事を艦長に告げた。「正体ばれちまつたんだし一つ良い事を教えてやるよ。まず今ガンダムが近づいて行つてるのは^{デコイ}だ」と言つた瞬間ボギー・ワンの反応は消えて続いてゲイツRの反応が消えたのが聞こえた。

「ボギー・ワン消失!^{ロスト}さらにショーン機もシグナルロストです!」と叫んでいた。

「イエロー六一一ベータに熱紋三一これは・・・カオス・ガイア・アビスです!」と言つていた。

「何で教えてくれなかつたの?」と此方を睨みつけるように言つて来た。「民間人が軍事に参加しろと?それに自分達が原因で起きた事は自分たちで落とし前を付ける」と言い放つた

タリアは口を噛んだ。彼が言つている事はある意味正論だ。それにMSを作り出した私達にも原因もあると考え目の前の戦場に集中した。

だが次の瞬間「ブルー一ハマーク九チャーリーに熱紋!ボギー・ワンです!距離五〇〇!」

「ええっ！」と副官が驚いているが「更にモビルスーツハ！」「測敵レーザー照射、感あり！」

クルーには動搖が走っていたが直ぐに「アンチビーム爆雷発射！面舵三〇トリスタン照射！」

「駄目です！オレンジ一二デルタにモビルスーツ！」「索敵人がそう叫ぶ

この状況は不味いとつい考えてしまった。背後を取られて敵にロッタクオンされ回頭もままならない

「機関最大！右舷の小惑星を盾に回りこんで！」ミネルバは背後から迫るミサイルを振り切るように走り出す。右舷に巨大な岩塊が迫る。

ミサイルはそのまま戦艦に突っ込んでくるが後部の迎撃システムに落とされ、あるいは小惑星の突き出した岩肌に激突し炎を吹かせる。そして衝撃を受けて戦艦が大きく揺れ悲鳴が漏れる。

「カガリ如何する？まあ依頼なら頼んだから如何にかするが」とシユウは咄嗟にカガリの衣服に無線を付けて話しかける

「如何言つことだ？」と疑問に成つていた

「俺等は今カガリのボディーガードだ。頼まれたらザフトに頭を下げてMSを借りる」と言い放った

「しかしつ！「此処で君達を死なせる訳には行かない！」……判つた。頼む」と言われ

「メイリン！シン達を戻して！残りの機体も発進準備を！アーサー迎撃！」と言った所で

「グラディス艦長先程の暴言を謝ります。私にどうかMSを貸して下さい。今此処で艦を失うのは辛い！」とシユウは言い放った。

「如何言う心変わり？それに貴方は民間人でしょ？MSは貸せないわ」と言つたが

「いや、構わない。私の権限を使う彼にMSを貸してあげよう」と議長がこっちを見て微笑んで来た

「有難う御座います」と言つてシユウは出て行つた

そしてグラディス艦長は

「一人パイロットが行つたわ。MSを貸してあげなさい」とハンガーに通信を入れ言った。

シユウはハンガーを目指して走っていた、だが急に艦全体に衝撃が来た。

とつぞに近くの手すりに掴まり堪えたが有る事を思つてしまつた

（隕石の雨でも食らつたのか？厄介だな）と思いつつ再び脚をハンガーへと向けて走り出した。

「ようやく着いた！すまないがM.Sを貸してくれ！」と近くの整備兵に頼み込んだ

「判りました、連絡は来ていますのでどうぞ此方へ」と言つてザクの田の前まで案内されたが

「ザクより今はゲイツの方が良い！借りてくれ！」と言つて隣にあつたゲイツRに乗り込んだ

「えっ！？」と近くに居た整備兵は全員驚いた。

何故性能の低いゲイツRを選択したのかが全くの謎なのだ。だがシユウは元々射撃の傾向を持つパイロットなので射撃武器を多く積んでいた方が使いやすいのだ。

その証拠に「ライフル一本じゃ足りない、他の武器も借りるよ」と言つて在庫に置いてあつたビームトマホークを腰に提げビームライフルをもつ一本の腕で掴み出て行つた。

そして宇宙へと飛び出した。とつたに出て来た所を狙つたのかドラグーンが4方から撃つてくる。

「クッ！…だけどこの程度なら…」と言つて機体を捻らせて弾を掠

らせただけで済ませ」「のビームライフルを大体の次の予測地点へと打ち込んだ。

ドラグーンは一機は落ちたがもう一機は予測でもしていた様に軽々と避けられた。

それでも攻撃は止まず再びドラグーンが銃口を向ける…

だが「機体のロックオン時射撃時の微調整照準のブレの予測を5%から15%に変更 機体の行動パターン通常オートマニュアルからマニュアルへ変更 機体の必要最低限のエネルギー以外ブースターに全移行」と言って機体の改造を行っていた。

正直こんな危険な真似は余りしないが、状況が状況だったの無理やり変更し再び起動させた。次の瞬間ドラグーンから弾が放たれた。

「ふつ・・・！」次の瞬間機体のGが一気に加算されたが機動性が早くなつた。

そして銃口をドラグーンより少し下に向けていた。

ドラグーンの知能回路は直撃しないと予測したようだが、次の瞬間ネオはすぐさま敵の意図が判りドラグーンを回避させたが再び一機が吹き飛んだ。

そうシユウが遣つた行動は敢えて当らない様に見せかけて銃口を下に向けたが先程のブレを15%に上げた事により調整は難しいが成れたパイロットなら15%角度を下げた所でも撃てるのだ。

「全くゲイツRのパイロット君は化物なのかい！？」と多少驚愕し

ながらそう叫んできた。

「ああ、まあ喧嘩売つてきたんだし覚悟しろよ?」と言ひてビームライフルを連射して翻弄しようと思つたが。

次の瞬間背後にドラグーンが近づき弾が連射される。そして前からはリニアガンの連射して突っ込んでくる。機体を上に上昇させたが、それを狙つていたように

ブーストを最大限にしてビームソードを展開して切りかかつってきた。余りに早いので気を抜いたら即死は仕方ないだろ?

だがシユウもビームライフルを一丁をすぐさま破棄してトマホークを展開した。すぐさま斧のビームの部分でソードを受け流したが、その大きな隙を見逃されず左腕をドラグーンの銃弾で貫かれた。

「クッ!」咄嗟に右腕に残ったトマホークを腰に再び提げすぐさまビームライフルを回収し一機に撃ち込んだ。

だが先程の件も考えて今度はマニュアルで動かしているようだ。簡単に避けられる。

「此れだつたら」と言つてテブリに突つ込んでいった。エグザズも後を追つてくる。そしてテブリの一つに有る物を仕掛けて隠れた。

「ネオ・ロアノーケSIDE~

「あのゲイツ何処に行つたんだ?」とテブリ群に隠れたゲイツを探していた

「クッ…あと少しだといつこのに！」と言しながらレーダーを確認した瞬間にデブリの後ろに熱源を感じ取った。

「ふつ、其処か！」とドラグーンを近づけて撃ち続けたようだが反応は未だにロストしない

「何？如何言うことだ！？」と驚いている所をドラグーン一いつぱいームトマホークによつて切り裂かれた。

「ふう、やっぱり騙してくれたな？こりひしては嬉しい誤算だ」と苦笑していた。

このときネオ・ロアノークは有る事を思つた。知恵もあり実力もある。ある意味ヤバイ奴を敵に回したかもしれない…と

→ SIDE END ←

「どう言ひじだー？何をやつたんだ？」と焦つているが

「簡単なことだ持つっていたライフルにMSのENを込めてデブリに埋め込んだんだ。そして撃ち込んで岩にしか撃つてないから何時までも経つてもロストしない。更にこつちは機体を切つてるから反応はせばれない。つまりお前はまんまと俺に騙されたんだよ」と冷たく言い放つた。

「やばいんだつたら撤退しても良いんだぜ？俺は無闇に命は取りに行かないからな！」と言い切つた

「クッ！…撤退だ！全員撤退しろ！」と言つて全機撤退させようとしているが

「此方はもう終わっている」と言ひて白いザクがそう言い放つた。

「悪いねレイ君、そむかに多くのMSを任しちゃつてさ」 といふ苦笑してしまつたが

「いえ、一番厄介な機体の注意を惹いてくれたので助かります。それに前大戦の英雄に背中を任して貰えるのは凄く光栄です」と言つてくれる。

そして気がついたらミネルバは岩を取り除いていたがボロボロに成つていた。

そして相手の戦艦から何個かの信号が放たれエグザズも撤退していつた。「待て！」とレイ君は落とそうとするが

「止めとけ。今攻撃しても俺らじや対処できない。しつかしゲイツRをボロボロにしたんだからコイツは報告書物かな？」と言ひながらミネルバに向かつていった。

そして彼が帰つて整備班の面々の人とタリア・グラディス艦長そしてシラユキに怒られた。

その後彼は整備班と一緒にMSを修理しグラディウス艦長に報告書を書かされシラユキには正座させられ怒られた……（何故シラユキも参加しているんだ？）と思つていたが

「聞いてますか？ちゃんと聞いてください！最近貴方の行動は、勝手過ぎます！」と色々と続いているが

「いや、あの状況じゃあればしかた「黙つて聞いてください！」・

・はい「と怒られ続けた。それは30分続き彼は密かに「俺頑張つたのに…何で」と涙を流してしまった。

抹茶「今日は此処までです。読んでいただき有難う…」

シラコキ「そうですね、有難う御座います。それと何で今回シユウさんが大量に被弾してるんですか！？」

シユウ「そりゃあねえ、作者説明しろ」

抹茶「俺かよ！？まあ良い。元々ゲイツRは一般兵に作られた普通なMSだ。それを高機動をメインにしている戦いをしているシユウからすれば何時もの感覚で戦つていたら被弾しやすいんだ」

シユウ「そう言つ事だ。キマイラだつたりコノシッター解除有るから普通に便利なんだけどな」

シラコキ「へえ～今思つと私達の機体つて便利ですねえ」

シユウ・抹茶「要約氣付いたのかよー！」

シラコキ「何時も乗つてるから凄さが良く判つてないんですよ」

抹茶「そ…そつか、それよりも今回この指摘を下さった見たら死ぬ死神さん・シーバスさんご指摘有難う御座います」

シユウ「一人とも助かるよ…でシラコキは何をやつているんだ？」

シラコキ「えつ？ああ今回出されたゲイツRとザクとキマイラ・Hジタルのスペックの差を見てたんですよ」

抹茶「お願いだから、後書きでいろいろ事はしないでくれ」

シワコキ「こんな事言わないで下せこー… それから後書き閉めますか」

抹茶・シユウ「もうだな」

シワコキ「こんな時にもはもうなこで下せこー」

シワコキ・抹茶・シユウ「わヒシユウ（俺）とシワコキ（私）はどうなるのか？ 次回お楽しみに！」

「ご意見・ご感想ありましたらアンケートにて下さい

あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～SHDEで何か有りましたら書つて下せこ

PHASE31（前書き）

抹茶「はいPHASE31を完成させました」

シユウ「今日は少し遅かった気がするんだが『氣のせい』か？」

抹茶「多分『氣のせい』じゃないかも」

シラコキ「作者の都合って奴ですか？」

抹茶「まあ、そんな所かな」

シユウ「どうせ、また何かの隠れ蓑を使つつもりか？」

抹茶「すみません、真面目に御免なさい。正直に言つとネタが閃かないんですね」

シラコキ「それを日夜考えるのが貴方の仕事でしょう」

抹茶「田夜つて無理だつての俺だつて寝るし、勉強もせんといけん。2年だから本腰入れて勉強してる所だし」

シユウ「此処にリアルを持つてくれるな。わざと本編入るや」

シユウ・抹茶・シラコキ「それでは本編をお楽しみ下せ」

「ありがとうございます。シウちゃん」とガーナを代表して整備士達から感謝された

「いやいや、こちらこそ好きなんだけいじくらせて貰つたんだし感謝してるよ。ありがとう」と言つて再びミネルバ内を適当に歩き出し始めた

そう、彼が何故こんなにもフリーに動けるのか？それは以前の戦闘から数時間後にカガリからは

「とりあえずシウ達の正体もばれたんだし、ボディーガード役は解任好きに動き回つて良いぞ。でも偶には私の護衛もしうよ？」と言われ

議長からも「君達はある意味YIPだからね。オープに帰るまでミネルバの艦内機密以外だつたらを好きに楽しむと良いよ」と愛想笑いを浮かべてくる。

そつ言う事があつたので々々に技術者として働きたくてハンガーまで出向いたら逆に御願いと頭まで下げられてしまった。

「全く俺になんか頭を下げるほどの価値なんか無いのになあ」と愚痴つていると

「お久しぶりです、シウさん」と懐かしい声が後ろから聞こえて来た

「ああ、シン君か久しいね。家族は元気かい？」と当たり障りの無い事を聞いた。

「ええ、あの時の事は感謝しています。…一つ聞きたいんですけど何でオープの味方をするんですか？」と凄く真剣に聞いてくる

「オープの味方というより俺はあそこが生まれで、故郷だしね。それに今回は頼まれたからやつているんだ。まあ頼まれなくても勝手に遣つてたかも知れなけれど」と言つて頬を少し搔いていた

「貴方は、憎くないんですか？オープが勝手に決めて焼いて！」とオープを焼いたアスハ家に対し激怒しているが

「うーん、確かに最初は俺も憎かつたよ。それこそモルゲンレーの人の達を皆殺しにしてやりたいほどだった」と思い出しながら苦笑していた

「だつたら！」と言つてくるが

「でもね。怨んでその人を殺したりして何が残るのかな？嬉しい？喜べる？答えば全部このだよ」と悲しそうに呟いた

「何故ですか？その憎しみを残すけどでも言つんですか貴方は！」

「憎しみを残せと言つてるんじゃない、そんな物を果たした所で最後には虚しさしか残らないんだ」

「やっぱり貴方もあのアスラン・ザラみたいに偽善者で居るつもりなんですね。失望しましたよ」

「ああ、好きなだけ失望しても良い。俺の行動が偽善と言わ
れても何もせずに見ているよりかは数倍マシだ」と言つていったとこ
ろで

「シユウカセ～助けてください」と馴染みの声が聞こえて来た

「ど・・・どうしたんだ? シラコキ 何か疲れているようだが?」
と聞いてみたら

「疲れるも何も私とシユミレーターで対決したいって言つてる兵士
が何人も居るんですよ」と肩で息をしているようだ。更には後ろか
ら何人も兵が見えている。

「はあ、仕方ない。俺も付いていくから案内してくれ」と言つて最
後にシン君にある事告げとく

「シン君、俺は君の生き方も否定しないし力を幾らでも手に入れて
も良い。でもね、決して力の矛先を間違い無い様気をつけてね。そ
れとキミの戦う意味を何時か僕に教えてくれるかい?」と言つてシ
ュウはシンに背を向け去つていった。

（シユミレーター室）

「ようやく來たんですか? 前大戦で生き残った力を見せて下せ～よ
と好奇な目を向けて言つてくるが

「よせ、ルナマリア。シユウさん、シラコキさん私達にどうか教
授してくれませんか?」とレイが礼儀正しく言つてくれる

「俺等みたいな戦争から一步身を引いた存在がベテランのパイロッ
トに勝てるとは思えないけど」と言つたが

「『』謙遜を、貴方の実力は以前の追撃戦で充分見せてもらいました。充分現役ですよ」とお世辞でも案外嬉しい物だ

(しかし、どうするべきか。此処でレイ君達を鍛えても良いんだが後々此方で戦う時に厄介な相手に成りかねないんだよな。)とシユウは今後の事も考えていた

まあ此処でシユウが鍛えないといって周りの兵士から怪しまれるよりかは、今は本気を出して徹底的に叩き潰して練習にも成らないほどにするべきの方が賢明と考えれるだろう。

「判つた、使用MSに何か制限はあるかい?」と一応聞いといた。

ちなみに現在造られているザクですらキマイラと比べると少し幼るので、制限が無かつたら使つだろう。

だがそれは一般的のパイロットが乗つっていた場合のみだ。流石にレイトルナマリアを相手にするならキマイラで本気を出しても問題は無いだろう。

「いえ、特に無いです。戦いは2vs2のどちらかの負けの宣言または撃墜ですが宜しいですか?」

「ああ、それで良いよ。俺は当然シラコキと組むが、そちらはレイ君とルナマリアさんかな?」

「はい、宜しくお願ひします」「宜しくね。赤服の実力見せてあげるわ」

「ああ、」ヒーラーは宜しく頼む。君達となら手加減無く遣り合えそうだ」と言ってショミリーターに入りこんだ。

「如何します、ショウさん？ あの一人は確実に厄介ですよ？」と作戦を聞いてくるが

「なに、何時も通りに遣れば良いさ。それに俺等は何時だって負けを見た事は無いだろ？」と言つたが

「いえ、私は一度敗れていますね。その大戦で・・・」と齒を噛んで言つてくる

「あれは仕方ないさ。原理の判つて無い奴は負けやすいつての」と言つてデータを送り込んだ

「宜しいですか？」とレイが聞いてくる「ああ、それじゃ始めよう」と言つて砂漠へと飛び出した。

「「懐かしい（な）（ですね）」「と見事にはもつてしまい苦笑してしまつたが

すぐさま一機はその場から飛び退いた。そして其処にミサイルの雨が降り注いだ。

「散開だ。シラコキ！」「了解！」と言つて行動を開始した始めた。

そしてオルトロスが横薙ぎに撃つてきたのでキマイラとハンジエルはすぐさま上空に飛んだ。だが、それが狙いなのかシラコキにビームトマホークが飛んでいったが、すぐさまガンソードを抜き出し刃の部分だけ丁寧に切り取り投げ返していた。

「チツ！」レイは恥々しげに其れをビーム突撃銃で撃ち落としシリキに連射している。

「白は頼んだ！俺は赤を殺る！」と言つて機体をガーナー・ザクに突っ込ませた。

だが遠距離戦を目的とするガーナー・ザクを遣らせない為に妨害するようミニ・サイルが飛んでくるが今回持つてきたガトリングシールドで撃ち落す

シユウは赤はシラユキに任せ反撃をする為に両足のホルダーから一連装ハンドガンを二丁抜き出しザクファンтомへと連射した。

流石はエースパイロットなのか簡単に避けていくが「誘導されてるのに気付こうな」と言ってザクは気づいた時には右側と後方に岩群が広がっていた。そして狙っていた位置に来た瞬間に気付かないよう少しチャージしていたビームキャノンと射出型アーマーシュナイダーを撃ち出す。

アーマーシュナイダーは銃に巻きつけ回避したようだがビームキャノンが引っ張っていた右腕に当り破損した。

だが誘導されたのも予定内だったのか「やれールナマリア！」と若山に立っていたザクにそう叫んだ。

そしてレイ君が囮の行動の間にオルトロスのENが貯まったのか此方に砲口を向けてくるが

「なつ！此處ままじやー…………なんてな」と不適に笑ってしまった。

「一機だけに集中すると周りが疎かに成りますよ」と言つて先程までどちらかのザクのジャマーが働いていたのかザクを探していて無視されていたエンジェルが頭部を切り裂いていた

「クツ！カメラを失つたからって！コンノオオオオオオ！」と言つてオルトロスを破棄し右腕でビームトマホークで切り裂いて来ようとしたが

「射撃型のタイプの人間がマトモに練習もしないくせに…」と言つて右腕を掴み脚を払い背負い投げをし地面に投げ出した。

「キヤツ！」と怯んでいる隙に肩に着けているビームライフルを連射しざくに大量の風穴が開き爆発した。

「ルナ・マリアッ！」と言つてエンジェルを警戒しているが「大丈夫ですよ。私の遣る事は終わったのでどうぞご勝手にシユウさんと撃ち合つて下さい……アッ、危ないですよ？」と言つたが既に遅かつた

「ハツ！」と通信越しに衝撃の強さが伺える。だが此処からは腕で頭部を掴み岩に叩きつける

「ガハツ！」と通信越しに衝撃の強さが伺える。だが此処からは俺の攻撃だ。

そのまま機体の片腕を持ち「リミッター解除30秒間」と言つて空中まで駆け上がり腕を放した。流石のザクも空中では余り動けないのか落下速度を少しづつ下げても、キマイラからは唯の的にしか見えなかつた。そしてホルダーから7.6mm突撃銃を抜き出し連

射した。

そして下から爆発音と少量の爆発の明かりだけが響き

バトル終了

と言った文字が出され戦場から出された。

「ふう、疲れたなあ。しかし久々にトレーニングした気がするよ」と言つてしまった

「有難う御座いました」「流石は歴戦のパイロットですね」と言つて来てくれる

「しかし悪かったねレイ君、流石にやつすきました。謝罪するわ。申し訳ない」と言つて頭を下げる

「いえいえ、此方も戦術を学びさせて貰つて嵌めちやつたのでお互い様です」と笑顔で許してくれた。

「そういえば、砂漠の場所を戦場にした時に『懐かしい』と言つてましたけど何があるんですか?」とルナマリアが聞いてくる

「別に喋つても良いよな、シラユキ?」と一応許可だけは取つといった。

「ええ別に良いですよ。と言つより私の方から話したら良いんじやないんですかね?」といってシラユキが代わりに話し始めた。

「あの砂漠の場所のバナティーヤに凄く似てたんですよ」と言つたら

「確かに以前砂漠の虎と呼ばれる方がいらっしゃった場所ですよね？」
トレイ君も聞いてくる

「そうだね、私達が会つたのはバナディーヤのシユミレーター室なんだけど、戦つた戦場も砂漠なんだよね」とアハハと苦笑しながらそう言つてしまつた。

「そりなんですか？で結果はどうなつたんですか？」ヒルナマリア
が続きが気に成るよつに聞いて来た。

「結果惨敗だつたよ、その頃からシユウさんは、キマイラに乗り始
めてたし私達はバクウだつたからボロ負けだつたんだよ」

「へえ～シラコキさんは何時からエンジェルに乗り始めたんですか
？」ヒルナマリアたちの会話が続いている中シユウは有る所に連絡
を取つていた。

「もしもし、俺だけぞ聞こえるかい？」と電話の相手に話しかけた。
「ええ聞こえるわシユウ君、どうかしたの？」と電話の相手が心配
して聞いてくる

「いや、特に無いんだけど、悪いんだがキマイラとエンジェルを
打ち上げてくれ。俺の予感が当らなきや良いんだがもし当たつたと
きの事を考へると自分の専用機で戦わないとな

といこの後を予見して呼んで置こうと考えておいたのだ

「判つたわ、直ぐにカグヤから打ち出すわ。パックは大気圏突入パ
ックで良いんでしょ？」と一応確認てくる

「ああ、それで頼むよ、あと武器入れられるようなコンテナも入れてください。それではエリカさん早めの打ち上げを頼みます」と言つて通話を切つて後ろを振り向いた

「何で皆でそう冷たい目で見てくるんだい?って言つか睨みつけてないか?」と何がなんだか判らぬ呆れて言つた瞬間に

「いや、シユウさんつて訓練の時に自分の機体馬鹿にしたせいで徹底的に潰したんですね」とルナマリアがシユウの行動に呆れてそう言つて来た。

「しかも何度もシラコキさんの行動の優しさに気付かない鈍感さ…此処まで来るとわざとしか思えないですね」とレイ君も少し呆れたのか冷たい目でこっちを見てため息を吐いている。

「何が何だか判らんが、ちょっとシラコキ来てくれないか?」と言つて手招きをして呼び寄せる

(今回必要な可能性があるからエンジェルとキマイラを呼び寄せた。単機で大気圏と地上に降りた時にアスランが乗るザクとシン君のインパルスを救助する可能性が有るから覚悟しといてくれ)と耳元でボソボソと呟くが

「シ…シユウさんの吐息が掛かつて…・はふう」とシラコキは何故か顔を赤くして倒れてしまった

「えつー!シ…シラコキ!大丈夫か!オイツ」と抱きかかえて揺らして言い放つたが

「 「 「あれで未だに気付かないんだからシラコキさんって報われないよね」 」と全員が頷いてショウの鈍感さに呆れて言い放つていた。

そうして今回危惧していたユニウスセブンの落下の件について全く話せずシラコキを部屋で休ませ一日ショミレーターにてザフトの兵たちと訓練したのであった。

抹茶「今日は此処までこたせて貰います」

シユウ「俺としてはこのあと作者が書つのは文字数が多くなりそつ
なのが怖いから此処までにしました。って言ひそな気が」

抹茶「お前先読みの才能有つたっけ?」

シユウ「さあ?それよりもシラコキは如何したんだ?」

抹茶「えつ?今回ぶつ倒れて医務室行きに成つたじやないですか。
あれで一回休みです」

シユウ「ああ、そうなんだ。シラコキも何で倒れたんだろうな?」

抹茶「(この鈍感め...)さあ?彼女も疲れてたんでしょう?」

シユウ「それよつも今回も感想で指摘受けたんだよな?」

抹茶「はい、そうです。今回じ指摘をくださつたと皆さん有り難う
御座います」

シユウ「さて今回の後書きも此処までかな?」

抹茶「そうですね、ネタも有りませんから閉めましょ?」

抹茶・シユウ「さてシユウ(俺)とシラコキはどうなるのか?次回
お楽しみに!」

ご意見・ご感想ありましたらドンドン書いて下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～S I D Eで何か有りましたら言って下さい

抹茶「フェイズ32完成しました」

シユウ「お疲れさん、今度から4回おき投稿にしたんだな?」

抹茶「ええ、此方もそろそろテスト期間に入りましたが、それでも投稿は続けますよ」

シラコキ「それよりも今回はどうな話に成るんですか?」

抹茶「ただ単にユニアスセブン落下の話です。ちなみに久々に例の2機が登場します」

シユウ「そうか、それだったら本編に入るか」

抹茶「そうですね」

シユウ・シラコキ「!珍しい作者が話を伸ばさないなんて…熱でもあるのか?」

抹茶「失礼な…ただたんに話すネタが無いだけなんです」

抹茶・シユウ・シラコキ「それでは本編をお楽しみ下さい!」

「しかし、ヨニウスセブンの落下ですか。あんな物地球に落ちたら地球の生き物なくなりますよ」

「そうだな、今回の俺らの遣る事はヨニウスセブンの落下の阻止とまでは言わないが、ある程度の大きさにして地球に落とすしかない」

今回シユウは原作の知識を持っていたとしても此れだけは余り対処が出来ないのだ。故にザフト軍と協力し隕石を大気圏で焼失しなければ成らないのだが、これは口で言つより簡単な任務ではないのだ。

「でも、地球への突入コースって聞きますけど、何で碎くんですか？」

「あれ？シラユキは知らないんだな？ザフト軍に居たから知ってると思ったんだが…まあ良いか」

そうやつてシユウは自分の持っていた端末を操作し一つの情報を開示した。

三本の支柱の真ん中にドリルが着いており、そしてそれを操作する為の端末が写し出されている。

そう此れがメテオブレイカーなのだが

大きな欠点は自衛の物が一切無い・運ぶ時に複数のMSが必要等少々厄介なのだ。

そして色々とシラユキと話している間にブリッジから

「シユウ・K・ライトニング シラコキ・カグヤの両名は直ぐにブリッジまで来てください」と呼び出しを受けてしまったので一人で向かって行った。

そして入った瞬間にアスランは頭を下げておりMSの貸し出しの許可を貰っていたようだ。しかしシユウ達はもう借りる必要性がないので、何の用か、気に成つてしまつた。

「失礼しますグラディス艦長。何か用事でしょうか?」
と敬礼をしながらも用を聞いておくシユウだった

「楽にして良いわよ。貴方達は客人なんだから」と言つて樂にして良いという指示が出た

「了解です。じゃあ今回の用事は何ですか?もしかしてメテオブレイカーの防衛任務に着くんですか?」

「ええ、それなんだけど。貴方はMS何を使うの?前みたいなゲイツRを持つて行かないでくれるかしら?あれのせいで整備班から私はどやされたんだから」

正直予想は当つたがキマイラを持つて来てなかつた時には再びゲイツRを使おうと思っていたのだが駄目なようだ。ザクは確かに便利では有るが、シユウ自身は決め手の無いMSは苦手なのだ

「ああ、それなら大丈夫ですよ。今頃ですが、もうすぐ此方に着きますよ」とシユウは機体を借りる必要が無いと教えといた

「それは如何言つこと?」とグラディス艦長を含めた全員が怪訝

な顔をしていたが

「いえいえ、別に出撃しない訳ではないですよ。ただ自分専用のMSに乗るだけです」

そういつた次の瞬間に

「不明機一機急速接近！…なつーガンダムタイプじゃ有りませんー」とバートが混乱しているが

「ああ大丈夫ですよ。少し予定より遅かつたけど自分のMSが届いたようですか？」

「予定より遅い？自分のMS？まさか、貴方！」と言いつくるが

「ええ、自分達の専用の機体キマイラ・エンジールの一機を」つちまで呼び出させました

「何て事を遣つてるのかしら貴方は…」こんな事に成るなら速めに報告として頂戴

「いやあ、すいませんね。時にサプライズは必要だと思いまして」

だがグラディウス艦長は一つだけ気に成っていた事が有ったのだ。

「時に聞くけど、あのMS何でブースター一機もつけてないの？もしかして途中で分離したのかしら？」と凄く嫌な予感しかしないが一応聞いてみた

「へっ？ブースターですか？あの一機にブースターなんて必要ありませんよ」

「じゃああの機体は単機で大気圏突破が出来るということなのかね？」ヒートコランダル議長も聞いてくる

「ええ、確かに可能ですが、慣れてないと大気圏突破した瞬間に直ぐに死ぬって事も考えられますね」

そう彼の言つている事はあながち間違いではないのだ。スペースシヤトルを例えてみよう、あれは宇宙に打ち上がるときに大きなブースターを底部に着け宇宙服には少しどは言えGを和らげる様に成っているのだが、キマイラは衝撃を吸収する物が何も無いので生身で全てのGが人間に掛かるのだ。運が悪ければ単機で宇宙に上がるのは危険だろう

「そりが、ハイリスクな事を遣つてているのか」と感心げに言つてくるが

「そろそろキマイラとエンジェルの回収をしてきます。混乱から誰かがあの一機を落としたら洒落に成らないん」とシュウはブリッジから出て、キマイラまで向かった。

すぐさまシュウとシラコキが宇宙へとパイロットスーツで飛び出した瞬間キマイラとエンジェルは此方を認識し、腕を伸ばしてくる。

そのまま両手でキマイラはシュウをエンジェルはシラコキを腕で引き寄せコックピットまで運んでくれる

「懐かしい」ツクピットだ。オートパイロット解除…マニュアル操作へ移行と端末に指示を出しミヒミヘルバのハンガーへと向かわせた。

すぐさまヴィーノとヨウランが他の整備兵に指示を出し機体を誘導していた。それに従いつつも空いていた一つのハンガーにキマイラとHンジエルを待機させMSから降りていった。

だが次の瞬間マッド・エイブス率いる技術者の面々が

「もしかしてあれが君の言っていたキマイラヒンジュルかい？」
と聞いてきた。

彼は技術者では有るがシュミニレーター等の本物が映し出されて無い機体には興味が無いのだが、いつやって本物を持つてくると弄りたくなるのだ。

「ええ、まあやうですけど・・・どうかしましたか?」

「いや、1世代前のMSを組み合わせてこのよつなMSを造り上げられるとは同じ技術者として君には脱帽するよ」

「ありがとうございます。」と申しても此れはパイロットの腕と慣れ
たOSだからこそ真価が發揮出来るんですよ。普通のパイロットが
扱つても直ぐに落ちるのが関の山でしょう

この機体達は高速戦闘・高速移動をメインに戦っている機体なのだ、成れない人がキマイラ・エンジエルを使っても運が悪ければリミッター解除使わなくてもデブリに衝突で死亡・リミッター解除のGによるショック死・操作が違う等結構熟練者専用MSなので殆ど使えないのだ。

「なるほど・・・といひで話は変わるが」のMSを解体しても良いかい？」

「……へつ？」

一瞬エイブスさんが何を言つたか理解出来なかつた。

「いや、言い方が悪かつたね。あのMSの構造を教えてくれないか？」と頼んできてるが

「いやいや、駄目ですよー。オレこの後出撃なのに何で出たら良いんですか！？」

「大丈夫さ、私達技術者に掛かれば直ぐに作り直せるさ。それにキマイラが元に戻せなくともザクに乗れば良いじゃないか」

(ドヤ顔で言つなよこの技術者は、しかも何だよパンが無ければ菓子を食べば良いじゃなーって言つてる感じじゃねえか。しかも全員の目が凄く怖い位光ってるし手には解体用の道具が…もう有無もなく壊す気しかねえじやないか)ヒシュウはついつい思つてしまつた。

さすがに此れから戦闘で使うキマイラを壊されでは洒落には成らないのでシュウはため息を吐きながら内側のポケットからHSBメモリを取り出しエイブスに渡した。

「この中にキマイラのデータが入つています。それはもうバックアップが取つて有るんあげますよ」

「そりゃ、すまないね。ありがたく貰つていいくよ」と置いてポケットに仕舞つて再び整備士としての仕事を始めていった。

「良いんですかショウさん？キマイラのデータを譲渡してしまって？」

「んっ？ああ別に構わないよ。あれの中身見る為には毎回1-2桁のパスワードを打ち込まないといけないし、データの中身は射出式アーマーシュナイダーだけだ」

とネタ晴らしを行つていた。そうショウはキマイラのデータが入っているとは言つたが、何を入れたかも言つては無いのだ。そして1-2桁のパスワードは毎回変わるので、ある意味持つても使えないでの相手からしたら無用の長物でしかないのだ。

「結構あぐどい事しますね。毎回ショウさんだけは敵に回したくないですよ」

流石のシラコキも今回の件については顔が引きつっていた

「くつくつくオレの最高傑作を解体するなんてアホな事を抜かした奴にはデータは渡さないよ」と再びあぐどい顔へと戻つていった。

だが次の瞬間

↙モビルスースツ発進三分前。各パイロットは搭乗機にて待機せよ。
繰り返す。発進三分前、各パイロットは →

報告を受けシラコキとショウは愛機へと乗り込みコックピットを閉めた。

「さて出るぞ。今回の任務はメテオブレイカーの防衛をうそに奪取されたガンダムシリーズの撃退だ」

「了解しました。でもガンダム系は他の人が対処してくれるんです

よね？

「ああ、俺等はジンをやるぞ…全く以前使つてた愛機の同列機を壊すつてのは良い感じには成らない物だな」

そして一機はカタパルトへと向かつて歩き出していくところを

↖ 発進停止！状況変化！ ↘

↖ ユニウス・セブンにてジュール隊がアンノウンと交戦中 ↘

↖ 各機、対M S 戦闘用に装備を変更してください ↗

と言つていたがシユウは少し驚いてしまつた。

（もしかしてあいつ等武装を持たずに出撃しようとしてたのか！？それだったら足手まといでしか無かつたぞ！？）と思つてしまつた。

シユウヒシリコキは味方のM S を落とされたと闻つ事を聞いた時から既に装備をしていたのだ。それなのに味方機は武器を全く装備せずに出撃するなど攻撃が当たり辛い訓練機でしかないのだ。

（どこまで戦争ボケをしていろつもりなんだ？）と顔に手を当てやれやれと想つてしまつた。

↖ さりにボギーイン確認！グリーン＝五デルタ！ ↗

先日ミネルバが逃がした未確認機までもが登場してしまつた。だが戦う事には変わらないので銃口を向けた瞬間容赦はしない。

「シユウ・ム・ライティング キマイラ出るー」「シラコキ・カグヤ ハンジョン出ますー！」

一機のMSが再び宇宙へと飛び出した。ショウは久々に懐かしく思つてしまつた。

あの時はヤキン・ドゥー工戦以降全く乗れなかつた機体だつた…シユミレーターに乗つてもリアルですらないのでキマイラに乗つてゐる気分はしなかつた。

だが今は違うキマイラはオープの技術者の手によつて再び帰つてきた。そう思いつつも4枚の羽を広げ戦場へと向かつて行つた。

戦場へと意識を向けていると敵のジンが味方のゲイツRに刀を振り上げていたようだが

「コミッター解除15秒間」と言ひてすぐさま2機の間に割つて入つた。

一瞬の事で驚愕したのだろうジンとゲイツは動きを一瞬だけ止めた。その隙が死に繋がるとほジンのパイロットも思いもしなかつたどうう。

直後キマイラによるヒジ打ちで頭部カメラを破壊し機体を捻らせ回し蹴り胴体に食らわせ吹き飛ばしつつも片手で一連装ハンドガンを抜き出しコックピットへと撃ち込んだ。

「ヤ！」のMSのパイロット大丈夫か？」と一応安否を聞いておく

「ハイ大丈夫です」「そつかだつたら直ぐにメテオブレイカーを味方と協力して設置してくれ」「了解」

すぐさまショウは的確な指示を出し先程壊したMSへと近づいてい

く。そして腰に付いてる鞘と腕に持つてた刀を戦利品として持ち再び戦場を駆け抜けた。

鞘は予めエリカさんに頼んでおいて腰に刀を引っ掛けたが何個もぶら下っていた。

だが刀を持っていたのが不味かったのだろう近くに居たジンが刀を抜いて迫ってきた。

「良くも仲間を！何故我等の信念を邪魔するのだ！」と言つて刀で切り迫つてくる

「信念だと！？貴様等がやつてるのはただの虐殺行為にしかならないんだよ！」

そうして刀をぶつけ合い鎧迫り合いを起こした。

そしてシュウは他の部隊を護衛する為にもコイツには時間を掛けられ無いと思い、機体を引かせる

次の瞬間敵のジンがよろめいた。元々押し気味の攻撃を遣つていたので油断しているのでこうなるのだ。

そのままジンはキマイラを横切つていきそのまま機体の腕とブースターを利用してコックピットを切り裂いた。

「悪いな、お前等にも信念があるんだろうが、オレはそれを容認できない」と言いながら再び刀を回収しつた。

次のジンへと向かつて行つたが、三筋のビームが近くを横切つてい

一瞬何事か、と思つてしまつたが周囲を確認した瞬間ガイアがMA形態で此方に銃口を向けていた。

だがそれで終わりではないのか、ビームを連射しながら翼部分のビームサーべルを展開していく。

「チツ！」ヒシュウは舌打ちを行つていた。本来原作ではコイツの相手はルナマリアのはずだった。

だが今は此方に攻撃を向いていると云つ事はルナマリアは無視されたか、または撃退されたかのどちらかだらう。だが今はその様な事を気にしている場合ではない。

すぐさまビームキャノンを連射しガイアの動きを乱しつつも

「コミッター解除30秒間」と啖き機体のわき腹を蹴り飛ばす。そしてMS形態に戻つたが、ヒシュウはそれが狙いだつたのだ。

すぐさまショルダータックルをしてガイアの腰に挿してあつたビームサーべルを奪い頭部を切り裂こうと思つたのだが、その攻撃を腕を掴まれコックピットに脚蹴りを食らわされた。

「ガハッ」すぐさま態勢を戻すがビームライフルを連射していく。すぐさま盾を構え防ぐ機体がサーべルを抜き斬りかかつてくる。

全く何なんだ一体コイツは、原作が有るからまだ叩き落せないんだよなあ。とついつい場違いな事を思いつつもサーべルを展開し切り合いを開始した。

「ステラ・ルーシュSIDE」

「なんなのコイツは！？」とステラは目の前の機体に驚愕を隠せなかつた。

横切つたこの機体を見た瞬間使つてゐるパーティが全て1世代前のMSのパーティだから直ぐに落とせる筈と確信はしてゐた筈だ。なのにその機体は未だに自分の目の前に顕在している。

相手の機体は一度距離を取るために後方へと下がつたが、ステラは本能的に攻撃を辞める事をしなかつた。

再びビームキャノンを連射していくが、「同じ手を何度も食らうと…」と悔つっていたのが失敗だらう

目の前の機体が再び消失してしまつた。そういう機体は氣を抜いてない筈なのに常に高速移動を行つてくる。

しかもする時もタイミングもバラバラだ。これでは何時遣つてくるか読めないし常に気を張つてなければ落とされる。

次の瞬間後ろからゾッとする気配を感じサーべルで薙ぎ払うが、実剣を持つて防いでいた。あの機体は実剣など持つていたのだろうか？改めて確認すると目の前に居たのは別の機体だった。

そして本来戦つていた機体は自分のはるか上空から何かを射出し機体に括り付けていた。

「なにこれ？」と呟いた瞬間に機体は急激に動き始めていた。すぐさま此れの正体に気が付いてしまつた。

だが気付くのが一泊遅かったのが原因だらう次の瞬間右腕と両足が吹き飛ばされた。

既にワイヤーはキマイラの腕に戻つておりサーベルビームキャノンが此方に向けられていた。

（やられんー？）と思つたが2機は向きを変え何処かへと飛び去つていった。

ステラは一瞬だけ安堵したが、次の瞬間そんな事を考えてしまった自分に激怒してしまつた。

敵機は手を抜いていただけなのだ。その気に成れば何時でも落とせるはずだった、なのに此方の興味を失つたように何処かへと飛び去つてしまつた。

（これほど屈辱的な行為を受けたことは初めてだ。あの二機は確實に落としてやる）とステラはそう思いつつも戦闘能力を失つたガイアを引き連れて、ガーティ・ルーへと戻つていつた。

→ SIDE END →

「やれやれシラコキ別に手伝わなくとも良かつたんだぞ？」と先程助けてくれたシラコキにそう告げる

「そうでしたね。相手は勘違いしてこつちにサーベルを向けて来てるつて言つアホな行為してましたし」

「しかし、格闘メインのエンジェルに攻撃しかけようつてのは自殺行為でしか思えないけどガンソードの方は大丈夫なのか？」

「正直言つて少し刃が溶けてますね。でも片方だけで防いでいたのでもう一本はまだ使えますよ」

と言つてゐるがこちらのカメラでもガンソードの刃を確認しておくれ、確かにもう一本は無事ではあるがそろそろ新しい格闘武器を造り出して置く必要があるだらうとショウは感じてしまった。

「あつシユウさんそういういえば刀此方でも数本回収しましたよ」と言いながらこちらに腰を向けて話しかけてきた

そこにはジンが持つていた刀が4本掛かっていた。

「悪いな集めてもういちやつて、今後必要に成ると思つたんだな」と聞いてきてるので

「何か造る気ですか？もし数余つたら少しぐらり譲つて下せいや？」

「判つてるさ、だが此方にも格闘武器が必要なんだよ。射撃専用とは言つても近づかれて何の対処も出来なかつたら笑い者にも成らなしさ」と呆れつつもゆっくりと近づいていたジンにグレネードランチャー・徹甲留弾を撃ち込んで置いた。

デブリ群に隠れて氣付かれないと思つてゐたのだろうが、索敵レーダーには既に反応が有つたのだ。わざと此処まで近づかせたのは、命中率を上げるためだ。

敵に近づければ油断する敵ほど多い物は無い物だ。故に先程の徹甲留弾が直撃したのだ。

右肩に弾を埋め込まれ氣付かれたとばれたジンは焦つて刀を振り上げて迫つてくるが

その刃はキマイラの頭部に当る前にジンは爆散した。

「ふむ、戦闘能力だけ奪つつもりだつたんだけど推進剤に誘爆してしまつたかな」と思わず呟いてしまつた。

「シユウさんそれ言つと結構わざとこじか聞こえないので、もつと穩便な弾使つたらどうですか?」

「そうだな、じゃあスタン弾でも使おつかな?いやでもスーパーアシッド弾も捨て難いな」

と色々と悩んでこねつひてやへゴニウスセブンが碎けたようだ。しかし「！」の大きさでも地球に落ちたらマズイな。シラコキやるべ!」と本腰を入れてシユウは行動を開始した。

流石にメテオブレイカーは大型なのでシユウとシラコキの両機を使わなければ動かす事は出来ないが端末の操作は物の数秒で完了してしまつた。

元々シユウは電子系にも特化しそぎて「」ののような作業では、凄まじいスピードで終わらせていくのだ。

どんびんとメテオブレイカーを設置していく中やはり此方の作業を邪魔するのか2機のジンが寄つて来る。

だがシユウは作業の手を一向に辞めるつもりはないのだ。その理由としては、先ずは地球に住んでいる人達を救う為に一分一秒と時間

が惜しい事。一つ曰は彼には絶対的に信頼出来るパートナーがいるからだ。

次の瞬間ジンはビームライフルを此方に向かつて撃つてくるが、シラユキは其れを守るように盾をかざし攻撃を防いでくれる。

そしてシユウは片腕で一連装ハンドガンをエンジェルに向かつて投げつけた。

そしてそれを回収したシラユキは「コミッター解除1分」と言つてジンに対して攻撃を開始し始めた

咄嗟にエンジェルが消えた事によつてジンは警戒して正面に盾を構えてガードしていたが、その行動は空しく後ろからエンジェルのガンソードによつて真つ二つにされた。

すぐさまもう一機のジンが隙を突くように刀を振り下ろしてくるがガンソードを上に構え刀の直撃を避けすぐさま一連装ハンドガンでコックピットに正確に撃ち込んで行く。

「やれやれ、たまに思うんだがシラユキってホント敵に対してもは容赦ないよな。お前が戦闘狂じやなくてよかつたと思うよ」

「酷いですね。私はシユウさんに銃口を向けた敵に対してもは容赦しないだけです。後は手加減はしますけどね」

と話している間に放置されていたメテオブレイカーの設置を完了させた。そして再び戦場を見るとカオス・アビスが撤退していた。

「ガンダム系が撤退している?さつきまで戦艦に何か動きでも有つ

たのか？シラユキは何か知らないか？」

「はい、先程敵艦が信号弾を撃ち込んでいましたね。この状況で撤退するつて事は」

「ああ、高度だな」とお互いの高度を確認し始めた。大気圏まであと少しだが、まだ作業は出来ると信じ再び動き始めた。

だが次の瞬間ミネルバから帰艦信号が出された。だがシユウは未だに作業を止めるつもりは無い。シラユキも此方を信じるように手伝いを始めてくれる。元々この2機には大気圏突入パックを積んでいるので大きな危険性は無いが、それでも片方のパックが不具合を起こした時にカバーをする為に残っているのだろう。

そして高度が限界だというのに未だに作業を続けていた機体が居た。認識コードではアスランが乗っていた。

思わず「戻らなくて良いのかアスラン？此方に任しても良いんだぞ？」と聞いてしまった。

「君こそ戻らなくて良いのか？君のMSなら帰れるだろ？」と二人とも帰る気は無さそうだ。

だが「何をやつてるんです！」と通信から怒鳴り声が聞こえる。

「帰艦命令が出たでしょ！？通信も入ったはずだ！」と文句を言つてくるがアスランもシユウも作業を未だに止めるつもり等更々無い。

「ああ、判つている。君は速く戻れ」

「一緒に吹っ飛ばされますよ！良いんですか？」

シンは唖然としていた。「それでも敬語を使っているのは此方の力量に敬意を抱いているからだわ。

「ミネルバの艦主砲と言つても外からの攻撃では確實とは言えない！これだけでも・・・」と未だに作業に手こずってる様だ。

シユウはすぐさま自分のメテオブレイカーを終わらせ

「アスラン変われオレがやる」と言つてキマイラの腕でザクを押しのけ再び作業を開始し始めた。

その間にアスランはメテオブレイカーの支柱を正確にはめ込んでいた。

そして離れたメテオブレイカーのセットを完了し離れた瞬間ビームが横切っていた。

すぐさま全機メテオブレイカーの前に立ちふさがりジンを睨み付けた。

「我が娘の墓標、落として焼かねば世界は変わらぬ！」と言つて迫つてくるだがインパルスはすぐさまジンの胴を切っていた。

「ここに無残に散つた命の嘆きを忘れ！撃つたものらと、何故偽りの世界で笑うか、貴様らは！？」

「軟弱なクラインの後継者どもに騙され、ザフトは変わってしまった

た！」

この言葉にシラコキ・シン・アスランは呆然としてしまっていた。
彼らはずつと想えていた何故こんな酷い事を?・とずつといこの部隊の
憤りと疑問を抱いていたに違いないだろう。

そしてシン達は悟る彼らにはコニウスセブンを落とす正当な理由が
あつたんだと

だがシュウだけは違つた、彼は刀を抜き出しジンに斬りかかつてい
た。ジンは咄嗟に防ぐが

「貴様には判らんのか我等の意思が!？」と叫んでくるが

「ああ判りたくないね、何も判つてない奴に判つた振りもして欲し
くない」と苛立ちが込みあがつてきた。

「たしかにお前等にはコイツを落とす権利も有るし正當な理由もあ
る!・だけどな、此れを落として何に成るんだ!・死んだ奴でも帰つて
くるとでも思つてるのかよ!」と言つて機体を捻らせ刀を受け流し
機体の腕を切り飛ばしそのまま蹴り飛ばす。

「あんたらが遣つている行為はただの自己満足だ!・落としてそれで
満足して死んでいくつて事だらうが!・あんた等は此れを落として何
が残るか考えた事あんのかよ!・やつたら第一のあんた等を生み出
す引き金を引いてる事しかしてねえんだよ!・最悪の事態は此れに対
する報復行為による核攻撃だ」

「黙れ!・何故気付かぬか!・我等コードィネーターにとつてパトリック・ザラのとつた道こそが唯一正しきものと!」と言つてキマイラ

に組み付き自爆してくる

「ガハッ！」装甲で機体が持ち堪えたとは言え次の直撃は不味いと
シユウは一瞬考えつつも

「あんな虐殺行為の行いでどれだけの被害が出たか：確かに連合の取つた行動は最悪最低だったかもしない。だけどな同じ行為した瞬間お前等も俺らナチュラルと何の違いも無いんだよ！」

結局同じ様に戦争によつて生み出された犠牲者を出して如何するんだよ！過去を振り返るなどまでは言わない、だけど過去に何時までも囚われるな！今あんた等がすることはこんな大量虐殺行為じやなくて未来へと…若者に希望を「与える為に何かを残せよ！」と悲痛な叫びをするが

「今更我等は止まらん、この願い、この意思今度こそナチュラルどもにいいい」と此方に組み付きそうに成っていたが、一筋のビームライフルがジンを撃ち貫いた。

「そうですね…たしかにナチュラルの遣つた行動は悪かつたかも知れません。でも！それでも中にはナチュラルでも仲良くしようと考えている人は居るんです！」とシラユキが援護してくれたようだ

「悪いなシラユキ助かったよ」と感謝していた。

「いえ、私も目が覚めました。確かにナチュラルの行為でこのような事が起きたかも知れません。一瞬私自身もナチュラル全員を疑いそうになりました。彼らの言い分は正しいんじゃないのかなって…・でも全員が全員そうじゃない。シユウさんはナチュラルでありながら自分の出来ること精一杯遣つて仲良くしようとしている。だからこんな考え方間違いなんだって気付かされましたよ

と自分の中に貯まっていた考えをぶちまけていた。

「 そりゃ、シラユキの本音を聞けてよかつたよ。それで如何する？ これからも俺を支えてくれるかい？」 と改めて聞いてみた。

「 当然じゃないですか、私は何時までもシユウさんのパートナーですよ 」 といつて微笑んできてくれた

「 良し二機は大気圏突入は出来ないはずだ。俺がシンをシラユキはアスランを助けてくれ 」

「 了解しました 」 そして二人は同時に機体を動かし機体へと近寄つた。

「 大丈夫かシン君？ 助けに来たよ 」 と言つたが

「 助けに来たってこの状況で何できるんですか！？」 と此方の内容が把握できていなかった。

だが次の瞬間キマイラは両腕でインパルスを引き寄せインパルスがキマイラの上に覆い被さる様になつていた。

「 もしかして貴方代わりに大気圏突入の壁に成るつもりじゃ… 」 と予想と大きく外れた事を言つていた。

「 だれがそんなMな行動取るかよ！ バックパック解放 」 と操作した瞬間機体の後ろにキノコ状の形をしたパラショートが出てきた。

「 此れは？ 」 と思わずシンは目を点にし聞いてきた。

「此れか？単体でも大気圏突入出来るように造られたバックパックだ」と説明しておいた。

「もうなんですか？相変わらず凄い物出しますね。そういうえばシラコキさんとアスランさんは如何したんですか…？」と心配に成つて聞いてくる。

「ああそつちも大丈夫だ。シラコキ向かわせて同じ様な事してると言つて機体の腕を伸ばし右方向に同じ様な物が開いている事を示した。

そしてお互に喋らずに機体は地球へと降下して行つた。すぐさまパックを分離し羽を広げ上空に待機する。

「ザザツ……シユウさん聞こえますか？アスランさんのザク運ぶの手伝つてください。エンジェルだけのパワーじゃとてもじゃないけど空が飛べないんですね」

すぐさまレーダーを確認しエンジェルの方に向かつたら、確かに少しづつだが下降しているのが判る。シユウはすぐさまザクに肩を貸しミネルバまで着艦して行つた。

だが彼自身は今回の件で反省する点が出来ていたのだ、今回機体の出し惜しみをしなければもっと多くのパイロットを救えたんじやないのか…とずっと考えていたのだ。

そしてシユウは決意の炎に燃えていた。

もう機体の出し惜しみはしないと…次からはキマイラ・エンジェルは使用せず例の一機で出撃する事を心に誓つた。

PHASE 32 (後書き)

抹茶「今日は此処までとせてもいいこます」

シユウ「やうなのか、そついえば新機体はイメージは出来上がつて
るのか?」

シラコキ「頼みますから変なのは辞めて下さこよ?」

抹茶「…正直まだネタが無いんです。MSの形をオリジナルにする
と大変さも増えるんだよ…」

シユウ「逆ギレすんなよ。カッ「悪いぞ」

シラコキ「良い大人が逆ギレって普ツ」

抹茶「オレは近頃お前等の方が悪魔じやないのか?つて疑問の方が
強くなつて來たわ」

シユウ・シラコキ「悪いね(な)作者。でも反省はしてこるナビ言
つた事に後悔はしていない!」

抹茶「ああ、そうですか。もう良いもん軽くイジケてやるもん!」

シユウ・シラコキ「その言い方気持ち悪い(ヤ) (ですね)」

抹茶「今回お前等二人が毒舌家田指してるのが良く判りそ
だわ。んじゃ後書き閉めるぞ」

抹茶・ショウ・シラコキ「さてショウ（俺）とシラコキ（私）はどうなるのか？次回お楽しみに！」

「意見・感想ありましたらドン・ドン言つて下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～SIDEで何か有りましたら言つて下さい

抹茶「良し、ようやくPHASE 3をコマセせる事が出来たわ」「シユウ「やうかい、でもようやくコマセせる事が出来たってちょっと文章がおかしくないか?」

シラコキ「そうですね。まるでもう完成してて後は投稿するだけみたいな口調でしたね」

抹茶「そうですね。完成はしていたんですけどさっきまで友人と飲んでいて投稿できなかつたんですね」

シユウ「やうなのが、それにしても呪律が回つてるな?」

シラコキ「普通だつたら酔つてこんなにも出来ないはずなのに」

抹茶「まあ、それが普通なんですけど日々にウコンの力飲んで酔いを避けていたんですね」

シユウ「なるほどな、それじゃあそろそろ作者もきつい筈だから本編に入るか」

シユウ・抹茶・シラコキ「それでは本編をお楽しみ下をこー!」

「ふう……」シユウはショミーレーターから出てきて息を思いつきり吐き出した。

以前の戦いから彼は既に手加減をしないと決めていた。それ故に常にやつてはいる練習量を増やしているのだ。

以前までは彼はショミーレーターではリミッター解除の1分の状態で練習をしていたのだが、やはりまだ足りないと感じたのだろう。今はリミッター解除2分30秒と時間を増やしたのだ。

一応は神たちの救済策のお陰でリミッター解除で死ぬ事は無くなつたが、その代わりに体力消費が激しいのだ。だが体力の消費だけで済むのなら安い物だらう。

以前ならば自分が死ぬ事も有つた物が代わりに体力消費で済むのだから体を鍛えれば持続時間も増えるといつ者だ。

「さてと次は何をしようかな」と言つて自分の持つていた端末を弄りながら次の行動を考えていたら遠目からアスランが何処かへ向かつていてるのが見えた。

すぐさまシユウはアスランに近づき「よつ、アスラン何処行くんだ？」と聞いてみた

「いや、特に何 パーン…なんだ? 行つてみるか
通路で話している途中ですぐさま銃声が鳴り響いた。シユウとアスランは多少気に成り鳴り響いた部屋を覗き込んでみた。

中には若い兵士達が甲板に標的を設置して、射撃訓練にいそしんでいた。シユウはその光景を見つつもそれぞれの人のフォルムを確認していた。

（やはり人によって癖等が大きく出るものだな）と色々人の構えを見てそう考えていた。

そしてアスランはやはり軍に所属していた頃が懐かしいのか甲板へと入っていた。シユウもそれに続き甲板に歩み出していた。

レイ・ルナマリアそしてモビルスーツ管制を担当としているメイリンの姿も確認できた。

ルナマリアとレイが弾倉一つ分撃ち終わっていた。だがレイの方は中心を狙って撃っていた様だが多少ずれておりルナマリアに至っては中心から大きく外れているのが良く判る。

ルナマリアは結果に不満なのか舌打ちをしながら弾倉を変えていた。そして此方に気付いたのかルナマリアは此方に振り返った。

「あら」「訓練規定か」とアスランは彼女に微笑みかけながらそう言った。

軍籍にあるものは週に何時間か、規定の訓練をこなす必要義務がある。シユウは訓練規定は知つてはいたが砂漠の虎に所属していた頃はバルドフェルドから直接「君は余りやら無くても強いからしなくて良いよ。寧ろ君がやると周りが落ち込むから辞めてくれ」と頼み込まれた物だ。

何故かその頃から射撃が得意なのか訓練時は的の中心にしか当つていなかつたので他の兵士が「所詮俺なんか、あの人に比べれば…」と鬱^う状態になりかけていたので、辞めさせられたのだ。

そしてルナマリアは標的に向き直りかけて、思い付いた様に振り向いて

「いっしょにやります?」「いや、俺は…」

アスランは少々戸惑つていたが、シュウは久々に訓練をしようと思つていた。

「悪いけどレイ君代わつてもらえるかい?」と訓練中に邪魔するの悪いくらいつとも頼み込んでみた。

「はい、判りました。銃は如何しますか?最初の時は持つていたようですけど」と聞いてくるが

「今日は流石にデザートイーグルは使えないからM9を使つよ」と言つてもう一個銃を取り出していた。

そう彼が選んだのは普通に軍でも採用されるM9を取り出し構え始めた。

基本的にはデザートイーグルのほうが強いと思われがちなのだが、実際の所デザートイーグルには大きな欠点があるのだ。

そつそれは反動の差なのだ。確かにデザートイーグルは小型銃の中でも威力は上位ランクに入るかも知れないが問題は外れた時なのだ。

本来どの銃も弾を撃ち出すとき必ず銃口が火が吹くのだ。故にその反動で銃口が上にあがつたり自然と腕が後退し肩に食い込むなど色々と有るのだ。

話は逸れたがデザートイーグルはその反動が常に大きい武器なので、次弾を撃ち込む前に倒される事も良く有る為まさに絶対に外せない武器なのでハイリスクなのだ。

だが今回シュウが取り出した武装は反動は少なく連射出来る。また銃口が正しい構え方をしたら上に余り上がらない便利な銃なのだ。

そしてシュウは集中し始めM9を構えマガジンに入っている6発全部的の中心へと命中させた。

すぐさま集中を解き弾倉を変えた後M9を再びスースの内側に仕舞いこんだ。

そして何も聞こえないので後ろを振り返った瞬間に「「「すげええええ」」と声が響いてしまった

「えつ？えつ？何で？さつきのつて普通の銃ですよね？」とルナマリアが疑問に成っていたので再び銃を取り出し貸してみた。

しかし貸して撃つても結果は変わらずルナマリア自身も混乱していく

たが

「銃のせいじゃない。君はトリガーを引く瞬間に手首を捻る癖がある。だから着弾が散つてしまふんだ」とアスランは苦笑しながらもルナマリアにコツを教えていた。

だがアスランはふと視線に気付いて目をやる。何時の間にかドアにはシンの姿があった。アスランは急に落ち込むような様子を見せた。

「こんな事ばかり得意でも、どうしようもないけどな」「そんなこと有りませんよ」

ルナマリアは勢いよく反論する。

「敵から自分や、仲間を守るためにには必要です」とルナマリアは言つていたが

シユウは有る事を考えてしまった。（敵から自分や仲間を守る為に力を得る事は確かに大切だ。でも敵って何だ？此方に攻撃して來た者全てが敵になるのか？それともトップが勝手に決めた者が敵に成るのか？）とシユウは思考に沈んでしまった。

そして「敵って……誰だよ？」とアスランが急に問っていた、その言葉にシユウも思考の淵から出てきた。

「えっ？」ルナマリアはその言葉に意表を突かれ目を瞬かせる。

シユウはこのアスランの言葉は仕方ないと思つてしまつた。結局は敵である、味方である等という見方には意味など無い。シユウ自身も前の戦争で学んでしまつた事でもあった。

アスランは一度捨て去つた力に目を背けようと歩み去る。とする。シユウも流石に居心地が悪いので一緒に着いて出ようとして

「ミネルバはオープへ向かうついですね」シンの横を通り過ぎようとした時そう言って来た。

「貴方達も、また戻るんですか、オープへ？」 「ああ」
シンの問いかけにアスランはそう答えたがシユウは何も答えようと
もしなかった。

「何でですか？そこで何をしているんです貴方達は？」 とこすり側を
攻めるようにそう言い放ってきた

そしてシユウは「今は様子見だけだ。この後にイヤに成るほど動き
出さないといけないんでね」と誰にも聞こえない声でそう呟いてを
甲板をあとにした。

そして彼らは再びボディーガードの役をしなければ成らなかつた。
真衣をカガリの前に出し後ろは和真とアレックスで守るという感じ
だ。

「カガリ！」 「コウナ？」 タラップを降りたかがりは青年の姿を認
め、驚いたように呪を止める。コウナという青年は真衣を押しのけ
カガリに駆け寄りひしと抱きしめていた。

「良く無事で！ ああ本当にうきみはー心配したよー」

「あ、あ、いやつ、あのつーす、すまなかつたつ！」

ぐりぐりと髪に頬を擦り寄せてくる青年をカガリは辟易した様子で
引き離そうとする。

アスランは此方でも直ぐに判る様に不快そうな顔つきになり、タリ
ア達はあっけにとられて『感動の再会』を見つめる

「これユウナ。気持ちは判るが場をわきまえなさい。ザフトの方々
が驚かれているぞ」とオレンジ色の大きな眼鏡をかけた小太りな男

がやや苦笑するような面持ちで歩み出でた。

「ウナト・エマー！」

カガリは要約抱擁から逃れ、その男に顔を向ける。ウナトと他の政府関係者が彼女に揃つて礼をとつていた。

「お帰りなさいませ、代表。よつやく無事なお姿を拝見する事が出来、我等も安堵いたしました」

「大事な時に不在ですまなかつた。留守の間に采配ありがたく思うカガリは彼らをねぎらつたあと、咳き込んでたずねる

「被害の状況など、どうなつてゐるか？」とカガリが話してゐる間に

（はあ暇ですね～）とシラユキが無線機越しに話しかけてきていた。

（おいおい、こんな時に必要でもないのに無線使はなよ）とショウは呆れてしまつたが

（仕方ないですよ、あのウナトとコウナでしたつけ～見てて田の毒にしか感じられないんですけ～）と本音をさらつと言い出してしまつてゐる

（まあ、そう思つのは仕方ないよな。片や反旗を翻そつとしている政治家デブもう片方はアスハ家を取り込もうと必死な軽薄な馬鹿な青年だろ）とショウは思わず愚痴つてしまつた。

（やつぱりショウさんもそんな事を考へてるんじゃないですか！人の事言えないじゃですか！）と怒鳴つていたところで

ユウナがこちら側にわざとらしく微笑んできて

「ああ、君たちも本当にご苦労だつたね。アレックス、和真、真衣。よく力ガリを守つてくれた。ありがとう」まるで彼女の正当な所有者で有るかのような口ぶりにシユウは苛立ちが膨らんできた

（ツー人は…カガリは物じやないつてのにコイツ今物扱いな日だつたな。こう言う奴ほど殺意が沸くのは無いな）と奥歯をかみ締めて怒りに耐えていた。

「報告書は後で良いから、君たちも休んでくれ後ほどまた、彼らとのパイプ役などを頼むかもしないし」とアスランに対して蔑みの目と語調を行つていった。暗にアスランがコーディネーターで有る事をあてこする様なセリフだ。

だが何故シラユキには其れが向けられないのか…それは5時間前のことだがシユウはこの事を思い出し、オープのデータバンクを改ざんしていたのだ。

シラユキはコーディネーターではなくナチュラルだと嘘の記載をし、アスランの方も如何にかしよう何か対策を…と思つたのだが、危うくばれかけたので何もすることが出来ずこうなつてしまつたのだ。

そしてシユウ自身もこれ以上何も悪い事が起きないだろうと思つていた所をシユウにとつて一番許せないことが次の瞬間起きてしまつた。ユウナがシラユキの方に目を当て踏みをするようにジロジロ見て

「君可愛いね、カガリの所に着くより僕の所に来ないかい？給料弾むよ？」と顎に手を当て見つめていた。

「落ち着け和真！お前の怒りは判らなくも無いが今此処でオープに喧嘩売つたら不味いだろう！」と小声でアスランが必死に説得して此方を押さえつけてきた。

「落ち着け和真！お前の怒りは判らなくも無いが今此処でオープに喧嘩売つたら不味いだろう！」と小声でアスランが必死に説得して此方を押さえつけてきた。

「放せアレックス！お前俺のパートナーにあれだけの事されて怒りを落ち着けられる訳が無いだろが！」と完全に怒ってしまったシユウは容赦なくアレックスを睨みつけていた

「いえ、申し訳ありませんが、私には他に着く人が居るのでお断りさせて頂きます」とユウナの手を払いのけ苛立ちを隠しながらそう言い放つた。

「そりなのかい？残念だなあ。こんなにも美人な人がボディーガードしてくれないなんてね。まあ良いや僕には力ガリが居るんだし」とまるでアスランに対する当つけにしか感じられなかつた。

カガリはすぐさま此方に申し訳無さそうな視線を送つてきただが、流石に今回の件についてはシユウは我慢できずに押さえ付けられたままコウナを見ていた。

さすがのタリア達もシユウとシラコキの関係を知つてはいるので、こんな事をされれば怒り狂うのは仕方ないだろうと考えていた。

そしてシユウとシラコキそしてアスランは、仕事から解放されて家へと向かつた。

すぐさまアスランが「悪かつたなシユウ押さえ付けてしまって。でもあそこで止めとかないと危険と判断してな」と本当に悪そうな表情をしていた。

「気にするなよ、アスラン。俺も悪いと思つてたからさ、自分を見失うなんてかつて悪いな」と自嘲氣味にそう言い放つたが

「いえ、カッコ悪くないですよ、私を守りつと動いてくれたんですねからその気持ちだけでも充分です」と微笑んできてくれた。

（それよりもアスランはオープに喧嘩を売つて負けるとは言つていが、まずオープに喧嘩を売る馬鹿は居ないだろ。まあ例の2機で本氣出せば7割型戦力削つて終了かな？）といついつい変な事を考えていた。

「取り敢えず今日はお互に疲れましたね？ゆっくり休みましょうか」シラユキがそつそつアスランは自分たちの家の前まで送つてくれた。

「助かつたよ、アスラン。まあ困つた事が有つたら相談してくれ手伝つからさ」とシユウはそう言葉を残し家へと戻つて行つた。

「ああ有り難うな」と言葉を残しアスランは去つて行つた

「さてと、明日はモルゲンレー^テに向かうから作業着の準備しどいなほうが良いぞシラユキ」

「判りました。しかし愛着有つたMSともお別れですか、寂しくなりますね」と落ち込んでいた

そうシユウとシラコキは神の饋別として貰つて置いた、NJCを使つたMSを製造していたのだ。だがこの情報はトップシークレット扱いなので知っているのは、エリカさん他信用できる技術者だけなのだ。

今は他の一般的な整備の方々にも手伝つて貰つているがその人達はMSにNJCが使われているのを一切知つてないのだ。

「別にお別れじゃないぞ？今日はミネルバを追い掛けるけど、俺らは救助もする為に他のMSを使わないといけない時も有るんだ。だからキマイラとエンジェルは引き続き使っていくぞ」

「そりなんですか？だつたら嬉しいですね」と心なしか凄く喜んでいるのが判る

「まあ、今まで使つてたMSに愛着湧くのは仕方ない事だけど、明日は速いからもう眠るぞ」

と言つてシユウは自分の部屋に入りベットに倒れこんだ。自分自身

気付かなかつたのか疲れが貯まつたのか速めに眠つてしまつた。

彼らは早朝に家を出てモルゲンレーへと車を走らせていた。途中で軍の確認が必要と成るのだが前日にエリカさんに報告を入れていたので一般市民のIDだけで悠々とゲートを通つていった。

「遅れてすいませんね」と目の前の相手に謝つといた。

「大丈夫よシユウ君それよりも貴方が頼んでいた例の一機もう完成しているわよ。着いてきなさい」

と再び車に乗り一つの格納庫まで走つていった。

其処は関係者以外立ち入り禁止と書かれたプレートと頑丈な壁そして6文字のパスワードを打ち込み網膜認証ＩＤ認証等しなければ入れない程の重要な物が入つてているのだ

時間は少し掛かつたがようやく3人の認証が確認でき一つのハンガーに入りこんだ。

「貴方達が頼んできたデスペアとホープよ、手間こそ掛かつた物の技術者としては此れを作れたのは嬉しいわね」と微笑みながら2機のガンダムを見上げていた。

そうしてシュウとシラユキも同じ様に一機を見上げて感嘆していた。設計図はシュウも書いたのだが大雑把に書き8割方は技術者の面々に協力してもらい名前もエリカさん達に任せていたがこのような出来に成るとは少々驚きで予想外だつた。

片方のデスペアと呼ばれたガンダムは全てを黒で統一されていた。そして大きく目に付いたのはＷガンダムゼロカスタムで使われていた白き翼が黒く染まり装着されていたのだ。

もう一つのホープガンダムはデスペアガンダムと対を成すように白で統一されていた。やはりこのＭＳも空を飛べるようにしたいのか

H.I - ガンダムで使われた6枚の翼が背中に着いていた。

シユウは設計図を描いていた時にやはりインパクトのある特徴を出したかつたのでこの翼を取り付けたのだが、大半は設計者のお陰でこのような形に成ったのは嬉しい物だ。

既にどつちがどの機体を乗るか等言わずもなが判りきっていたものだ。何故ならシラユキの視線が既にホープに釘付けに成っていたからだ。

「凄いですね。もしかして私が乗せて貰えるのってホープですか？」
とシラユキがワクワクしながら聞いてきた。

「ああ、そうなるな。俺の場合デスペアだ。意味はホープが希望・デスペアが絶望だ。対を成す存在だけど、俺らはパートナーだから離れる事はまず無いな」と自信を持つてそう言い切った。

「そうですね。私この機体上手く使いこなしてみせますよ」と新しい機体を見てやる気を出していた

「取り敢えず今は完成しているけど起動すらしてないから調整は自分でやってね」

とエリカさんが付け加え言つてきたのでシユウとシラユキは新しいコックピットに入りこみ機体の調整などを開始し始めた。

この機体の動力源がばれた時ユニウス条約に違反し言及は酷いものと成る筈だ。しかし彼らはそんな事は気にしないだろう、新たな翼を手に入れ偽善者と蔑まれ様とも一人は戦いを辞めない。

力を使わず核を使って来ている連合にただただ怯えているより犠牲に成ってる人を助けるために一人は立ち止まらない、それが自分たちの正しい事信じて。

その日シラコキヒシュウは新しい機体を慣らす為にシコミレーターに引き籠もっていた。二機の実力は同等だった故勝率もお互い5分5分で終わってしまった。

抹茶「今日は此処までとさせていただきます」

シユウ「相変わらず歯切れの悪い終わり方だな?」

シラコキ「もう少し頑張って書いて下さいよ」

抹茶「すいません・・・でも『スペア』と『オープ出せた事でテンションが上がってるんですね』

シユウ「やうなのか、しかし『の名前はびひやつて思ついたんだ?』

抹茶「うーん、此れといった物は無いんですけど強いて言つなら頭から希望と絶望の文字が浮んで消えなかつたんですね」

シラコキ「ようにもよつて何でその二つが浮ぶんですか」

シユウ「よほびやバイゲームをしていたとしか思えないぞ?」

抹茶「ヤバイゲームじゃな」と思います。基本自分はホラー苦手でやるゲームはアクション・シユーティング・RPG・格ゲー・レースだけですから

シユウ「それ殆どだからな?一応ホラーたまに入るジャンルも有るし

抹茶「そのジャンルでのホラーはしないだけです。まあ此れ書く前

は ps3 の COD MW2 つて言つシユーティングゲームやってたから思い付いたのかも知れませんが

シラコキ「 そ うなんですか、それよりも作者さんまで」指摘を受けたそうですね？」

抹茶「 はい、蟻とキリギリスさんと今夜のおかずさん」指摘有り難う御座います」

シユウ「 さて後書きは此処までだな、それじゃ閉めるか」

シユウ・抹茶・シラコキ「 さてシユウ（俺）とシラコキ（私）はどうなるのか？ 次回お楽しみに！」

『』意見・『』感想ありましたらアンドン言つて下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～S I D E で何か有りましたら言つて下さい

(新) 機体情報(前書き)

抹茶「PHASE34に入る前にショウとシラコキの次代のMSを紹介しようと思います。一応PHASE34は予定通り18日に投稿するのでお待ち下さい」

抹茶「また、MSでの疑問が有りましたら」感想の一言で申し上げてくれれば可能な限り答えようと思います」

(新) 機体情報

機体情報

デスペアガンダム（シュウ・Ｋ・ライトニング専用機）

機体原型 ガンダムＷゼロカスタム

色彩：頭部の△アンテナを銀色へ変更

胸の縁のコアが赤へと変更

両肩の円形は黒緑色 黄色い線の所が赤

本来の脚の赤 フェイスマスクの赤は無変更

後の羽・胸部・腕部・脚部は全部黒で統一

両肩・マシンキヤノン

左腕：ゲシュママイティッヒ・パンツァー・シールド（形：ストライクと同様の形に加工）

右腕：収納式二連装ミサイルランチャー（使用時のみ腕から突出してミサイルが発射される）

両手：近接戦闘用クローラー（判らない方は「コードギアスの紅蓮の爪と考えて下さい） 武器所持可能

左腰：黒刀（絶）（ユニウスセブン時に手に入れた刀を加工 刀身が黒い）

伸縮式ビームデスサイズ（展開時のみ持ち手が伸びる。普段はバトンサイズの2倍まで縮小）

右腰：ビームライフル

後ろ腰：大型ビームバズーカ（GNバズーカとほぼ同じ）

右足：スタンダガード（アーマーシュナイダーを小さくした物 スタン効果有り）

左足：小型サブマシンガン（現代の装備で言つPP2000）

OP：羽にビームローディング仕様

後ろ腰武装変更可能：6連装ガトリング砲・緊急医療キット・ツインバスターライフル等

ニユートロン・ジャマー・キャンセラー装備

大気圏突入・突破可能

リミッター解除（時間制限5分 体力消費に代わったが未だに体力が足りずに限界が5分まで）

機体全パート解放

（時間制限3分 リミッターとの違いはリミッターが速さ・機体制限解除は機体全体の性能を一時的に上昇 トランザムのような物）

注意：リミッター解除と機体全パート解放は可能だが普段は同時使

用禁止

(り)

(使用したら機体の大破。「バイロットの死亡」の危険性有

デスペア=絶望 ホープとは兄弟機であり、対を成す機体

ホープガンダム（シラユキ・カグヤ専用機）

機体原型：H.I - ガンダム

色彩：機体の胸部の青と腰部の青が赤色に変更・頭部の赤色はそのまま

他の場所は全部白色で統一

頭部：イーゲルシュテイン

左肩：斬艦刀（ガンダムスロー・ネッヴァイと同じ様に装着）

右腕：ゲシュマイディッヒ・パンツァー・シールド + ミヨルニル（形：イージスと同様の形に加工）

本来のイージスの盾の尖っていた部分をミヨルニルに変更
相手に巻き付けて引っ張る、ミヨルニルで叩き付ける等用

途は色々有り

左腕：ビームライフル。ハイパー・バズーカ

背中：バックパックにビームサーベル2本

フィン・ファンネル（シラユキが慣れずに練習中の為最初は1個のみ射出）

左腰：白刀（雪） 柄・鍔・刀身・鞘 全てが白に染まっている
日本刀（堅守）
つば

一般的な色彩と成っている 名前の由来はシラユキが大切な人達を守る為の意味を込めている

右腰：76mm重突撃銃

両膝～両足の爪先まで：ビームブレイド、格闘が得意なシラユキの為に装着

（判らない方はインフィニット・ジャスティスと同じと思ってください）

OP：後ろ腰 装備変更可能 デスペアの装備使用可能

ニュートロン・ジャマー・キャンセラー装備

大気圏突入・突破可能

リミッター解除（制限時間5分） 機体全パーティ解放（制限時間3分）

ホープ＝希望 デスペアと対を成す機体。兄弟機であり、常に2機

は同時行動している

抹茶「はい、新話完成させましたよ」

シユウ「ようやく完成したのか。ちよつと時間掛かつてないか?」

シラコキ「シユウさんそれ突っ込んでじゃ駄目ですよ。作者は投稿時間何時もバラバラな酷い人なんですから」

抹茶「グフッ！ 酷いや。でも毎回田中おき投稿してから許して貰るよね？」

シユウ「ああ？ じりねえよ。それより今回せどんな話に成るんだ？」

シラコキ「私達の新機体『スペア』と『ホープ』は使えるんですね？」

抹茶「今回はミネルバが連合の艦隊と戦う所です。新機体は出でます」

シユウ「やうか、じゃあ本編にでも入るつか」

シユウ・抹茶・シラコキ「それでは本編をお楽しみください」

「シユウさんミネルバ発進しました」シラコキが報告してきた。

「やうか…」いつも確認できたよ。……連合がまた、核を使った

シユウはそう言いつつも手に無意識に力が入りすぎていた。再び核を使わないと連合とザフトは誓ったと思っていたはずだ。だがもう既に均衡は崩れきり戦争が起きてしまった。此れで再び戦争と関係無い人達が多く傷つくその事にシユウは怒りを隠し切れなかつた。

「シユウさん…怒ってるんですね。再び関係ない人が傷つくから」とシラコキがこっちの怒りと悲しみを判り切った様に言つてきた
「ああ、何でこんなにも傷つかなきゃいけないんだ! その人達が何したってんだ!」となりふり構わずそう叫んだ。

モルゲンレーの端っこでそう叫んでしまったせいで色んな人から注目を受けてしまったが、シユウはその事を全く気にせず怒つていた。だがここまで怒るには他に理由があつたのだ。

「シユウさん落ち着いてください。…って何ですかー?」のザフトの回答は!?

シラコキ自身もこれに付いては少々驚きを隠せなかつた。そこに書かれていたものは『此方からは攻撃は仕掛けはしない、だが連合から攻撃を仕掛けてきた場合ザフトは積極的自衛権を使わせてもらつ』と書かれていたのだ。

端から見たら『攻撃』という表現は無い。だが自衛といつ言葉を使つてしまえば武力を使う事への忌避の念が和らぐ。

さうには自分達は悪くない。向こうが撃つて来るからやつているだけだ。向こうがやめさえすれば、こちらは直ぐにも手を引ける。とも言つてゐるようなものなのだ。

此れを見たらシュウも激怒するのも仕方ない。彼らは戦争をしたくないのかもしけないが連合が核を撃つた時からコードィネーターの怒りも仕方ないだろ？

そしてシュウはようやく落ち着いたのか有る所を目指すように歩き始めていた。

「ちょっとシュウさん！？何処行くんですか？」とシュウの突然の行動に驚きつつもシラコキもついて行き始めた。

「ん？少し怒つてはしまつたが、冷静に考えてみれば今此処で動かないより動いた方が良い。だから、そろそろホープとデスペアを起動させるぞ」そう言いながらボロ布を纏つて正体を隠したMSを見上げていた。

「出るのね？それをやつちやつたら中々此処には帰つて来れないけど良いのね？」エリカが心配してくるが

「エリカさん心配してくれるのは嬉しいんですけど、今のオープの政策には賛成できないんでね」とシュウ自身も多少悲しそうな表情をしてしまつた。

「それは私達も同じよ、ウズミ・コラ・アスハの後継者がセイラン

家に成っちゃつたら私達どうなるか判つたものじゃないわ」とHリ力さんもセイラン家には嫌な表情を隠しきれてなかつた。

「それじゃあ有り難う御座いました。」のMジだけじゃなくジャンク艦まで水中移動も可能の様にして貰つて感謝しきれませんよ」と言つて頭を下げる感謝していた。

そう彼らはオープから離れる事を画策していた事をエリカさんにばれたのだ。だが彼女は何も言わず自分達の戦艦を水中でも航行可能にしてくれたのだ。

因みにジャンク艦は今はオープ領域外で水中内に潜んでいる

そうして悲しいと思いながらもシユウとシラコキは故郷オープを離れ行動しようと想えていたのだ。

「それでは失礼します」と言つてシユウとシラコキはテスペアとホールプを起こし羽を広げた。

「シユウ・K・ライトニング テスペア出るー」「シラコキ・カグヤ ホールプ出ますー」

そう言つて一機は一場から飛び出し上空からオープを眺めていた。

「何時か…何時かこの地に再び戻つてくるからな。それまで待つてくれオープ」

そうシユウは呟き//ネルバの後を追つようになにか機体を翻して飛んでいった。

私達は秘匿通信から来た危険だという指示を受け早朝にオープを出て行つた。

だけど途中までオープ艦隊に見送りのよつな物で領域外まで護衛をしてもらつたが護衛をするつもりは無かつたのだ。

そう相手は空母を含む二十隻以上が待ち構えていたのだ。

だがまた最悪な情報が振り込んできた「後方、オープ領海線にオープ艦隊展開中です！」

「砲塔旋回！本艦に向けられています」とバー^ト自身信じられないと言つ表情に成つていた。

「領域内に戻る事は許さないと言つ事よ。どうやら私達は土産か何かにされたよ^うね」とタリアは怒りを覚えながらそう吐き捨てる

だが次の瞬間タリア自身も疑問を覚えさせる事が起きてしまつた。

バー^トが続いて「更に不明機^{アンノウン}一機急速接近！照合…一致機一切ありません！」と叫んでいた。

そしてブリッジ遮蔽中によつてモニターから確認してしまつたが次の瞬間ボロ布に包まっていた一機が黒と白の刀を抜いて、砲塔を斬り落としていた。

ブリッジのメンバー全員が驚愕してしまつた。あのMSが来た位置から見てもオープから來ていた筈なのにオープの艦隊を攻撃していた。その後直ぐに此方の前に立ち連合の方を睨みつけていた。

（あの機体はオープの味方じゃないのかしら、だとしたら嬉しい誤算ね）とタリアは思つていたが

「艦長！あの機体味方なんですかね？」とアーサーが聞いてくる
「知らないわよ。メイリンあの機体に連絡を取つてみて。あっちの
事情を聞いてみたいわ」

「了解！」

（さてあの機体は私達の味方なのかしらね？だつたら嬉しいんだけどね）と思いつつも戦場に意識を向けていた。

→ SIDE END ←

「全く、オープは原則不介入とか抜かしといってこう行動を起こすのかよ。やはりセイラム家にオープを任せたらオープと言う名が消え去るだろ？」と言いつつも刀を鞘へと戻した。

そして腰に掛けっていた大型ビームバズーカを抜き出しチャージを開始し始めた。

すぐさま危険性を感じたワインダムが此方にビームライフルを連射して撃ち貫こうと連射をしているが、その攻撃は無駄に終わってしまった。

何故なら次の瞬間一機のウインダムのコックピットがホープの持っている刀『雪』『堅守』によつて貫かれてしまつたのだ。

それにより気付いていたとは言え敵機も驚きが隠せないのだろう。

さっきまでもう一機のそばに居た筈…だが今は此方の背後を取つて攻撃を仕掛けってきた。多くのMSのパイロットが恐怖を覚え硬直し大きな隙が生まれていた。

当然固まっている間にもテスペアの持つ大型ビームバズーカはチャージが完了し終わっていた。

次の瞬間ビームキャノンから無慈悲な一撃が放たれてしまった。何機かのワインダムが自分達の空母を守ろうと躍起に成って盾を構えビーム砲の直撃を代わりに受けようとするが、その考えは空しく終わりビームはワインダムを包み込み貫通して空母へと直撃した。

そして空母は大型ビームキャノンを受け貫通してしまった。遠くから見ても反対側が見えるほど破壊力だった。次の瞬間当然の如く空母は大きく火を噴き海へと沈んでいった。

「ふん、その程度の攻撃じゃ此方を葬れないぞ？もつと機敏に動かない」とただの的にしか見えない」とシユウは冷たく落ちて言った空母へと言い放った

だが次の瞬間その考えを捨て左へと緊急回避をし始めた。そして気づいた時には今回の戦場にて連合の切り札とも言えるザムザザーが近接用クロード切り裂いてきたのだ。

シユウは気付いてないとは言えすぐさま反応し回避しようとしたがそれでもクロードが掠つたのか機体をおおつていたボロ布がクロードに引っ掛け海へと落ちていった。

その姿を見て誰もが墮天使と思ってしまつただろう。そのMSは1対の黒き羽を広げザムザザーを見据えていた。そして次の瞬間左腰

からビームテスサイズを取り出し肩に担いだ。

「機体の正体をばらされたか。まあ良い…… あ、貴様等の断罪を始めよウか」と黒き羽を持つMSのパイロットからそう言い放たれた。

だが威圧的な喋り方に怒りを感じた何機かのワインダムがテスペアにビームライフルを連射していた。何機かで挑めば落とせるとでも考えていたのだろう。次の瞬間テスペアガンダムが爆風へと包まれていた。

そしてこれまで止めとでも言ひよつにビームサーベルで3機のワインダムが煙が立つてゐる中へと突っ込んでいった。

だが次の瞬間落ちていつたのはテスペアではなく体と脚が分かれたワインダムが落ちていき爆発が起きていた。

肝心のガンダムの方は右腕一本でビームテスサイズを難無く振り回しつつ全くの無傷でしかなかつた。全く何が起きたのか理解の出来ない敵兵だったがシユウは撃ち込まれた瞬間に翼で自機を包み込みビームの攻撃を完全に防いでいたのだ。

「さあ、お遊びは此処までだ。体も暖まつて来たしメインディッシュにでも入ろうかな」と言つたが次の瞬間ミネルバからタンホイザーが援護とでも言ひよつにザムザマーに向かつて放たれていた。

だがシユウも確認しようと思っていた事だが、やはり陽電子リフレクターのせいでビーム攻撃が防がれていたのだ。

「シラユキ… あれやるぞ、練習通りだから出来るな?」と秘匿回線

で何時の間にかデスペアに近づいていたシラコキへと聞いてみた。

「あれをやるんですか？まあ今回は標的デカイから何とか出来ますけどね」と言つてやる気はあるようだ

そして同時に「リミッター解除 5分間！」と言つて一機は高速で左右に分かれた

そしてシユウはザムザザーの右側に出現し左足にある小型マシンガンを引き抜き右腕をザムザザーに向けて差し出しミサイルを発射しシラコキは逆側の左側左腕に持っているハイパー・バズーカと右腕に付いているミヨルニルをザムザザーに向けて打ち込み始めた。

すぐさまザムザザーが陽電子フィールドを張つて此方の銃弾を防ごうと考えたんだろう。だが次の瞬間陽電子は何も反応せずそのまま実弾を通しザムザザーへと直撃して言つた。

シユウとシラコキは以前から確認していたのだ、陽電子リフレクターはビーム攻撃等の電子系に干渉してダメージを減らす事をしているのだと、故に実弾には干渉できず直撃を受けてしまうと…今回それを試す為に行つたのだが大成功のようだつた。

そしてシユウとシラコキは武器を元有つた場所に戻しシユウがスタンダガーを投げつゝも『絶』を引き抜き格闘攻撃を仕掛けた。だがデスペアが出てきた所はザムザザーの真正面だつた。すぐさまザムザザーが爪を振り上げ此方を叩き潰そうと思っていたが爪はピクリとも動いていなかつた。

そのままデスペアは『絶』を抜き出しザムザザーの左腕に振り落と

され斬りおとされた。そして時間差攻撃とも言つように斬艦刀をザムザサーの後方右足へと突き刺した。

これによつて後方右足は上下左右運動が不可能となり実質使えるのが右手・左足なのがその程度の時間を与えられるはずも無く、止めとでも言つようにシユウはビームサイズをシラコキは『雪』『堅守』をザムザサーへと振り下ろし後方へと下がつて行つた。

この行動を改めてシユウは時間を確認したが実質3分しか経つておらずザムザサーは既に海へと沈んで行き海中で爆発を起こし海の藻屑として消え去つた。

流石の連合も第三者の軍事介入は予想していなかつたのだろう、既にミネルバと言つ標的すら忘れてしまい矛先が此方にしか向いていなかつた。

流石にシユウもワインダム相手にリミッター解除は大人気ないと悟つてしまつたのだろう。

次の瞬間「リミッター解除終了」と言つてブースターの展開を終わらせた。

「ちょっとシユウさんなんぞリミッター解除切つてるんですか！？」
とシラコキが驚いているが

「いやいや、この程度にリミッター解除使う必要性あると思つつか？
無いだろ？」とシラコキにそう言い切つてしまつた。

「まあ、そうですけどね。でも…いや、貴方に何言つても駄目な気がします。リミッター解除終了」とシラコキも觀念したようにリミ

ツター解除を切っていた。

すぐさまウインダムが静止した此方にビームライフルを連射していったが一機は呼吸が合つよつに同時に盾を張りビームを曲げていた。

「どうだい？自分達が造つていた兵器が相手に利用される気持ちはわ」と言つて微笑んでいた。

そしてシュウとシラコキはお互いの武器を持つて敵艦に攻撃をし始めた。

まずシュウから行つて見よう

シュウはすぐさまビームサイズを抜いて敵艦へと突っ込み始めていた。

だが敵も既に此方の狙いなど判り切つてゐる様に何十とも呼べるウインダムで此方を囲んでいた

「やれやれ、今持つてる武装を何とも思わないのかな？」と呆れつつもビームテスサイズを両手で持ち構えた。

次の瞬間ビームサイズからコードを伸ばし機体の一部に繋げビームサイズの刃を長くして大きく振り回した。

この行動に予想外だったのかすぐさま数機は上空へと飛翔するが反応し切れなかつたMS達はコックピットを切り裂かれ無様に落ちていつた。そして上空に逃げていつたMS達も足を切られ余り戦闘が出来ない様にしか見えなかつた。

周りのイージス艦を確認しても戦艦自体は早く動けないせいでブリッジは叩き潰され戦闘不能でしかなかつた。

「全く歯はいたえの無い連中だな。…おつと危ない危ない危うく俺自身が戦闘狂に成る所だつたよ全く」と言いつつも自分の周りに敵が居ない事に呆れてしまつていてシユウだつた。

一方シラコキの方は

「今頃シユウさんは速攻で終わらせてるんでしょうねえ」と言いつつまた一隻のイージス艦を叩き潰していた

彼女は今お気に入りの武器『雪』『堅守』の一一本を持ちつつも敵MSと戦艦を相手していたのだ。

すぐさま空中へと飛び上がり再び一機のウインダムを斬りおどしていた。だがホープに気付かれないようにイージス艦の影に潜んでいた一機のウインダムが此方をビームライフルで撃ち貫こうとしていたが逆に何か凹型の何かによつて機体は撃ち貫かれ爆発を起こしていた。

「ふう、此れは疲れるんですけどやっぱり良い物ですねドрагーンは」と思わず言つてしまつたが

「おつとつと、間違えましたね。シユウさんが言つにはフイン・ファンネルって言つらしいですけどドрагーンとそこまで代わりないんじや?」とシラコキは頭を傾げながらも横から来たウインダムを斜めに斬り爆風に巻き込まれないように蹴り飛ばした。

そして蹴り飛ばしたところを余り良く見ずにやつていたが運が良かつたのだろう。機体は他のウインダムにぶつかり一緒に爆発してい

た。

それをボッターと眺めつつもシラコキはファンネルを再び操作しながらMSを順調に叩き落していた。

だが何時までも長いと感じていた戦いにも決着が付いたかのように一隻の空母から信号弾が打ち上げられどんどんとイージス艦が拠点へと引き返していく。

そしてシラコキはようやく戦いの終わりが来た事を感じ少しの安堵を覚えていた。

だが改めてテスペアとホープが合流し海を確認すると機体の残骸が海へと沈んでいたのが良く判り敵艦も数が少なかつたのだ。

「シユウさん今回何機落としたか覚えていますか?」とシラコキが少しの疲労感を覚えながらも聞いてみた。

「判らん、でも結構落としたのは頭に残ってるぞ」とシユウ自身も今回の戦いは疲れを感じているのだろう

そう彼らが今回落としたのは、正直言って軍に居たならば表彰者だつただろう。

今回シユウとシラコキが落とした数はMSは八十三機 大型MA一機 空母を含めた戦艦は十一隻とある意味勲章物に成るほどの撃墜数を誇っているのだ。

今回此れだけで済んでいたのは殆どはシラコキの武装の貧弱性も有ったからだろう、今回シラコキは才能が有ったとは言え未だにファ

ンネルは一本しか使えず更にはガトリングと言つた強力な兵器を一切使わなかつた為にこの数で済んでしまつたのだろう。

今回シユウはそれが少々気がかりに成り聞いてみた
「シラユキ、何で今回は大型武装を使わなかつたんだ？」

「今日はザムザザー落とせば勝手に撤退すると思つてたんですけどこんな展開に成るなんて読めなかつたんで」と軽く申し訳無さそうにしていた。

「まあ、仕方ないよな。今日はザムザザーだけで終わりだと思つていたのは間違えでは無いが連合にもメンツが有るんだろうね」とシユウ自身も連合には呆れていた。

メンツやプライドなど確かに人によつては凄く大事な物だろう。だがシユウはその考えは少し苦手でしかなかつた。

プライドやメンツにこだわり過ぎると今度は自分の命を危険に晒す為彼自身生き残る為ならシラユキやキラ等前大戦の仲間を救いつつも他の人間を容赦無く利用するだらう。それが例え自分が大きな汚名を被つてもだ。

「そんじや「待つてください」…はあ、何か嫌な予感がする」とミネルバに呼び止められた

「何ですかね？此方とて多少忙しいので速めに用件を言つて下さい」とシユウは声でばれたら危険なので砂漠でやつた様に変声機で声を変えていた

「幾つか話が聞きたいので着艦していただけないかしら?」とグラ

ディス艦長が頼み込んでくるが

「すいませんが其れは出来ません。今回助けたのは自分達の意思と
たまたま戦場に居合わせただけです。それでは」と言つてホープと
デスペアの一機は機体を翻しジャンク艦の有るポイントへと機体を
走らせた。

後ろから「ちよつと…待ちなさい…」と聞こえてくるが、当然無視
に決まつている。

彼らが特に悪い事をしていないのは判つてゐるのだが、機体の情報
を教える訳にもいかないので逃げるよつに撤退して行つたのだ。

そしてシュウは考えていた（此れで連合とザフトの戦争が再び始ま
る…。どれだけ多くの人達の命を奪い取れば気が済むんだよ上層部
は…）と内心怒りを感じつつもジャンク艦へと向かつて行つた。

PHASE 34（後書き）

シユウ「今日はミネルバの獲物を全部俺らが搔つ攫つた訳だな
シラコキ「そうですね。改めて見ると私達の機体って結構チート臭
がするんですけど氣のせいですかね？」

抹茶「多分それは氣のせいじゃないです。結構書いてる内にホープ
はギリギリチートじゃないとしてもデスペアがチートすぎる氣が…」

シユウ「自重しないお前が悪い氣がする」

シラコキ「そうですね。それに格闘専用機にファンネル着いてたら
進軍が絶対に止まらない気がしますよ」

抹茶「別にもう良いじゃん。前のキマイラとホンジョンもチートで
しかなかつたし今回ぶつ飛んだチートも有りだね」

シユウ・シラコキ（開き直ったよ）の作者

抹茶「何か悪い想像された氣がするな、まあ良いや。今回じ感想を
くれたヒカルさん有り難う御座いました。と言つか混乱させて申
し訳有りませんでした。」

シユウ「作者…あんまり読者を混乱させないよ」

抹茶「はい、改めて読者の皆様方にまお詫び申し上げます」

シラコキ「さて後書きは此れぐらいですかね？」

シリコキ・抹茶・ショウ「セヒシユウ（俺）とシリコキ（私）はどうなるのか？次回お楽しみに！」

「ご意見・ご感想ありましたらドンドン書いて下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～SHODEで何か有りましたら言つて下さい

抹茶「はいフェイズ35完成させました」

シユウ「今日は早朝投稿だが、朝の1時くらいに投稿できなかつたのか？」

シラコキ「また、作者の事だから何かしら理由をつけて投稿出来なかつたって言つんでしょうね」

抹茶「うん、正直に言つと寝落ちした。完成した次の瞬間に緊張の糸が切れてグッスリと」

シユウ「駄目じゃん！全く作者のウツカリ具合にも呆れが出てきたぞ？」

抹茶「そつ言わないでくれ、と言つた俺のウツカリは何時もだ！」

シラコキ「そんな自慢して言つまびじやないと想いますよ～むじろ言つて空しくなりませんか？」

抹茶「うん、今マジハで自分で言つた事が空しくなった」

シユウ「それより今回まだどんな話なんだ？」

抹茶「今日はキラ君達が暗殺されるといふを介入です」

シラコキ「そうですか、それでは前書き閉じますか」

シラコキ・抹茶・ショウ「それでは本編をお楽しみ下せこー。」

あのオープ領域外の戦いから1週間が経つた。たまたまシラユキがオープとザフトの方が如何なつてているのか、確認していた。

そして彼女は一つの情報を見て驚きを隠せていなかつた。それをすぐさまシユウへと知らせる為部屋へと向かつていた。

「シユウさん！大変です！」と言ひてシラユキが部屋に入つてくる
「ん？何が大変なんだ？俺には今このコーヒーを飲むと言つ楽しみを奪われる以外に大変さは無いんだが？」ととても真剣な顔で言い放つが

「そんな事は如何でも良いんです！取り敢えずこの一つを見てください！」

と言つて小型の端末を投げ渡される

シユウは自分の大切な時間としているコーヒーを楽しむ時間を邪魔され多少苛立ちそうに成つたが映像を見た瞬間その苛立ちは吹き飛んだ。

そう其処に書かれていたのは『オープのアスハ家とセイラン家結婚！オープ安泰か！？』と書かれた物が目の前に写つていた。

シユウ自体も原作を知っていたが流石にあの鬱陶しい男と結婚するカガリに多少の同情をしてしまつた。だが正直シユウも悩んでいた。

此れに介入すると言つ事は確實に此方は敵に回ると言つ意思表示と

考えられる恐れが有るのだ。それによつてオープの地を一度と踏めないと言つ事が起きるという可能性を考えるとシユウは怖さを覚えてしまった。

だが其れを考えながらももう一つの記事を開いた。それは映像付きの画像だったが、シユウ自身も此れは、プロだつたら一瞬で見分けられるほどの嘘が書かれていたのだ。

そこには『新造艦のミネルバとそのクルー達オープ領域外で勲章物の撃墜数』と書かれており詳しく映像を見ると、幾つか不可解な撃破が残つてゐるのが良く判る。

そつまづ問題の記事は、シユウの『スペアが大型ビームキャノンで空母を撃ち貫いた所がミネルバによるタンホイザーで行つていた所・シラコキと組んでザムザマーを落とした所ではビームサーべルで爪を切つておきながら切断面がやけに綺麗過ぎる所・ホープがイージス艦のブリッジを潰した所はインパルスのエクスカリバーの斬激で潰している等色々と攻撃と攻撃後の形が合つていない等数え始めたらキリが無いほど多いのだ。

「何だ此れ？最近のザフトの連中つてのは人の手柄を取るのがシユミなのか？それとも騙し映像を見せて置いて此れが本物です。とでも言つてるつもりなのか？」と流石のシユウも此処まで来ると怒りを通り越して呆れと苦笑しか残らなかつた。

「ちょっとシユウさん笑つてる場合ですか！？片方はカガリさんの無理やりな結婚もう片方は、手柄の横取りですよ！？」とシラコキはこの件については憤りを隠せないようだつた。

「シラコキもそつまじ切れするなよ。こんなもん子供の悪戯にしか

思えないほどだしな」と言つてショウはあんまり氣にはしなかつた。この程度の手柄を取られた程度で彼らは痛くも痒くもないのだ。寧ろ彼は、勲章や撃墜数など全く興味を示す事など無いのだ。彼が一番興味を示す事……

それは「そんな事より今は楽しい楽しいコーヒー時間なんだ。頼むから邪魔しないでくれ」と言つて造りたてのコーヒーを楽しんでいた。

「はあ、もう良いです。ショウさんに相談しようとした私が馬鹿だつたかもしません」と言つて部屋を出て行こうとしていたが

「悪いがシラコキ」この後暇が有つたらBarrett .50calとmp5kの2丁を用意ししてくれる当然一つともサイレンサーとサーマルスコープ付きでね」とシラコキに向かって頼み込んでいた。

「如何詰つことですか?誰かの暗殺でも行つつもりなんですか?ショウさんは」と流石のシラコキも武器庫にその二つの武器は有ると言えそれが必要と言わわれては怪訝な顔に成るのは仕方ない事だ。

「何そう変な顔しなくても大丈夫だよ。友人を助けに行くだけさ」と言つてショウは再びコーヒーを啜つていた。

「そうですか、それだったら判りました。直ぐに準備しておきます」と言つて部屋を後にしていった。

シラコキもさつきの会話で判つてしまつたのだひつ、キラ達が危ないと言う事を…。最近ではショウとシラコキは一晩一晩話すだけで言つてる事が判る時があるのだ。

そしてシュウは一人部屋で悲しい顔をしながら
「こんな事でオープを訪れる事に成るなんてね。しかしデュランダ
ルもそれほどまでに俺らを殺したいのかなあ」と言いながら呆れて
しまっていた

そう言いつつも彼は飲み干したカップをテーブルに置き立ち上がり
て歩き始めた。そう目的はキラ君達を殺害しようとしている暗殺者
達の殺害だ。

そしてシュウは既に準備を終わらせたシラコキから荷物を受け取
りMSに乗り込んだ。今回はキマイラを使おうと思ったのだが、考
えてみれば既にオープからはキマイラのパイロットは知り渡ってい
るのでデスペアへと乗り込んだ。

そして彼はジャミングを機体に掛けながらキラ君達が住んでいる別
荘と海を見渡せるポイントを陣取り夜を待っていた。

そして深夜……予想通りサーマルスコープ越しから敵の姿を確認す
る事が出来た。そして彼らが動き出した所を見てシュウも狙撃を開
始した。

彼らは中腰で動いている為速度が遅い。故に少し先の移動予測地
点に銃弾を打ち込めば後はむこうから勝手に弾に当たりに来てくれ
ると言う訳だ。

そしてシュウの予測通り暗殺者の一人は体をうつ伏せにし動く事が
無かつた。流石の彼らもスナイパーの存在には驚きを隠せないだろ
う。そして厳しい訓練を受けてた暗殺者が普通のスナイパーライフ
ルで絶命する等考えてもいなかつただろう。

彼らも生き残るために防弾チョッキくらいは着込んでいる筈だろ？

故に普通のスナイパー・ライフルだつたら瀕死程度で生き残れたはずだ。だがそれは普通のスナイパー・ライフルで撃たれた時の話だ。今回彼が持ってきたスナイパー・ライフルは対戦車用のライフルである為防弾チョッキなど紙に等しいほど簡単に貫けるのだ。

そして焦り始めた暗殺者は急いで屋敷内に駆け込んで行っていた。それも見逃す訳無く着実に撃ち抜いていくが何人かは屋敷内に入り込んでしまった。

そして中から銃声が響き続いている。シユウは中に入れてしまつた事に舌打ちを行つていたが、次の瞬間、その考えを吹き飛ばしすぐさま自分のMSの居る場所に走り出した。

そう、シユウが逃げ出した理由は海から何十ものMSが出現していだからだ。そして此方の位置が判り切つていて先程自分が居たところに背中のミサイルランチャーが撃ち込まれた。

「なつ！マズイ！」と言つてシユウはすぐさま態勢を低くし吹き飛び難そうな木の後ろへと下がつた。次の瞬間大きな岩が自分の真横に吹き飛んでおり、あの時の判断を間違えてたら即死だつただろうと改めて思うシユウだった。

そして黒の塗装をしていたカーニーの形をしたMSは此方に興味を失つたかのように攻撃対象を地下のシェルターへと向けていた。

そうしてシユウは意識をされて居ないことに感謝し、片膝を着いて森に隠れていたデスペアガンダムに乗り込みMSを起動させた。そ

して森から立ち上がつても未だに向ひつけは気付きはしなかつた。

相手もそつだが此方も黒であり、また森に居るので気付き難いのだ
るつ。そしてシユウは一気に羽を動かし空中へと浮上した。

流石に大きな音で敵MSも此方に気付いたのだひつ。すぐさま何機
かガミサイルランチャー や機関砲等を連射してくるが

「その程度なら俺には通用しない！」と言つて速度を上げながら機
体を左右にローリングさせ弾を回避しておいた。フェイズシフト装
甲も有るので一応当つても良いのだが、デスペアを傷付けるのも嫌
なので回避したのだ。

そして急速の接近に驚き硬直していたのだ。シユウはそのまま止ま
らずにビームテスサイズを近くの一機のMSに振り下ろした。

当然硬直した状態の一機にその攻撃は避ける事は出来ることとは無く、
一機は斬られた所をスライドし爆発を起こした。

デスペアは爆発に巻き込まれたが、それをもうともしないよう炎
の中MS達を睨みつけていた。

そして今炎のお陰でようやく此方のシルエットがハツキリしたの
だひつ。やはり情報を改ざんした事をこいつ等も知つてているのだろ
う。何機かが後ろに下がり始めていた。

だが彼らは一つの点に気付いてしまったのだ。あの海上の戦いで居
た白いMSが居ない事に。

そう今回シユウはシリコキにも手伝つて貰うべきか悩んでいたのだ

が、流石に個人的な私用でも有るので一人で相手をしているのだ。
それにはあの機体は真っ白なので夜では見付かり易いと言う欠点も多少残っているのだ。

「アーツはフェイズシフト装甲を持つている実弾じゃなくてビームを使え！」と隊長機らしき奴からそう言い放たれた。

そして残った12機のカニのMSが6機が格闘をする為に此方に近づいて来ておりもう6機は肩や頭部のビーム砲を連射してきた。

「オイオイ、たつた1機のMS相手に此処までするか普通？」とシユウは疑問に成りながらもビームデスサイズを相手側にブーメランのように投げつけた。

それによつて多くのMS達が体勢を崩したり機体の一部を斬られる隊列を乱される等が発生した。そしてシユウは単機で戦つてゐる為その心配が無いのだ。

「落ちろつ！」と言つて再び高速でアッシュの方に接近し黒刀『絶』をコックピットに突き刺す。その時にオイルが機体に飛び散つたが、それは暗殺兵の恐怖心を仰いだ。

「ふんっ、たつた一機のMSに苦戦するお前等つてただの雑魚にしか分類されないんだろ？なあ」と言つて苦笑しながらシユウは暗殺兵達に挑発を仕掛けた。

流石に恐怖で心が安定してない為何人がが怒りを感じたのだらう。ビームクロウを展開させ突っ込んでくるが……。

「やれやれ、しかしあ前も着いて来ていたんだなシラユキ」と言い

ながらシユウは、田の前のMSを眺めていた。

次の瞬間白いMSが迫ってきていた。そしてMSを横からビームサー贝尔で貫いていた。

更に追撃とでも言ひよつにフィン・ファンネルが後方支援をしていたMSを破壊した。

「全く、着いてこなくともこいつ等俺単機でも潰せてたんだぞ? どれだけ心配性なんだお前は」

ヒシュウはやれやれと思しながらもそう言い放つた。

「何を言つてるんですかシユウさんは。先程までは少々苦戦してたくせに」とシラコキが皮肉を言い放つていた。

そして続いてシェルターが開く音が聞こえた。全員がシェルターに視線を向けた瞬間1機のMSが飛び出してきた。

すぐさまシユウは目で追つたが反応が追いつかず何とか見れたのがカ一のMSの戦闘能力を奪つた所だけ確認できた。

そのときシユウは一つの事を思つてしまつた。（うわあ、敵MSが可哀想に成つてきたな。相手はロールアウトされた新型言つてもデスペア・ホープ・フリーダムの前じゃ弱い方にしか分類されないんだろうな）と思いシユウは敵に黙祷をささげてしまった。

そこからは、ただ単に一方的な戦いが始まってしまった。相手がミサイルやビーム砲を放つても叩き落される・回避される等此方は被弾せず一機また一機どんどん数が減つていく。

そして最後の一機が『デスペア』の『絶』によって沈み始めた。そして改めて戦場を見回した。

そこには先程のMSの残骸だけが残り、あの綺麗だった海の面影が一切残つてなかつた。

シユウはその光景を眺め氣持ちが沈んでしまつっていた。「オープを守りたいつて願つたはずなのに今の俺は、オープを汚してるだけじゃないのか?」と思わず自分に対して毒を吐いてしまつた。

そう意氣消沈をしている所を「すいませんが、貴方方も降りてもらえませんか?」とキラ君から通信が入つた。

「如何しますシユウさん?この機体ばらしたら不味いんじゃ?」とシラコキが敢えて危惧して来るが

「大丈夫だ。口を滑らせない限りこいつ等の動力源はキラ君達も判らない筈だ」と言つてロックピットから降り立つた。

そしてヘルメットを取り改めて全員の前へと立つた。

「お久しぶりです。と言つてもこんな風に再会するなんて思つてもいませんでしたよ」とシユウは言い放つた

「全くだな。それよりもシユウはこの存在に何時気付いたんだ?」
とバルドフェルドさんが聞いてくる

「ついさつきですよ。それで先に自分が先行してあのMS達の相手をしていたんです。間に合つて良かつたですよ」と思わず微笑んでしまつたが、此れが彼なりの演技だ。

「そりなんですか、有り難う御座います。しかし何でラクスが狙われたんでしょうか？」とキラ君ですら疑問に成っていた。

「ふうん議長は、目障りな物を早急に消す事を決めたんだな」とシユウは考え深くそう言い放つた。

「ほう？その言い方だと議長の何かを知っているかのような口ぶりだね」とバルドフールドさんまで聞いてきた

「ああ知っているぞ。確かに表向きは良い政策をやつてはいるが、あれはあくまで表向きの方を見たらだ。裏の方を見たら何度も議長が糸引いて厄介な奴を消しているって話がチラホラ見られたよ」とシユウは呆れてしまつた

「じゃあ今回ラクスが狙われたのって」

「ああ議長に厄介と見られてしまつたんだろうね。それに今ザフトじゅラクスさんの身代わりが出てるしね」とシユウは端末を操りバルドフェルドに渡しといた。

「ふむ、確かにこれが取られたのは数日前だ。それにその時ラクスは此処に居たからな」

「此れで決定だな。あれは偽者だな、此れで議長は完全に信用できないな。ミネルバも今じゃ信用出来るかどうか甚だ疑問に成るな」と言いつつもデスペアに向かつて再び歩き始めた。

「シユウさんは此れから如何するんですか？」とキラが思わずこっちに聞いてきた。

「俺か？俺は自分が正しいと思っている道に向かつて進んで行くさ。その為に新しい力を求めたんだ」と言ってデスペアに乗り込こもうとして

「俺たちは此れからミネルバを追う。予想が外れれば良いんだが、いつ等につきまとつて動いてた方が何かと良い気がするしな」と言つてデスペアのコックピットを開めた。

シラユキも置いて行かれない様急いでホープに向かい乗り込んでいた。

そしてショウとシラユキは翼を広げ自分達の艦へと戻つていった。
自分達の戦いを始めるために……。

ショウ「今回ばかりも短かつたな」

抹茶「だつてアニメじゃキラ君が決意してアッシュを瞬殺してるんだよ? 話だつて少なく成るに決まつてんじやん」

シラコキ「だつたらショウさんゴミシターリー解除すれば瞬殺出来たんじや?」

抹茶「数ある戦闘を描[画]は下手だからと言つて秒殺したら面白みとか無くなるだろ?」

ショウ「まあ、作者の方が一理有るのか?」

シラコキ「多分そつでしょ? そつ言えば今回は多くの感想を貢つたようですね?」

抹茶「はい、ぶれいぶパパさん・三ノ丸さん・マサトさん・やすこさん・みりんさん・テクノロジーさん」感想有り難う御座いました」

ショウ「今回は6人にも感想を貢つたのか…何時もより多いな」

抹茶「そうですね。何処が悪いか言つてもうれば次に繋げれるので実に助かってますよ」

シラコキ「作者にも反省つて言葉あるんですね」

抹茶「何気に一番シラコキが酷いような気がしてきた。と言つた俺

を苛めるの樂しんでないか！？」「

シユウ「氣のせいだと想つた…………多分」

抹茶「オイッ！パートナーがさじを投げるな！」

シラコキ「さて、そろそろネタが無くなつそうですし、後書きも閉めますか」

抹茶「結構シラコキって場の空氣を搔き回すの得意なのかな？」

シユウ「もしかしたら、そうかも知れんな」

シラコキ「何か言いました？」

抹茶・シユウ「いえ、何もあつません！」

抹茶・シユウ・シラコキ「さてシユウ（俺）とシラコキ（私）はどうなるのか？次回お楽しみに！」

「ご意見・ご感想ありましたらドンドン書いて下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～SHIDEで何か有りましたら書いて下さい

PHASE36（前書き）

抹茶「はい、今回は多少速いですが、PHASE36を出させて頂きます」

シユウ「速く投稿するのは良いが混乱する読者が続出するんじゃないのか？」

シラユキ「そうですね。何時もは4日おきに投稿するはずなのにこんなに早いなんて予想できる人居るんですかね？」

抹茶「あーそれに付いては申し訳ないと言つしか有りませんね。実は言つと自分がさ来週からテスト期間に入るのでその間に投稿できないと言つ事が有り得るので今回早めに投稿させていただきました」

シユウ「ああ言つえば昨日あたりに活動報告でそんなの書いてた気がするな」

シラユキ「読者が如何思つかは判りませんが、もしかしたら快く思わない人も出るかも知れませんね」

抹茶「そうなるのはちょっと怖いですね。何とか」「承頂ければ幸いだと思いますよ」

シユウ「読者の皆様方も頼むから作者を許して貰えるようお願ひする」

シラユキ「そうですね。作者の方も色々と努力している感じなので見

逃して欲しい者です」

抹茶「二人とも弁解有り難う。さてそろそろ本編入ろうか」

抹茶・シラコキ・シユウ「それでは本編をお楽しみ下さいー。」

「シユウさんオープでカガリさん…」と言つてきた。

「ああ言わなくて良いフリーダムとアークエンジエルが搔つ攫つたんだろ?」とシユウは判り切つた様に言つた

そして映像にはカガリがフリーダムに乗せられて飛び去つていくのが見えていた。

「それよりも今は、あいつ等が如何動くかが大事だろ?」と言つて目の前に映し出されていた映像を眺めていた。

彼らは今カーペンタリア基地から出てきたミネルバの後をゆっくり追つてきていたのだ。流石に海中にボズゴロフ級潜水艦が2?先に航行しているので、自作の無人偵察機を飛ばしていたのだ。

そしてミネルバが戦闘ステータスへと移行していくので、自分たちも出るよう立ち上がる。

「えつ?直ぐに出ちゃうんですか?もう少し休憩できると思つたのにあ」と愚痴を良いつつもシラコキも立ち上がった

「面倒だつたら出なくとも大丈夫だぞ?俺としては出撃して怪我をするシラコキなんて見たくないからな」とシユウは特に意識せずにつきつてしまつた。

「シユウさん…いえ、やる気出ましたーやりますー」と言つてやる気が満々に成つていた。

シユウは何でシラコキがこんなにも元気が出たのか謎に成りつつも自分の愛機に向かつて歩き始めた。

そして自分達の機体の準備が整つたので、一人はジャンク艦を出ですぐさま海中から空中へと浮上した。そのとき大きく水柱を立てたので何機かが此方を確認し始めた。

「さあ戦争介入を始めよう」とシユウは咳きながらビームテスサイズを開いた。

だが此方の戦闘を邪魔するかのよつてミネルバから連絡が入つてきた。最初は無視しても大丈夫だろうと思つていたシユウだが、何時までも鳴り響くので苛ついて通信に応じた。

「こちら強襲揚陸艇ミネルバ艦長 タリア・グラディスです。^{アン}不明
機其方の目的を言いなさい」と話しかけてくるが

「此方から話す事なんて一切無い。ただ邪魔をするなら先にそつちを落とすだけだ」と言つて通信をすぐさま切つた

相手からすればシユウの言葉は半分冗談にも感じられるだろうが、彼が本氣を出せば空母や戦艦を落とすことは容易く出来るのだ。

そしてシユウは戦闘を邪魔をされて苛ついていたので、さつきから近くでビームライフルを連射してくるワインダムの一機をビームサイズで切り裂いた。

流石にこんなにも簡単に落とされると、初めて見た敵から見たら予想外だったのだろう。すぐさま此方を落とすと考へていそうな、赤紫のワインダムが突撃してくる。

さすがネオ相手では、油断できないと判断したシユウは「シラコキ！」「ちに斬艦刀貸してくれ！」と言いつつもビームサイズの持ち手でサーベルを防いでいた。

「もう、そんなことしなくても『絶』有るんですから勝てるでしょうが！それに今私斬艦刀を使ってます！」と言つてるのでホープの位置を確認すると、確かに斬艦刀を振り回していた。

それを見たシユウはしぶしぶ借りるのを諦め目の前の戦闘を再び集中し始めた。そしてお互に一向に下がろうとしないのでシユウはワインダムに左足から膝蹴りを喰らわせようとするが、それを読んでいた様に一度後ろに下がつていったが、シユウはそのまま突っ込みショルダータックルを食らわせビームサーベルを一本奪取した。

流石に奪つたのが相手は嫌だつたのか「お前ヒトのサーベル奪つてるんじやねえよ！」と苛められた

「うつせえーよー」「ちだつてサーベル持つてないんだから一本くらいケチケチせず寄越せよ！」と逆ギレを起こしてしまった

そして会話が終わつたように再びサーベルが此方に向かつてくるがシユウは奪つたサーベルで防御をし『絶』を引き抜いた。

そしてそのまま蹴りを着ける様に「リミッター解除1分間」と言って振り下ろそうとしていたワインダムの目の前から消失した。

次の瞬間空振りを起こしたワインダムは大きく体勢を崩し、シユウはその隙を逃さないよつと左足からの膝蹴りを頭部のカメラへと喰らわせる。

反撃とでも言つよつにサーベルを振つてくるが既にデスペアは移動しており次はウインダムの後方に現れ両腕を斬り飛ばした。そして止めと言つよつに『絶』でウインダムの頭部を切り裂く。

「ふん、あつけないな」と言つて興味を失つた用に再びその場から離れようとしたが……。

「よくもネオを！」とガイアのパイロットが叫びながら体当たりを仕掛けてくる。

「なつ！？」油断していたシュウはその突撃を避けきれず直撃を受けてしまった。すぐさまシラユキが救援へと入ろうとするが力オスが移動を邪魔するかのように、此方に来れないようだつた。

そしてロックオンされたアーネートが機体から鳴り響いてきた。

（マズイ！）と思つて機体を起こそうとしてもガイアがMA形態で此方を抑えているので、全く持つて動けないのだ。

「クソッ！此れだけは使いたくなかったが、全バーツ解放！」と言つて機体が軋む音が聞こえてくるが自分の命に比べれば安い物だつた。そしてバーツ解放をしたと同時にデスペアの機体の色が大きく変化した。

今まで黒で統一されていたデスペアだが白へと変わりガイアを蹴り飛ばした。そしてやられたお返しとでも言つよつに手でガイアの頭部を掴み何度も岸壁へと叩き付けた。

そして戦う気も無さそうなのに未だにデスペアはマシンガンとミサイ

イルをガイアに撃ちを痛め付けていたのだ。そう周囲から見たら残虐な行為かもしないが、

シユウからしたら「自分が手加減していなかつたらもう死んでいる。自分の力量を弁えろ」とかつての奢っていた自分と姿を重ねボッコボコにしていたのだ。

そしてガイアはボロボロになつた装甲を引き摺りながらも自分の母艦へと逃げ出すように帰つっていた。

「流石に遭り過ぎたんじやないんですかシユウさん？」ヒシラコキが流石に相手のパイロットに同情しているが

「いや、あの程度痛め付けていたら自分から引き際も判つて来るんだよ」と言つてガイアの飛び去つた方向を見つめながらも、戦場を見回したが未だにワインダムやらカオス等が残つていた。

シユウが思うに先程の指揮官は帰つてしまつたが命令は続行しているのだろうと判断してしまつた。

「命知らず共が…」と愚痴を呴きながら戦場を改めて見回した。そして気づいた時にはザク一機が海中へと進んでいた事が判つてしまつた。

「何で、ザクを海中へ進ませるんだよ！」とグラディス艦長の判断に疑問を覚えながらもシユウも海中へと突入して行つた。

そして中の光景を見た瞬間に直ぐに状況が理解する事が出来てしまつた。そうアビスが水中で一方的な狩りを行つてゐるのだ。

「確かに増援は必要だとは思うが此れじゃあ増援と言つよりただの的だな」とシユウは思いつつもアビスへと突っ込んで入った。

そして先程までザクとやり合っていたカオスは此方に興味を持つよう魚雷を此方に撃ち放つてくるが、シユウはすぐさま小型サブマシンガンを引き抜き撃ち落していく。

だが気づいた時にはアビスは田の前に存在しなかつた。

「なつ！？……アビス何処入ったんだ？」とシユウは魚雷の泡でアビスを見失った。

悔しいが一度動きを止めレーダーを確認した次の瞬間シユウは背中に嫌な物が走るのを感じすぐさまその場から避けた。

次の瞬間アビスがMA形態で回転しながら横を通り過ぎていった。あの場に居たらコツクピットを貫かれ自分の体はミンチに成っていても可笑しく無かつただろう。

追撃するためにミサイルランチャーとビームライフルを連射するが、再びMS形態に戻りビームランスで難ぎ払い叩き落している。

「クツ！」とシユウは戦場で久々に冷や汗を搔いてしまった。デスペアも一応だが水中でも戦闘は出来る。

だが機体の水中適正がBランクなので反応する前に回避しなければ直撃等も有りえるのだ。

(如何する？如何すれば良いんだ！)と焦りつつも一度田の突進が来る。それを辛くも避けたが後ろから魚雷が迫つてくる。

シユウはそれを気付いていながらも直撃を受けてしまった。

「ガハツ」後ろ羽は対ビーム・コートティングは掛かっているがPS装甲を着ける事が出来なかつたのだ。

話によると対ビーム・コートティングとPS装甲が何故かお互いに反発し上手く機能しないとなリシユウは渋々羽だけを対ビーム・コートティングだけ掛けて居たのだ。

そして今回は魚雷は実弾なので後ろ羽は直撃を受けるが付け根部分はPS装甲を発生しているので、ぎ取られずに済んだが、ホントに不味くなってしまった。

「さつきのがパターン化したら確実に死ぬな…今回ばかりは本当に運に成るかもな」とある行動に対しての決心を決めていた。

そしてシユウは機体の構えを解いて無抵抗の証のように腕を解除しアビスを待つた。

→アウルSIDE

黒いガンダムが着てからザクに興味が亡くなつた俺は黒いガンダムを落とすことに専念した。

未だにザク達がバズーカを連射してくるが、当るはずも無くただ横を通り過ぎる事しかない。

そして先程のガンダムはPS装甲は有るし、頑丈だしパイロットは良い腕だと色々と腹が立つ要素が詰まつてゐる。

「それにしてもアイツ、こっちの得意な戦場で戦つてくれるって馬鹿なのか？」とアウルは敵パイロットがアホだと判断した。

あの機体はどう見ても空中用だ。主に羽を見たら誰だつてそう思える。先程の魚雷は直撃してもう機体もボロボロの筈だ。

「そろそろキツイだろ？止め刺してやるよー」と言つて再びアビスを回転させながらも黒いMSに止めを刺そうとする…。

そうなる筈だったが可笑しな事が起きてしまった。黒いMSはゼームランスの槍の刃の部分を掴んでいた。

当然手には、傷が着いているがそのまま手に力が入つており槍がミシミシと嫌な音をたて次の瞬間槍が折れてしまった。そして自分は唚然として逃げようとそのまま真っ直ぐ自分の母艦へと走り出すつもりだったがMA形態の時に後ろに出ている足を掴んでた。そのままサーベルを開拓してきており左肩の武装を縦に切り裂かれた。

そのまま持つてるのも危険なので左肩のパーツをページしMS形態へと戻り黒いMSを睨み付けた。（まさか此処まで厄介なMSが敵に回るとはね…）とアウルは思いつつも敵を倒す方法を考えていた。

→ SIDE END ←

「ふう…まさか上手くいくとはね」とショウは先程の攻撃を防ぐ方歩を画策していたが、思いついたのが（当るのが危険なら槍事態を壊してしまえば良いんだ）と詫びの発想に思い至つたのだ。

それで先程の突撃を機体を少し傾けて槍を突き刺して動きを止めようとも考えたのだが、それでは腕をえぐられる危険性が有るので試

しに腕の部分だけをリミッター解除した状態で待ち受けてみた。

当然試みた行動は成功し、腕だけ高速で動く槍を掴んだ。その後リミッター解除を止めパーティ全解放を腕にのみした所、また此れも成功し槍を折りアビスの足を掴んでそのまま左肩をサーべルの最高出力で無理やり切り裂いたと言う流れだ。

「もし、あれが成功してなかつたら即死だつたのは否めないな。…今度から此方の得意な所からひたすらボコるとするか」と今回戦いを遊んだ事を反省したシユウだった。

「それに今の俺は絶対に死ねない理由も有るんだしな」とシユウは一人呟いていた。あの夜に一人にしないと誓つておきながらその誓いを裏切るのは不味い事だとシユウも理解していた。

未だに目の前のアビスは此方に警戒しているが、既に此方も相手と戦うつもりは無いのだが先程の肩を切り裂いた事で未だに敵対心を持つていると勘違いされても困るのだ。

ただこのままこの海中に居たとしても再び攻撃される危険性も充分有るのでシユウは羽のスラスターを動かし海中から空中へと飛び出した。

それを合図にしたようにアビスは撤退しておりカオスもアスランのセイバー・シラユキのホープによつてボロボロにされていた。

見るからに一方的なリンチが有つたにしか思えない。カオスの方は何故なら右腕は吹き飛んであり、左腕はヒジから先は無い、ポッドも1つは破壊され、両足とスラスターが残っているのが奇跡としか思えなかつた。

普段は敵を容赦なく狩るシユウだが、今回ばかりはカオスの方が不憫で仕方が無かつた。そして遠くに空母が有つたのだろう信号弾が三つ放たれカオスが撤退していった。

きっとあれは撤退の意味を示す信号弾だったのだろう。シユウもシラユキも余り追撃は仕掛けずに放つといった。そしてシユウはインパルスの姿があらずふと周りを確認した。

そのときにインパルスが一箇所にずっと留まっているので近くで確認した瞬間にシユウは愕然としてしまった。

そう彼は、既に戦意を失つた連合兵に未だに攻撃を仕掛けていた。それに気付いたシユウはすぐさまインパルスに体当りし海の浅瀬まで押し飛ばした。

「クッソ！何すんだよお前はっ！」と怒りてくるが、シユウも同時に怒っていた。

「何をしているのはビッちだ！戦意の無い兵士を殺して楽しいか！」とぶち切れた。

「何！？何も見てない奴がそんな事言つ資格有るのかよー」と言つてくるが

「ああ、あれだけ見れば直ぐに判るさ。地元住民が銃殺されてそれの敵討ちのように力の無い連合兵の抹殺か？戦争はヒーローごっこじゃねえんだよー」と言つてサーベルを開いてインパルスを攻撃する。

「なつ！あんたは一体何なんだよ！」と言つてインパルスもサーベルを展開し鍔迫り合いが起きる。

「シン！今助けるぞ！」とアスランが援護の為に此方に腰のビーム砲で狙おうとするが

ホープが間に入り「彼はやられませんよ。今から貴方のお仲間が傷つくのをゆづくと見ておいて下さいよ」と言しながらパンツァーシールドを構えてビーム砲を曲げていく。

「そいつは任せたよ。俺は『イツをやるから』とお互いの名前を言わずにどっちをやるかだけを会話しておいた。

そうして話しているうちにインパルスがサーベルで突いてきた。端から見たら不意打ちだがシュウからすれば直線的な攻撃なのでそのまま機体を半身にしインパルスの腕を横切らせた瞬間にその腕を掴み脚を払った。

そのまま倒れた所をミサイルランチャー撃ちこみ再び後ろに下がつた。

「何なんだよアンタは！助けたり攻撃したりいい加減にしろよ！」と怒りながらもライフルを連射してくるがパンツァーシールドで防いでいた。

「別に俺はそちらの味方をするなど一言も言つた覚えは無い。そつちから勘違いを起こしているの間違いだらつ」ヒシュウはシンの勘違いを馬鹿にしあざ笑つた。

「なつ！ここの屁理屈があ！」と完全に怒りサーベルで斬りかかっ

てくるがシユウも簡単にやられる事はせずサーベルを出し対抗し始めた。

「それに何なんだよ、何故あの人たちを助けて俺が攻撃されなきゃならないんだ！」と何で攻撃されたのかも判らないようだった。

「お前はアホなのか？あの時に助けたのをお前は正しいと思つたのかも知れないが、この後どうなるのか予測した事は有るのか？」とシユウは彼らの未来を考えても助けた事が正解に成るのか謎だった。

「もしあのまま助けずに見逃したままで居たらあの人達は厳しい労働があったとしても寝食はマトモに出来ていた筈だ。それが今は如何だ？寝食をマトモに出来ると思つていいのか？それに再び彼らが徵兵されると言う可能性は捨てきれない」とシユウは今後の事を考えると地元住民が死ぬ危険性も有つたのだ。

「だからって何だつて言つんだ！おのまま放つておけとでも言つのか、住民が殺されたんだぞ！？」とシンが正しい事を言つてているが

「別に助けるなとは、言つてない　お前はその場その場で自分が正しいと思つた事をしているかも知れないがもつと先のことも考えて動けといつているんだ戦場はお前の遊び場じゃないんだよ！」

「なつ！遊び場つて俺はいつも真剣だ！」と反論するが「だつたら何故自分の持つてる力に気付かない！自分で勝手な判断をするな！力を持つ物ならその力を自覚しろ！」とシユウはシンの言う事を一蹴して怒鳴った。

流石のシンも言い返せずに攻撃を仕掛けてくるので「言葉で負けたら次は暴力で黙らせるか…野蛮だな。恥を知つて欲しいもんだ……」

リミッター解除1分30秒」と呟き

シュウはサーベルビームサイズを展開してインパルスの四肢を切り落とした。

「やれやれ、パイロットの腕がこんなんじや隊長も困るもんだな」と呆れて言い放っていた。

「シン！よくもシンを！」と言つてセイバーが突っ込んでくるが、「だからあの人達の邪魔はさせないって言つてるでしょう？」と言つてホープが斬艦刀でセイバーの両足を切り裂いていた。

「戦場で冷静さを失うなんて貴方らしくないです。ザフトに復帰したアスラン・ザラさん？」とシラコキが嫌味つたらしくそう言い放つていた。

「インパルスのパイロット覚えておけ、お前の場合力をただ使うんじゃない何の為にその力を振るのか考える」と言つてシュウは「テスペアを浮上させジャンク艦の有る方向へと機体を走らせた

「待て！」と後ろから叫び声が聞こえているが、今のミネルバのグループ達に興味を失った用にシュウとシラコキはその場を後にした。

抹茶「さて、今日は此処までとさせて頂きます」

シユウ「少し疑問があるんだが…」

抹茶「はい、何でしようか？」

シユウ「何で海中戦でリミッター解除使わなかつたんだ？」

シラコキ「ですよね。それを使つたらもっと楽に勝てたはずなのに」

抹茶「ああそれはですね。海中での水の抵抗率も含めると一般の機体の全力で走つた時とあんまし変わらない気がするので全体のリミッター解除は使いませんでした」

シユウ「でも腕の方のコモリッターは使つたよな？」

シラコキ「これに付いても説明宜しくお願ひします」

抹茶「此れはだな、力を一箇所に集めてるから高速で動けるんだ。普段のリミッター解除は力を分散させて全体に行き渡らせてるけど一箇所に集めると完全にその部分だけ目で追いつけない速度で動かす事が出来るんだよ」

シユウ「成る程な。後一つは主はシンガキライだろ？？」

抹茶「ええ大キレイです。ウズミがどれだけ悩んで選んだ選択肢かも全然判つて無いしスコーンだし、ステラ死んだらルナマリアに移

り変わるわで凄く苦手です

シリコキ「でも最後の「トキラさんも同じですよね?」

抹茶「キラは良いんだよ!俺が個人的に好きだからスルー」

シユウ「この作者無茶苦茶だ。まあ良いか。それよりも今回も感想
来たんだろ?」

抹茶「ええマサトさん」感想有り難う御座ります

シリコキ「さて後書きも此処までですね」

シリコキ・抹茶・シユウ「さてシリコキ(俺)とシリコキ(私)はどうなるのか?次回お楽しみに!」

「意見・「感想ありましたらアドンアドン書いて下せ」
あと誤字脱字など也有りましたら注意してくれれば直します
またヘlideで何か有りましたら言って下さい」

抹茶「はいフェイズ37を完成させました」

シユウ「そうか、テスト大丈夫なのか？」

シラコキ「落としても私達のせいにしないで下さいよ？」

抹茶「大丈夫です。そんな酷い事は絶対にする気は無いです」

シユウ「そうか、今回まだんな話に成るんだ？」

抹茶「ああ、それならシユウ達の持つてるMS四機でガルナハン基地攻略です」

シラコキ「ついに私達もチートパイロットに属しちゃうんですね」

抹茶「いやいや、前大戦生き残れた奴は殆どエースパイロットの要素があるからな？」

シユウ「そりなんだな。じゃあそろそろ本編に入るか」

シユウ・抹茶・シラコキ「それでは本編をお楽しみ下せー！」

「しかしアンタも余程物好きだねえ？こんな所にまで豆を買いに来るなんてさ」と豆を売つてくれたおっちゃんがそういった。

「いや、俺はコーヒー好きだからさ、それに俺は今的情勢には興味は無いわ」とシユウはコーヒー豆の香りを楽しんでいた。

「ハハツ、アンタみたいな旅人だつたら、こんな重圧を受けなくて済むんだけどな」とおっちゃんは苦笑しながらそう言つていた。

「ん？如何言つことだ。まるで誰かから重圧受けてるような言い方だね？」とシユウはおっちゃんの悩みが疑問に成つた。

「今このガルナハンは連合の情勢下だ。前なんかザフトが攻めて来た時にこつちも暴動を起こしたんだけどザフトは負けて暴動を起していった人間は全員処罰されたよ」と悲しい顔をしていた

「そうなのか、連合の人間は全く持つて酷い人が居るもんだな」とシユウは人事の言つようによつておいた

「そうだな、兄ちゃんも死にたくなかつたらさつさといの町を離れたほうが良いぞ。たまに連合が…」と話している間に

バン！という入り口のドアが蹴破られる音が聞こえた。

「おう主人 見回りだ。何か隠し事してねえだろ？」「と2人ほど連合の兵士が入つてくる

「い…いえ、何もしておりません。それよりもコーヒーでも如何ですか？」とおずおずとコーヒーを出していた。

「ん? 何だお前此処の人間じゃないな?」ともう一人が聞いてくる

「そうですね。自分は旅をやつてゐるんです。それでたまたまこの街に辿り着いただけです」とシユウは驢をついておく

「わうか、まあ良い。ゆつぐりしていけよ」とニヤニヤと嫌味つたらしくそう言い放つてくる。

(ふん、どうせ逃げたら撃ち殺すとかそつ言つ事考えてるんだろうが)とシユウは内心毒を吐いていた

「取り敢えず以前のように他の奴と同様に死にたくなかつたら大人しくしどけよ?」と最後にキツイ一言だけ言つて店から出て行つた。

「やれやれ、あいつ等が来るたんびに俺らは『氣疲れするよ』とおっちゃんは嫌がつていいようだ

「そつか、そろそろこの重圧から解き放たれたいかい?」とシユウは確認を取つた。

「そうだね。どうせなら連合にも復讐をしたいもんだよ、でもアンタは何が出来るのかい?」と聞いてきた

「出来るもん……アイスピック」と最後に咳いて右手の人差し指で机を三回叩いた。

「…アンタだつたのが先程のメールは嘘だと思っていたんだけどな」とおっちゃんは驚愕していたがすぐさま表情が真剣になつていた。

「ああ、流石に連合の横暴は許せないが相手側の情報が判らない限り対策は一切練れないからな」と言って以前頼んでおいた情報の提示を頼んだ

「判つた、こつちまで付いて来い」と言つて店を閉店にして奥の部屋を指差していた。

そうして中に入つて基地の形・武装・MS・戦術・地形等を書かれた紙を机の上へと纏めて置かれた。シユウはそれを確認する為に手に取り頭に暗記しようと思つたが

「別に暗記はしなくて良いぞ?」データを渡してやるからさ」と言ってデータの吸出しが済んでいた。そして此方にHロを渡された。

「悪いな、手伝つてもらつてさ。でも安心してくれこの作戦は、絶対に成功させる」とシユウは改めて決意を決めていた。

「ああ、頼んだぞ。何人かはザフトにデータを譲渡する事を決めていたが正直以前失敗してから信用出来ない奴が多く居るんだ」とおっちゃんは心の内を話していた

「それに比べてあなたは信用できる。データを転送させられた時は目を疑つちまうが、あの実力を見ちまえばアンタの方に渡したくなる」とおっちゃんはデータを改めて映し出していた。

そうシユウが渡したデータはデスペア・ホープの機体性能・武器・

戦闘の映像等を見せておいた。その中で全員が興味を出したのがツインバスター・ライフルだ。

あれは事実シユミレーターでもローエングリングゲートのショルターを貫く予想が出て来てしまつたので有る意味2機でガルナハン基地は攻略可能な事に成るのだ。

だが以前の戦闘で油断は、もうしないと決めて居たのだ。故に今回出す機体はジヤンク艦に有る物全てを出すつもりで居るのだ。

「それでそつちも言つてた物を用意しておいてくれたんだよな？」と改めて確認を取つてくる。

「ああ当然に決まつてるだろ。何処に持つて来れば良いんだ？手持ちだとばれるぞ？」とシユウは改めてバギーを何処に置くか聞いておいた。

「裏の駐車場を使え、其処ならばれる危険性は無い」と言つたのでシユウは再び店外に出てバギーを店の裏に停めた。

そして裏のトランクを開けブルーシートを取り除いた。そこには大量の銃器が乱雑に置かれていた。

そう今回シユウ達が攻めている間に兵士か居ない基地をレジスタンスにも協力してもらう事にしたのだ。

多少の犠牲は目を瞑らないといけない事をシユウは悔しくも思いつつも町を開放されるなら必要な犠牲と割り切らなければ駄目なのだ。

そして今回シユウが出来た事はMSを動かすことと強力な銃器を用意する事だけなのだ。

そして今回持つてきた銃器はAK-47・U.S.P.・45・M1-U.N.I.・W2000・RPG-7の4つの銃器を用意しておいたのだ。正直裏の武器商人を経由して買つたせいで金は多く飛んだが、銃器は最高の物を用意したのだから死ぬ人間も少なくて済むはずだろつ。

「良くこんなにも用意できたな。予想より多いから驚きだな」とおっちゃんも驚いていた。

「そんな事は如何でも良いそちらが用意した町人に殆ど行き渡るのか？」ヒシュウは表情を堅くしてそう聞いといた。

「ああ此れだけ有れば一人二つ位は持てるだろつ。しかし此れだけの物を良いのか？」

「良いさ、俺は救つて言つて居るのに結局は民間人にも戦う事を頼んでいる。それで犠牲が出るんだから俺は酷い人間さ」

「兄ちゃんが気にする事じやないぞ、これは俺らの総意さ。この町が守れるなら少しの犠牲位は我慢すれば良いんだよ」とおっちゃんは気にする事無く笑つていた。

「判つた。ただ死なないでくれ、こつちも直ぐに終わらせてそつちに行くからさ」とヒシュウはバギーに飛び乗りエンジンを掛けた。

「おう、兄ちゃんも頑張れよ」お互に会話を済ませてヒシュウは指定した位置に向かつてバギーを走らせた。

そこにはキマイラが存在し、キマイラに乗り移りバギーを回収して

ジャンク艦へと飛び出した。

「おかえりなさいショウさん。」ヒラキは既に準備を終わらせましたよ」とシラコキも今回はどれだけ重要な仕事か判つてゐるのか既に表情は真剣でいた。

「ああ助かったよ。デスペアにはツインバスター・ライフル ホープには6連装ガトリングを用意してくれて助かったよ」とショウはシラコキに感謝し一つのプログラムを用意した。

「シユウさんそれなんですか？今まで見た事有りませんけど？」とシラコキもこのプログラムは判らないようだ。

「今までのホープとデスペアの戦闘データだ。あと以前俺らが戦つた事覚えているか？」とシラコキに聞いてみた

「ええ、以前ホープ対デスペアとキマイラ対エンジェルの本氣の対決しましたけど其れがどうかしたんですか？」とシラコキは此れだけ話しても未だに理解できていようだ

「俺らの本氣の状態でキマイラとエンジェルを高性能AIに積むんだ。つまり俺らの行動や考へてる攻撃方法を全く同じ様に考へて何十万とも言えるパターンを生み出して動くシリミッター解除もパイロットが乗つてないからある意味俺らより厄介かも知れん」とショウ自体も敵に回つた時落せるかどうか疑問に成つてしまつた。

「そうですか、ある意味エゲツナイですね。それよりも敵が本当に可哀想に思えてきました。今まで難攻不落とも言われたガルナハン基地がたつた4機のMSに落ちるんですから」とシラコキも苦笑しながらもそう言つてゐる。

「今日は手を抜かない。邪魔をするならザフトですら容赦はしない」と言いながらシュウはデスペアに乗り込み始めた。

そして4機のMSが空中へと飛び出していった。そしてこの後連合に깃つては、忘れられない悪夢としてこの戦いは、語られる事にも成ってしまった。

「シュウさん連合のレーダーから捕らわれない場所にまで上昇しました」とシラユキが通信で教えられた。

「判った。シラユキには悪いが囮に成ってくれるか?一応護衛の為にキマイラとエンジェルを僚機にするから確実に安全だが」とシュウはシラユキにそう頼んだ

「判りました。ツインバスター・ライフルのチャージに感ずかれるのはマズイですからね。それに一機が僚機に着くんでしたら私だけでも蹴りが着きそうですがね」と苦笑しつつも地上に向かつて降下して行つた。

そして相手方も此方の存在に要約気がついたのかけたたましくサイレンを鳴らしMS隊を発進させて行く。数分後自分達の周りにMSが多く揃つていたがシラユキはそんな事すら眼中には無かつた。

「あの人を…あの人をよくも悲しませてくれましたね?貴方達全員

は殺します」とシラユキは久々にマジで怒っていた。

そうシユウが帰つて来た時にシユウは無理して笑つていたが、ホントは凄く辛そうだった。それこそ直ぐに壊れてしまいそうな位悲しそうな顔を浮かべていた。シラユキはその痛みを分かち合つ事が出来ずシユウ一人だけが持つていた事にショックだったのだ。

故に彼女はその様な表情を浮かべる原因である連合にホントの殺意を覚えてしまった。そう彼には悲しい顔など似合わない、常に笑つていて欲しいと彼女は願つているのだ。

だが向こうは此方を完全になめきつているのか、ウインダム20機程度しか存在しなかつた。大半の人が見れば驚愕的な数だがシユウとシラユキ多分だがアスランとキラにとつては肩慣らし程度の数でしかないだろう。

（後ろの一機を見ても此方の正体に気付かないと言つ事は指揮官は余程の馬鹿ですかね？）とシラユキはついつい思つてしまった。

既に後ろの一機の姿を隠す事無く機体を現しているので知つている人は知つているのだが知らない人は余程知らないらしい。

「さあ、始めましょう。一方的な殺戮劇を」^{さつりくげき}とシラユキは呟いてウインダムたちへと襲い掛かつていった。

／アスラン・ザラ SIDER／

俺達はガルナハン基地を攻める為に現地レジスタンスの協力者ミス・コニールに廃棄坑道の地図を貰つてシンに通るよう指示をしようと思つて居たのだが……。

「た・・・大変です艦長！ガルナハン基地が攻撃されています！」
とバートがオペレーションルームへと駆け込んできていた。

その瞬間オペレーションルームがざわめきが起きてしまった。

「何ですって？何処の部隊が戦っているの？」とグラディス艦長も
その軍の正氣を疑っていたのだろう。

（何でこんな時に？ローハングリングエートと大型MAが存在してい
るんだぞ死に行くような物じゃないのか？）とアスランすら疑問
に成っていたが

「そ・・・それが何処の軍でも無いんです」とバートが恐る恐る口
を開いた。

「じゃあ何処がある拠点に攻撃したって言うんだ！あそこは難攻不
落だぞ！あれを落すんだつたら英雄が何人も必要になるだろうが！」
とアーサーまでもがそう言つた

「それが、戦ってる機体が三機で、その三機の内の二機がキマイラ
とエンジェルのデータを表しているんですね」

「何ですって？彼等二人がガルナハン基地を落そつて言つたの？無
謀すぎるわ」とグラディス艦長は馬鹿にしていたが

「バートさんもう一機は何か確認できましたか？」とアスランは悪
い予感が的中しないようにそう聞いたが

「それが、以前此方に対して敵対行動をしていた、白いMSまで動
いているんです」と悪い予感が見事に的中してしまった。

（まさかだと思つがあの一機は、シリコキヒシュウの専用機なのか？だったら説得して話せば何とか味方に着けるか？）とアスランは色々とあの一人を味方に着ける方法を画策していた。

「艦長、此方で先に偵察を行つてきます」とアスランは珍しく一人で行動を開始しようと決めた。

「判つた。仮にも貴方もフェイスの一員だから私には停める権利も無いわ」とグラディス艦長からも許可が下りた。

そしてアスランはすぐさまハンガーへと向かい自分の愛機セイバーに乗り込み発進した。

すぐさま現状を確認する為にMA形態で戦場に向かつたが、余りに悲惨な光景が目に映つた。

そう既に同等の戦い等をやつてゐると言つ生温い話では済んでいかつた。今やつてゐるのは動きは見えないが時々軽く減速しているキマイラとエンジェルそして白いMSが一方的な殺戮を行つてゐただけでしかなかつた。

それ故に恐ろしさから一瞬でも動きを止めた瞬間一度と生きては帰れないだろう。そして今ほんの数秒位しか止まつていなかつたウインダムがエンジェルのガンソードによつてコックピットを貫かれた。

アスランも一瞬で理解した。今は氣付かれては居ないが此処に居るのは危険だと…。仮にも彼もエースパイロットだが、あの三機には氣付かれたら落とされるだらう。

「あれ相手にジャステイスでも勝てるか疑問に成つてくるな…」とアスランは一抹の不安を覚えながらもその場を後にした。

（SIDE END）

「弱い…弱すぎます！」この程度を今まで落とせなかつたんですかザフト軍は！？」とシラコキはザフト軍の弱さに呆れ返つてしまつた。

今までの戦闘は余り本氣を出さず3～6割程度の力しかしてないのに本気を出したら此処までだ。正直期待外れも良い所だつたが、機体のアラートが鳴り始めた。

「よつやくチャージが終わつたんですね。全機この場から避難です！」とA.I.に命令を下してシラコキ・エンジエル・キマイラは戦闘領域から離れた。

次の瞬間一筋のビーム砲がガルナハン基地を撃ち貫いた。そう彼が狙つたのは、連合の自身の塊であつたローエングリンゲートだつた。そしてシユウの予測通りツインバスター・ライフルはシェルターを貫きロー・エングリンへと直撃した。

直後シユウの乗るデスペアは此方に興味等無いよつてこの戦闘領域から離れ町の有る方向へ機体を飛ばせていた。

シラコキはそれを止める事無くただ見送る事だけおこなつて後の始末を開始する事にした。そう最後の連合の抵抗とでも言つよつて、まだ残していたワインダム十機グルズガー一機が戦場へと飛び出してきた。

「さてと、正直ザフトの方にプレゼントしてあげても良いんですが、このMS達が町人を襲つたら危ないので此処で落としておきますか」と言つてビームサーベルを一本抜き集団へと襲い掛かつた。

当然ウイングダム達も反撃しようつとそれぞれ得物を出してくる

「行きなさいファンネル！」と此れも一個展開する事が可能になつていた。そして援護射撃のキマイラからの76mm重突撃銃の連射が来る。

だが此れはあくまで牽制用でしかなく当てる気等一切無いのだ。それでも判断できないパイロット達は回避を専念しその間にエンジェルとホープが確実に一機ずつ切り落としていく。

そして一機のウイングダムがキマイラにサーベルで切りかかるうとするがファンネルが攻撃しようとする腕を貫きもう一つのファンネルがコックピットを貫いた。敢えてシラコキは自分の方にファンネルは置かずにキマイラの方に置いたのだ。キマイラには援護を優先して貰いたいので邪魔な物は此方で対処しているのだ。

「残りはゲルズゲーを含めてもたつたのハ機ですか。シユウさんにして置いて行かれない様此処で一気に終わらせますか：リミッター解除3分」と言つて残りのMSに迫つて行つた。

その移動中敵パイロットでもギリギリ確認できるのはサーベルが発しているピンク色の光だけだらう。

そして気づいた時には既に一機のウイングダムがサーベルによつてコックピットが貫かれていた。それを落とす為に他の機体がライフルで集中砲火を浴びせようとするが、それすらも意味を成さないのか、

直撃を受けていたのは壊されたウインダムだけしかおりず既に白い機体は、もう一機を真つ二つにしていた。

全員が白い機体に集中していた時に、また2機のウインダムが壊されていた。そうキマイラとエンジェルがお互いの得物を持つて叩き落して居たのだ。

しかもその一機に背後を取られ正面には白い機体が存在している。まさに前門の虎後門の狼の状態だ。

あまりの部隊の壊滅速度に残ったMSのパイロット達は動搖を隠せず一人また一人と抵抗も空しく落とされていった。

故に気づいた時には、ゲルズゲー一機だけがポツンと残り司令部は、レジスタンスによって壊滅状態に追い込まれていた。

「やれやれ、やはりこの程度でしたか、ザフトも所詮口だけですかね？」とシラコキもザフトの対応の遅さには呆れを隠しきれて居なかつた。

（どうせ、この戦いも一部改ざんされてザフトのMSがやっていると言つ事に成るんでしょうけど、もう戦闘の所を誤魔化せられるか見物ですね）と一人思っていたところを機体のアラートが鳴り響いた。

だがシラコキは対応せずにエンジェルとキマイラがホープの前に現れて攻撃を止めた。

「ザフトの挨拶の仕方は攻撃でするんですか？だったら初めて知りましたよ」と機体を振り向かせそう言つておいた。目の前にはミネ

ルバとレセップス級・ピートリー級 MS隊が並んでいた

だが今はシラコキも戦つ気は無いので「それでは、私達の用は済んでいるので失礼させて頂きます。再び会いましょうノロマなザフト軍さん」と言つて3機は戦闘空域から飛び去つていった。

「シユウさん聞こえますか? ザフト軍が到着しました。私達の出来ることは此処までですから退きましょう」とシユウの端末に話しかけていた

「判つた。途中で合流してわざと退くわ」と短く答えられ端末を切つた。まあこの対応は正しいだろ? ミネルバに会話を聞かれたら無駄だと思うが正体がばれると厄介なので簡単な会話で済ませたのだ。

そしてシラコキとシユウは僅かの満足感だけを残して戦地をあとにして行つた。

PHASE 37（後書き）

シラコキ「今回も終わり方微妙ですね」

抹茶「すいません、話を切る方法自分全く下手なんです」

シユウ「一体何時に成つたら主はマトモな小説家に成るんだよ?..」

抹茶「小説家に成る気は有りません。自分が書いている理由は、人気は出なくても良いけど自己満足の様に好きに書いてるだけです」

シユウ「一歩間違えたら問題発言にも聞こえるが、自分が満足出来ればそれで良いのか?」

抹茶「多分そうかも知れませんね。書き終わったときの満足感が毎回楽しいので何を言われても書き続けるのだけは辞めません」

シラコキ「そうですか、頑張つてください。それより今回も感想が一件来たんですね?」

抹茶「そりですね。マサトさん有り難う御座いました」

シユウ「さて、今回はもう後書きを閉めるのか?」

抹茶「ええ、今回は残念ながらネタが其処まで無いんです」

シラコキ「そうなんですか、頑張つてネタを考えてください」

シラコキ・抹茶・シユウ「さてシユウ（俺）とシラコキ（私）はど

うなるのか？次回お楽しみに！』

『ご意見・『』感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～SODEで何か有りましたら言つて下さい

抹茶「今日は拠点編に成ります」

シユウ「ぐる今回は一切戦闘が無いんだな」

シラコキ「あれで今回などんな話に成るんですか?」

抹茶「えつ? もう? それは本編を読んでからのお楽しみで」

シユウ「え? もう? 今回も同じ辛やつだな?」

シラコキ「どうせ変な事でもやつかけられたんでしょ?」

抹茶「シラコキさんとの言葉をつと後悔すると思こますよ?」

シユウ「シラコキに変な事した? テスペアのツインバスター・ライフルをプレゼントする?」

抹茶「」めんなさい。勘弁してください」

シラコキ「訳が判りませんが、本編入りまじょ?」

シラコキ・抹茶・シユウ「それでは本編をお楽しみトセー!」

「ティオキアか初めて来たが、オープとそう変わらない美しさがあるもんだな。そう思わないかシラコキ」と隣で一緒に車に乗ついたシラコキにそう聞いといた。

「そうですね。しかし此れが見回りじゃなくて、データだつたらどんだけ良かつた事やら」と何か後ろでブツブツと愚痴を呟いていたが

「見回りでも次の戦場を把握しないと此方が不利に成る危険性もあるんだぞ、さつさとする事する」ヒシュウは戦場の写真をどんどん撮つていた。

他の人から見ていればただの風景好きの観光者にしか見えないだろうが、彼らは次の戦場の使えるポイントを考えて居たのだ。だがシラコキはそんな事を露知らず着いていつてこうなつてしまつたのでテンションがガタ落ちだつたのだ。

「はあ、シュウさん何時も私の事をバトルマニアと思つてる様ですが、私からすれば貴方の方が充分バトルマニアに見えますよ」とシユウもシラコキの愚痴がどんどん酷くなつてゐる事に救済策を思つてしまつた

「判つた判つた 何時も此方の用事に着き合つて貰つてゐるんだから、あとで幾らでも買い物やカフェに連れて行つてあげるよ」とシユウと氣楽に言つてしまつたが、後で後悔してしまつた。

「ホントですか!? 約束ですかね!」とやけに食いついてくる。
彼女もこの街は楽しみだったのだろう

（シラユキも何か探し物でもしてゐるのか？それだつたら悪かつたな。幾らでも手伝つてやるか）と苦笑しながら思つてしまつた。全く何時まで経つても彼は鈍感でしかなかつた。

そして彼らは予定していた時間より速めに終わつてしまつた。大抵の理由はシラユキが急にやる氣を出して速攻で終わらせてしまつたからであつた。

多少街の熱氣で気分が乗つてしまつたシユウは「さてどうまで送りましようかお嬢様」と調子に乗つて言つてしまつた。

「お…お嬢様！？わ…私がお嬢様…。それではシユウ適当にアクセサリー・ショップまで乗せて行つて下さい」とシラユキも顔を赤くしながら調子に乗つたようだつた。

「はいはい、判りました。それでは参りましょ」と言つてシユウは青のスポーツカーにエンジンを掛け発進させた。

普段は軍用に近いバギーを使って居たのだが流石に正体を怪しまれる上に折角綺麗な町に居るので新しい車を購入したのだ。ちなみに即決で小切手で購入したので店側からお偉い様と勘違いされ掛けてしまつたのだ。

しかも車の生産場所を確認してみればオープ産と書かれていたので、シユウは（オープは色んな所に手を出しているんだな）と一人納得していた。

それよりも車を走らせている間何か声が聞こえて來た。

くそしてティオキアのみなさん！一日も速く戦争が終わるよう、

わたくしも、切に願つてやみませえーん♪そう言つてファンスに群がつていたティオキアの人達が歓声を上げていた。

「その日の為に、皆で此れからも頑張つていきましょーうー♪とシユウとシラコキは何時の間にか車を止めてげんなりしていた。

「何なんだあれ？」とシユウは思わず言つてしまつた。

「あつ、あはは　あれでバレテナイつて未だに凄いですよね」とシラコキですら顔引き攣らせて笑つていた。

流石に一瞬だけ考え事をした後、「一日も速く戦争が終わるよう願つているつて言つけど結局は、ザフトは何もして無いじやん」と毒舌を思いつきりしてしまつた。

「そうですね。今まで戦つてきているのは私達であつてザフトじゃないのに」とシラコキも多少の怒りが籠つていた。

そしてこの前のガルナハン基地での戦場ではシラコキのホープに攻撃しておいた映像だけを消失させ『閃光の殺戮者』『断罪の天使』の異名を持つ両名が一時的な協力によりガルナハン基地攻略などと嘘を吐かれてしまつたのだ。

「ふう、取り敢えず買い物如何する?」とシラコキに聞いてみた。正直自分の中では結構しらけて来ていた。

「この事を忘れるために速く何処か適当に行きましょう」と言われ、車を発進させた。そしてシユウは遠くに与る海を眺めながら考え事をしていた。

(平和のため…か 全員田指す物は一緒でありながら争うなんてアホらしいな。それにこの戦争は、勝つてもそいつ等が正しいなんて事は無い。戦争を終わらせた後に如何するのかを考えるのも大切なよな)とシユウは、未だに見えないこの先の未来について考えていた。

「あつ、シユウさん。この先にアクセサリーショップあるので其処に行きましょう」と指示を出されたので意識を運転に戻しアクセサリーショップを目指した。

「しかし、シラコキも何時もそのアクセサリー着けてるよな? そろそろ新しい物にしたら如何なんだ?」と以前バナディーヤでプレゼントしたラピスラズリのアクセサリーを未だに着けて居たのだ。それにシラユキは気に入っているようだが、宝石には既に汚れも着いていて気に成る点が多くった。

「良いんですよ此れで。私からすればシユウさんに貰つた物は宝物ですから」とシラコキはラピスラズリに目を向けて微笑んでいた。

「そうか、でも無理しなくて良いからな? 欲しい物が有るんだつたら幾らでも言ってくれよ」

そうしてシユウとシラコキは目的のアクセサリーショップに辿り着き中へと入つて行つた。其処にはいかにも男性が入り辛く、見るからに他の男性は隣の女性と手を組んでるのでカップルと予測出来た。

だがシユウは其処まで気が回らずにショーケースに入つているリンクやアクセサリーに目が行つていた。

（もうっ、ショウさんは何で気付かないんですかねー）とシラコキは久々にショウの鈍感さを呪つてしまつた。

そうしてショウは何故か急に身震いを感じ辺りを見回した。其処にはやけに二口二口したシラコキを見て恐怖を感じてしまった。

（な・・・なんでシラコキあんなに怒つてるんだ？俺行くところ間違つたか？）と怒つてゐる理由に見当がつかずその場に居る恐怖の対象に震えながら目をショーケースへと向けて時間を潰していた

～1時間後～

ショウとシラコキはお互に欲しい物が見付かつたので購入していった。

シラコキはピンク色の貝殻が乗つた新しい髪留めをショウは十字架と盾の中に剣が描かれている首に掛けるアクセサリーを購入していました。

「お互に買つ物買いましたじご飯でも食べに行きましょうか」とシラコキが言つてショウも着いて出ようとした時有る物がショーケースが目に映つた。

シラコキは自分が着いて来ていると勘違いをしてもう店外に出でいるが、ショウはペアルックに成つてゐるハート型に彫られたピンク色の宝石の着いたリングに目を離せなかつた。

（そう言えばシラコキとパートナー組んでからマトモに何もプレゼントしてなかつたな。：ハア、そう思うと俺も結構酷い人間かもな）

流石のシラコキも着いて来ていない事に少し怒りを表していたが、ちゃんと自分を待つていてくれた事にシユウは嬉しさを感じていた。

「シユウさん！何してたんですか！？」と流石にお怒りのようだったが

「悪い悪い ある物買つてたら意外に時間が掛かつちゃつてさ」と軽く謝罪しながら購入したペアルックのリングをシラコキの右手の人差し指に着けてあげた。

「ふえ！？何ですか此れ？」とシラコキは、着けられたリングを見て少々戸惑っていた

「いやあ、遅れちゃつたけどパートナーに成つてから2年くらい経つて今更遅いけど有難うな。それと此れからも宜しく」と言ってシユウも自分の右手の人差し指に同じ物を着けて太陽の方に手をかざして指輪を眺めていた。

「よし、それじゃあ飯でも食いに行くか」と言つてシラコキの方に向いたら……泣いていた。

「えつー…シ…シラコキ何で泣いてるんだ？怪我でもしたのか？」とシユウは突然の事態に少し動搖してしまった。

「いえっ…グスッ…違うんです。ただ余りにも嬉しすぎて グスツ涙が止まらないんです」とビビりやら嬉し涙のようだった。

「そうか、ただこう言う時如何すれば良いのか判んないけど、止まるまで幾らでも流して良いよ」と言つてシユウもガチガチだがシラ

コキが涙を止めるまで胸を貸していた。

そして泣き終わるとシラコキが決意を決めたよつこ「シユウさん…少しお話したい事が有るんで海辺の方に行きませんか?」と聞いてくる

「ん? 飯は「今はそんな事より話がしたいんですね」…判つた」とやけに真剣なのでシユウも大人しく従つた。

そして言われた通り海辺へと行きシラコキが砂浜をゆっくりと歩き始めた。シユウは流石に訳が判らずにただ着いて行く事しか出来なかつた。

「私今まで何してたんでしょうね? シユウさんと今まで一緒に居たのに、ずっと戦鬪とかでホントの私の気持ちを見てなかつた」とシラコキが急にそんな事を言い出した。

「ホントの気持ちって何だよ? 何か決心でも着いたのか?」ヒシユウは未だに何の事が判らなかつた。

「あんまし茶化さないで下さいよ。乙女心は纖細なんですから

「ふうーん、でも俺女性に成った事無いから良く判らないや」とシユウは頬を搔きながら苦笑してしまつた。

「だから私のホントの気持ちは…‥‥」と言つてシユウの唇に柔らかい何かが触ってきた。

「ひづ言つ事です! シユウさん私は貴方の事が好きです!..」とシラコキは顔を赤くして言つて来ているが

シユウはそれ所じやなかつた。彼は今自分の身に何が起きたか必死に理解する事で精一杯だつた。

（キスされたのか俺は？……シラコキに？あれ？でもシラコキの好きな人って他の奴じやないのか？）とシユウはグルグルと同じ事を考えていた。

「えーとシユウさん？大丈夫ですか？」と何時まで経つても反応しないシユウにシラコキが心配し始めた。

「えーと、『冗談じゃないよな？』」とシユウは改めて確認を取つてしまつた

「じょ・・・『冗談つて、私は至つて真面目です！貴方が考へているのは多分『joke』でしあけど私の場合『love』です！勘違いしないで下さい』」とシラコキは凄く必死に話していた。

「ああ・・・うん、ちょっとどじめん少し理解に追いつかないから、説明して貰つて良いか？」とシユウは頭を悩ませてしまつた。

「何がですか？」とシラコキは何を説明すれば良いか疑問な事に成つていた

「えーと何時から俺の事好きに成つてたんだ？」とシユウは説明を頼んだ。

「最初はカツコイイ人だなつて思つてたんですけど、ホントに好きだなつて思つたのは前大戦でのヤキン・ドゥーエでシユウさんが私に別れを告げようとして一人死のうとしてた所で好きかな？って思

つてましたが?」とシラコキに教えられてショウは瞬く間に顔が赤くなっていた。

（あの時から!？でも今までの行動を振り返ってみると確かにシラコキに手を出されて凄く怒りを感じた事何度も有つたな…。もしかしてあれは、俺がシラコキの事好きだったから）と考えていくと合点が着いてきてしまった。

「それで如何なんですか?」とシラコキが改めて答えを聞いてくる

「あーその、俺は気の利いた言葉も言えないし相手の気持ちもたまに理解出来ない酷い奴かも知れないけど、シラコキ俺もお前のことが好きだ。付き合つてくれ」と言つてショウはシラコキにキスをした。

「はい、私も大好きです。何時までもショウさんと一緒に生きて居たいです」と顔を赤らめながらそう言つてくれた。

（ハハツ時間は掛かつちましたが、俺にも好きな人が出来るとはね。何時までもシラコキは俺が守り続けてやる）とショウは心の中で一番大切な物を守ると決意した。

例えそれがナチュラルとコーディネーターの両方から非難を受けてもだ。

そうしてショウは、今の最高の幸せを充分楽しんだ。

ショウ・シラコキ「――」

抹茶「いやーお一人ともおめでとひびきだいます」

ショウ「…………」

抹茶「えっ? 何々今日は恥かしいから作者だけで後書きを閉めて欲しい? 貸し一つですからね」

抹茶「はい、と言つわけで久々に一人で喋る事に成りましたね。…
酷く寂しいです」

抹茶「まあ今回はシラコキとショウの恋愛を出してみました。恋愛の所を書くのは初めてなんで下手なのは許してください」

抹茶「さて、今回は話し相手が居ないんで直ぐに後書きを閉めましょうかね」

抹茶「今回感想を下せつたマサトさん有難うござります。さて話す事が無いので速いですが此処で失礼させていただきます」

抹茶「さてショウとシラコキはどうなるのか? 次回お楽しみに!」

「ご意見・」)感想ありましたらドンドン言つて下さい

あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
またSHODEで何か有りましたら言つて下さい

PHASE39（前書き）

抹茶「はい、PHASE39完成させました」

シユウ「そうか、それよりもテスト期間は大丈夫なのか？」

シラコキ「ですよね。一ijつちに集中しそぎてテストを落とす無様な事をしないで下さいね？」

抹茶「ええ、判つてますよ。だから一度PHASE39で一旦止めます」

シユウ「そつか、何時テスト始まつて何時終わるんだ？」

抹茶「だいたい8月3日から8月10日までテストなんでその間は投稿できません」

シラコキ「そなんですか、読者の皆さんも待つてあげてくださいね」

抹茶「それはオレのセリフ。相変わらずの駄文な自分ですがテストが終わるまで待つてくれると有難いです」

シユウ「それじゃあ本編入るうか」

シユウ・抹茶・シラコキ「それでは本編をお楽しみください！」

「オープが派兵ねえ、やっぱりセイラン家にオープを任せるのは失敗かな」とシユウはタケミカヅチのカメラに写っていた映像を見てい切れてしまった。

「そうですね。映像から見てもトダカさんとアマギさんがウンザリした顔してますからね」とカグヤも二人の苦労を同情しているようだ。

「それにネオ・ロアノークに利用されてるって事に気付かないと、やっぱリアホだな。今度俺自らオープに向かってセイラン家という名の毒でも排除しようかな?」とシユウは至極真面目に言ってしまった。

「シユウさん、幾ら何でも殺すには、まだ早いですよ。カガリさんがオープに戻るまで生かして置いてあげましょう」と何気にシラコキの方が酷い事を言つてる気がして成らないシユウだった。

「まあ、そうだな。しかしオープの理念は今は既に無く、逆にオープが焼かれそうだな」とシユウは同じ国人間が死ぬ結末を見たくなかつた。

「その結末を出さない為にも私達も動くんですよシユウさん。まだ絶望するには早いですよ」

「そりか・・・そりだな。考えるより先に機体を動かした方が俺には合つてるかもな」

「そうですよ、まあ出ましょ。手段は酷いんですけど、オープの人達を助けに」

そう言って二人は会話を切り、何時もの戦場の様に集中力を上げ機体を始動させた。同時にキマイラとエンジェルがそれに反応し、機体が動き始めた。

そして先に出るようキマイラとエンジェルを先行させ、それに続くようにホープとテスペアの上のハッチが開き一機は空中へと飛び出して行った。

そう今回彼らの目的はダーダネルス海峡で行われるオープ軍と連合とミネルバの戦闘の軍事介入なのだが、大きく目的は二つに分けている。

そうまず一つ目は、オープ軍から出てくるMS M1アストレイとムラサメの戦闘力の無力化を決めている。此れはキマイラとエンジエルのAIにも命令しており、オープ軍認識を持つMSだけは戦闘能力を奪うように設定している。他の奴等は目標を着けられたらご愁傷様ということだ。

二つ目はハイネ・ヴェステンフルスの救出だ。此れは完全にシュウとシラユキの本当の目標なのだ。

今回出てくるグフはフリーダムが攻撃してしまって戦闘能力を奪つたせいでガイアによつてコックピットを切り裂かれ死んでしまったと言つ事。

だがそれを防ぐ為にもフリーダムの攻撃を防いでグフを生かすか、戦闘能力を奪われた所を死なない程度に大破を狙つてパイロットを救出させる一択があるのだが、正直言うと後者は後遺症を残してし

まう危険性も有るので前者の方が基本的に良いのだ。

だが戦場で一箇所に気を配つていてはシユウ自身も流れ弾で落とされる危険性が有るので救出出来るかどうかは、本当タイミングが掛かっているのだ。

「はあ、成功してくれると良いんだがな」とシユウは思わず愚痴を言つてしまつた。

だが「大丈夫ですよ。今まで成功しているんですから、今回も絶対上手くいくはずです」とシラユキが励ましてくれる。

「ははつ有難うなカグヤ励ましてくれてわ」とシユウは何時も気を使つてくれるパートナーに感謝した

「いえいえ、それよりも直ぐには直ぐ名前で呼ばれるのは慣れませんね」とカグヤは頬を赤く染めていた。

「頼むから慣れてくれ。何時も俺はカグヤに名前で呼ばれていたから気には成らんが、カグヤがそれが原因で落ちたら俺が悲しいわ」とシユウはカグヤが今回の戦場で落ちない事を心から祈つてしまつた。

「うう、判りました。頑張つて慣れますから、シユウさんも落ちないで下さいね?」と此方の心配もしてくる。

「ああ判つている。それじゃ戦闘領域だから通信終了」と言つて通信を強制的に切つてしまつた。

そうしてふやけた顔を元通りに戻し再び戦場へと意識を向けていた。其処にはタイミングが良かつたのか、タケミカヅチから多くのMSが出撃しており、ミネルバからもセイバー・インパルスが出てきたのが確認できた。

そうしてシュウはすぐさま出てきたアストレイ・ムラサメ・戦艦に対して連絡を送った。

「此方オーブ民間軍所属シユウ・K・ライトニングだ。オーブ軍こんな無益な戦いを辞めて撤退しろ！」とシユウは無駄だと判つても呼びかけていた。

「なつ、シユウ様ですか！？その機体は一体！？」と微かな同様とトダカが聞いてくる

「久しぶりだね、トダカさん。あと様付けは、辞めて下さいって前も言いましたよね？この機体については教えられないが出来れば軍を退いて欲しい」と民間軍でりながら正規軍に頼み込んだ。

「何でお前は？今の指揮官は僕だ。そつと何処かに行けよ！」とユウナが叫んでくるが

「黙れ小僧。死にたいならまずお前から殺してやろうか？」と言ってライフルをタケミカヅチに向かつて構える。それによつて通信越しに警報が鳴り響いた。

「お止め下さい、シユウ様！こんな青二才は死んでも良いですが、我々まで巻き込まないで頂きたい」とトダカも思わず本音が漏れていた。当然ろに居たアマギが少々慌てていた。

「冷静なトダカさんがこんな事言うなんて色々とストレス貯まつてるんですね」と流石のカグヤもトダカに同情していた。

そして何故か苦労を判つてもらえる人に会えて嬉しいのか目じりに涙が浮んでいたが、次の瞬間

「さつさとあの2機を殺れ！此れは命令だ！」と再びユウナが喚いていた。

「何を言つているのですかユウナ様！あのお一人も前大戦で戦争を止めてくださった英雄なんですよ！？」とアマギが怒鳴っていた。

「それは、こっちのセリフだ！ホントにあいつ等がオープの国民なら首長の僕に恥を搔かせる訳が無い！さつさとあの英雄の名を語つてる偽者を撃つんだよ！でなけりやこっちが連合に撃たれるオープも！攻撃開始！」と喚いていた。

「ミサイル照準…所属不明MS」と言つて警告音が今度は此方が鳴り響いた。

「トダカ一佐！」とアマギが止めようとするが

「止めなくて良い、すいませんねアマギさん嫌な役を押し付けてしまって」とシユウはトダカ一佐に謝つてしまつた。

「こちらこそ申し訳有りませんシユウ様・シラユキ様」と謝つて通信を切り此方に大量のミサイルを撃つてきた。

そして20機のM1アストレイ・ムラサメの銃口が一斉に此方に向いてしまつた。当然シユウとシラユキも大人しく遣られる気は無い。

「許してくれ同じ国民を傷付ける奴として罵つてくれても良い」と
シユウは下唇を噛みながらそう言つてMS群へと突っ込んだ。

当然ミサイルは此方の4機の速度の機動性に付いて来れず海面にそのまま直撃してしまった。

そしてシユウは『絶』とサーベルを抜きアストレイに斬りかかつた。当然シユウ自身も殺す氣は無く狙っていく所はバックパックのシユライクを切り裂く。

これによつて片方にしかないプロペラで不安定に飛ぶ事しか出来ず、戦闘不能に近い筈なのだが。

未だに攻撃しようとしたライフルを此方に向けてくるが、「許せ」とシユウはボソリと咳きライフルを持つてゐる腕を切り落とし、連激の様にサーベルで頭部を切り落とす。

此によつてM1アストレイの能力は完全に削がれ撤退していった。シユウは、其れを見てホッとしてしまった。

だが気を抜いたせいで後ろから警告音が鳴り響くが、キマイラのビームキャノンによつて両肩を撃ちぬかれもう一機のアストレイも戦闘不能と成った。

カグヤの方を確認するとフィン・ファンネルを一本だけ展開し、器用にムラサメのブースターだけを掠めさせ、海面へ不着陸させていた。

エンジェルの方を見れば片翼・ブースターだけをガンソードで切り

落とし完全に空を飛ぶ事すら許さないようだつた。

戦闘パターンはカグヤの方をメインにしているので「アソッ前大戦でどんな戦いしてたんだ?」と思わず気に成つてしまつた。

そう思いつつも、今度は脚に着けているスタンダガーを引き抜きムラサメへと投げつける。

当然効果を知らない相手側からすればタダのナイフだと思つたが、此れはスタン能力の他にシステムダウンを改めて着けたのだ。

故に2～3本機体に刺さつた瞬間プログラムはダウンしただの鉄の塊へと変貌してしまつたのだ。

相手側も此方の危険性を感じ取つたのかそれとも無謀な指揮官が命令したのか、一機ずつ此方を取り出し包囲の薄い場所に突つ込み始めた。

「その程度の包囲網幾らでも抜かれる!」と言つてビームサイズと小型サブマシンガンを取り出し包囲の薄い場所に突つ込み始めた。突つ込んでいる間に左手に持つてゐるサブマシンガンを連射撃乱し、近づいた瞬間にビームサイズの刃の幅を一気に広げ3～4機の腰の部分を一気に切り落とした。

だがその内の一機が動力部に斬り付けてしまつたのだろう、火を噴きながら海へと落ち爆破が起きてしまつた。

だが、殺した事が功をそつてしまつたのか、何機かが恐怖し戦線を離脱し始めた。

此によつて頃合いと見たシユウは、心苦しく思いつつも「オーブの軍人よ、これ以上無駄な抵抗を行うと言つならば先程のMSの様に叩き落すぞ!」と脅しを掛けた。

それによつて戦線は一気に崩壊し、オーブ軍のMS達は撤退し始めた。流石に多くのMSを投入しても無駄死にと考えれるキサカ一佐とトダカ一尉のお陰だろつ。

要約撤退を行つてくれた事にシユウは安堵をしてしまつたが、次の瞬間モニターから一つの映像が映し出された。そうそれは、一気に面倒なオーブを潰そつと考へたミネルバがタンホイザーをタケミカヅチへと向けていた。

そしてシユウは咄嗟にオーブ軍を守る為に、パンツァーシールドを構えミネルバの前へと立ち塞がつた。そのままタンホイザーは撃ち放たれシユウは絶対に後ろに有る大事なものを守る為にと両翼までも前に出し攻撃を受け止め始めた。

だが所詮戦艦の攻撃を単機で防げる訳も無く、まずパンツァーシールドがドロドロに成つて溶けていく。それでもシユウは防ぐ事を辞めず次は、両翼で自分の機体の全身を包み込んだ。

そして最後の盾とも言える羽が少しづつ溶け始め、限界だと思った次の瞬間ミネルバのタンホイザーに一筋のビームが降り注いだ。

それによつてタンホイザーが爆発を起こし、ミネルバは傾き始め海面へと突つ込んでいた。

シユウは一安心しながらもライフルを撃つた機体を改めて確認した。其処には以前オーブで確認したフリーダムとアーケンジエールが存

在していた。

それだけ確認するとシユウは、機体をふら付かせながら空中へと舞い上がるうとしたが、次の瞬間両翼から火が噴き海面へと沈んで行った。

「シユウさん！」と言つ自分で心配してくれるパートナーが機体を引き上がらせ、キマイラに肩を貸された。若干だがキマイラもAIでありながら此方を心配してくれる素振りをしていた。

「シユウさん、今のデスペアでの戦闘は危険です。下がつてください」と頼み込まれたが

「其れは出来ない。俺らの任務はまだ終わっていないだろ?」とシユウはタンホイザーの余波によって体が少し赤かつた。きっと体内に多くの熱を持っているのだろう。

シラコキはシユウの意思も汲み取りたかったが「ごめんなさいシユウさん。それでも私は貴方には死んで欲しくないんです」とだけ言つて

「全パーティ解放15秒間」と呴いてデスペアのコックピットへ膝蹴りを喰らわせた。

相手側からしたら仲間割れか?と多少の動搖を起こしてでしたが通信越しでは「カグヤお前…」とだけ言つて気絶していた。

「キマイラ後は頼みましたよ。シユウさんを安全な場所まで運んであげてください」とだけ言つてシラコキは改めて戦場を見回した。

そこにはストライクルージュも出ており、オープ軍を説得しようと無駄に終わっていたようだ。

そして第4者の介入によって連合もザフトもMSを惜しみなく出してきていた。

シラコキは、今回の任務を思い出しオレンジ色のグフとその相手をしているガイアに迫つていった。本来は、任務も関係しているのだが。

彼女は「よくもシユウさんをあんなにも傷付けてくれましたね?」と思いつきり私情が入つていた。

当然ガイアとグフが此方に警戒しようとするが「遅いですよ」とシラコキは『堅守』とサーベルを引き抜いてガイアとグフの間を通り抜けた。

当然一機は焦つてしまつたが何も起きていないと確認すると安堵していた。

「貴方達は何を安堵しているんですか?さつきのが本気だつたらもう落ちてますよ?」とシラコキが一機へと挑発を仕掛けた。

「「なつ!?」」と挑発をまんまと受けた一機は

「今回だけは共同戦線だ」「判つてる。アイツ撃つ!」と一機が協力するようだ。もし戦争じやなかつたら犬猿の仲でも知り合い程度には成つていたかも知れないだろう。

「お喋りせずにさつさと掛かってきたら如何なんですか?」とシラ

コキは完全に相手を舐めきった。

「ふんっ！言われなくともやつてやるよ！」とハイネがグフの機動性を生かし搅乱しようとするが

「遊んでないでさつさと攻撃するべきですね…リミッター解除30秒間」とシラコキは、最初からハイネの搅乱行動は遊びとしか受け取らず、『堅守』で左腕を切り落とした。

当然30秒なので直ぐに終わり、終わつた所を狙うように「そこだああ」とガイアがMA形態で此方を切り裂こうとサーベル翼を開するが

「大きな隙も見せてないのに大振りの攻撃は危険性しか残りませんよ？」と言つて左足でガイアを蹴り飛ばし追撃にサーベルで右前足を切り裂いておく。

すぐさまガイアはMS形態に戻つて浅瀬へと着地するが「厄介な機体から先に潰しに掛からせて貰います」と言つて『堅守』を戻し斬艦刀を引き抜いて両足を薙ぎ払つ。

MS形態に戻つてから数秒後の攻撃なので当然パイロットは反応出来ず、両足を無様に切り落とされた。

「IJの厄介な奴があ死ねよ！」とハイネが突つ込んでくるが

「何も警戒せずに突つ込むのは悪手ですよ」と言つて以前シラコキが遣られたように背中のバツクバツクをファンネルで打ち抜き、機体を海へと突つ込ませた。

「やれやれ特殊な機体を使つてゐるのにこの程度ですか、それとも私が強くなり過ぎたんでしょうかね？」とシラユキは歯応えが有ると思いつ機を同時に相手して居たのだが余りの実力の差にガッカリしてしまつた。

そうして彼女は目的を達するためにエンジエルを使ってグフをジャンク艦に運ぶ事を命令した。

だが次の瞬間シラユキは身の危険性を感じサーべルを展開し空中へと離ぎ払つた。そこにはサーべルを持って此方を攻撃しようとしたフリーダムが存在していた。

「なつー・キラ君何故！？」とシラユキ自体も混乱してしまつた。

「それはこっちのセリフだシラユキさん。こんな一方的な！」とキララが理由も知らず言ってくる

「だつたら大人しく殺されるとでも言つんですか貴方は！」とキラの無茶苦茶な言い分に怒りを感じた

「何も知らない人が此方の事に口を出さないで下さい！あなた達だつて手当たり次第に攻撃して…自分の遣つている事が正しいとでも思つてるんですか！」とシラユキはサーべルを振り払つて後方に下がりライフルを連射する。

だが攻撃が、当るはずも無くシラユキはライフルを捨ててもう一本サーべルを展開し再びフリーダムと切り合ひ事に成つた。

「それに私達は貴方達とは、違つて自分たちの出来る事を遣つて來ていたのに、貴方達は何も遣つていないので急に出てきて此方の遣

り方に口出ししないで下さじよー」とシラコキは苛立ちながらそう言い放つた。

元々シラコキは、行動しない人は好きではないのだ。こんな風に行き成り出てきて「戦争を辞める」と無茶苦茶な発言をし、拳句の果てには攻撃まで開始する。此れでは「自分たちは正しい事を行っている」と言われても全然説得力の欠片も納得する所も存在しないのだ。

そうしてシラコキは自分たちの任務の目的を達成するために今は目の前の敵を排除する事を完全に決めた。たとえ前大戦で仲間だったとは言えにこまでされて腹の立たない者等居ないだろう。

故に彼女は手を抜かない「リミッター解除3分」と呴き一気に勝負に出る事を決めた。

最初はリミッターを解除している事を勘付かせない為に普通に切り合いで行うがシラコキはある程度の攻撃でわざと問題無い程度に攻撃を掠めたりして慌てて背中を向けて撤退する素振りを見せた。

それを見逃すはずも無くフリーダムが追撃してくるが「此れで終わりです!」と言つてフリーダムの反対側に回り込み左腕を切り飛ばした。

本当は両腕を飛ばす予定だったのだが、如何やらパイロットの腕は鈍つてないようだった。

だがシラコキは本来の任務であるグフのパイロットの回収を目的としており今回収完了のメッセージが出てきたので素直に撤退する事を決めた。

「貴方達は、今遣つてる行為が正しいと思つてるんでしょうけど、ハッキリ言つて迷惑です。私達の遣る事の邪魔をしないで欲しいです」とだけ言い残してシラユキは戦場を後にして行つた。

正直相手側も何機か此方を追いたい様だがフリーダムの攻撃で戦闘能力を奪われたのでそれすら出来ないようだった。

シラユキは、フリーダムのそれだけを感謝し悠々と撤退して行つた。

抹茶「はい、今日はショウが一回休みですね
シラコキ「シユウさんの匂ない後書きに何の意味が有るんでしょうね
か?」

抹茶「酷いや、俺がいるじゃないか!」

シラコキ「ふざけないで下わー。作者とショウさん比較対照に成つ
てると思つてたんですか?」

抹茶「グフッ…つまりオレヒシユウは甲と乙っぽん位の差が有るの
ね」

シラコキ「やうですね。やう一えれば今回も感想來ていたようですが
?」

抹茶「ああ、はこマサトさん」感想有難い!」
れこました

シラコキ「それじゃあ今回も此れで終わりですかね?」

抹茶「ちょいタンマ 少しだけ自分が話したい事が…」

シラコキ「何か有るんですか?じゃあどうぞ」

抹茶「えつーと今回ガンダムUEEDを少しどは言えほりぱり出し
て待ちわびていた読者には申し訳有りません。言い訳がましいです
が、ネタが思いつかなくなり思わず他の小説を書いてました。一応

もう片方は、此方が完結するまで余り書かないと言つ事をさせていただきます。色々と身勝手で本当に申し訳有りません」

抹茶「さて今回ばかりだと謝罪も出来ましたし後書きは」の程度で
すね」

抹茶・シラコキ「さてショウとシラコキ（私）はどうなるのか？次
回お楽しみに！」

「意見・「感想ありましたらアソブン言つて下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～SHIDEで何か有りましたら言つて下さい

PHASE 40 (前書き)

抹茶「はい、投稿を再開します。お待たせしましたー。」

シユウ・シラコキ「「...?」

抹茶「ん? 如何したんだい」「一人とも驚いたやつてさ?」

シユウ「なあ… お前さんテスト如何したんだ?」

シラコキ「あ… まさか諦めたんですか? 最後まで頑張りなさいよー。」

抹茶「お前等結構失礼だな。テストの方だが、今まで10日まで有ると思ってたんだが予定表見たら俺9日で終わるしテスト勉強したからこいつして投稿しているんだ」

シユウ「そうなのか… でテストの方は如何だったんだ?」

シラコキ「まさか最悪とは言こませんよね?」

抹茶「まあ、結構な手応えを感じたから大丈夫だと思つぞ?」

シユウ「そつか、それじゃあ信じるよ」

シラコキ「それじゃあそろそろ本編に入りましょうか」

シラコキ・シユウ・抹茶「それでは本編をお楽しみ下をこー。」

ようやく戦闘が終了した私は、急いでシユウさんの容態を確認する為にジヤンク艦へと着艦して入った。だが其処に有つた光景はグフのパイロットと思われる青年がデスペアのコックピットへと近付いていた所だった。そして此方の存在に気付き、少々動搖していた。

シラユキも護衛をキマイラとエンジェルに任して居たのだが、このようにコックピットの近くに取り付かれて、攻撃でもしてしまったシユウ自身にも被害が出ると考えて何も行動していなかつた。

すぐさまシラユキはホープのコックピットを開き自分が常に携帯しているJUSSP・45カスタムを抜き出しパイロットへと構えた。

「其処の貴方撃たれたら、そのMSから離れなさい！」
と顔を見られるわけにもいかないので被つたまま銃口を向けていた

「此方に抵抗の意思は無い。それに抵抗してたら其処の一機によつて俺が殺されてるわ」

「戯言をよくぬけぬけと言えますね。その乗つてる人の命が貴方達の目的でしょが！」と未だにシラユキは警戒を緩め様とはしなかつたが次の瞬間その考えは打ち切られた。

「それに、このMSのパイロットはミネルバのタンホイザーを受けたんだろ？が、速く救出しないと命に關るぞ」と警告された。

シラユキは青年に警戒されたことに集中しすぎて、シユウの事をすっかり忘れて居たのだ。先程までタンホイザーの直撃を受けMSも

修復出来るかどうか謎なほど損傷し熱を持っているので中のパイロットも下手すれば致命傷な可能性もあるのだ

シラコキはその事態に焦りを感じながらホープのゴックピットから離れデスペアへと取り付いた。

オレンジ髪の青年も先程の攻撃には全く気にせず、デスペアのゴックピットを開く装置を探していた。

そして肝心の外から開くボタンらしき物を発見したが…

「なあ、ボタンって此れ一つだけか？」と聞いてくる。

「見付かったんですか！？だったら速く開けて下せー！」とシラコキも急かして叫うが

「だから其れが利かないんだよ！せっかくボタンを押しては居るが何にも反応が無いんだよ」

とその青年の一言にシラコキは驚愕と少々の焦りを感じてしまった。

「如何すれば…如何すればシユウさんを助けられるの？何か…何か無いの！？」と焦りながら辺りを見回した。

元々シラコキは自分のMSを整備はするにはするのだが、工具などは何時もシユウが持つて来ているので何処に置いているのか全く判らないのだ。

そうしてどうやってシユウをどうやって助けるか考えていると「一か八かだが、MSのコックピットのハッチだけを上手く斬るしかない」とオレンジ色の青年が提案してきた。

その言葉にシラコキは怒りを感じて「貴方はシユウさんを殺せと言うんですか！？幾らなんでも無茶苦茶です！」と思いつきり怒鳴つたが

「だつたらそれ以外に方法が有るのかよ？中のパイロットは今も衰弱してるかも知れないんだぞ！？」と至極正論を吐いてくる。

そう彼女も判つていた。手つ取り早く救出するなら其れが一番便利な方法だと。しかし失敗してしまえば中のパイロットごと死んでしまう危険性があるので敢えて其れを回避する方法を画策していたのだが、もう無理だろう。

「判りました。斬るのは私がやります。だから貴方はさっさと此処から離れてください」

と言つてホープへと向かい再び乗り込んだ。

流石に狭いジャンク艦のハンガー内で刀を振り回すのでキマイラとエンジエルは艦外へと出て行つた。

シラコキはすぐさまホープの自動演算によつてビのよつて振れば良いのか一応仮想映像で確認し集中し始めた。

そして覚悟が決まったように、『堅守』の柄を握り締め居合いの形を取つた。少々大袈裟かも知れないが、デスペアの場合PS装甲だけではなく、普通の装甲もガンダム系統なので少々厚いのだ。

故に剣速を落とさずに一瞬で切り裂いた方が速めに済むのだ。

「絶対にシユウさんには当てません。だから……成功してっ！」と叫びつつも『堅守』を振り抜いた。

シラコキは成功した感覚だけを腕に感じ、中を確認する為にホープから降り切り裂いたデスペアのコックピットを確認した。

其処には、多少息苦しそうに氣を失っているシユウを確認してシラコキは安堵しシユウを思わず抱きしめてしまった。

「良かつたシユウさん・・・生きててくれて有難う」とシユウに感謝している所を

「あつー取り込み中悪いんだが、直ぐにソイツを医務室に連れて行かないと不味いんじゃないのか?」と少々目を背けながらもそう言われた。

「ツー・ソ・・・そうですね。早くシユウさんを運ばなきや駄目ですね」と少々顔を赤くしたシラコキはシユウを背負つて医務室まで運んでいった。

（医務室）

取り敢えずシユウをベットに寝かし適切な処置を施した後にシラコキは改めてオレンジ色の青年の方に顔を向けた。

「取り敢えず、何も話さずにこの艦まで運んだ事を許してください。一応お互いに名前が判らないと困るので先に名前を伝えておきます。私はシラコキ・カグヤそして今倒れてる人が私のパートナーシュウ・K・ライトニングです」と一応自己紹介を済ませたが

「断罪に閃光の二人が動いているのか…おつと失礼。俺はハイネ・

ヴェステンフルスだ。気軽にハイネと呼んでくれ

「判りました。取り敢えずハイネさん悪いですが貴方を連れ去ったのは、理由があります」

「理由？戦場から俺を放すほど途轍もなく重要な事なのか？」とハイネはすぐさま真剣な顔に成った。

「はい、酷いようですがあの時私達が貴方を攫つてなかつたら貴方はあの場所で死んでました」とシラコキは顔を背けてそう言い放つた。

「何だつてー?だが俺は、今でもこいつしてこの場で生きているんだぞ如何言つことだ!?’とハイネは少々焦りシラコキの両肩を掴んで揺さぶりながら聞いた。

「それは・・・「良い、其処からは俺が全部話すよカグヤ」「シユウさん!-?」ヒシリコキは思わず振り返りシユウの傍へと近寄った。

「大丈夫ですか?」

「ああ何とかな。それより初めてだねヴェステンフルスさん」と体を動かしへッドに腰かけ頭を下げ挨拶をした。

「ああ、それより俺のことはハイネで良い。それで続きを頼む」と一刻も早く急かしてくる。

「そうだな。まずその事については一度簡単に平行世界に着いて説明して置いた方が良いかもな」

「平行世界？」とハイネは何が何だか判らないような顔をしていた。

「まあ、普段は余り聞かない言葉だから頭を傾げても可笑しくないよな。簡単に言うと平行世界つてのは、良く似た全く別の世界という存在だ。例えるなら今俺が左腕を上げたりしよう、だが少し違えば右腕を上げたかもしれない。もし、もしも、もしかしたら、かも、だつたならそんな別の世界の事を平行世界つて言つんだ」と長々と説明してしまったが如何やら理解できたようだ。

「つまり、もしライトニングとシラユキが俺を助けなかつたらガイアに真っ一つにされてたつて事なのか？」とハイネは少々恐ろしくなつてそう言つて来た。

「ああ、そうだ。俺とカグヤは其れに気付いたから起こる前にハイネを助けようと画策していたんだが、信じてもらえるか？」と説明したが、ショウとしては納得してもらえるか不安な所があつた。

「ああ、所々不安な所が有るがさつきの話を聞けば納得出来ない事も無い。それに一つ気に成つた点なんだが最近議長の行動に不安を覚えてきたな」とハイネは怪訝そうな顔をしていた。

「不安な行動だと? 正確に教えてもらえると助かるんだが?」とショウは少々疑問に成つていた。

「ああ、以前議長の部屋の前に通つた事があるんだがその時に『暗殺』だの『改ざん』だの色々な事が聞こえて少々疑問を覚えてきているんだ」

「ショウさん、もしかして其れつて」と此方に目を合わせてくる

「ああやつぱり予想通りだつたな…ハイネちょっと付いて来てくれ」とシコウは自分の部屋へと向かつて歩いて行つた。

ハイネS.I.D.E

最初はこのジャンク艦まで連れ去られた時は少々不安も大きかつた。だが抵抗しようにも此方のグフは既に戦闘不能な状況にまで追いやられているので焦つっていた。

だがすぐさまその考えは消え去つてしまつた。そう此方まで運んできたのは、自分でやら憧れていた『断罪の天使』『閃光の殺戮者』の名を持つ一人だった。

此れは何か有ると思い話を聞いたが、平行世界等でもしかしたら自分は死んでいたかも知れないと言う事を聞かされ少々恐怖に陥つたがその為に自分たちがボロボロになつても助けてくれる事に嬉しさを覚えてしまつた。

そして彼らは俺がふと漏らした言葉に興味が有るようになつて聞いてきた。其れに付いて話したら「見せたい物がある」といつて部屋まで誘導された。

そしてライトニングの部屋だつ、そこらじゅうにMSの設計図やP.Cでも完成予想図画組み立てられてゐる。それに興味が湧いた俺は、すぐさま壁に張つてあつたMSに目をやつた。

其処には前大戦で使つていたエンジェルやキマイラ等も書かれ他にも支援型・遠距離型・近距離型・量産型等一つ一つがとても価値のある設計図にしか見えなかつた。

そして一つの設計図に目が着いてしまつた。其処にはガンダム系統

と同じで有りながらずっと目が離せずに居た。

それに気が着いたシユウは此方に近寄り

「このMSに興味が有るのか？でもコイツは作つてもきっと乗る奴が居ないんだ」と少々苦笑しながら言つてきた。

「如何言つことだ？このMSに欠陥なんて無いはずだが？」と自分自身何処も可笑しく無い様に見えてしまった

「確かに外側から見たら可笑しくは無いんだけど、このMS殆ど射撃武器を積んでないんだ。形では、ハイネが乗つてたグフに凄く近い感じに成るだろうね」

「成る程ね。それよりこのMSに名前は着いているのか？」と其れだけが疑問に成っていた。

「この機体の名前かい？レストアガンダムだよ」と説明しておいた。

「レストア？如何意味なんですか？」と思わず聞いてしまった自分が居た。何故かこのガンダムにだけは惹かれてしまった。

「ん？レストアの意味かい？修復だよ。たとえ全ての関係が壊されたとしても修復出来ない事は無いからね。その名前をこのガンダムにも着けたんだよ」と説明をし終えて映像の準備を終わらせたようだつた。

(レストアか…気に成つてしまつが、今は俺はザフトなんだこの設計図を貰う事すら許されないだろう。それ以前に生きて帰れるかどうか謎だな)と一抹の不安だけを残し映像を見始めた。

（ふむ、ハイネが凄くレストアガンダムに興味が有ったようだな。この映像を見せて此方側に引き込めれば良いんだがな）と思いつつも映像を流していった。

其処に映し出されていったのはオーブ沖でのザムザザー戦・ガルナハン基地での戦闘映像を流していった。最初は怪訝な顔をしていたハイネだが、次々流される新情報に驚きを隠せなかつたようだ。

そう彼らは戦闘改竄の映像を流し続けて居たのだ。そして極めつけは最近要約シユウが危険な橋を渡つて手に入れたラクス暗殺を命じた議長の映像の一部始終を流し始めた。

「此れは・・・如何言つことだ？」とハイネが言葉を失つてそう告げてきた。

「如何もこつも、全て議長の思惑通りなんだよ。あの基地に居たラクスもミネルバが落としたと言わてるオーブ沖の戦闘・ガルナハン基地の戦闘全て俺たちが遣つた事だ。それを議長は改竄しミネルバの手柄にしていった。正直言つて議長を信用しない方が良い、奴は自分の思ったとおりに動かない駒は消す人間だからな」と告げておいた。

そう告げた後シユウのPCからピピッピピッピと小刻みな電子音が聞こえて来た。シユウはその音を聞きすぐさまPCの前まで動きキーボードをひたすら打ち続け、要約終わったかのようにキーボードを打つのを辞め画面をずっと見ていた。

「要約尻尾を掴めたな。全くのらりくらりと逃げやがつて連合の連

中は面倒だな」と愚痴を吐きながらシユウは自分の部屋を出て行こうとして。

「シユウさん何処に行くんですか?」とカグヤが行き先を聞いてくる。

「ん?連合の作ったロドニアの研究所まで行つてくるよ。カグヤは監視を頼む。ハイネは悪いが今ザフトに戻つても良い事は余り無いだろ、これから如何するかは自分で決めてくれ。俺はハイネが決めた決断を止めたりもしないからさ」とシユウは良い残して自分の機体へと向かつた。

だが今回デスペアは本人が知るように、中破しているので修理するまで全く乗れないのだ。だが今から整備していくには、ザフトに先越される危険性も考えられるので、キマイラに搭乗し出撃するしかないのだ。

そしてキマイラを久々に起動させハンガーから離れていった

目的地はロドニアのラボだが其処は連合の強化人間^{エクスンティッド}の研究所なのだ。強化人間と言えば前大戦で戦つたレイダー・フォビドゥン・カラミティの3機のパイロットだ。

以前に比べれば禁断症状などを抑えられているかも知れないが、同じ人間を調整等と言つて肉体をいじり兵器としか見ていない事にシユウも微かの怒りを感じていた。

そつして考え方をしている内にPDCでも表示されていたポイントに辿り着いた。シユウも攻撃の危険性が有ると思い暫く上空を旋回したが攻撃の気配は無く、かなり広い敷地内と言うのに入影一つ見当

たらない

だが廃棄されたのはつい最近なのか、アスファルトや整備された地面には其処まで大きな傷は残っていなかつた。シユウは、安全と感じキマイラで地上に降り問題の施設内を覗いた。

シユウは内心恐怖しながらビル内に入り其処から続く地下内へと入つて行つた。だが階段を下りている途中に無機質な臭いが鼻に突いたシユウはすぐさま薬品だと気付き、ガスマスクを装備して異常性を確認したが特に問題は無かつたようだつた。そして要約問題の地下に辿り着いて安心したように一息着いたが微かに部屋の奥から物音が聞こえた

シユウはすぐさま腰に掛かつている銃を抜き出しまガジンを変えておいた。今回は戦闘兵が居ると警戒し実弾を入れていたのだが、その気配は無く研究者だった場合の時も考えて麻酔弾へと変更したのだ。

そして地図の図面を思い出し、部屋に入つて直ぐ右にあるスイッチを押し明かりを着けた。次の瞬間自分の左から殺意を感じ咄嗟にその場で転がり手術台の近くまで動いた。そして改めて姿を確認する其処には、まだ幼い子供が居た。だが右手に持つてメスを改めて見ると其処には少量の血がこびり付いていた。そしてその子の目を見ると、多少の恐怖と殺意しか見えなかつた。

シユウはこの子供が大人に対し怒りと恐怖しか持つて居ないと悟つた。そう思うと多少の戦意を失つたが次の瞬間再び子供が此方の頭上まで飛び上がりメスを振り下ろしてきた。

だがシユウは其れを避け様ともせず左腕を差し出して自分からメスに刺されていたのだ。

「グッ」と多少の痛みを堪えながら数発子供に対して麻酔弾を打ち込んだ。即効性の有る薬品でも有るので子供が驚きつつもメスを手放し数歩下がつた瞬間糸が切れたかのように眠り出していた。

すぐさまシユウは子供に近付き安否を確認するが、特に擦り傷等が多く見えたが特に大きな怪我は無かつたようだ。

ほつとして安心してしまったシユウだが、メスが深く突き刺さつたせいに多少の痛みを感じてしまった。だが痛みに耐えつつもまだ生きている一つの端末を探しハツキングを開始した。そこには此処で起きた事・命令内容・調整法・強化兵士の製造方法等とても人間が遣る事とは思えない事が書かれていた。

シユウは、そのデータを全て自分持つてきましたP.Cに移し入れ幾つか研究所内の写真を撮つておいた。此れによつて戦争が終結後連合を壊滅させる事が出来る決定的な証拠の一つとなるのだ。

そしてもう一つシユウには探し物をしていた。そうそれは強化兵士の治療方法を探して居たのだ。幾ら研究員達が酷い奴等としても、その何人かは良心的な人間が居たはずだろう。

そして1時間ほど研究所のフォルダを探し回つていた所一つのデータが残つていた。其処にはシユウの予想通りエクスンテッドの治療法そしてこれを書き残した研究者の思いがつづられていた

研究員のレポート

此れを読んでいてくれる人間が正しく使ってくれる事を切に願う。

私は、今此処でエクスンテッドの作成を行つてゐる。正直嫌な作業だが、こうして動いて置かなければ私の家族の命すら危うくなつてくる。

だから私は、今此処でこうやって誰かに見られる事を願つてこのレポートを書き記す。

正直言つてエクスンテッドを生み出した私達にも原因が有るだろう。しかし私は、これ以上戦争での犠牲者を生み出したくない。勝手なお願いだが、私が育てたステラ・ステイキング・アウルを助けて私の代わりに育てて欲しい。この下に私が考えたエクスンテッドを治療する方法を書いている如何かあの子達を救つてあげてくれ。

「有難うよ。名も知らない研究者さんアンタのお陰で今此処に居る子を一人救えそうだよ。そして可能な限りアンタの願いも叶えてやるよ」と感謝をし願いを聞き入れて未だに麻酔弾によつて眠つている女の子を抱きかかえ自分のMSへと戻つていった。

だがシユウには、少しだけ不安が残つていた。それは、この後の力グヤの説教だ。

(「こんな怪我をするなら私も連れて行つてこよー・全くシコウちゃんは、何時も無茶ばっかりして）
とカグヤの声がショウの頭の中で再生され、その細つとした背中に
冷たい物を感じゾッしてしまつた。

「ここのまま傷を隠すのは無理だよな…ハア」と溜息を付きながら自
分のジャンク艦へとキマイラを向かわせていった。

抹茶「はい、今日は此処までさせで頂きます」

シラコキ「さて私は次話でシユウさんとOHANASHIをしないと黙りますね」

シユウ「ちよつやめ！作者如何にかしてくれー！」

抹茶「うん、如何にも出来ない。止めたら俺が撃たれそりだから黙つてOHANASHIを受けといてくれ」

シユウ「クソッ！OHANASHIされる前に逃げ切つてやるー！」

シラコキ「ああ、シユウさん逃げたらもつと酷いOHANASHIになりますので」

シユウ「俺終わつたかな？」

抹茶「ドンマイ。さて今回感想を下さったマサトさん前原圭一さん有難う御座いました」

シラコキ「さて今日は此処までですかね？」

シユウ「やつだな。喋る事も無れそりだし後書き閉めるか

シユウ・シラコキ・抹茶「ちよシユウ（俺）とシラコキ（私）はどうなるのか？次回お楽しみにー。」

「意見・「感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また、SHIDEで何か有りましたら言つて下さい

PHASE 41（前書き）

抹茶「はい PHASE 41 完・成！」

シユウ「何時もよりテンション高いからキモいな」

シリコキ「ドン引きですね。さつわと消えてくれませんかね？」

抹茶「お前等酷いな。そんな事するんだつたらカップルかいしょ・・・」

「

パンツパンツパンツ

シユウ「ねやおや急に脚たく成ったんだね。こんな所で寝ちゃって
た」

シリコキ「ホントですね。さて作者は眠ったようですし本編入りま
じゅつか」

シリコキ・シユウ「それでは本編をお楽しみ下さい。」

「「「めんなさこ」「めんなさこ」「めんなさこ」「めんなさこ」「めんなさ
い」「めんなさい」」

「はあ、もう謝らなくて良いですから何でこんな事に成ったなんですか？」

シラコキはシユウとのOHANASHIを終えて女の子と傷の件について聞いて聞いてみた。

「はつ！？そ・・・そうだな。簡潔に言うとだな地下のラボまで入ったのは良いんだが、この子が生き残ってて此方を敵として勘違いして襲ってきたんだよ。それで殺すのもヤボだからわざと攻撃を受けて多少動きが止まつた所を麻酔弾で眠らせたんだよ」と説明し刺さつた所を見た。

流石に何時までも左腕にメスを突き刺したままのは、氣味が悪いので針を縫つて包帯をしているのだが、まだ痛みを感じてしまい顔をしかめ左腕を押さえた。

「大丈夫ですかシユウさん！？それより先程熱心に薬の調合して女の子に注射してしまったけど何を注射したんですか？」とカグヤは傷の事を心配しつつも薬の方が気に成っていた。

「ん？あれはラボに残していた心優しい研究員が残したエクスンデッドの治療薬だ。ただ一回注射したら終わりじゃなくて強化兵士に成るまでに打たれた薬の量が量だから定期的に治療薬を打ち込まないと駄目なんだよな」とシユウは、溜息を吐きながら未だに眠りに付いている子を眺めた

「酷いですよね。戦争に勝つためと言つ理由の為に孤児を利用して戦争に駆り出させるなんて人の遣る事とは到底思いませんよ」とカグヤも女の子を見つめながら悲しそうに呟いた

「ああ、連合の上層部はきっと人間の皮を被つた悪魔なんだろうな……それよりハイネの方はどうなってるんだ?」と今医務室に居ない彼を心配し始めた

「それが…今まで自分が信じていた人間に騙されていたんですから落ち込み様も凄いですよ。今は一人にして欲しそうなので監視していませんが」

「そうか、まあハイネはこの程度じゃへこたれる人間ではない事を信じとくよ」と言つていたら、急にポケットに入れていた端末が震え始めた

シユウは会話が打ち切つた所だったので丁度良いタンミングと思いつつも端末を動かし始めた。

其処に映し出されていたのはロドニアのラボから1km離れた所で監視していた強行偵察型ジンのモノアイを経由して映し出されたザクとインパルスの映像だった。

「ふむ、今更ロドニアの位置を割り出したか…正直言つて遅いし其処まで必要なデータを見つけることはあいつ等には不可能だらうな」とシユウはうんうんと一人納得しつつも画像を眺めた。

カグヤも気に成るように覗き込んだが、何が何だか判らず一人?マークを浮かべながら混乱していた。それから20分後にレイを引き摺つたままシンが研究所から出てきた。

流石に端末越しで見ているせいもあるのか二人の表情が良く見えなかつたので強行型にズームして貰った。改めて映し出された映像には顔を青くして震えているレイと戦艦に連絡し様としているのに何度も打ち間違いをして焦っているシンが居た。

「シユウさん何故レイ君はあんなにも震えているんですか？もしかして薬剤でも！？」とカグヤは一つの可能性を言い出したが

「いや、それはまず有り得ないだろう。もしそうだった場合先に入つた俺がそうなつていたはずだ。だが現状俺には何の症状も現れては居ない。つまりだ考えられるのは、何個か有る。一番有力なのは、彼が造り出されし者か、エクスンデッドみたいに改造されたかだな」と自分の思いついた事を取り敢えず言つてみた。

そうして要約連絡でも着いたのかさつきからシンが喋り続けている。シユウはそれを見つつも後ろから聞こえる布が擦れる音をしつかり感じ取つた。カグヤの方を向くとカグヤも気付いたように一度だけ目を合わせて頷き同時に腰の銃に手を置きながら後ろに向いた。

其処に居たのは、研究所で見せた大人への恐怖を瞳に宿した女の子が目を擦りつつも此方に対して警戒心剥き出しの状態で睨みつけていた

「此処何処？また私を他の人達みたいに改造して研究するの？」と言ひ放つてきた。

「そんな気は無い。寧ろ俺たちは、キミ達みたいな戦争の犠牲者を救う為に活動しているんだ」とシユウは如何にかして女の子の警戒を解こうと思つたが

「嘘だ！ そう言つて私が逃げたら腰に着けてる銃で撃ち殺すつもりでしようが！」

と震えつつもそう叫んできた。此処まで過敏に反応すると言つ事は、仲間が殺されたのだ。

「判つた。じゃあ俺たちも攻撃しないと言つ意思を見せてあげよう……カグヤ」 そう言つてカグヤとシユウは自分の腰に着けている銃を取り外しマガジンから1発に成るよう弾を外し女子に投げた。

カグヤは其れを気にしつつも銃からマガジンを取り外し部屋の扉を開け弾を投げ捨てた。当然銃身も警戒される要員でも有るので自分の足元に置き遠くに蹴り飛ばした。

「さて此れで良いかい？」とシユウは女子に弾の入った銃を向かれていながらもそう聞いた。

「何で？ 何でこんな事をするの？ 私が貴方を撃たないとは言い切れないのよ？」と女子が聞いてくる。

「うーん。まあ撃たれた時は、そん時はそん時で仕方が無いとしか言いきれないかな」とシユウは苦笑しつつもそう言いつてしまつた。

「はあ、貴方も諦めてください。この人は、今貴方に撃たれても良いと言うのは本音でしょうね。正直言つてシユウさんは、これ以上他の人たちを救えないと言つだけは悔やんでも貴方だけを救えた事だけを嬉しがつて逝く人でしょうから」とカグヤも呆れたようにやれやれと首を振っていた。

「なつ、あなた達正気なの！？本気で色んな人を救う為に自分を犠牲にするなんて命が惜しくないの！？」と女の子も少々驚きを隠せないよつてやう叫んだ。

「命が惜しい惜しくないとかそんなの如何でも良いじゃん。ようは自分が如何有りたいか如何したいか一番大事なんだよ。それに入り一生なんて凄く短いからさ、悔いが残らないよつて生きてるだけだとシユウは笑いつつもそう言い放つた。

「馬鹿じゃないの？ホント今まで聞いても馬鹿馬鹿しく思えてくるわ。……少なくとも今まで理想だけを語つてた人よりかは数倍マシね」と要約女の子も笑つてくれていた。

「全く馬鹿馬鹿言わないでくれ。それよりも腹減つただろ？直ぐに飯持つてくるから待つてくれな」と言つてシユウが再び部屋を出よつて次の瞬間

女の子は、何かに苦しむかのように胸に手を押さえて体を震えさせ始めた。流石にシユウも尋常事ではないと思いつつさすま女の子の傍に近寄つた。熱や体に異常が有るのかと思い額や体に聴診器を当て確認するが特に危険な所は無い。

つまり考えられる事は、エクスンデッドの治療薬が切れ始めているのだろう。今回は初めてなので少量しか注射しなかつたが失敗だつたようだ。

「カグヤ この子に薬を打つから体を抑えておいてくれ！」と頼み込み注射器の中を特効薬で満たしていく。

「シユウさん速くして下さい！」の子体が冷たくなつて来てますー。」

とカグヤが焦りつつもやつやつ叫んでくる。

シユウは、入れたのが完了したのと同時に腕を思いつきり掴んで注射器を突き刺し薬を投入した。最初は女の子の方も苦痛に顔を歪ませつつも徐々に落ち着きを取り戻していく。

「『みんなさー』。『みんなに暴れちゃって…医務室広げちゃって』『めんなさい』とほんやりとした意識の中暴れたのを正確に覚えているらしく涙を流しつつも謝つてくる。

「大丈夫だよ。キミだけでも助けられてホント良かつたって俺も力グヤも思つてゐるよ」ヒシユウは優しく微笑みながらそう言った。

「ありがと。やついえば私名前言つてなかつたね。私の名前は…風舞 つばさだよ」とだけ言い切つて眠りに入つていった。

シユウはそれだけ聞くと再びつばさをベッドへ寝かして

「おやすみつばさ」とだけ言つて髪を優しく撫でた。

「今まで頼る人が誰も居なかつたんでしょうねつばさちゃん。例え私達が力を失つてもこの子だけは守りきりたい物ですね」とカグヤも優しい顔をしながら髪を撫でていた。

「ああ、こんな子まで戦争に駆り立てようとする輩は一度殺さないと学習しないのかな?」

と言いながらシユウはつばさが持つていても全く似合わない近くに放り出された拳銃を拾い上げスライドし弾を捨てホルダーに仕舞い込み医務室を後にした

PHASE 4-1（後書き）

シユウ「今日は拠点編だけだったのか」

抹茶「そうです。戦闘まで入れると長くなると思い今日は拠点だけで済ませました」

シラコキ「もう復活したんですね。案外復活速いんですね?」

抹茶「復活が早い?当然じゃないか!俺はしゅじん」・・・

パンツパンツ

シユウ「主人公は俺だから勘違いするなよ?」

シラコキ「それより今回出てきた新キャラ如何するんでしょうね?」

抹茶「あーつばさちやんの方かあの子は、如何するかは本編で書きますのでお待ちしてください」

シユウ「幽霊に成っても未だに役目を果たす氣か?」

シラコキ「呆れ通り越して賞賛に成りそうですよ。そういうえば今回感想来てたらしいですね?」

抹茶「はい三ノ丸さん」感想有難うございます

シユウ「それじゃあ今日は此処までか?」

シラコキ「やうじやないですかね？作者も深夜で眠たそりなんで閉めましょつか」

シラコキ・シユウ・抹茶「さてシユウ（俺）とシラコキ（私）はどうなるのか？次回お楽しみに！」

「意見・「感想ありましたらアドン言つて下せ」
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～SHIDEで何か有りましたら言つて下せ」

PHASE 4.2（前書き）

抹茶「はい、結構時間掛かつたけど要約PHASE 4.2が出来た」

シユウ「普段は毎とかに投稿するお前が珍しいな？」

シラコキ「何か有ったんですか？話ぐらいなら聞きますけど」

抹茶「今回のステラの救出の話何度も納得行かなくて書き直してたんだよ。それで今日が投稿日だったから自分で一番良い奴を選んでた」

シユウ「そうなのか、主つてもしかしてオリジナルストーリー作るの苦手なのか？」

抹茶「うつ、それは言わないでくれ。それより重大発表だ」

シラコキ・シユウ「重大発表？」

抹茶「そう、今田8月17日は自分とシユウの誕生日なんですよ！」

シユウ「ふうーん、でも前書き利用してまで言つて普通？」

シラコキ「普通言いませんよね？それだけが言いたかったんですけど？」

抹茶「そんなつもりは無かつたんだけどな。まあ良いやそろそろ本編入りつつ」

抹茶・シラコキ・ショウ「それでは本編をお楽しみ下せこー。」

「ふう、やはり物語は史実通り進むのか」と強行偵察型ジンから映し出されていた映像を眺めつつもシユウはそう呟いた。

「そうですね。しかしこれから如何するんですか? ザフトが救出すべき対象とガイアが鹵獲してしまいましたけど?」とカグヤが聞いてくる。

「ん? 如何するつて決まってるだろ? 何時も通りのようにステラとガイアガンダムを此方が実力行使で入手する」

「はあ、此処最近何か有る度に相手側に攻撃しかけてるのはこっちの気のせいでしょうかね?」とカグヤは少々頭を傾げながら言った
「多分気のせいじゃないと思うぞ? しかしどうやってミネルバに攻めに行くべきかな。普通に行つた所でミネルバからの砲撃・ザクによる搅乱攻撃・インパルス・セイバーによる止めが少々恐怖を生み出すんだよな」とシユウは多少の戦闘での危険性をカグヤと考えていた。

そして一つ面白い作戦が頭の中をよぎりてしまった。

「なあカグヤ　お前さんとエンジェル・キマイラでミネルバとMS達何分位引きつけられる?」

「はい? 何でそんな事聞くんですか?」

「これからは作戦でもしかしたら重要なからだ」「

「そうですね。だいたいですけど10分位は、無傷で引きつけられますね。それ以上は、集中力もちょくちょく途切れますし、仮にミネルバとMS落としてもキマイラかエンジェルのどちらかは大破してホープも少しの損傷は目を瞑らないと厳しいですね」

と軽そうに言つてくるが、新造艦を三機で攻略できる方が余程凄いと思つてしまつたシユウだった。

「どうか、それほどの時間は耐えるのか。じゃあカグヤには悪いが、暫くミネルバを引き付ける間に成ってくれ」と何時もの事を頼むシユウだが普段カグヤに頼りつきりなのが心苦しいと思つてしまふ所だ。

「判りました。取り敢えず作戦の説明をお願いできますか?」と言われたので、今回の作戦内容を大雑把で有るが説明をしておいた。

「と言う訳だ。まあ話し合いで済めば戦闘は殆ど無いんだけど、戦闘に成つたら最初の2~4分は、単機で戦うから厳しいかも知れないけど此れが成功すれば相手側の戦艦・MSに大打撃を与える事は可能だ」

「確かに成功すれば向こうも此方の条件を飲んでもらえる可能性もありますけど、もし話し合いを拒否した場合は如何するんですか?」

「ん? そん時はそん時で実力行使でステラ・ルーシュとガイアガン

ダムを貢つていいくさ。まあガイアガンダムはオマケ程度だから手に入れなくても良いが確実にステラだけは救出したい」とだけ言つて机の上に広がつてある資料とジンから映し出されていた映像を切つていった。

「作戦は明朝 順番はカグヤ・ヒンジェル・キマイラの順で5分毎に出撃だ。俺はお前等が出撃する30分前に出撃するから機体の武装の最終チェックは忘れるなよ?」とシユウは告げて医務室へと歩き出した。

「やあつばさちやん調子はどうだい?」と先程目覚めたとハイネから言われたので会いに来た。

「お陰さまで調子は良好よ。全く貴方は何なの?私達エクスンデッドの治療法を知ってるなんて」と先日の弱っていた時と違つて強気になつていた。

「ははっそれは秘密だよ。それより一つ聞きたいことがあるんだけど大丈夫かい?」

とつばさが薬を打つたと言えど昨日の事でも有るので体調位は心配はある

「それだつたら大丈夫。それで聞きたいことつて何?」

「つばさちゃんが居た研究所でステラ・ルーシェって子も居なかつたかい?」とシユウは悪いと思いつつも口を濁さず聞き出した。

「ん?ステラ?ステラつて…ああ、あの子か知ってるよ。暇が有れば研究所から出て鳥とか海とか眺めてた変な子だけど如何かしたの?」と如何やら知つているようだ。ただ何故聞くのか判らないように首をかしげている。

「そのつばさちゃんの知り合いのステラがザフトに捕まつたから救出しに行くんだよ。このまま放置していくなら確実に起る事は、ステラの衰弱死かザフトの一部のバイロットが離反して連合に返すかの一択だ」とシユウは冷静に話をしていく

このまま数日間放つておけば此方の手を煩わせる事無くステラは、シンによつて連合に引き渡され何かしらの治療をしてもらえたると信じ込むだろう。だが所詮連合ではエクスンデッドは治療等と言う生易しい言葉ではなく『調整』と人を人として扱つていない行動なのだ。更には調整が終了した後はテストロイに乗り込まされて戦死と言つふざけた結末を迎える等許せるはずが無い

「そう…だつたら絶対にあの子を助けてあげてくれない?ステラは人一倍死に対しての恐怖が有るから」

「そつなのか、確か何度か噂じや聞いたこと有るけど、それぞれに用意されてるエクスンデッドの禁句用語を聞くと精神が一時的に不安定に成るつてことだよな?」とシユウはエクスンデッドに対しては知識が曖昧なのだ。

「そうね。私は、まだ完全に洗脳される一步手前で実験中止に成つてたから幸い禁句用語は無いよ」と此れからの会話で一々気を使わなくて済んだ事にシユウはいじりなしかホツとしてしまつた。

「んじゃ、そろそろ俺も眠るからひざをかやんも速く寝とけよ?もしかしたらステラと有つたら話したい事が一杯出来るかもな」と苦笑しつつも部屋を出て行つとしたとき

「そんなこと知らないわ。……とにかく無事に帰つてきなさいシユウ」と恥かしさうにしつつもつばほさちゃんのその弦きが聞こえて来た。

私は、今単機でミネルバの場所まで向かつてゐる。キマイラやHンジエルは作戦通り別行動を行つてゐる。流石に単機でザフトの最新鋭に挑むには余程の勇気が必要だと自負もしているが

それ以上にシユウが私を信頼してゐるので、その期待を裏切らないのが一番重要なことだと思つ。

「さて・・・そろそろミネルバのレーダーの探知機の範囲内に入る頃ですね」

と弦きつつも肩に掛かつてゐるファンネルを始動させておく。

仮に話し合ひに応じてくれたとしても、一部の人間の勝手な行動によつて攻撃される危険性も有るので直ぐにでもファンネルを展開出来るよう常に後先の事を考えておくのも必要な事なのだ。

「そこ」の白い機体、これ以上近付くな。これ以上の接近は認められない

とミネルバの通信が聞こえてくるが歩を止める事をやめなかつた。

「聞こえますかミネルバのクルー及びパイロットの方々？私はシラコキ・カグヤこのホープガンダムのパイロットです。今回は、ちよつとした交渉をしに来ました」

そうして直ぐに向こうも応じるよつてミネルバの艦長タリア・グラディスが映像に写ってきた。

「お久しぶりですね。グラディス艦長…まあ、こんな事で再び再開などはしたくなつたんですけどね」とシラコキは表面上だけ辛そな顔をした。

「ええ、そうね。でも話すならMSから降りて話すのが礼儀つて物じやないかしら？」

「面白い事を言つますね。今そちらに着艦したらあなた達の考えることはホープのデータを奪つてパイロットも捕縛つて所でしう？そんな馬鹿な事誰がするんですか？」とシラコキは若干相手を馬鹿にしつつも話を進めようとした。

「まあ、そうでしょうね。それで話つてのは何かしら？」

「簡単なことですよ。先口此方にガイアガンダムが此処まで来たでしう。こちらの要求はそのガンダムに乗つていたエクスン・デッドのパイロットを此方に引き渡してくれるだけで良いんですよ」とシラコキは右腕を差し出しながらパイロットの引渡しを求めていた。

「其れは出来ないわ。仮に引き渡すとしても此方に利益が無いでしょう?」と如何やら対価交換がしたいらしい

「そうですね。じゃあ此方が秘密裏に入手したエクスンティッドの治療方法との交換で如何でしょうか?」と画像越しに一つのデータを開示した。

「なつ!何でそんな情報を持っているの?ロドニアのラボにもそんな物は無かつた筈よ?まさかあなた達連合と繋がってるんじゃ?」と疑つてくるが

「全く面白い冗談を言いますね。私達が彼らと同盟を組むなんて百害有つて一利無しですよ。それで如何します?データを貰つて彼女を渡すか…それともデータを破棄して彼女を渡さないか」とシラコキは途轍もなく気持ちの悪い薄ら笑いを浮かべて話していた。

「答えはノーよ。今此処で連合のエクスンティッドを渡す事は出来ないし、情報は^{しゃまつぶ}風漬に探せば見付かる筈でしょうね」

「そうですか。交渉は決裂ですか…それでは方法を変えましょう」と言つて彼女は右腰に掛かっていた重突撃銃を上に向け連射した。

だが出てきたのは実弾ではなく眩しい位の赤と青を照らした照明弾だった。それが合図のようにミネルバの前方に有る左翼が一筋の大きなビーム砲によつて撃ち貫かれた。

「あなた何をやつたの!?」と流石のタリアも警告も無じにイキナリ攻撃を仕掛けってきたので驚きを隠しきれて居なかつた。

「何つて此れは先程の生易しい交渉とは違つてお願いでも何でも無いただの命令をしているんです。……次はありません。早くあなた達が捕縛したステラ・ルーシュを此方に引き渡しなさい」と先程とは違つて完全に命令口調に成つていた。

「クツ！ ブリッジ遮蔽・対MS用戦闘準備！ MS出撃用意！」と人の話を全く聞かずにMSを出撃させようとすると

「遅いですよ？」と既にシラコキは其れを読んでいた様に急速に接近し白刀『雪』をブリッジへと突きつけていた。

「まあ、そちらが用意しなくても此方は何時でも奪取は出来るんですけどね」とシラコキは言つた瞬間リミッター解除で一気に距離を縮めていたエンジュルとキマイラがミネルバの一部へと格闘を仕掛けミネルバの装甲を？ぎ取り始めた。

この予想外の行動にモニター越しから見て判るようにミネルバのブリッジのメンバーが絶句していた。そしてシラコキもキマイラの行動を見続け、そして当たりを引いたかのように、純白のベッドを大事そうに両手で抱え込みミネルバから離れていた。

そして容態を確認するためかシユウが乗り込んでいるデスペアガンダムが上空から降りてきていた

そしてキマイラとエンジュルはシユウから命令でも受けたのか首を縊に振つてジャンク艦有る方向へと飛び去つていた。

「シユウさんステラさんの容態は如何でしたか？」とシラコキも流石に気になり聞いてみた。

「速めに救出したのが功をそうしたのかステラは先程の無茶苦茶な回収の時に負つた切り傷以外は少し衰弱しているだけで特に問題は無かつた」

と如何やら無事なようだが、切り傷に至つては完全に此方に非があるだろう。

「さて、目的の人物を救つたんで、私達は此処らへんで失礼させてもらいますよ」

「待ちなさい！貴方達は一体何がしたいの！？こんな戦場や軍を荒らすような行動をして！」とタリアは如何やら理由を聞きたいようだ。

「戦場を荒らす行為ねえ。じゃあ逆に聞くけど力を扱う貴方達はですか？貴方達平和平和と何時も提唱しているけど、実質何一つ行動を起こしてすら居ない。逆に撤退する気のあつたオーブ軍を追撃して殺そうとする始末」とシユウは呆れつつも怒りを滲ませて來ていた。

「あれは貴方がタンホイザーを止めたから実質被害は無かつたでしょう！」と当然反論していくが

「へえ、そういう言い訳するんだ。まあ良いと仮に俺があの攻撃止めずにオーブ軍に直撃してたら如何なつてたと思う？判らないだろ？まず一つ目は『ザフト軍は撤退しようとしていた無抵抗のオーブ軍に対して攻撃をした』という事だ。此れによつて運が悪ければ指示をしたと考えられる艦長・副長は確実に叩かれるのは間違いない。更には、ミネルバに命令を下した議長にも被害が被る危険性も否定できない。

「一つは『ザフトの領地下に居るナチュラルの暴乱または連合によるザフトの領地に居る同じナチュラルの大量虐殺行為』此れだけ言えば判るよな？」

あの時お前等の攻撃を阻止してなかつたら世界各地で殺し合いが始まりザフトには多少なりとも被害が出て来ていた事は可能性として否定できないんだよ。何も考えずにただ敵を撃てばそれで終わりじゃない。撃つた後如何言つことが起きるかも考えないと何時か死ぬぞ?」とシユウなりの忠告をしておいてホープとデスペアはミネルバから少しづつ離れた。

当然此れだけの被害を被つて何かしらの反撃をしたそしが、今此処で此方に攻撃を仕掛けても無駄な消耗と判り切つているのだろう。

デスペアとホープが機体をひるがえし撤退しようとしているのに何もせずただただその場で待機する以外他に無かつた。

そしてミネルバの射程圏外から離れた時にシユウは

「全くこの程度で心が揺らぐぐらいなら戦場に出てくんないの」と少々の苛立ちを覚えながらも愚痴を零していた。

「シユウさんもこの程度で苛立たないで下さいよ。今回の目的はステラの救出以外にミネルバに危機感を持たせる事も一つの任務なんですから」とシラコキはシユウをなだめていた。

そう今回の目的はステラ・ルーシェだけの救出ではないのだ。シユウは最近ミネルバが手柄を如何しても手に入れる為に躍起に成つていたのを知ったため、此処で一度喝を入れて置く事にしておいたのだ。確かに軍では戦績が一番重要だが、後の事を考えずにただ敵を倒すのは危険なのだ。

「しかし今回カグヤは面白いぐらい悪役に成っていたな」とシユウは苦笑していた。

「幾ら演技とは言え一度とあれは遣りたくないですね。それに何時も私にばっか汚れ役させてたまにはシユウさんがやってくださいよ！」とカグヤは今回ばかりは少々怒っているようだ。

「判ったよ。今度は俺が遣るけどカグヤ長距離射撃宜しくな?」とシユウも少し意地悪をしたくなつた

「えつ！？酷いですよ！私が射撃苦手なのシユウさんが一番知つてるでしょうが！」

「ははつごめんごめん。さて冗談は此処までださつと帰つてもう一人も治療するぞ」とシユウは、レバーを握りなおしてジャンク艦へと向かつて行つた

PHASE 4.2 (後書き)

抹茶「はい、今回は一切戦闘シーンが有りませんでした。申し訳ない」

シユウ「やつだな。しかし今回はブリッジ制圧して一気に動きを止める作戦か」

シラコキ「一番戦艦の動きを止めるのに有效な手段では、有りますけど実質良い戦艦程取り付くのって難しいんですね」

抹茶「そりゃしこですね。まあ詳しく述べ、自分も良く判りませんけど」

シユウ「お前はFPJやつてるのに知らないんだな。そういうえば今回も感想来てたらしいな?」

抹茶「はい、RayStationさん・杉やんさん・前原圭一さん・vooonさん有難う御座いました」

シラコキ「さて今回の後書きは此処までですかね?」

シラコキ・抹茶・シユウ「わしシユウ(俺)とシラコキ(私)はどうなるのか?次回お楽しみに!」

「ご意見・「」感想ありましたらドンブン言つて下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
またSHADEで何か有りましたら言つて下せー

PHASE 4③（前書き）

抹茶「あーもう今日は予想外に時間掛かっちゃった

シユウ「やうカリカリすんなって苛々してたら物事が上手くいかないぞ?」

シラコキ「やうですよ。もつと冷静に落ち着いて動いてください」

抹茶「す…すまない。だけビ今回は小説書く時に限つて用事が舞い込んで来るから中々打てなくて腹が立つてた」

シユウ「あつーそれは、もう」愁傷様だな

シラコキ「絶対にRPGで作者の運の数値見たらーなのは確実せいやが出てきやうですよ」

抹茶「グフッ、それは言わないでくれ

シユウ「まあ、んな事は如何でも良ことして。今回はどうな話に成つてるんだ?」

抹茶「あんまし言いたくないので、さつさと本編入りましょ」

シラコキ「やうですね

シラコキ・抹茶・シユウ「それでは本編をお楽しみ下セー!」

「ふう、全く酷い目に合つたもんだよ」とシユウは引っ掛けた所を消毒しながらベッドで眠つてゐるステラを見つめた。

そう、シユウは任務の後ステラの治療を行う為にステラを固定しているベルトを緩めたのだが、流石はガンダムのパイロットに選ばれる実力なのだろう医務室の中を暴れまくつて抵抗してきた。

だが流石にザフトも何も薬が打ち込めなかつたので当然ステラは衰弱しており数分暴れた後に再び倒れ始めた。それを機と見たシユウは鎮静剤を打ち込んだのだが、最後の抵抗とでも言つようになで頬を引っかかれ少々血が出てしまつた。唯一幸いだつたと言えるのならつばさちゃんに被害が出ていない事だつた。

「全くステラも変わつたわね。研究所で一緒に居たときはもっと大人しかつたのに」と昔を懐かしむような目に成つていた。

「そつながら、やはり人格が変わるのは薬のせいでも有るんだろうな」

「かも知れないわね。如何見ても昔の時の大人しかつた性格が今さつきのように急激に変わるなんて何かされない限りは有り得ないわ」とつばさちゃんも自分と同じ様な考え方のようだ。

「こればかりはステラじゃ無くて他のエクスンデッドの奴等に聞いた方が良いんだろうな」とシユウはステラに話を聞くのは半分諦めていた。

「そうでしょうね。だってステラ何時も説明下手だったから常にアウルかステイニングが傍に居なきゃ全く会話が出来てなかつたしね」と今非常に大事な事を言つていた。

「えつー？ つばさちゃんってアウルとステイニングとも知り合いなのか！？」とシユウはその情報を聞きだしたかった。

「え、ええ一応最終的に生き残った実験体は私を含めてアウル・ステイニング・ステラ位だったわ。途中から私は3人とは離れ離れだつたけどね」と少し辛い過去だったのだろう顔をしかめながら話している

「そうか、無理に聞いて悪かったね」と軽く頭を撫でて部屋を出ようと踵を返そうとしたが

つばさちゃんが服の袖を掴んで「お願い。…もうと撫でて」と上目遣いでお願いしていく。

「ん？ 判つたよ。幾らでも気が済むまで」と軽く微笑みながら撫でるが

(ヤツベエエエー…さっきのつばさちゃんマジで可愛かつたな。…
…つて！ 待て待て待て。こんなんじや俺口リコンに成るんじや！？
でも俺にはカグヤが居るし、これ以上進んだらカグヤからOHNASHIも否定できん) と心中で大きな葛藤を繰り返していたシユウだった。

「んつ、有難うシユウ。これから用事有るんでしょう？ 頑張つてね」と屈託の無い笑顔で言つてくるが

「ああ、有難う。行つてくる」とシユウは別の意味で恐怖を感じつつも作戦室へと向かつた。

だが其処には、先程まで一緒にいたカグヤが居たが
「まさかシユウさん…貴方口リコンなんですか？」と凄く失望した
よつな目で見てくる

「ち…違う！俺はカグヤ一筋だ！勘違いしないでくれ！」と土下座をして謝つていたのだが

「じょ…冗談ですよシユウさん頭を下げないで下さい。其れに本音を聞けて嬉しいですし／＼」と少し顔を赤らめていた。

「いや、それでも『メンな。カグヤにはやきもちを焼かせる気は無かつたんだけどな』と頬を少しきながら苦笑していた。

「もう、それだったら私にやきもち妬かせない様もつと構つてくださいね」と微笑んでくる

「判つた判つた。……さて、そろそろ本命に入ろうか」と言つて先程の緩い表情から一変して真面目な表情となつていった。

「そうですね。取り敢えず先程再び放つていた強行偵察型ジンが監視を行つていた所ミネルバが移動を開始しました」と言つて機材を操作しミネルバが動く映像と地図が現れた。

「どうか、このミネルバの進行方向から見るに、エーボ海の有る方向だな」とシユウは冷静に判断し始めた。

「はい、シユウさんの予想通りこのまま行けばミネルバはエーゲ海のクレタ島沖で戦闘に成る事は間違いないでしょう」とカグヤは自信を持つてそう言い切っている

「ん？ 何でそう言い切れるんだ？ ミネルバの目標の最終目標はジブラルタルだが接触する可能性は有るとは言い切れないぞ？」とシユウは怪訝そうな顔で聞いたが

「はあ、シユウさんってたまに何処か抜けてますね。以前シユウさんが盗んできた連合兵の一般端末に地球のクレタ島沖でご丁寧に戦闘を行うとテカデカと書かれているんですよ」と言って此方に端末を向けてきた。

「そりなのかな！？」と言つてシユウはカグヤから端末を受け取るが其処には確かにクレタ島沖でオープ軍と協力してミネルバを落とす事が書かれていた。

しかも予想外な事に一般兵士用の端末でありながら作戦がオープ軍を囮とし連合がミネルバが弱つた隙を狙つて全ての手柄を奪つていくと言うシンプルながらも自分たちが被害を負わない為の効率的な手段だ。此れでは同盟と言うよりただ利用出来る駒としか見れないだろう。

「まあ、今のオープは統率者がアホだからこう言つ作戦に成つても可笑しくは無いけど、死んで貰っちゃ困る人が居るな」とシユウは目を細めながら一人の男性の写真を眺めていた。

其処にはトダカ一佐そしてアウル・ニーダが写つた写真があつた。

「そうですね。トダカさんは、私達の事を誰よりも支援してくれた

人ですからね」とカグヤが過去を懐かしむような目になっていた。

そうシユウとシラコキが前大戦終了後に一緒に住み始めた事に対し事情を知っている人なら賛成する人たちも多かつたのだが、逆に事情を知らない人たちからすると反対も多かつたのだ。反対する多くの人の理由が『コーディネーターとナチュラルが一緒の家で住むなど信じられない』と何とも馬鹿馬鹿しい理由だつた。

当然其れに怒りを持つてくれた仲間も何人か居たが『こっちはそんな事気にしてないから大丈夫だ』とだけ告げ怒りを納めて回つたのだ。

だが事情を知らない中で唯一此方を祝つてくれたのがトダカ一佐だつたのだ。

最初はシユウもカグヤも疑問に思つて『トダカさんは俺たちが一緒に暮らしてへんに思わないのか?』と聞いたことが有るのだが理由が何処にも有りません』と言い切つて居たのだ。

その時からシユウとカグヤはオープでこの人は信頼できると思い戦争が始まるまでの2年間の間お互いの事を知り合つて居たのだ。

故に今ではカグヤとシユウにとつてはトダカ一佐は家族と何ら変わりない絆を持つて居いるのだ。

「ああ、そうだな。それじゃあそろそろ出るぞ、作戦は何時もの通り臨機応変に戦うぞ。僚機は俺がエンジェル カグヤはキマイラにする」と言つて格納庫へと歩き始めた。

だが格納庫に入った瞬間今まで全く話さなかつたハイネが居た。

「ハイネ？如何したんだこんな所に居て？」と思わずシユウは聞いてしまつた。

一応彼が乗つっていたグフは元通り修理をしているので、今では四肢と頭部は新品と何ら変わらない位整備されている状態なのだ。

「ああ、シユウ 僕はお前と少し話がしたいんだが」と如何やら真面目な話のようだつた。

「判つた。カグヤ先にキマイラを連れて戦場まで行つておいてくれ
「えつ？でもエンジールは如何するんですか？」と疑問に成つてい
たが

「もしかしたら使うも知れないから此処に待機させておく」
と言つた瞬間カグヤも理解したようにホープへ向かつて歩き始めた。

「流石に此処で聞くのは悪いが時間が無いから手早く済ませたい。
用事はなんだいハイネ？」
と顔をハイネに向けてそう聞いた。

「俺は、今まで議長の遣つている事が正しいと思って動いてきた。
だが今までシユウが持つてきたレポートを全部読んで今じゃ議長の
行動が怪しく感じてきた。もしシユウが持つてきたレポートが正し
くて俺らが駒のように操られてたなら正直言つて議長を許せない。
だから頼むシユウ！俺も真実が知りたいだから俺をお前のチームに
入れてくれ！」と頭を下げる頬んできた。

「どんな真実であろうと後悔はない…それだけは誓えるか?」

「ああ、例え其れが非情な現実であっても俺は田を背けない。前を向いて歩き続けるぞ」とハイネの田を見たが如何やら本気のようだ。

「判った。じゃあハイネ 今からお前にエンジンルを貸すよ。流石に慣れないとは思うがグフよりかは幾らか性能はマシなはずだ」

「ああ!有難うなショウ これから宜しく頼むぜ」と言つて握手を求めてきた

「ああ、此方こそ宜しく頼むな」

と言つて握り返しハイネはエンジル シュウはテスペアに乗り込み上部ハッチを開放した。

「シュウ・K・ライトニング テスペア出るー」「ハイネ・ヴェステンフルス エンジエル出るぞ!」と言つて一機のガンダムはジャンク艦から飛び立ち戦場へと向かつて行つた。

やはり戦場は、シュウがカグヤを送り出していたせいでほぼ一方的な戦争と化していた。

だがカグヤは此方が戦場に到着した事に気付いたのか機体を翻らせ此方まで接近してきた。

「ようカグヤまかせつきりで悪かつたな。それで今は如何言う状況だ?」とシユウは今の状況を聞いておいた。

「はい、一応ミネルバは此方を敵と認識しているようですが、全く持つて此方には攻撃を仕掛けて来ません。ちなみにオーブの方は、戦闘能力だけを奪つておいてます」と状況を告げてくる

「そうか、それじゃあ引き続き各自の判断で戦闘続行。一応アビスガンダムに乗つているアウル・ニーダとタケミカヅチに搭乗しているトダカ一佐の救出は絶対に行え!」と言つてシユウはその場を離れた。

「「了解!」」とハイネとカグヤも作戦を了解させその場を離れた。

そしてシユウはサーベルを腰から抜き出しサーベルを横に薙ぎ払つた。其処に居たのは、シンが搭乗しているインパルスがサーベルを持つて対抗していた。

「ステラを…ステラを返せよシユウ!」

と言つてもう一本サーベルを抜き放つて左手のサーベルを頭上にそしてもう一本のサーベルを右手でコックピットを狙つて横に薙いでこようとしていたが

「悪いが、其れは出来ない相談だな」と言つてデスペアの両腕をつかみ攻撃を止め前蹴りを放つた。

当然両腕を捕まれている状態で避けれはすも無く。綺麗に吹き飛んでいた。

「あの子は、俺が守らなくちゃ駄目なんだ！アンタにだけは絶対に渡さない！」と諦めないように突撃してくるが

「何も知らないクソ子供が甘ったれた事言うんじゃねえぞ」
ガキ
とシユウはサーべルで突き刺そうとしてる腕をそのまま掴み逆に引つ張り隙だらけの右腕をサーべルで切り落とす

「なんだと！？ 何も知らないって如何言ひことだよー？」と如何やらインパルスの腕をなくしても話を聞きたいようだ

「ホントお前は何も知らないんだな。もし俺があのままステラを奪つてなくてそのまま放つておいたら確実に死んでいたぞ。それにお前等の軍医は、副作用が怖いからマトモな治療を一個も施してなかつたよな？お前ホントにあの子を救う氣有るのか？」と言いながら今度はシユウが攻撃を仕掛けていく。

当然シンも反撃をする為にサーべルを抜いて斬りかかって来るが

「その程度なら甘いつー！」と言ひて左腕を掴み膝蹴りを食らわせそのまま空中で縦に一回転しかかと落しを叩き込んだ。

当然下は海なのだが、先程の重力とデスペアの重量を合わせた攻撃なので暫くは気絶して海へと沈んでいくだろ。

「少しば頭を冷やしゃがれバカシン」とだけ呟きつつも海上へと戻るが手柄目当てなのだろう。機ほどのウインダムを此方を取り囲んでいた。

シユウは「連合は」の機体の危険性一切教えてないのか?だつたら
オーブよりもつと重傷するぞ」と頭を押さえながらやれやれとし
てしまつた。

だが何もしない事を隙と思つてしまつたのか6機のウインダムが一
斉にサーべルを振り上げて斬りかかつて来るが

「所詮は、連合に実力を求めよつとした俺が馬鹿だつたか」とだけ
眩きビームサイズをその場で展開しデスペアを支点としその場で一
回転した。

そして手柄を狙おうとして居たウインダム達は全機コックピットだ
けが丁寧に切り裂かれ無残に海へと落ち爆散していく。

そしてそのウインダムによつて起きてしまつた赤い爆炎がデスペア
を赤く照らし出し、獲物を狩るような赤い一対のガンダムアイが鈍
く光その場に居た連合の兵士達を恐怖させてしまつた。

当然恐怖に陥つた連合の兵士達は冷静に物事を判断する事は出来ず

「さあ、次は誰が死にたいのかな?死にたい奴はさつと前に出て
きな命を狩つてやるよ」と不気味な笑いを上げながらそう告げた。

その言葉だけでウインダムに乗つていた連合の兵士は我先にと言わ
んばかりに戦場から離れていくとしていたが。

一機のウインダムが赤紫のウインダムによつて打ち貫かれていた。
そして命令とばかりに「さつきの奴みたいに死にたくなければさつ
さとザフトとあの黒いガンダムを落とせ!」と叫んでいた。

当然死にたくないウインダムのパイロット達は死に物狂いで襲いかかるうとライフルやサーベルを展開し迫つてくるが、その瞬間3機のウインダムが弾によつて貫通し爆発しそしてビームによつて貫かれた。

「やれやれ、お前らは心配性だな。俺が簡単に殺されるとでも思つてゐるのか？」とウインダム達を囲んでいた3機のMSにさう言い放つた。

「全くシユウさんは、そんな余裕持つてたら落とされますよ?」 「一人だけ撃墜数増やそうたつて層はいかないぜシユウ」とハイネとシラユキが皮肉な事を言いつつも笑つていた。

「つたぐ、まあ良い各機最終目標は、赤紫のウインダムだ!絶対に逃がすなよ!」「了解」と言つてキマイラ・エンジェル・デスペア・ホープによる一方的な殺戮劇が始まつた。

（ハイネSIDE）

「こんな一対多数なんて久々だな。だが…この機体ならやれる！」とガンソードを一本抜き出し背中に切りかかつてくるウインダムに振り向きざまコックピットを横に裂きそしてそして左右から迫つてきたウインダム一機を両腕を左右に突き出しサーベルを展開させほぼ同時に2機のウインダムのコックピットを貫く。

「えつと確かシユウたちは…ロミッター解除30秒間」とためしに流石に近距離戦はマズイと思つたのだろう今度は6機のウインダムがバックパックのミサイルランチャー・ライフルを連射してくるが

ハイネは起動させ始めた。

そして其れと同時にミサイルランチャーとライフルはエンジュエルに直撃し爆風が起きたが……

「グフとは違うんだよ！ グフとはあ！」 と何時の間にか一機のワインダムの背後に回り縦に一刀両断していた。

そして急激な動きに戸惑っているワインダムをハイネは見逃す事無く2機のワインダムを貫通弾によつてパックパックを撃ち抜き中に内蔵されているミサイルランチャーを誘爆させワインダムを大破し残り3機のワインダムに振り向くが

「辞めてくれ！ 撃たないでくれこっちにはもう戦う意思なんて無い！」 と何処に持つていたのか謎な白旗を振り投降していた。

一瞬如何するか戸惑つてしまつたハイネでは有るが直ぐにシユウから一枚のデータが送られ脱出する手段が書かれていた。

「だつたら誓えそのMSで人たちを襲わないと」と言つてガンソードの剣先をワインダムたちへと向ける

「判つた！ 絶対に人を殺したりはしない。だから見逃してくれ！」 と如何やら演技ではなく眞面目に言つてゐるようだつた。

「じゃあ今からデータを送る其れにそつて脱出しな」と言つて3機のワインダムにデータを送つた。そしてワインダム達はそれぞれ持つてゐる武装をその場で破棄し

「恩にきる」と言つて戦場から消えていった。

「全くシユウは甘いんだが厳しいんだか良く判らないな。……だがそれがアイツの良い所なんだろうな」とハイネは咳き心配は無いと思つがキマイラの援護へと向かつた。

「ハイネSIDE END」

「カグヤSIDE」

「ああ、もう！何で勝敗は決まってるのに逃げないんですか！」と目の前のウインダム達にそう叫んだ。

だが「こっちだって死にたくねえんだ！それにその機体を落とせれば俺だって大佐みたいに」と如何やら死に物狂いだけでなく欲もあるようだつた。

「Jの下種が！貴方達みたいな人が居るから…」と言しながらシリドミヨルニルをウインダム目掛けて飛ばす

「はんっ！そんな簡単な攻撃……」と言つてゐる間に既にウインダムは落ちていた。

「全くお喋りが過ぎますね。それに態々直線的なのは岡本命はライフルなんですよ」と笑いながら咄嗟に引き抜いていたビームライフルを再び腰へと掛けた。

だがそのゆつたりした行動に対して怒りを感じた何機かのウインダムはビームライフルを連射しホープを爆風へと包み込んだ。

「殺つたか？」「判らん。だがあれだけの物を喰らえば無傷じやすまいだろ？」「此れで俺らも昇格だ！」と各自喜んでゐる中爆風

の中から突如弾が放たれてきた。

氣を抜いていたワインダム達は防ぐ事も出来ずただただガトリングの直撃を受け、無様に海へと沈んでいった。

「一つ忠告をしてあげますよ。最後まで敵を倒せるかどうか確認するまでは氣を抜いては駄目ですよ?」と言い放ちながら煙が晴れてきていた。

そこには4つのフィン・ファンネルによつて発生していたピラミッド型のバリアを発生していて無傷なホープが存在していた。

「改めて説明書読んでて助かりましたね。……このホープ貴方達程度には、落とさせませんよ?」と言いながら腰の『堅守』『雪』を抜き出し辛うじて生き残つた残りの2機のワインダムに対しても刀を横に薙ぎ払つた。

流石のワインダムたちも直撃しては即死だと判つては居たのだが、バックパックやブースターなどに先程のガトリングによつて支障が起きたのか避ける事無くコックピットは切り裂かれ爆発する事無く海へと沈んでいった。

「ふう、死ぬくらいなら戦場に出て欲しくないです。こう言つのをきつと無駄な犠牲つて言つんでしょうな」と言いながら氣を抜いた瞬間

海面からの攻撃警告音が鳴り響き「要約狙いの機体が来ましたか」と言いつつも機体を上昇させ三本のビームを回避した。

だが上空に居た所でアビスは全く浮上する事は様子は全く見られな

いので

「しょうがないですね。…水中戦は苦手なんですかどうもしかないですね」と覚悟を決め水中へと潜つていった。

そして其れを待つていたかのようにアビスのパイロットが「お前の兄弟機には酷い目に合わされたからな。…今度は俺がお前の機体をボロボロにしてやるよ！」と水の中で3つのビーム砲を放つてくるが

「何時誰が貴方の得意な戦場で戦うと言いました？…全パーティ解放1分間」と言い放ちアビスへと急接近し始めた。

「クソッ！何なんだよコイツ急に動きが！」と近付いた瞬間ランスを横薙ぎに払おうとしたが

「その程度で当てようなんて舐めないで下さい！」そう言い放ちながら横に払われていたビームランスを右腕一本で掴み取つていた。

「なつー？マジかよー？」と焦つている間にカグヤは咄嗟にランスを手放しアビスに近付き両脇を掴んで海面へと投げ飛ばした。

「あと…30秒」と解放の時間を確認しつつホープも後を追つようく海面へと飛び出し、空中を舞つてアビスに対しシールドミヨルニルを括り付け一気に近くに有つた小島へと叩き付けた。

そしてアビスは機体を完全に叩きつけられ仰向けの状態で此方の方を向いて態勢を起こそうとしているが、「そのまま倒れ続けてくださいね」と再び頭部を掴み地面へと叩き付けた。

「クッてめえふざけんなよ!」とアビスのパイロットが叫んできているが

「ふざけてる?失礼ですね。何時も私達は真面目に行動していますよ。ただ人を駒としか見てない連合と違つてね」と言いながら両手を握つてアビスのコックピットと頭部のメインカメラを殴り始めた。

いつけん無駄な行為にも見えるような攻撃でも有るのだが、此れは敵パイロットを殺す為にやつていてる行動ではないのだ。正確には敵を恐怖を陥れる為に行つてているのだ。元々人間と言つ生き物は暗い部屋に閉じ込められると物事を正しく判断する事が出来ず。外からゆつくり「えられる衝撃や音だけでも恐怖を植えつける事が可能なのだ。

そうやって1分間だけ外から殴り続けて装甲が少々凹んでいる中様子を見ていたが如何やら効果観面てきあんなのか此方は隙だらけといいうのに全く攻撃すらせぬ寧ろ両手で頭を抱え込んで恐怖から逃げようと必死な所が見える。

流石に此処まで来ると攻撃するのも気が退けてくるので手持ち無沙汰のキマイラにアビスを回収させ戦場を見回した。

既に戦場もMSの数が減り撤退していく艦が多く見られた。そこには全く被害すら出していないオープ軍までもが撤退していた。

「可笑しいですね?シユウさんの聞いた話じゃ此処でタケミカズチが沈んでフリーダムがまた戦場を荒らすはずなんですが……考えられる事は一つだけですね。此れがシユウさんの言つていた原作ブレイクって奴ですか」と言いながらシユウの居る方向へと機体を向けた。

其処に居たのは、予想通り無傷で未だに顕在していたデスペアの姿が映っていた。しかし次の瞬間ウインダムの最後の一機を落とした瞬間デスペアガンダムの左腕が斬りおとされていた……。

「カグヤSIDE END」

「チツ！」

とシユウは舌打ちしながら自分の目の前に居る機体に対して後方に下がり距離を取っていた。

そうシユウは、今さつきまで相手していたウインダムを撃墜し戦闘終了だと思い氣を抜いてしまって居たのだが、それが失敗だったのだろう。急激に機体から警告音が鳴り始め、ギリギリで反応し僅かに機体を動かしたが、それでも機体の直撃は回避する事すら出来ず左腕がエクスカリバーによつて斬り飛ばされてしまった。

「ようやく隙を見てくれたなシユウ。ずっと機体にダメージを与える隙を狙つていたよ」と顔が見えないがシンはきっと今ひどく氣味の悪い笑顔をしているのだろう。

「ふうん。左腕を？ぎ取つた程度でデスペアが弱体化すると思つているんだなシン君は？」

「ああ死にたくなかつたらステラを差し出して土下座すれば逃がさない事も無いぞ？」と挑発的発言をしてくるが

「戯言だな。左腕一本を失つても実力さは変わらないよ。何時まで経つても君は俺には勝てないさ。それこそ実力も今自分が背負つてゐる物の重さもな！」と言つてサーベルや刀を抜かずに素手で突つ込

んで言った。

「何だと！？？？ だけど舐めるな！ 武装が無い状態で勝てると思つてるのか！」 と叫びながらエクスカリバーを正面に持ってきて突っ込んだが

「ああ勝てると思つてるさ」と呴きながらエクスカリバーの突きを擦れ擦れで避け残った右腕でインパルスの頭部を掴み

「パーティ解放15秒 エネルギーを右腕に移行」
と言つた瞬間デスペアの残つた右腕もギシギシと軋みを上げながらインパルスの頭部を握りつぶし？ぎ取つた。

「ハハッ、此れで頭部なくなつたから少しほは軽くなつたんだから感謝はして欲しいな」とシユウは笑いながらサーベルを展開した。

「なんだと！たかだかメインカメラをやつた位で調子に乗るな！」
とサーベルに持ち替えて突つづとするが

「攻撃が直線過ぎて当らないよ。もっと近付いて体術やサブ武器も組み込んで戦わないと落とせないよ・・・見本を見せてやる！」 そう言つて突つ込んできている中右腕を突き出しミサイルランチャーを撃ち始めたそして撃ち終わつたと同時にデスペアも突撃した。

インパルスは突つ込んでいる最中だったのでホーミングの攻撃を避けず自分から直撃を受け多少の体勢を崩していた。その隙を見逃す訳も無くシユウは見逃す事無く左腕で持つているサーベルを容赦なく振り下ろし持つてはいるサーベルごとインパルスの腕を斬りおとし、その場でコックピットに当るよつて前蹴りを食らわせ無理やり距離を離した。

「ほらな。俺が武装一個でも持つてただけでも実力の差が開くんだけよ」と格の違いを見せ付けていた。

だが未だに諦める気は無いのか「ふざけるなああああああああ！」と我も忘れて突っ込んでくるが残っていたバックパック・左腕・両足は何時の間にかカグヤが放っていたフイン・ファンネルによって撃ち抜かれた。

「大丈夫ですかシユウさん？」とカグヤは心配して通信を送つてくれているので

「ああ、大丈夫だ。しかし落とせる奴は落とせなかつたし原作も話が少し拗ねじれて来るかもな」と一抹の不安を覚えながらも残っていたミネルバとそのMSたちにも興味を示さないように一度も向かずにシユウ達は戦場を去つて行つた。

そしてただ戦場に残つていつたのはシンの圧倒的な実力による敗北に対する悲しみの叫び声とミネルバが全くダメージを受けていないでクルー達が安堵しているという矛盾している物だけが残つていた。

PHASE 4③（後書き）

抹茶「今日は此処までと成ります」

シユウ「デスペアは今回少破したか…あのバカシンめ
シラコキ「何時も以上にシユウさん苛ついてますね。作者止めて下
れことよ」

抹茶「よし、拒否する。今手出したら確実にやられそうだ」

シラコキ「じゃあ私はその拒否を拒否しますー。」

抹茶「ヒートH！鬼かお前はー！」

シユウ「煩いぞ作者少し黙つてろー！」

パンツパンツ

抹茶「な・・・なんで俺だけ」

シラコキ「それは作者がボ「られ要因だからだと思つまよ。そう
言えば今回感想来てましたね？」

抹茶「はい、Raystiongørさん・アンティーカー珈琲店一
さん有難う御座いました」

シラコキ「さて、今日は此処までですかね」

抹茶「そうだな・・・シユウ閉めるからそろそろ正氣に戻れ

シユウ「判つた。今度シンとインパルスは滅多打ちにしてやる」

抹茶「何か最後物騒な子と言つてゐたどまあ良いか」

抹茶・シユウ・シラコキ「さてシユウ（俺）とシラコキ（私）はどうなるのか？次回お楽しみに！」

ご意見・ご感想ありましたらアンドン言つて下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～SHIDEで何か有りましたら言つて下さい

抹茶「皆さんお待たせして申し訳ありませんでした。みづやへ復活しました」

シユウ「要約帰ってきたか作者死」でも起きたのかと思つたぞ?」

カグヤ「ホントですよどうせやる氣失せたから書く気無くなつたとかそういう奴ですよね」

抹茶「いや、それがマジで車にひかれちゃいました」

カグヤ・シユウ「は?」「

抹茶「しかもその一週間前には愛犬が死んじゃうしで精神的にも身体的にも追い込まれて大変だったんですよ」

シユウ「あーそのなんだ」愁傷様

カグヤ「怪我のほうは大丈夫なんですか?」

抹茶「心配なく、何とか打撲と擦過傷で済みましたから。さて暗い話はここまでです、此処からは心機一転また書き始めますよ」

シユウ「そうか、それじゃ何時ものやるか

シユウ・抹茶・カグヤ「それでは本編をお楽しみください」

「全くデスペアの左腕が持つて行かれるのは予想外だつたなあ」とシユウは愚痴をこぼしながらも修理を行つていた。

「いや、シユウ。俺はあの時絶対に殺されそうな一撃をギリギリで回避して左腕一本で済んでる事とインパルスを中破まで行つていう方に驚きを隠せないぞ?」

「ん? あれ位訓練すれば普通だろ? ……それにシン達の行動パターンって真っ直ぐ過ぎるから逆に読みやすいんだよ」とシユウは7割方修理したデスペアを見つつそつ言つておいた

「へえ、じゃあどういう事されるヒシユウも不味いんだ?」と少しハイネも興味があるようだ

「そうだな。…例えばサーベルで斬り合つてる時に後ろから弾幕が張つて来られたりとかインパルスのレッグフライヤーを装着じやなくてこっちに突っ込ませて来たりすると回避し辛いかな」

「そうなのか、でも辛い程度で対処する事は出来るんだろう?」

「そうだね。まあ対処する事は出来るけど戦闘中に何処か一部反応が悪い事が起きたら確実に不味いだろ? うね」とシユウはコツクピットの中に入り込み切り落とされた左腕の回路を改めて確認していた。

JCCの所多くの戦闘が有つた事や4機の機体のリミッター解除やパワーツ解放のせいでMSに使われる電子回路や接続コードが戦闘終了後焼き切れたり部品にヒビが入つているなどして取り替える事が多

かつたのだが今回の件でエンジン・キマイラ・ホープは何とかマトモな修理を施せたのだがデスペアは今回の一件で全体の七割ほどしか修理出来ていなかつたのだ。

「このままじや確実に不調を起こすだろつな。……」この際何処かの街によつて部品を集めておくか「そう言つて今出来る限りデスペアに修理を行い最低限動かせる所まで修復させようとキー・ボードを叩いていたが唐突にドアの開く音が聞こえたのでシユウとハイネはその音の方向へと顔を向けた。

其処にいたのは、面倒臭そつしつつも車椅子を動かして此方に近づいて来ようとしていたつばさちやんが居た。

「あれ？ もう起きても大丈夫なのかいつばさちやん？」とシユウは心配しそう聞いておいた。

一応診断結果では、体内に残つていたナノマシンの殆どは駆除されており体は正常通り動く様には成つて居たのだがシユウは、少し様子を見る為に寝かせておいたのだがこうして動き回つていたので心配したのだ

「おかげさまで大丈夫よ。それよりもカグヤさんがシユウを探してたよ？」

「カグヤが？ 何の用なんだの？ つばさちやん何か聞いていいかい？」

ヒシュウも思い当たる節がなくつばさちやんに聞いてみた。

「いや、判らないわ。でも何かすゞぐ深刻そうな顔をしていたのは確かね」

「そうか、ありがと。・・・取敢えずカグヤに会つてからだな。
話はそれからだ」

と車椅子の後ろの取つ手を掴みシユウとつばさとハイネはハンガー
を出てカグヤのもとへと向かい始めた

（作戦室）

「シユウさん来てくれましたか。」と確かにカグヤは深刻そうな目
で此方を見つめて来ていた。

「如何したんだカグヤ？簡単な件ならお前に一存してるけどお前だけ
で解決できないことって？」とシユウは怪訝そうな顔をしつつも
そう聞いた

「それが、これを見てください」と一つのプリントされた真新しい
紙が一つ机の上を丸まつて転がっていた。

「何だこれ？」とハイネは言いつつも紙を広げシユウはそれを隣で
覗き込んだ。

其処に書かれていたのは、どうやって此方のＩＤを知ったのかは知
らないが、来ている所は嘗ての仲間がいるアークエンジェルからの
伝達だった。そして書かれているのはたつた一行の簡素な言葉だっ

た。

「話がしたい。指定しているポイントに来てほしい」

「如何考へても怪しいだろシユウ。以前攻撃してきたのに話がした
いつてどんな心変わりなんだよ」とハイネは会うのは嫌そうにして
いた

「それは、有り得ませんよ！私たちは前大戦で共に戦つた仲間なん
ですよ？話がしたいのは当然でしょうー」とカグヤはどうやらキラ
達と会いたいようだ。

「やつ甘く見ていると行き成り撃たれるかもしれないぞ！」

「彼らを知らない癖に良くそんな事が言えますね。この臆病者！」
とシユウが考え込んでいる間にも一人の討論は続いていた。

そしてシユウは一つの決断を下した「俺はキラ達に会つてみたいと
思つ」と明確に答えた

瞬間ハイネはこちらを睨み付けて

「正氣がシユウ！？何も警戒せずにホイホイ行くなんて」と語つて
くるが

「まあ、待てハイネ。こっちも何の考へもなしにただアークエンジ
エルに乗り込むなんて馬鹿な考へはしないさ、ハイネには俺らがア
ークエンジェルに乗り込んでいる間にエンジェルに乗り込んでア
ークエンジェルに何時でも攻撃できるように武装を持って隠れてほし

い

そうシユウも嘗ての仲間を疑う事は余りしたくないのだが、以前カグヤが攻撃されることを考えると何かしらの対処をしなければいけないのは当然だろう。

「判つたシユウがそういう考え方なら俺はもう何も言ひ氣はない」

「シユウさんがそういうなら」

そう言ってハイネとカグヤはしぶしぶ納得しながら作戦室を出て行つた。

そしてシユウは一人作戦室へと残りPCの前に座り込み連合の情報を得る為にキーボードを叩き始めた。そして何度も危険な綱を渡りながらよみやべ一つの情報を手に入れた。

其處に書かれていたのはG F A S - X 1『デストロイ』

映像に映し出されているのはほぼガンダムタイプと同じ形をしているのだが、その違いはやはりその問題は計測上ではデスペアに比べてデストロイの全高はデスペアの一倍も有るので、ただ的にしか成らないと考えがちだが、装備にゲルズゲーやザムザザーに装備されている陽電子リフレクターが装備されているせいで強制的に実弾を打ち込むか接近戦を挑むしかないのだ。

だが実弾を撃ち込んだ所でデストロイは元々の装甲は厚いえにヴァリアブルフェイズシフト装甲まで有るので余り意味は成さないだろ。

故に最後の選択肢は「格闘で確実に叩き落とすしかないのか」と愚痴をこぼしてしまった。

それが最良の選択と思われがちなのだがシユウは一つの事を危惧してしまった。それは「デストロイに機体を掴まれた時の対処だ……」たとえ此方がP.S装甲を着けているとは言え結局は圧倒的な力の前では握りつぶされるのが当たり前だろう。それがコックピットだとうのならもつと最悪なことが起きるだろう。

そう考えるとシユウは、頭を悩ませながらも「デストロイのコックピットの装甲を引き剥がして中のパイロットを無理やり救出するべきか?」とシユウは一人朝日が昇るまで対策を考え込んでいた

PHASE 44（後書き）

シユウ「また中途半端なところで終わらせたな・・・」

抹茶「すいません、続きを書いてたら上手く切る所が此処しか思いつかなくて」

カグヤ「そしてデスペアが意味深的な事起きてますが大丈夫ですか？」

抹茶「まあ、気のせいでしょう。デスペアが落ちたら新しい機体を考えるのもまた作者の仕事ですから」

シユウ「ちょっと待てっさつきの言葉じゃなんかデスペアが落ちそうな気がしてきたんだが？」

抹茶「氣のせいでしょう？」

カグヤ「まあ、ネタバレに成るかも知れないでのこの話は辞めましょ。取り敢えず今回も感想が来たんですね？」

抹茶「そうですね。彩理さん」指摘有難う御座いました

カグヤ「今日は此処まで位ですかね？」

抹茶「でしょうね。取り敢えず自分は頑張つて4日更新を目標そつと思つてるので待つてくださいね」

抹茶・カグヤ・シユウ「さてシユウ（俺）とシラコキ（私）はぜひ

なるのか？次回お楽しみに！』

ご意見・『感想ありましたらドンドン言って下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～SIDEで何か有りましたら言って下さい

PHASE 45 (前書き)

抹茶「取り敢えず何時も通りの4日更新始めました」

シユウ「何かかき氷始めました。みたいに聞こえるのは『氣のせい』か
?」

抹茶「『氣のせい』じゃないんですかね?」

カグヤ「やつですかね? そりゃねば今回ほんな話になるんですか
?」

抹茶「……い…言えない」

シユウ「おじおじ、なんでそんなにも汗かいてるんだ?」

カグヤ「まさか酷い事に成つてませんよね?」

抹茶「いは逃げる勝ちだ!」

シユウ「逃がすか! 待て作者!」

カグヤ「…逃げるのは良いんですけど前書き如何するんですかね?」

カグヤ「仕方ありません今回だけは私だけがやりましょう!」

カグヤ「それでは本編をお楽しみください!」

「…何で此処にこいつ等が居るんだ?」とシユウはキラ達と対面しそう言つた

だが其れを答えたのはキラ達ではなくアマギー佐が答えてきた。

「それは、私たちがセイラン家を見限つたからです。此のままではオープの意思是無くなり兵は無駄死にするだけです。故に私たちは今や信用できるキラ様たちと連絡を取り合流したのです」とこの時シユウは何故クレタ島沖でオープ軍が出てこなかつたのか疑問だつたのだがアマギー佐の言つた内容で疑問が解消された。

「成るほど。クレタ島沖での連合との協力はフェイク…本当はキラさん達と合流するのが目的だったんですね」とカグヤも納得していった。

「ええ、そうよ。今回の件でオープ軍は少なからず戦闘要員を失つて真面に戦争する事も出来ない筈よ」とマリューさんが答えてくるが「だけど、俺らに話したい事は此れだけじゃないんだろう?オープの事だつたら連絡越しで伝えれば良い事だし…何より俺はお前らの事を許す気はない」とシユウは声冷たくそう言い放つた。

「ああ、それについては此方が申し訳無いとは、感じているわ。…ただ今の俺達に出来る事を考えたらあれしかなかつたんだ」とムウさんが弁明してくるが

「あれしか無かつただと?無理やり戦争に介入して『撃ちたくない』

と言つておきながら出てきて誰にも味方をせずただ戦場を荒らす無茶苦茶な行為だけ行つて…余りふざけるなよ?」

だが「私は…私はオープを守りたくて戦争に介入してそれで…」とカガリが何かを言おうとしていたが

「だから何ですか?オープを守りたい?…だつたら最初からずっとオープ軍にでも所属して戦い続ければ良かつたじやないですか。それなのに守るべき対象まで攻撃して他の人達は全員叩き落として正直私達を舐めてませんか?」とカグヤも怒りを堪えきれずに言葉に怒気が含まれていた。

「取り敢えず…明確な敵も見つけられないまま、ただ戦場に出て荒らすだけだつたら出てくるな。正直言つて兵士が無駄死にするのが見えてくる」とシユウも少し怒りを抑えてそう言い切つた

「じゃあ僕たちは間違つてるんですか?本当は僕たちが遣る事よりシユウさんが正しくて、それで僕たちの遣つてる事は馬鹿げてるんですか?」とキラが俯いてこちらに向かつて聞いてくる

そしてアーチエンジェルのクルーたちもその答えを聞くためにシユウに視線を移していた。

だがシユウは「それは誰にも判らないさ」

思わず予想外の答えを言いカグヤを含め全員が驚きを隠せず目を丸くしていた。

「確かに今回キラ君達が遣つた事は多くの人達から見たら馬鹿げた事なんだろうけど、結局は何が正しい何が悪いなんかは誰にも判断しないんだよ。…ただ判り切つてるのは、自分が正しいと思った事は

「今まで遣り遂げるつて信念が必要なんだよ。俺はただそれを遣つてるだけさ」

「とまあ、それでもたかだか20年しか生きて無い子供の戯言だ。適当に受け流してくれよ」とシユウは雰囲気を一変させるために笑いながらそう言った。

「いや、ただそれだけの言葉で十分さ。今さつきの俺達には道はなかつたがシユウのお蔭で何とか新しい道が見えてきたさ」とムウも先ほどとは打つて変わつて顔が変わつていた。

それは不安定に漂う決意から新たにしつかりとした決意を持った顔に変わつていた。

それを見たシユウは（此れでアーチエンジエルの方も道を間違えずに進んで行きそうだな）と少しの安堵を感じていたがそれは束の間の平和でしかなかつた。

急遽シユウが持ち込んでいた小型の端末が断続的に震え始めた。一瞬何事かとシユウも思い端末から直ぐにハイネの顔と連合の情報が入り始めた。

「此方のハイネだ。シユウ聞こえるか？連合が動き始めたらしい。今は強硬偵察型ジンが後を追つているがデストロイの進行方向に街が幾つか有りやがる。連合の奴らは避難勧告を出さずに攻め続けてやがる。このままじや壊滅するぞ！」とハイネが説明していく

その事を聞いたシユウはすぐさまデスペアに乗り込むために隣接していたホームに戻ろうとするが、

「シュウ…今回の件は貴方たち2人じゃ荷が重すぎます。私たちも手伝うわ」とマリューが提案してくるが

「良いのか?これは俺たちが勝手にやる誰にも喜ばれない意味も無い事なんだぞ?」

「そんな事は有りませんよ。…」Jのまま放つておいたらそのMSは確実に街を焼き払うんですよね?だったら今力の有る僕達が何とかしなくちゃ」

「それに感謝もされず戦つてきたのは前大戦も同じだろ?今更名前とかそんな事気にする事なんか無いさ。それに困ったときはお互い様だろ」とキラとムウの順番で答えて

シュウは少し悩みつつも「判つた。手伝ってくれ危なくなつたら撤退してくれても構わないデータは後で機体に送つておくから後でな」とシュウとカグヤは駆け足でアークエンジェルとジャンク艦を繋ぐパイプを駆け足で渡りMSに乗り込んだ。

「判つているなカグヤ今回は時間との勝負もあるんだ。速攻で勝負を決めるぞ」と忠告をしておく

「判つてます。…それでも幾らなんでも連合の遣り方には何時まで経つても反吐が出ますね」と言いながらMSを始動させていく。

そしてお互いの準備が整つたと同時にハッチも開き終わりシュウとカグヤそしてキラとムウは自分たちの機体を駆つて戦場へと向かい始めた戦争に無関係な人たちを殺す破壊を齎すものを壊すために

そしてシユウ達が到着した頃には既に一つの街が壊滅しており、少しでも動きを止める為に先行していたハイネの乗っているエンジエルも機体は、ボロボロに成っていた。

「大丈夫かハイネ？」とシユウは機体とハイネを状態を確認する為にそう聞いた。

「ああ、何とかな。…だがこれ以上の戦闘は少々無理そうだ。連合の奴らあのデカブツだけじゃなくてMSも多く投入してやがった。おかげでこのざまだ」とハイネは悔しそうに歯を食いしばっていた。

「どうか、ありがとうございますハイネ。先に戻つてくれて構わない此処から先は俺たちが引き受ける」そう言つてシユウはモニターに映つていたデストロイを睨み付けていた。

「生きて帰つてくることを願うゼシユウ」

とハイネがそいつた後にエンジェルは戦闘区域を離れ戦艦へと撤退していく。

そうしてシユウは「各機散開！3人は此方がデストロイを破壊するまでの時間稼ぎを行つてほしい」と命令を下した。

「何か策があるんですか？でなければあの機体は一機じゃ到底」と

流石のキラも心配してくるが

「心配するな。でなければこんな事言わないさ」

そうしてシユウは外部からの話を聞かない為に無線を切り一人デストロイの前方へと機体を進めため息をついた。

「はあ、連合も何でこんな兵器作るのかな？…余計俺の怒りを買うだけだと何故判らないだろうな？」と目の前の機体に呴きながら腰に掛けていたバスター・ライフルを、デストロイへと撃ち込んだ

だが殆どチャージもせずに撃つたせいかデストロイに傷を着けるまでには、至らなかつた。だが先程の攻撃によつて此方の存在を気付かせるのには十分だつたのかデストロイの目は確実に此方に向いており。

まるで邪魔なハエを叩き落とすかのように指に着いている5つのビーム砲が此方へと向けられそして放たれた。

だがシユウも撃たれる訳にもいかないので上空へと上がりデストロイの頭部を眼前へと捉えたが既に胸に装備されていたスーパースキュラのチャージが開始していたのか胸に砲口にエネルギーが貯まつていくのが良く判つてしまつた。

シユウは一瞬背筋が冷える思いがしたが直ぐに「リミッター解除1分！」と言いながらすぐさまその場から退避した。その数十秒後スープースキュラは撃ち放たれ、キラ・ムウ・カグヤは辛うじて回避できたものの近くにいた連合のMSはそれを回避することも間に合はずただただ火線へと巻き込まれていつた。

だがシユウは「こんな事して何時までも許されると思つなよー」と叫びながらもまだ残つてゐる1分30秒でデストロイの頭部へと近づき腰からビームサイズを展開し口のあたりにあるドライツォーンを中心に大きく薙ぎ払い頭部を破壊した。

だがこのビームサイズを大きく薙ぎ払つたのは失敗だつただろ？。何故なら気づいた時にはデストロイの手のひらがデスペアへと迫つており、シユウは反応しきれず機体を掴まれていた。

シユウはこの時自分の先ほどの行動に苛立ちながらも「コミッター解除キャンセル…その後解放3分間腕と脚部だけに回せ！」と言いながらもデストロイは此方の機体を握りつぶそうとしているのかロツクピットから警告音が煩いほどに鳴り響いていた。

「こんな所で死んでたまるもんかよ！」と叫びながら両手をデストロイの手に置いて力を入れ続けた。

だが余りにもビクともせず一瞬駄目かとシユウも思つてしまつたが次の瞬間一瞬だけ手が緩むのを感じすぐさまシユウは右腕に収納されているミサイルランチャーをその場で全弾撃ち込み爆風によつて手のひらから抜け出した。

だが零距離からミサイルを撃つたせいか既に右腕は原形も止めずにひしゃげて煙を上げていた。

そしてシユウはまだ殆ど傷の着いていないデストロイを見つつも機体のダメージ量を確認していった。そして全体の6割ほどがダメージを受けているにも関わらず

「まだやれるよな…最後まで耐えてくれよデスペア」と呟きながら

解放の時間が残って居る内に一気に勝負に出ようとシユウはボロボロの「デスペアを駆りながらもデストロイへと近付こうとするが此方を完全に破壊する気なのか両手・胸のビーム砲が完全に此方に向けていた。

デスペアの予測ではこのまま行けば直撃は免れないだろうと表示しているが

だがシユウは「だから如何した！直撃するから逃げるだと…？そんな事出来るもんかよ俺は逃げない、絶対にデストロイのパイロットを救うんだ！だからお前の可能性を魅せてみろデスペア！」と怒鳴りながらも言葉も通じるはずもないデスペアにそう叫んだ瞬間

（…リミッター解除）とモニターに有り得ない表示が書き込まれていた…。

本来ならばリミッター解除と解放は同時に使用してはならないのだ、その大きな理由が二つあるそれは、パイロットへと負担または機体の大破が起きてしまうからだ。

機体の大破と言つてしまふと大きな語弊が生まれてしまうが、この場合の大破は機体が壊れるのではなく、機体のパーツがすべて、情報の処理に追いつけず電子系やパネル系統が一切焼き切れ溶けてしまふのだ。

つまりこの戦闘が終了後デスペアは各部のパーツが壊れある意味死んでしまう事にも成るので。

それを知っているシユウは

「今までありがとうな」とだけ告げデストロイの火線を避けきりコックピットへと取りついた。

そしてパイロットを救うのに邪魔なハッチを近接用クローラーで突き刺しハッチを引きちぎった。そして中にいたパイロット見ると意識は無く、ただデストロイを扱う部品のようにコードが体に巻きついていた。

それを見たシユウはすぐさまデスペアの腕を伸ばしパイロットを握りつぶさない程度の力で掴みコックピットから引き離し

そして「此れで終わりだ！」と両肩に掛かっているマシンキヤノンをデストロイの計器が集まっているコックピットへと撃ち込んだ。

そしてデストロイは、その機能を完全に停止し、その巨体を支えていたホバー・ブーストは機能しなくなりデストロイは地面へと沈んだ。

それを見た連合の兵士は、ザフトを攻める駒が無くなつた事で戦力的に勝利出来ないと判断したのだろう、次々と撤退していくところでしたが、唐突にMSの一機が火を噴き爆発を起こした。

当然、カグヤ・キラ・ムウの三人は撤退している機体を撃つという非人道的行動をする程酷い人間ではない。

つまり考えられるのは「連合及びフリーダム・デスペア・ホープ・ムラサメのパイロットに告ぐ既に我々は其方を包囲している大人しく抵抗を辞め銃を下せ」とザフト軍からの警告が出てきた。

「シユウさん此処は撤退しましょう。流石に此れだけ居たら……」

と通信をONにした瞬間カグヤからそう言われたが

「やつは言つても全員が一斉に撤退したらこいつらの位置もばれるだろ？せめて一人は足止めしないと」

「でも、残つた人は生き残れる確証は？」とキラも悪い結末を考えそ
ういったが

「俺が此処に残る。皆は先に戻つておいてくれ」

「そんな、シユウさんは先程デストロイとやつて機体がボロボロじ
やないですか…！」とカグヤが辛い事を言つてくるが

「今ここで一番消耗が激しいのはこの機体だ。足手纏いをチームに
入れてもザフト軍に追い付かれるかも知れない。だから先に行け！
俺も一当てしたら絶対に帰る！」

と言い近付いてきたホープにステイティングを渡した後にバスター・ライ
フルのチャージを開始した。

「絶対…絶対戻つてきてくださいね！約束ですからね！」とカグヤ
が言つてくる

「ああ、約束だ」と言つて通信を切りバスター・ライフルを包囲して
いる一部へと撃ち込んだ。

そしてそのバスター・ライフルのビームの後を追つようになリーダム・
ムラサメ・ホープの順に撤退していった。

それをゆっくりと眺めたシユウは

「約束…か。また破つちまつたな」とシユウはそう呟きながらもう一度バスター・ライフルのチャージを開始した。

そうボロボロに成った機体でこの包囲網を抜けるのはほぼ無理だろう。故にシユウはあの3人が少しでも遠くに逃げられるようにたつた一機で孤軍奮闘するつもりなのだ。

そして予想通り逃げた3機は追わずザフト軍の標的はデスペア一機へと向けられた。

だが「雑魚が俺に勝てると思つてゐるのか?つぐづく舐められたもんだな」と周りを飛んでいるバビやバクウやガズウートの方向が此方に向いているがシユウはチャージの完了したバスター・ライフルをもう一度周りに対し撃ち放つはずだった。

急にデスペアは右腕を持ち上げる動作を辞め全ての機能を停止し地面へと落下した。

そしてシユウは、デスペアが壊れたことを感じ

「お疲れデスペア」とだけ言いデスペアのコックピットで静かに地面に落ちるのを待ち

そして地面に激突したと同時にシユウもその衝撃で気絶した。

PHASE 45（後書き）

カグヤ「作者、此れは如何言つ事でしょうか?はつきり答えてくれないと困りますね」

抹茶「は…はい、シユウが捕まつたので今回もまた一人だけ…」

カグヤ「二人だけですか…？うですか、うですか」

抹茶「…」・「めんなさい、許してください！」

カグヤ「ふふつ、何を言つてるんですかね？私怒つてないですよ」

抹茶「その邪悪な笑みが俺の震えの原因なんだけど…」

カグヤ「知りませんよ、それよりも今回も感想来てましたよね？」

抹茶「はい、マサトさん」感想有難う御座います」

カグヤ「それじゃもう、用も終わつたし後書き閉めましょうか？」

抹茶「い…嫌だ！お前此れ終わらせた後持つてる銃で撃つ氣だろ…」

カグヤ「嫌だなあ、そんな事考えませんって。さあ閉めましょうか？」

抹茶「は…はい」

抹茶・カグヤ「さてシユウとシラコキ（私）はどうなるのか？次回

お楽しみに！」

「J意見・JJ感想ありましたらドン・ドン書いて下せ」
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～S I D Eで何か有りましたら書いて下さい

カグヤ「さあ処刑の開始です貴方の罪を数えなさい！」

「…………」

PHASE 46（前書き）

抹茶「投稿遅れてすいません！！」

シユウ「へえ、自覚有ったんだな？良い覚悟だ。一瞬で樂にしてやる」

カグヤ「前回の処刑で少しばかり反省したのかと思つきや此れですか良い度胸ですね？」

抹茶「マジでごめんなさい。許してください…尋問をする所なんて初めて書いたんで如何書けば良いのか全く分からなかつたんです」

シユウ「そうかそうか。でもそんなのは関係ない後でお前は『テスペアで・・・』

抹茶「『テスペア壊れちゃつたから意味ないでしょ？』

パンツパンツ

シユウ「ふう、話の腰を折るのが好きなんだな作者は」

カグヤ「でも、シユウさんの専用機もそろそろ考えないとキマイラに逆戻りに成るかも知れませんね」

シユウ「かもな。ほら作者マトモな機体考えておけよ？」

抹茶「うう、了解です」

カグヤ「それじゃそろそろ本編に入りますか」

カグヤ・抹茶・シユウ「それでは本編をお楽しみくださいー。」

「・・・此処は?」とシユウは田観めてそう呟いてしまった。

一瞬シユウ自身も何故知らない場所にいるのか疑問に成ったが、直ぐに自分が何故此処に居るのか三つの答えが導き出された。

「まだ、死んでないのは、俺に利用価値があるのか、それともデスペアの情報を得るためにかキラ達の位置を聞く為かな」と言う割には殺す為なら捕虜の治療などは行わないだろうと思い最初の答えを切り落とした。

そうして残り一つの情報を聞かれたとしても、デスペアの方は既に内部が壊れ元となる設計図すらもオープにある自分の家の地下の金庫に有るためパスを知っている自分しか手に入れられないし、キラ達の位置を聞かれても今頃何処かに逃げているだろう。

ただ一つ気がかりとなるのは

「カグヤが暴れて無きゃ良いんだけどな」とため息を吐きつつも、心配に成ってしまった

仮にもカグヤは冷静な方だが、自分が関わると後先考えずに行動する為キラ達が止めない限り一人自分を助ける為に単機で拠点まで襲いかかって来るだろう。

そう考えるとシユウは此処から抜け出してすぐさまキラ達の所に戻りたいが、自分自身が治療を施されたとは言えベットにベルトで縛り付けられている上に服の裏に隠していた道具類の感触が無い為取り戻すのが大変だ。

られたのだろう。

そうして何も出来ないため大人しく寝ていた所、部屋の外からカンカンと何かが歩いて此方に近づいてきたのに気付いてしまった。

「田覚めはどうかしらシユウ君？」と牢屋こしに聞きなれた声が聞こえてきた

「タリアさんですか、お久しぶりですね。…田覚めに関しては最悪ですよ。こうして荷物が取られた事、ベットに縛られてる事は実に腹立たしいですね」と治療をされているには感謝しているが、個室で縛られていることには多少の怒りを覚えていた。

「はあ、仕方ないでしょ？貴方を拘束もない状態で牢屋に入れたとしても抜け出しそうな気がするし」と扉越しからため息が聞こえるが「まあ、そもそもせんけど。今回は、喋りをする為に来た訳じゃ無いんですね？だったらさつと本題に入りませんか？」

「そうね…でも流石に此処じゃ話は出来ないから部屋変えるわよ」と言つて扉がガチャツと言つ音と共に数人の兵士が入つてきた。

そして暴れられては困るのか、両手両足に手錠を着けられ車椅子に乗せられ再びベルトで縛り付けられ尋問室へと運ばれていった

途中で何人か見知った顔を見つけたが、多くの人物は何とも言えがない表情をして此方を見つめて来ていた。だがシユウはそんな事を気にすることなくただただ無視して尋問室へと向かつていった。

「さて、貴方には幾つか答えてもらひうわ。当然貴方には、喋りたくない事が有れば喋らなくても良いわ」と何とも生ぬるい対応にシユウは何も出来ないとは言え警戒をしてしまった。

「如何言つ事ですか？知りたい情報を聞きたいのなら拷問でも何でもするべきでしょ？」と思わず聞いてしまった。

「それもそつしたいんだけど貴方を拷問とかで殺したりして『断罪の天使』が来たら厄介だからって事で極力暴力をふるうなつて上層部から命令が来てるのよ」

とタリアがカグヤが攻めて来た時の事を考えたのか頭を押さえていた
「そつなのか、それよりも聞きたいことはなんだ？極力答えるようにはするぞ？」

「アレとは？色々と心当たりが有りすぎてどれか迷うんだが？」
とシユウ自体も何を聞きたいのかせっぱり謎だつた。

「貴方が乗つてたデスペアについてよ、整備班が調べた所じゃ動力原はNJC：入手経路が気に成る所だけど、一番重要な事は内部がもう壊れて正常に動かないし一体如何言つ使い方すればあんな風に壊れるの？」

と整備班すらも外側は一部だけが壊れているとは言えそれだけが原因で全てが壊れるはずがないと判つて居るらしい。

「ＺＺさんは、普通に造った。……デスペアについてはパーシの許容熱量に耐えられなくて全てショートしてしまったって所だろうな」と自分が氣を失う前の事を考えてリミッター解除と解放の同時使用が壊れた原因になるだらうと思いついてそう答えた。

「MSが壊れた理由が判つたけど、ＺＺさんはそんな簡単に造れる代物じゃないわ！何処で手に入れたの」

と如何やら此ればかりはちゃんと聞いておきたいよつだ。

「いや、造つたつてば、完成には2年の月日を掛けたけど設計図さえあれば俺は基本何でも造れるさ」とシユウは敢えて貰つたのではなく作ったと答えておいた。仮に神から貰つたと言つた所で正氣を疑われるのは田に見えているので敢えて貰つたと嘘を着いたのだ。

「はあ……ＺＺについてはこれ以上聞いても無駄そうね。取敢えず次の質問に入るわ……貴方の仲間は何処に居るの？」

「別に教えても構わないが、あいつ等の事だらうからきっと別の場所に移動しているはずだぞ?」とシユウは仲間を裏切るような発言をしているがこれは嘘だ。

彼にとつてアークエンジュルやジャンク艦の位置を見つける事など今までやつてきた行動の中でも一番簡単な行動と言つても良い位楽勝なのだ。だから敢えてアークエンジュルが居る場所から全く離れた場所を言つつもりなのだ。

「やつ、だったらそのポイントだけでも教えてもらひえる?」

「ああ、判つた。ポイント…」

と言おうとしたとき唐突に大きな音と共にシンが尋問室へと駆つて
きた。

そして其れを止めようと廊下で待機していた兵が

「まだ尋問中だ。部屋を出る」

と言つてシンの腕を掴んで外に連れ出そうとしていたが

「離せよー」と兵士の腕を振り払いそして此方の胸蔵を掴んで

「答えるシユウ！ステラは何処に居るんだ！」と言葉を荒げて聞いて
きたが

「アホかお前は？なんでお前にそんな事を教えないじゃないん
だよ？仮に連れ戻しに来たとしても、また衰弱させてあの子を苦し
める気か？それじゃあ俺があの子を治療した意味がない。故に俺は
お前たちには教えない。強化人間は俺が責任もつて俺が治療する。
だから目の前の感情で好き勝手行動する子供はさつさと失せろ。見
てて苛々する」とシユウも拘束をされている身でありながらシンに
対して言葉の暴力を吐き続けた。

だがこの言葉が余計シンを苛立たせたのか

「何だとー」と今にも殴り掛かりそうな勢いだつたが

「それとも俺が何か間違えた事でも言つたか？仮にこっちに連れて
きたとしてもお前にあの子をどうこうする権限はない。つまりだ：
直ぐに上層部の命令で研究所送り・実験に成るのが日に見えている

その言葉で完全にシンの沸点は突破したのか

「アンタは理屈ばかりでもう少し人の気持ちとか考えないのかよ！..」
と怒鳴つてきただ

「人の気持ち？たかだかお前はあの子に会いたいために此処まで連れてこいと言つているのか？それだったら馬鹿馬鹿しい誰がするかよ。それに理屈で物を言つて何が悪い？理想ばかり語る奴らより現実的に物事を解決していく方がよほど正しい事じゃないか」

そして遂には言葉で勝てないのか、拳を振り上げて此方を殴りつとしていたが

「止めなさいシン！捕虜に暴力を振るうのは、条約で禁止されて居る事よ！あなたの個人的な感情でこれ以上彼を傷つけるというなら貴方にも独房に入つてもうつわよ」
と艦長の権限行使して脅しをかけていた。

流石のシンも独房入りは嫌なのか振り上げた拳を下げていき悪々しげに此方を睨み付けながら尋問室から出て行つた。

「『じめんなさいね』でも貴方も貴方で彼に挑発するのは辞めてくれないかしら？止める方は大変なのよ？」と忠告を言われ

「すいませんね。・・・だけど俺も子供みたいに騒げば何でも許されるつて奴は正直見てて苛々するんで」とシンに対しても、毒舌を吐くことすらを辞めなかつた。

「そつ・・・それよりも尋問の続きをやるわよ」と言つて再び尋問が再開された。

そして尋問が終了したとき

「やつにえは此の艦は何處に向つてゐるんですか?」

と兵士に車椅子に押されて尋問室を出る前にやつタリアに聞いた。

「ジブ・ラルタル基地よ。それで正式に貴方に何らかの処罰を受けてもかう事に成るわ」

「せうですか、それでは」

とだけシュウは告げて尋問室から出て再び牢屋へと運び込まれた。

そして彼は牢屋に入れられた後 誰にも聞こえないほどの声で

「……長く捕まつても良かつたんだが、そろそろ監の所に帰るか」と呟いていた。

ショウ「作者が

抹茶「はい」

ショウ「何だこの短文か…」

カグヤ「これが長く時間かけてできた集大成ですか…」

抹茶「うううう…」めんねさー…」

ショウ「今まで何かしらの理由で逃げていたが今度は逃がせん…」

抹茶「ちよつ…お前ロープで俺を縛るな！首がつ」

カグヤ「良い気味ですね。…ん？作者から何か紙落ちてきましたね？」

司会進行後頼んだ

カグヤ「やつぱりですか…仕方ありませんね」

カグヤ「さて今回感想」指摘をくださった最弱戦士さん前原圭一さん有難う御座いました」

カグヤ「さて…後書きで話す事が思いつかないのでそろそろ閉めますか」

シユウ「やつだな」

カグヤ「あれ? シユウさん作者はどいつしたんですか?」

シユウ「抹殺してきたが、幽霊になつてでもまだ書く気は有りそつ
だつたぞ」

カグヤ「ある意味凄い執念ですね」

シユウ「やつだな。じゃあ今度こそ閉めるか」

シユウ・カグヤ「さてシユウ（俺）とシリコキ（私）はどつなるの
か? 次回お楽しみに!」

『意見・『』感想ありましたらドンドン書いて下さい
あと誤字脱字なども有りましたら注意してくれれば直します
また～S I D Eで何か有りましたら言って下さい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7546s/>

ガンダムSEED - 閃光のライトニング -

2011年10月6日17時40分発行